
大根と王妃?【改訂版】

大雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大根と王妃？【改訂版】

【Nコード】

N1638T

【作者名】

大雪

【あらすじ】

田舎産まれの田舎育ちの王妃様。

たまたま夫が王になったから王妃になっただけ。

前回の農作物盗難の収束と引き替えに、王都への帰還を決意した王妃。しかし、そんな彼女に魔の手が襲いかかる。

攫われた先で待つものとは――。

王と王妃のすれ違い&王妃のシンデレラストーリーです。

大雪が此方で完結させた【大根と王妃（帰郷編）】もとい【大根と王妃本編？】の改稿版になります。

また、こちらが【大根と王妃（始まり編）】もとい【大根と王妃本編？】の正式な続きとなります。

大根と王妃 用語集（ネタバレ注意）

●場所名

天界十三世界：

十三の世界からなる神々の住まう世界で、以前は『天界』と呼ばれていた。

前身となる『天界』は創世時の際に一番最初に創造された事、また他の世界の元となった事から、現在も『始まりの世界』と呼ばれている。

非常にバランスが不安定で脆く、それに影響を与えて拍車をかける神力の使用が現在制限されている。

天帝夫妻と十二王家に治められている。

炎水界：

天界十三世界を構成する世界の一つで炎と水を司る国々で占められている。

十二王家の一つ——炎水家によって統治されている。

この世界に凧国が存在している。

凧国：（物語の舞台）

果豎が王妃として住まう国。

天界十三世界が一世界——炎水界にて一、二を争う大国で、凧と時化を司る。

食糧自給率が低い輸入依存のくせして最強で居られるのは、賢君たる王と優秀な上層部の存在と、国で取れる豊かな鉱物資源とその加工技術の御陰らしい。

美形が多いが、上層部になると『オトメン』、『男の娘』率が非常に高い。

> i 2 6 5 4 6 — 5 0 3 <

瑠夏州：（領主 李盟）

風国の三十二州ある州の一つで中央から遠い田舎の州。

王妃の追放先で、果豎はここで二十年の休暇？を満喫した。

大根と王妃？での舞台で、反乱未遂事件が起きた。農業や酪農が非常に盛んである。

鶯州：（領主 不明）

瑠夏州の隣の州。

食糧自給率が低いが、鉱業が非常に盛んである。

果豎達が拉致された場所。

隠れ里：

果豎が拉致されて連れて来られた場所。

蓮璋達が隠れ住んでいる里で、場所は不明。

●用語

創世の二神：

全ての創造者。凄まじい力を持つが、滅多に姿を見せない。
会えるのは天帝夫妻と十二王家、そして特殊五家だけである。

天帝：

天界十三世界の統治者。暗黒大戦の際に一番最初に兵を挙げ、実質上大戦を集結させた英雄。

創世の二神により力を分け与えられている。

天后：

天界十三世界の統治者で天帝の正妃。天帝と共に大戦を終結させた英雄。

創世の二神により力を分け与えられている。

十二王家：

天帝夫妻に仕える十二の名家。

暗黒大戦以前からの天帝夫妻の友人であり仲間。各家の現当主夫妻は共に大戦を終結させた英雄。

天帝夫妻に次ぐ地位と権力、身分を誇る。創世の二神により力を分け与えられている。

特殊五家：

現在は名前だけ知られている。大戦を終結させた英雄で、地位的には十二王家と同格。

但し、十二王家とは違い表には殆ど出ない為、知らない者達も多い。天帝夫妻と十二王家とは大戦以前からの知古。

創世の二神により力を分け与えられている。

王：

各国の統治者であり長。

しかし、大戦以前の王とは違い、領土の空間を支える柱的存在。

天帝夫妻と十二王家により直々に選任され、空間安定の為に神力の使用が認められている。

上層部：

貴族達の中でも、王の補佐として領土の空間を支える柱的存在。
王の力が強ければ強いほど、その負担は少なくなり政治に回る事が
出来る。

天帝夫妻と十二王家により直々に選任され、空間安定の為に神
力の使用が認められている。

プロローグ（前書き）

大雪が此方で完結させた【大根と王妃（帰郷編）】もとい【大根と王妃本編？】の改稿版になります。

また、こちらが【大根と王妃（始まり編）】もとい【大根と王妃本編？】の正式な続きとなります。

プロローグ

【始まりの世界】と謳われし神々の世界たる天界で勃発した暗黒大戦。

多くの世界を崩壊に導き多くの命を屠ったその悪夢は、唯一残った天界にも多くの余波を残し、余りにも多くのものを破壊した。

それは文化、文明、風習、常識、観念、慣習、法、制度など実に多岐に渡っていた。

そうして全てが破壊された中で、元から天界在住、また他の世界から引き上げてきた神々は、新しい天帝と十二王家のもと、再生された新たな世界の維持と発展の為に尽力した。

今度こそ、誰もが願う平和で穏やかな世界を得るために。

そうして再創造された世界が、新しい天帝と十二王家によって統治された【天界十三世界】。

そこで進む開発、発見される技術。

あらゆる世界の文化や科学技術は積極的に取り入れられ、幾つもの文化や風習を持つ国や都市国家が同時に出現する事となった。

加えて、神力の使用制限から、数多の世界の科学技術を組み合わせた第三の技術も多く開発された。

中でも、宝珠の欠片を使用した第三の科学技術の発達から鉱山業は特に著しい発展を見せる事となる。

しかし、そうして積極的に行われる発掘や開発がもたらすのは良い面だけではなく、同時に悪い面ももたらししていく。

ある国で、一つの宝珠が見付かった。

十二王家が一つ——炎水家が統治する炎水界の中でも一、二を争う大国で。

それは、その所在が知れ渡ったならば、更なる発展をその国にもたらしただろう。

しかし、実際にはその宝珠が表沙汰になる事は決してなかった。

同時に、宝珠の発見された鉱山ごとその存在は抹消されたのである。

もちろん、そこで働いていた者達も。

果たしてそれは本当に宝珠だったのか？

その疑問さえあがる事はない。

全てが、人知れず闇に葬られたのだから。

第一話 見送りと出発

ああ愛しの大根。

私の心のマイダリン！！

白く輝いていて、私がこの地に戻る、その日まで。

「無理でしょう。所詮は生鮮食品。その水分の多さが仇となり、一月持たずに腐るでしょう」

明燐めいりんの言葉が果豎かじゆをえぐり抜いた。

「それが嫌ならミイラ化ですね。ああ、でも大根の漬け物は駄目ですよ。永久に持ちませんから」

「のおお！！　こんな事なら、麗しい大根の肌を保つ『永遠の美肌大根』研究しておけば良かった！！」

ぎゃああと叫び転がる果豎から、その場に居た全員が一定の距離を取る様は群舞の如き美しさ。

それは、先の件ではただ王妃を迎えに來ただけなのに、散々こき使われた使者団も同様だった。

今回ようやく風国王妃——果豎に帰郷を認めさせるに至ったが、ちよつとだけ帰還延期を願いたかった。

もちろん、王妃様には絶対に王宮までお帰り願わなくてはならない。

それは、上層部の命令だけではなく、自分達の想いでもある。

しかし、他のお世話になった者達への別れの挨拶を一割とするならば、大根への挨拶に残り全てを注ぐ王妃様は酷く近寄りがたかった。

王宮帰還したが最後、国の全てを大根に変えられそうな気がする。売買は基本的に大根による物々交換。

学校ではまず大根の歴史から教えられ、国の宗教全てが大根教となる。

大根の人権を保護し、大根を利用した技術開発を行う大根省なる

ものが作られるかもしれない。

風国^{なまこく}が大根に乗っ取られる！！

使者団一同がバタバタと倒れていった。

「ちよっ！ 何？！ どうしたの？！」

「おい、しつかりしろ！！」

屋敷勤めの者達は、倒れた使者団の姿にひたすら首を傾げる。

因みに、旅支度をした果豎や明燐とは違い、屋敷勤めの者達は普段通りの着衣だった。

その意味する所は、此処に残るという事に他ならない。

元々は、王宮から果豎に同行してきた彼ら。

上層部でこそないものの、本来であれば王妃の帰還時には共に同行する筈だった。

だが、まだ不安定な瑠夏州の為にも、暫く残って李盟達と共に経済の立て直しを図るという。

二十年、王妃を守ってくれた恩を返す為として、その事は既に使者団も了解していた。

そんなわけで、今回果豎と共に戻るのは明燐だけとなっていた。

果豎の出発には組合長を始め、李盟^{りめい}や輝凰^{きわう}達も見送りに駆け付けており、静かな屋敷の前はちよっとした賑わいを見せている。

「また遊びに来て下さいね」

「李盟、貴方も領主として頑張るのですよ」

「はい、明燐様」

麗しく微笑む明燐。

その姿は王宮までの長旅に供えて華美とはほど遠い装いだ、明燐が身に纏えば慎ましい清楚な装いにも見えるから不思議だ。

そればかりか、堂々とした風貌は正しく一国の王妃に相応しい――

「って、逆だろ」

「逆だな」

「逆ですね」

「明燐の馬鹿ああっ」

縄でぐるぐる巻きにされ、ピンヒールで踏まれている果豎。どっからそのヒールは用意したのですか。

いや、それよりも貴方様が踏まれているのが王妃です。

例えどれほど明燐が王妃に見えようと、彼女は王妃付きの侍女長であって、王妃ではない。

相変わらず逆転主従である。

しかし、この場合は明燐が王妃に見えるだけで、果豎が侍女長に見えるかと言えばそうではない。

寧ろ、いたいけな子羊にしか見えなかった。

というか、あの寸胴体系色気皆無の少女が十七歳という所がまずおかしい。

「だよね、だって私、最初に王妃様があの陛下の妻だって知った時思ったもん」

「私もよ」

「ってか誰だって思うよね」

ロリコン——と。

「大国の国王なのに」

「文武両道、世界に名高い容姿端麗なのに」

「巧みな政治手腕と絶対的なカリスマ性の持ち主なのに」

「あらゆる方面の才能に長けている方なのに」

「あの極悪非道で伶俐冷徹な鬼畜上層部を従えているのに——あ、もちろん王自身も鬼畜だけど」

「国中から人望があって敬愛心酔されているのに」

「そして強大な神力の持ち主なのに」

「十二王家の一つ——炎水家にも謁見可能なのに」
でも、ロリコン。

RO・RI・KO・N、なのだ。

重要だから二回言った。

三回目もリクエストがあったら言う、寧ろ言いたい。

きつとロリコン組合なるものがあれば、その代表取締役に就任している事は間違いない。

そして一斉逮捕される。

と、話はずれたが、どう見ても王が王妃を寵愛する様は、いたいけな少女に手を出す犯罪者とは思えない、果豎を見ると。

しかも夫婦生活があつたから恐ろしい。

あの小さな少女に一般男性より遅いそれをねじ込む？

見るからにアブノーマルプレイよ？それ。

幼児性愛者は、特異な性欲の一つ。

それは幼児・小児を対象とした性愛・性的嗜好を好む者達を言う。うん、だってどう見たって王妃様は小学生――。

天界十三世界では、まだ全ての世界で共通していないが、一番教育の進んでいる世界では幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、大学院という人間の教育機関が取り入れられている。

小学生は十一歳か十二歳までの子供達が通う所。

そう、王妃様みたいな色気も皆無な子供達が通う場所だ――が、

小学生は小学生でも栄養状態が不良の時の小学生だ。

何せ、今の子供達は成長が早いって言うからな。

え？セクハラだろって？

そんなの、ロリコン王に比べれば可愛いものである。

奴は真性の犯罪者だ。

幼児虐待で捕まってしまえばいい、本当に。

……王宮に帰らない方が幸せなのではないか、という想いがむくむくと成長していく。

一方、果豎はといえば、そんなロリコン夫よりも大根への愛を叫んでいる。

「うう……私の大根達を、私のマイダーリンを、宜しく御願ひします！！一日三回のトリミングは欠かさずに！！そして入浴は朝と晩で――！」

大根は生き物なのか、しかも毛皮があるのか。

しかしそんな突っ込みをしないのが、屋敷勤めの優秀なる者達。

「お任せ下さい、王妃様！ 貴方様に手ずから叩き込まれた大根の世話の神髄、今こそお見せ致しましょう！！」

そう、熱血テニスコーチの如く果豎は厳しかった。

『お馬鹿ああ！！』

殴られ吹っ飛ぶ料理長。

『そんな事で愛する大根達の世話が務まると思っているの？！』

『申し訳ありません王妃様！！』

地べたに座り込み、殴られた頬を抑える料理長。

そんな彼を見下ろし、果豎は大根に対する愛を訴える。

『愛よ！！ 全て愛から来るのよ！！ 大根への世話には、世界平和を願う広き心が必要なのよ！！』

さあ、声を大にして！！

世界平和のために！！

『はい、王妃様！！』

そうして見事に洗脳された料理長。

気付いた明燐がすぐさま病院送りにしたが、もはや治療法はなかった。

そんな哀れなる被害者は、実は屋敷の近隣の村や町に結構居たりする。

というか、大根で世界を救えるのか。

暗黒大戦は現天帝夫妻や十二王家の方々でも終結させるのに苦勞していたのに。

最強だな、大根。

無敵だな、大根。

そしてお願いだから、誤報は自分の胸の中だけで留めてくれ、果豎。

大国の王妃であるあんたが言うところ洒落にならないのだ。

自分の身分と地位がもたらす影響がどれだけ大きいか分かってくれ——大根に関してだけで良いから。

「遠くから見守っていて下さい！！ この瑠夏州の土全てに大根を埋め込むその時を！！」

「ちよい待ち！！ 何環境破壊する気なんだっ」

「瑠夏州の生態系を狂わせる気か！！」

「流石です王妃様！！」

「後はお任せ下さい、王妃様！！」

使者団が止め、屋敷勤めの者達が煽る。

「しかし、王宮に帰ってから大変でしょうな」

組合長の言葉に明燐は同意する様に溜息をついた。

「ええ。帰ったらすぐに王宮での仕事が待っていますわ」

「確か、もうすぐ建国祭もありましたな」

「……そうですね」

一年に一回行われる風国建国祭。

それは、周辺国からも賓客が来る大祭だった。

当然、王と王妃、また居るならば側室達も出席する公式行事である。

もしかしたら、王宮側にはそれに王妃の帰還を間に合わせるつもりなのかもしれない。

つまり、帰還した王妃の大々的なお披露目の場として使うのだ。

しかし……明燐は思う。

今回お披露目されるのは果たして王妃だけなのかと。

果豎だけではなく、明燐も本当は知っていた。

王が……愛妾を迎えたという事を。

それどころか、その愛妾は誰かに押し付けられたのではなく、どこから自分で連れてきた、自らの意思で迎えた存在だということ。そればかりではない。

常に側に置き、仕事だろうと休んでいる時だろうと関係なく寵愛しているとか。

信じられなかった。

一体何故なのかと王宮に何度も手紙を送ったが、返事は一切なか

った。

まさか、あの王が果豎を切り捨てたのか。

だが、万が一そうでも、上層部まで果豎を切り捨てるわけがない。上層部の誰もが果豎を可愛がつていたのだから。

しかし返事の来ない手紙は、何よりも明燐の疑いを強めていた。一体お兄さまは何をしているのか、他の上層部は何をしているのか。

だが、王宮からの返事は未だない。

それでも変わらない事は一つだけあった。

愛妾が迎えられてからも王妃に帰還を促す使者が来るという事だ。忘れられていない、捨てられていない。

しかし、明燐からすれば、本当にそれが幸いな事なのかも分からない。

なぜなら、愛妾が出来た今、王妃を王宮に帰還させる理由が不明だからだ。

愛妾は愛妾、王妃は王妃として、果豎に王妃としての仕事をさせるつもりなのか？

それとも、愛妾は愛妾として愛するが、王妃は王妃として愛するのか？

一番最悪なのは、王妃と離縁する為に呼び戻すというものだ。

つまり、愛妾を王妃にする為に、果豎を離縁するべくわざわざ呼び戻す。

もしそれが、今も熱心に使者を送ってくる理由だとすれば、明燐には許せない。

ならば王宮に帰りたいがらない果豎に帰還を促すべきではないが、向こうの真意が分からない状態では此方も動きようがないのも事実だった。

向こうの真意を知る為に一度戻るべき——それが、明燐の下した判断だった。

その上で、向こうが果豎を切り捨てるなら、自分も覚悟を決める。

侍女長の地位も全て捨てて、果敢に何処までも同行しよう。

「明燐様」

「え？」

はっと我に返ると、組合長達が心配そうに自分を見つめていた。

「あ、すいません、ぼくっとしていましたわ」

「お疲れなのでしょう。準備でお忙しかったのですから」

「いえ、この程度何でもありませんわ。それに、一番忙しいのは春に向けての人事の時ですよ？ 新たな採用は毎年大変な騒ぎになるのですから」

王宮仕えは、一般市民はおろか、貴族達にとっても憧れの職である。

最下位職である下男下女ですら、倍率は五十倍を軽く超える。

「それに、屈国は試験がありますからな」

伝手を使う場合も、王宮に勤める場合には試験と面接を突破しなければならぬ。

逆に言えば、それを上位で突破すれば上位職に就くことだって可能なのである。

その為、毎年口利きや賄賂などで不正をしようとする者達が現れるが、今まで成功した者達は居なかった。

というのも、試験がかなり特殊なのだ。

「特に侍女採用の面接は最難関と聞いておりますが」

「あら？ そうでしょうか？」

明燐は最難関と噂される試験を思い出す。

その試験の最終選考は侍女長である自分の面接である。

「一体どういう事をお聞きしているのですか？」

不正が行われてはいけない試験に対して内容を聞くのは御法度だ。しかし、それが分かっているにも聞きたくなるのが好奇心というものだ。

神だって好奇心は旺盛なのだ。

「別に、普通の事ですわよ。侍女になりたい動機だとか。後は――」

『貴方の熱い想いは分かりました。しかし侍女になる為には、これだけは出来なければならぬ事があるのです』

『そ、それは』

『ずばり、熊を素手で倒せますか？』

「は？」

固まる組合長。

「く、熊？ しかも素手で？！」

驚く李盟。

輝凰に至っては凍り付いている。

「ええ。熊です。侍女になるなら避けては通れないでしょう？」

熊を倒す事がですか？！

しかも素手ですよ？！

「なのに、大抵の方達が茫然とするのです」

明燐は心底分らないという様子だった。

『何がおかしいのです！！ 風国の侍女は、建国以来ずっと熊を素手で倒せることが何よりも重要とされてきたのです！！』

それはとある一人の侍女から始まった。

彼女の名は涼雪^{りやんすゑ}。

後に、王宮上層部のオトメン集団の心を撃ち抜き、オトメンの代表者とも言える宰相すらメロメロにした彼女は言った。

『え、えつと！！ 私、素手で熊倒せます！！』

風国建国史にも載る程の名言だったと言っても良い。

「それからずっと、侍女は素手で熊を倒せる事が何よりも大切な事とされてきたのです」

そう——あの全てが凍てついた兄の心を溶かし、胸キュンさせたあの一言こそ、この国に必要な言葉だったのだ。

あんまり王妃の事は言えない明燐の思考回路は、基本的に宰相である兄が大きく関わっている。

「それに、侍女は王妃を守る最後の砦でもありますから、腕っ節の強さも必要ですわ」

なら、素直にそう言っただけでいい。

その思いは李盟達だけではなかったらしい。

「明燐の思考は偏りすぎなのよ」

「果堅」

「ってか、その選定方法のせいで思い切り民達から誤解されてるって事分かってるの?！」

熊熊煩いせいで、「風国王宮には熊が大量に出没するのか」とか「王妃は熊を素手で倒すほどの強さでないと止められない」とか「実は王妃自体が熊なんだ」とか。

酷い誤解である。

「おかげで、獵友会からも熊の駆除をしましょうか?　って思い切り同情した目で見られるしっ!！」

そればかりか。

『陛下、貴方様の広い心は分かっておりますが、真性の獣を王妃に据えるのは』

と、思い切り誤解する貴族まで現れている。

獣神や獣の一部の特性を持つ神ですらないただの獣は、幾ら敬愛する国王とはいえ王妃にする事は認められないらしい。

ってか、モノホンの獣姦ですよ、それだと。

「何を言うのです果堅!!　これからの時代、熊の十匹や百匹、素手で瞬殺出来なければ生きていけませんわっ!!」

どんなサバイバル国家やねん。

いや、それよりも風国って安定したように見えて、実は結構危険な国だったんですね。

李盟は成人したら王宮に挨拶に行かなければ行けないが、その時にはボイコットしようかと本気で悩んだ。

「……その、道中は気をつけて下さいね」

ようやくそれだけ告げた李盟に、明燐は微笑む。

「ええ、ありがとうございます」

此処から王宮に帰るまで、【馬車】で一ヶ月間。

因みに、他にも乗り物が沢山あり、【車】の方が断然速いにも関わらず、何故【馬車】を選んだのか。

それは、果豎の哀しいささやかな抵抗に寄るものだった。帰らなきやいけないけど、王宮に辿り着くのは遅い方が良いな、という、我が儘。

とはいえ、本来なら時間もお金も余計にかかり、更には同行者達の心労や警備面から考えても、速攻で却下されるそれは最終的に受け入れられた。

理由は、王妃への配慮だった。

王宮に戻れば、たぶん王妃は滅多に外には出られないはずだ。

それこそ、再び追放でもされない限りは。

だが——連れ戻される王宮が、二十年前のそれとは遙かに違うのも事実だった。

使者団の長は、ずっと王妃に視線を向ける。

ようやく帰還に応じた王妃だが、彼女を待ち受けている者は余りに酷な事は使者団の誰もが知っていた。

王宮は、彼女が居た頃とは余りにも様変わりしていた。

王妃ただ一人を妻にしていた王はもう居ない。

美しい少女を愛妾として片時も離さず、上層部は王妃同然の扱いをしている。

そればかりか……。

『お前達に王妃の迎えを命じる。……まだ、お前達ならば影響も少ないからな』

主である宰相の言葉が蘇る。

今も思う。

何故、上層部は王妃を連れ戻そうとする事を止めなかったのかと。そう——使者団達は、何も知らなかった。

確かに王妃は冤罪だったから、その疑いが晴れた時点で王宮に戻そうとするのは当然の事だ。

しかし、現在の王には愛妾が居る。

それも、王が愛して止まない美しい少女が。
使者団の誰もが、王が少女を寵愛する様を見て思った。

ああ、これで王妃への王宮帰還の使者は打ち切られるだろうと。
そしてそのまま遠方に追いやったまま離縁し、少女を新たな王妃にするのだと。

しかし、王は少女を愛妾にしたまま、王妃の帰還命令を取り下げなかった。

もしかしたら、王妃を連れ戻して直接引導を渡す気なのかとも思ったが、そういう様子も見られない。

ならば何故こうまでして連れ戻そうとする？

王の真意も、上層部の真意も分からない。

何故？何故？

気付けば、僅かな者達を除いて、王宮に仕える全ての者達が同じ方向へと進んでいる気がした。

彼らは言う。

王妃を連れ戻せ——と。

引導を渡すのか、渡さないのか。

渡さないとすれば、王妃は今の立場のまま王宮で過ごすだろう。

王が別の少女を寵愛するのを見ながら。

今の王の様子からすれば、どう考えても愛妾を手放しはしないだろう。

だが、そこまで愛しているならば、どうして現在の王妃を廃して愛妾を王妃にしないのか。

分からない。

全く分からない。

彼らは王妃を連れ戻す事だけを命じられた。

そう……王が愛妾を迎えた頃から、少しずつ何かの歯車が狂って
いつている気がする。

詳しい事は何一つ分からず、混乱する。

でも、主が望むならば自分達は命令を果たすまで、と心に決めた。

自分達としては、果豎が王妃として留まってくれる事を望む。
彼女ならば、今後も立派な王妃として国をもり立ててくれるだろう。

しかし……それは、同時に彼女に女として、妻としての苦しみを与える事になる。

夫に見向きもされず、全ての寵愛を奪われて……それは、王妃にとっては死ぬよりも辛い苦しみを背負うかもしれない。

「宰相閣下……」

貴方がたは、何をしようとしているのですか？

使者団の長は王妃を見つめる。

宰相は自分にさえ何も話さない。

これ以上知れば、終りだと言うように。

それが酷くもどかしかった。

敬愛する主の為に命を捧げようと誓ったのに、自分達だけ何も知らない。

けれど……もし、王妃を連れ帰ったならば。

あの方達が求める存在を無事に届けたならば、自分達にも真実を明かしてくれるかもしれない。

愛妾を持ちながら、王妃の帰還を求める彼らの真意を。

それだけではない。

愛妾を迎えたその日から、少しずつ狂っていった齒車の全てを。

いや、その前に……そもそも、何故王は愛妾を迎えたのか？

「うう……すぐに帰ってくるからね、私の大根達！」

野菜の保管庫で大根を抱き締め嘆く姿は異様を通り越し見る者全ての心を打った。

ああ大根。

私の大根。

「ここで大根に向けて一句」

げしつと、明燐が果豎を【馬車】の中に蹴り入れる。

「いやあ……私の大根への愛の告白強制終了?!」

心を伝えることは大切だ。

言わなければ伝わらないこともある。

けれど果豎は熱い重い——ではなく、熱い想いは明燐^{めいりん}によって強制終了されたのだった。

「いやああ！！ 大根大根大根んっ」

「さあ、帰りましょうね」

笑顔で言いつつ、明燐は自分も【馬車】に乗り込もうとした。

「あ、明燐様」

「あら？ 料理長どうしました？」

屋敷の料理長が大きな風呂敷包みを明燐へと差し出す。

「これ、【馬車】の中で食べて下さい」

「お弁当ですか？」

「ええ。その、王宮の物には敵いませんけど」

「ありがとうございます」

明燐は笑顔を浮かべると、風呂敷包みを手に【馬車】へと乗り込んだ。

「明燐、ちょっと待って！ 大根にまだ挨拶」

ベシンと何かを叩く音が中から聞こえ、果豎の声が聞こえなくなる。

「御達者で〜」

とりあえず、下手な事には首は突っ込まない。

屋敷の者達は白いハンカチを振って果豎達の出発を見送ったのだった。

第二話 二つの州

雲一つない快晴の青空。

【馬車】の窓から見える、まるで王妃の王都帰還を祝っているかのような空に、明燐は目を細める。

しかし、王宮側は果たして果豎の帰還を祝っているのかどうか。そう考えると、この晴れ渡った空が皮肉にも思えて憎らしい。

「今日で十日ですか……」

瑠夏州の屋敷を出て十日。

ようやく、隣の州の鶯州に入った。

だが、街道が整備された瑠夏州とは違い、鶯州の街道事業はそれほど進んでおらず、少し進んだ所で土の道へと変わった。

しかも雨でぬかるんでいるせいか、馬の足がとられ車輪が沈み、速度は一気に遅くなった。

この分では、王宮まで一ヶ月以上かかるかもしれない。

「瑠夏州よりも広い領地と豊かな財政をお持ちだというのに」

「本当にね」

鶯州は鉱山が多い事もあり、その発掘作業に伴う神口の流入とそれに伴う開発によって発展した州だった。

いわば、瑠夏州とは対極的な位置にある。

瑠夏州の五倍の広さの領土には数多くの街や村が点在し、その村や町も鉱山を拠点に栄えていた。

すなわち、鉱山ある所に町村ありというそれで、州規模での鉱山業が発展している。

が、逆に言えばそれ以外の産業はそれほどもなく、食糧自給率に関しては完全に国の輸入に頼っていた。

言うなれば、瑠夏州よりも国に依存していると言っても良い。

故に領主の政治能力は、瑠夏州よりも重要になる。

というのも、国から供給された物資はまず領主の元に集う。

それを、領主が均等に各町村に回さなければならぬからだ。

どの町村でどの物資が不足し、どの物資が必要なのかをきちんと把握しなければならない。

つまり、情報伝達が何よりも大切になる。

しかし、電話やパソコンなどの電子機器が使えない炎水界では、実際に各町村の視察に入り調査するしかない。

だが、どれだけ念入りに調査したところで日々欲しいものは変わっていく。

だからこそ、少しでも早く伝達しなくてはならないのだが、それには手紙や伝書鳩だけでは限度があるだろう。

となれば、後は使者を出すしかないが、この荒れた道では余計に時間がかかる。

一体領主はその所をどう考えているのか。

「商売するにはまず物資の確保。でも、確保したらそれを流通させなきゃならない。で、その時に道が良いということは、自然と物流も良くなり更には商売も盛んになる。でも、それ以外にも街道を整備すると良いことは沢山あるわ」

街道の整備は物資の流通や情報伝達を早めるだけではない。

遠い街に商売に赴く商人達が多く来るようになるのだ。

それに伴い、彼らが休憩したり泊まったりする宿場町ができ、料金をとって部屋や食事を提供する商売にも発展する。

溜夏州では、そういう宿場町が幾つか造られていた。

もちろん、街道は良い面ばかりではないが、それでも経済の発展を促す重要な要因の一つと言える。

「あははは！！ 面白い」

「面白いじゃありませんわよ」

今度は砂利道らしいが、中には大きな石もあるらしく、【馬車】の揺れはどんどん大きくなっていく。

その揺れを利用して果豎がぴょんぴょん跳ねていた。

お子様と言うのは何時いかなる時でも簡単に楽しみを見つけるら

しい。

「全く、この道の悪さについては王宮に帰ったら要相談事項ですね」

「うんうん。でも工事は来年だね、きっと」

もうすぐ秋になる。

幾ら王宮で審議されて領主に改善を命じても、数ヶ月はかかるだろう。

しかも、領主にはある程度の自治権が認められているから、王宮側も緊急事態でなければ強制権はなく無理強いは出来ない。

それこそ、財政が貧しいとも言われれば、すぐにはどうする事も出来ないのだ。

風国は絶対王制を貫いている。

しかし、本当の意味での絶対王制でない事は、領主達には周知の事実だった。

確かに最初こそ、王に全ての権力が集中していた。

だが早い段階で、国王は最終決定権と緊急時の命令行使権を残して、行政権、立法権、司法権を、上層部を含めた官吏達に分け与えてしまった。

と同時に、領主達にある程度の自治を認め、不輸不入の権も認めている。

因みに、不輸の権とは免税特権のことで、不入の権は王が派遣する役人の立入りを拒否できる権限の事を言う。

それは、万が一国が間違った道に走った時に領主達に自分達の領民を守る為でもあり、ある程度国に頼らず自分達の財源を確保させる為のものだった。

もちろん、過分なまでの財源は反乱など良くない事にも繋がりがねない諸刃の刃ではあるが、余りにも州に力がなければ国が暴走した時に抵抗出来なければ意味が無い。

しかし、今回のように余りにも悪い道を直して欲しい時などには、この自治権が邪魔しているのも事実だった。

「本当に、まだまだ問題が多いですわね」

「当たり前だよ」

「果豎？」

明燐が果豎へと視線を向ける。

「まだ百五十年だよ？ あの時黒大戦が終結してから」

「……」

「全てを破壊し、この天界十三世界の前の世界である天界も多くの領土を失って……大勢の者達が死んで……まだ、百五十年しか経ってない。それなのに、ここまで復興した事の方が凄いと思うよ」

風国が建国して百五十年。

暗黒大戦が終結したのは百五十前。

数十年から百年程度の寿命しかない人間であれば、百五十年は余りにも長い年月である。

それこそ、人間界の一世紀が百年の暦では、軽く一世紀半は過ぎている。

だが、神々にとっては子が成神する事も出来ない、短すぎる年月。そのたった百五十年の間に、風国は炎水界のどの国よりも発展と安定を遂げた。

他の国々では、未だ混乱が続いている国や政治経済が不安定な国々も多く、土地や家族、財産を失った者達への補償すら行き届いていない場所も多い。

津国でさえ、急激な金融不安が起こるのを覚悟の上で、王妃自ら国庫を開かなければならないほど切迫していたほどだ。

もちろん、その後は輸入関係で大打撃を受けたが、それでも国が瓦解しなかったのは一重に王夫妻と上層部の政治手腕のおかげだろう。

風国だって、津国ほどではないが、何度も国が揺らぐ様な事件が起きた。

それでも風国は、他のどの国の中でも最も早く、今の状態にまで辿り着いた。

そう——安定した衣食住の供給と、鉱山業による豊かな財政。それに伴い、凧国は教育面でも成功を見せた。

炎水界で一番教育が進んでいるのは、残念ながら凧国ではない。しかし、国の大半に教育を行き届かせているのは凧国だった。

それがどれだけ大変な事は、田舎出身で満足に教育を受けられなかった果豎には痛いほどよくわかっていた。

まだ両親が元気で村で暮していた頃、果豎は読み書きが出来なかった。

計算だって満足に出来なかった。

だが、それは大戦以前では当然の事だった。

なぜなら、学校があるのは殆どが大きな街か首都で、通えるのは特権階級か富裕層の子供達だけだったからだ。

また、学問学んだ者が小さな村に居たとしても、村人達は生きる為に朝から晩まで働き通して教育を受ける時間すらなかったし、大人達も貴重な働き手を失いたくないなどない。

そうして教育からどんどん遠ざかり、読み書きすら出来ない者達が大勢出た。

だが、支配者層がその問題に着手する事はなかった。

それどころか、支配者層からすれば無学の民達が増える事を大いに喜んだ。

民達は自分達の富みを生み出すものであつて、考えるものではない。

自分達の思い通りに動かすためには、余計な知識をつけられては困るのだ。

そんな支配者層の思惑通り、民達は働いた、馬車馬のように働いた。

そして耐えるのが当然となり、それが前天帝や佞臣、一部の悪徳貴族達を増長させ、天界を一時は再生不可能にまで腐敗させてしまったのだ。

それをもつ二度と起こさせない為にも、教育は必要だ。

そうして、凧国では教育に力を入れる事となった。

領主には不輸不入権を認める代わりに民達に教育を行き渡らせる事を了承させ、少しでも読み書き、計算、学問をたしなんだ者達には率先して子供達への教育を任せた。

とはいえ、民達には生きる為に働くという本業がある為、その教育時間は微々たるものだ。

が、それでも大戦以前よりは十二分にその成果は上がっていた。

また、成績の良い者達は望めば王都に召喚して一流の教育を受けさせ、教師として生まれ育った村に教育を広めさせる。

もちろん、それだけでは子供達を貴重な働き手とする大人達は動かないから、同時に子供達の働く時間を減らすべく行政が動き続けた。

そうして百五十年経ち、ようやく実りを得られ始めたのだ。

身分や地位に関係なく、誰もが平等に教育を受ける権利を手にするという、人間界ではとっくの昔に行われていた権利に恵まれる機会が。

大戦以前の天界の支配層は人間界を馬鹿にしていた。

身のほど知らずだと。

戦いを好む愚か者達だと。

しかし、神々だって大差はない。

寧ろそれ以下だった。

人間界では表向きではあるがとっくの昔に禁止された奴隷制度が残り、民達が満足に教育を受けられず、強い選民意識と何処までも広がる貧富の差によりどんどん疲弊していった天界。

そう——天界は滅ぶべくして滅んだと、今なら分かる。

「凧国は本当に凄いと思うよ」

混乱する国々の中で、一番早く教育を行き渡らせた国。

でも——。

「だから今度は、食料供給率の増加と安定だね」

他国からの食料供給に頼っている現段階では、凧国はまだまだ真

に安定したとは言えない。

それこそ、他国に何かあって輸入停止となれば、あっという間に
虱国は食糧難に陥ってしまう。

瑠夏州だけでは到底賄いきれない。

「出来れば、鶯州にも農産業に力を入れて欲しいんだけど」

そして開拓した農地の八割に大根を植えて欲しい。

「いや、それだと栄養偏りますって」

「大根は万能野菜よ!!!」

問題ナッシング。

と、グギュルルルと果豎のお腹が鳴った。

「うっ……大根切れだ」

「大根切れはどうでもいいです。ってか、燃費悪いですね。さっき
食べたばかりなのに」

「ああ、出立した日に差し入れてくれた料理長の大根料理がまた
食べたい」

甘辛い大根の煮物。

あれは絶品だった。

「確かあれは郷土料理でしたわね」

「そうそう。この州の郷土料理だった筈だよ」

料理長の出身州の味。

あの屋敷に居た二十年の間に果豎もすっかり気に入ってしまった。

「あの味はもつと広く国に広まるべきよ!」

「確かにそうですね」

明燐もあの郷土料理の味は気に入っていた。

特に魚の煮付けは絶品である。

「そう、大根料理とか、大根料理とか、大根料理とか」

「果豎、大根大根煩いですわ」

「くうう! こうなったら何としても大根料理の為の大根栽培に勤
しんでもらわないと!」

果豎は強く決意した。

第三話 二十年前の新生活

「つて事で、大根を植えて貰えるように、街道事業に加えて農地開拓も上層部に話を通さなきゃね」

そしてどこから取り出したのか、紙にさらさらと要望を書いていく。

うん、あとで改ざんしよう——大根の部分だけ。

明燐は固く決意した。

「でも……この二十年は、こんな余裕もなかったよね」

「果豎？」

「王都から瑠夏州までの道のり。こんな景色だったんだね……全く、覚えてなかったよ」

果豎が少しだけ哀しげに笑った。

「此処に来てからの私の二十年間は、あの屋敷とその周辺、そして州都だけだったんだね」

王宮時代に比べれば広すぎる世界。

けれど、もし王妃ではなくただの果豎であれば、きっと自分は……。

「私、本当に一部分しか見てなかったのね」

「果豎……」

明燐は果豎の手にそつと触れた。

それは違う。

なぜなら、あの時は悠長に外を楽しむ余裕などなかったのだから。

そう……あの日も、【馬車】で駆け抜けた。

王都から瑠夏州まで一月もの距離を、徹夜で駆け抜けたのだ。

バケツをひっくり返した雨と鳴り響く雷。

途中洪水や山崩れが起きている中、ようやく辿り着いた屋敷は、手入れこそされていたが、長らく無人な建物に特徴的な澱んだ空気が立込めていた。

それから一週間雨は降り続き、雷が鳴り響いた。

先の農作物盗難事件時の小雨なんて比較にならない程の大雨は、果豎と共に来た者達の心まで折りそうになった。

側室候補を殺した容疑者にされ、謂われなき罪を被せようとする者達の魔手から逃す為に、殆ど身一つで果豎は「馬車」に押し込められた。

『必ず、迎えに行きます』

果豎を寵愛していた王は、そう言って信頼の置ける者達と共に王妃をのせた「馬車」を見送った。

本当なら、他にも果豎付きの侍女が共に来る筈だったが、秘密裏の追放であり、あまり大勢が居なくなれば気付かれてしまうと、明燐だけが共に行く事を許されたのだ。

そうして命の危険は去ったが、問題は山積みだった。

その一つとして、いつ王妃が王宮に戻るかというものがあつた。罪を被せられた王妃の命を救うために瑠夏州に追放されたのだ。その罪が冤罪であると分かり、真犯人が捕まるまでは戻れない。それは、王妃に同行した者達の心を暗くした。

けれど、果豎だけは違った。

屋敷までの間に心に踏ん切りをつけたのか。

落ち込む者達を気遣い、率先して働き始め、同行した者達の度肝を抜かせた。

王妃様にそのような事はさせられません、と止める者達を逆に制止し、此処は王宮ではない。

一刻も早く住みやすくする為には全員で働くべきだと、水汲みや掃除やらを行った。

王宮から当座の生活費として渡されたお金は極力貯金に回し、領主に許可を貰って屋敷周辺の土地を開墾して畑として食料作りに勤しんだ。

そしてその野菜を周辺の町村に持って行き、お金へと変えたり、物々交換したり。

更に薬草を集めて薬品をつくり、生地を買っては色々で見事な刺繡を行い高値で売り払った。

本来なら王宮の生活とはほど遠いそれに泣き暮らしてもおかしくないのに、果豎は自ら動き生活をよりよいものにしようとした。

だが、それは自分の為と言うよりは、巻き込み共にこの地に来ることになった者達の生活を少しでも豊かにしたかったからだ、後に屋敷勤めとなった同行者達は知る。

果豎は何時だって周囲の者達の為に働いた。

冬には、夏の間に作製した綿入りの防寒具を屋敷勤めの者達に提供し、水仕事時の為に湯を沸かす為の薪割りにも勤しんだ。

電気やガスも通っては居たが、長年誰も住んでいない場所の為にすぐに使えず、しかも瑠夏州で伯富達の反乱がありしばらくの間はそれどころではなくなった。

満足に電気やガスが使えるようになったのは、果豎達が屋敷に滞在して一年以上経った頃の事だった。

それでも、十分に満足した生活が送れたし、果豎にとっては彼女を誹謗中傷する者達が居ない分、心安らぐ場所であつたのは間違いない。

そう——あの屋敷は、王妃である事を強いられ、否定され、憎まれてきた果豎にとっては、ただの少女で居られる理想郷とも言える場所だった。

また、果豎は周辺の村人達とも仲良くなった。

王妃である事は隠していたけれど、農作業やらなにやらと共通する話題も多く、何よりも村が人手不足になると率先して手伝いに向かった。

そこで、自分の持てる知識を伝授した。

どのようにすれば、より豊作になるのか。

どのようにすれば、より効率的に作物を収穫できるのか。

また、生地も無地のものよりは刺繡があればより高値で売れる事、その刺繡の仕方を教えたり、薬草の調合方法も教えた。

時間がある時には、子供達に読み書きも教えた。

それにより、周辺の幾つかの村では生活は大いに改善され、生活も前よりもずっと豊かになった。

それは、国の政策そのものだった。

果豎は王妃としての資質を十二分に備えていると明燐は思う。

それこそ、まだ見ぬ王の愛妾なんかよりもずっと。

どうして王がそこまで愛妾にのめり込んでいるのか分からない。

上層部が王妃同然の扱いをしているのか分からない。

いや、そもそも愛妾の存在自体が信じられない。

今でも夢ではないかとさえ思う。

しかし、それを口には出せない。

明燐は溜息をつく。

自分が愛妾の存在に気付いている事は、果豎は知らない。

たぶん、自分だけの胸に留めていると思っている筈だ。

だが、明燐は知っているし、果豎が愛妾の事に気付いているのも知っている。

でもそれを伝えていないから、口に出すことは出来ない。

寧ろ、今突然伝えたところで果豎を混乱させてしまえばかりか、下手すれば傷つけてしまいかもしれない。

果豎にとつては、王の愛妾の事については絶対に触れられたくない話題だろう。

でなければ、とつくの昔に明燐に相談していた筈だ。

だから明燐は、今も喉から出かかっている言葉を飲み込むしかなかった。

「本当に、ままならないものですわね」

明燐は窓の外に視線を向け、そつと息を吐いた。

「何が？」

「いえ、何でも」

ムギユ

窓から果豎の方に向き直った瞬間、明燐の顔に何かが当たった。

柔らかくモコモコの感触。これは

「……大根」

「のヌイグルミ！！ 見てみて〜、この前作った新作のものよ！！」

等身大（大根ではなく果豎の）の大きさをした大根のヌイグルミを抱きながら、果豎は親指を立てた。

「って、大根のヌイグルミ？」

そこで気づけば、【馬車】の中にもこれでもかと大根のヌイグルミがあつた。

しかも、自分の隣や果豎の隣に大根のヌイグルミが座っているし。そういえば、ついさっき窓の外を向いた頃から、何か狭苦しいと思つた。

因みに、この【箱馬車】は十人乗りの【大型馬車】だが、乗っているのは果豎と自分の二人だけ。

荷物は全部【馬車】の上と、別の【馬車】に積んである為、本来なら広々としている筈のこの車内。

しかし、いまや定員一杯に人が乗っているよりも狭苦しかった。

床にもヌイグルミ、天井からも小さなヌイグルミがぶらさがっているし。

「って、いつの間にこんなに乗せてたんですか！」

「明燐の気づかない間に、そしてたつた今」

「そりゃそうだろう。」

さつきまでこんなものはなかった。

だが、それ以上に、仮にも大戦時代は前線に立ち鞭を振るい、多くの敵を屠ってきた自分にさえ気付かせずに、この状況を一瞬にして作り出す果豎に恐れすら抱く。

「凄いでしょ〜！！ 昨日徹夜で作った大根ゴレンジャー！！」

色違いの戦闘服を着た五つの大根のヌイグルミ。

徹夜で何を作ってるんだ、しかも全く気付かなかつた。

「やっぱり、旅には心の癒しがいないとね」

心の癒しだとしても、こんなにいらん。

王都で出迎えに来る民達がこれを見たら、無言で扉を閉められかねないではないか。

それどころか屋敷に強制送還されかねない。

はっ！まさか果豎はそれを狙って！！

いやいや、それは考えすぎだろう。

明燐は自分の心を落ち着けた。

リラックス効果は緑色がいいと言うので、大根の又イグルミの葉っぱの部分を見ながら。

干されている大根人形だったらぶん無理だったが、これらの又イグルミは瑞々しい生大根。

問題は全くなかった。

「明燐、暇だから大根について私と熱く語り合わない？」

キラリと光る白い歯。

眩しい笑顔。

とりあえず、大根の事を語りながら見せるものではないだろう。

どうしてこう無駄な所に無駄な事をするのだろうか。

「何で年頃の乙女が大根について語らなきゃならないんです。しかも熱く」

「愛する存在を語る時に冷静さはいらないのよ」

「いや、寧ろ冷静に考えましょう。それに暇だから大根について話すなんて、大根を暇つぶし程度にしか考えてないようで失礼ではないでしょうか？」

「はっ！それもそうね！！大根のことは、厳肅なる国会の場で、それこそ大切な法案を決めるかのように話し会わなきゃ！」

いや、絶対話し合わない。

何で法案決める場所で大根について話あわなきゃならないんだ。

話し合うとすれば、農作物と一括りにされるだろう。

大根とピンポイントでは話し合わない筈だ。

「そうよ！！親しみやすい大根だからって、暇潰しの話は駄目よ

ね」

「寧ろ暇潰しで話して下さい。間違っても法案を決めるような場で大根の話をしないで下さい」

「なんで」

「なんででもです」

風国の名産が大根だと思われたらどうするんだ。

風国の名産品は『海燿石』かいようせきであって、間違っても大根ではない。

「とにかく、王都ではあんまり大根大根って言わないで下さいね。大根王妃だなんて言われたらどうするんですか」

「どうしよう?!」

え?何そのキラキラ視線。

もの凄く顔が輝いているんですけど。

世界中の幸せ全てを吸い取ったかのように見えるんですけど。

寧ろこつちがどうしよう?!なんですけど!!

明燐は自分の失言に心の中で舌打ちした。

愛する大根の名を加えて大根王妃。

果豎が喜ばないわけがない。

他の女性にとっては蔑称とも言えるそれも、果豎にとっては愛称でしかないのだ。

って、これじゃあ果豎は大根の国の王妃ではないか。

もちろん大根の国だから国民も王様も大根。

つまり、果豎の夫も大根になる。

明燐の脳裏に、果豎の夫である風国国王の姿が思い出された。

今は違うが、二十年前まではウザイほど妻命だったあの国王。

例え外面が異常に良くて、王の中の王と謳われる美貌の賢君と名高くても、上層部からすれば卑怯な手段で果豎を妻にしたロリコン犯罪者。

実際の年齢さは、人間で言う所の四歳差ほどだが、かたや性別を超越した美貌は全く美女にしか見えずとも、成人男性の二十一歳かたや、寸胴体型と色気の無さから全く十七歳に見えない外見小

学生。

うん、やっぱりロリコンだ。

何度、逮捕される！！と心の中で祈ってやったか。

しかし、司法権を司る機関は王のカリスマ性にぞっこんで、幾ら『青少年保護法違反』と『未成年へのわいせつ罪』を訴えても全く動いてくれない。

それどころか

『はっはっはっ！ 陛下がそんな事するわけないじゃないですか』
何が、はっはっはっ！だよ。

お前らの肩に国民の司法がのっかかってるんだよ。

国民の権利の一つが背負われてるんだよ。

きちんと目を開けて、ロリコン犯罪を裁けよ。

『王は間違った事はしません、美しいから』

美しくたつて犯罪者になる奴はごまんというだろうが。

しかもあれは見た目が白いだけで、腹の中は真っ黒だ。

腹が立ったから、明燐は奴の愛娘を自分の魅力でメロメロにし、

『お父さん不潔！！ 近寄らないで！！』と言わせてやった、ざまあみる。

因みに司法権のトップは、それから一週間引きこもった末に奥さんに職場に叩き出されていたが、明燐は気にしない。

トップの父娘関係より果豎の貞操の安全こそが最優先だ。

その為には、どこの父娘関係を犠牲にしても構わないとさえ思う。

それに一番悪いのはあのロリコン変態犯罪者だ。

既に明燐の中では王の「お」の字も出てこなかった。

しかも奴は酷く心が狭く、鬼畜腹黒で、妻である果豎には馬鹿みたいに優しいのに、共に暗黒大戦を戦い抜いた盟友たる上層部には冷たい真の鬼畜だった、二十年前までは。

そんな奴が、果豎の心は大根に奪われたなんて知れば。

『国王命令です。今日よりこの国から大根は一切合切廃棄します』
いやあっ！！大根農家からクレームがくるっ！！

……かも知れない、二十年前なら。

今は愛妾にトチ狂っているから見逃して貰えるかもしれないけど。しかし……あの鬱陶しいまでにウザイ粘着質の王の事だ。

果豎に対しての興味は本当に無くなってしまったのだろうか？

寧ろ、両手に花とか馬鹿な事を言い出すかもしれない。

明燐にとって王は何処までも犯罪者でしかなかった。

いや、もし果豎さえ良ければ王と離婚させた方が果豎の為かもしれない。

ただしその場合は自分が果豎を独り占めするが。

そう——他の上層部もいらないと言うなら、自分が果豎を独り占めし、綺麗に着飾ってあんな事やそんな事やこんな事を——。

その時、果豎は全身に凄まじい悪寒が走ったという。

そして野生の本能並みで距離を取る果豎に、明燐はようやく我に返った。

「と、とにかく、王都で大根は禁止にしておきましょう」

「何で?!」

ってか、一体どんな思考回路の末にそうなった。

寸前まで考えていたのは、果豎をどう可愛がるかだけだっただろう。

今も口の端から唾を垂らしているぐらいだ。

しかし明燐は爽やかに言い切った。

「この世から大根消されたくないでしょう?」

「私から大根取ったら何が残るのよ?!」

「沢山残るから大丈夫ですわ」

暴れる果豎を押さえつける明燐。

もし此処で護衛が【馬車】の中を覗き込んでしまえば、妖しくも淫靡な『百合』の世界がお目見えするだろうが、厭な予感がしていた護衛達は皆聞かなかった事にした。

この世には見ない方がいい事もあるのだ。

「長」

「なんだ」

「【馬車】の中、騒が、いえ、楽しそうですね」

部下の言葉に、使者団の長は苦笑した。

そこで言い直した部下の成長が眩しくさえ思う。

その一方で、【馬車】の中でぎゃあぎゃあ騒ぐ王妃と侍女長に苦笑いする。

しかし……思ったよりも元気そうで良かった。

王妃の本音は、王宮になんて戻りたくない。

だが、それでも瑠夏州の領主を助けるべく、彼女は自分の王宮帰還を引き替えにした。

王妃が愛妾の事を気付いているかは分からないが、気付いていないにしろ王妃にとって王宮は心休まる場ではないだろう。

だから、王都が近付くにつれて憔悴していてもおかしくないのだが、今の所はそういう姿は見られない。

もちろん、あえてそういう姿を見せていないというのも考えられるが、この様な姿を見せていられるならまだ大丈夫だろう。

万が一の場合には、珍しい大根を献上すれば良い。

明燐様がそう言っていたから。

流石は宰相閣下の妹姫。

いや、彼女自身が有能だからこそ、王妃付きの侍女長になれたのだろう。

凧国王宮は、実力主義。

能力が高ければそれだけ上の地位につけるが、そうでなければ何時までも下の地位だ。

経験も考慮されるが、それだけでは尊敬され敬われても上には上がれない。

「長」

「ん？」

「次の宿营地ですが、予定通りでしょうか？」

部下の質問に長は頷いた。

「ああ。この調子だと、後二時間ほどで着くだろう」

気付けば、夕闇が迫り太陽の光が赤みを帯びていた。

何時もならばとくに宿に辿り着いていたが、次の宿を本来の場所よりも一つ先にした分、時間も余計にかかっていた。

それは、少しでも距離を稼ぎたいという想いもあったが、大部分は治安面に配慮した結果だった。

先の宿の主の話だと、今向かうとしている宿場町の方が予定していた場所よりも治安面が良いという。

自分達だけならまだしも、王妃が同行しているとすれば、治安の配慮はしてもし過ぎる事はないだろう。

「だが、少し急いだ方がいいな」

周囲の景色はのどかな草原から、何時の間にか両側が木々の斜面に覆われた細い道に入っていた。

周囲に人里はなく、聞こえるのは虫や鳥の鳴声のみ。

ここは獣達の領域だ。

風がふく。

茂みや木々の枝が大きく揺れる。

「ふむ」

「長、どうしました？」

「いや、ここなら隠れるにうってつけだと思ってな」

隠れる場所はそこら中にあるし、人目にもつかない。

しかも道が悪いうえに細く、先程まで王妃の乗っていた【馬車】の左右にっていた護衛は前後に位置するしかない。

完全に無防備となった側面。

この時を待っていたとすれば、相手も中々の知謀を持っている。
「来るぞ」

「御意」

既に他の者達も気付いていたらしい。

皆が一斉に刀を抜くやいなや、それらは襲い掛かってきた。

第四話 襲撃

大きく馬車が揺れ、急停止する。

「きゃっ!!」

反動で明燐が後ろに転がり、その上に果豎が覆い被さった。

「あんっ」

「ご、ごめんっ!!」

腰が碎ける様な甘い喘ぎが、明燐の唇から漏れる。

その原因は、果豎が明燐の胸に顔を埋めてしまったのと、起き上がる際にその胸をわしづかんでしまった為。

ふるふると揺れる胸は、大きな二つの白桃と、その先に色づく甘い桃色の実から出来ている。

服の上からでも分かる豊かなそれ。

男達はおるか同性からも垂涎ものだが、果豎は意図も容易くわしづかんだ。

その力強い手に、明燐の全身に電撃が走り子を育む器官が疼く。
が、果豎はそんな事には気付かず、キョロキョロと辺りを見回していた。

馬の甲高い嘶きの声が轟く中、護衛達の怒声が響き、緊迫した空気が伝わってきた。

「な、何？」

馬車の扉が勢いよく開き、人相の悪い髭面の男が顔を覗かせる。

「おいっ!! 馬車から出——」

男の顔が固まった。

そして、そつと扉を閉めた。

一体何だったのか？

「おい、なんで扉を閉めるんだ!!」

「駄目だ!! 開けちゃなんねえ!! この扉の向こうは魔窟だ!!」

今、聞き捨てならない言葉が聞こえた気がする。

「良いからどけ!!」

別の男が扉を開け放ち、顔を見せた。

「……」

その男も扉を静かに閉めた。

それが数回続いた。

「お前達、ふざけてるのか!!」

「だって魔窟が!!」

「なんか白いものが手をこまねいているんですっ!!」

「有り得ないものが居たんです!!」

失礼極まりない台詞が幾つも外で飛び交っている。

「っ! もういい!! 俺が——」

そうして開け放たれた扉。

顔を覗かせた男。

どうやら、今までの男達よりも地位は上らしい。

過酷な視界への順応力も高かった。

彼は大根で覆われた馬車内の光景に、見事に耐え抜いた。

だが。

倒れた明燐にのし掛かる果豎を見た瞬間、彼は叫んでしまった。

「十人並みの女が、絶世の美女を襲って、ごほお?!」

男の顔を鋼鉄の大根で殴り無言で扉を閉めた果豎。

呆然とする明燐を後ろ庇いながら、ゼエゼエと息を吐いた。

「顔だけじゃなくて、思考と言葉も失礼ねっ!!」

確かに自分は十人並みで、明燐は絶世の美女だが、改めて言われると腹が立つ。

「落ち着け私。とにかく、外に出てきやつ!」

いきなり扉が開き、近くに居た果豎が弾き飛ばされる。

明燐が悲鳴をあげた瞬間、馬車に一人の男が乗り込んできた。

先程の男とは比べようもないほど精悍で見目麗しい若い男だった。長身の体をするりと馬車に滑り込ませ、明燐の体を押え付ける。

「貴方達は」

もしかしくなくても、賊。

馬車が急に止まった事や護衛達の叫び声、外から聞こえる怒声や刀を切り交わす音などから推測すれば、そう考えるのは簡単だった。「お静かに。抵抗しなければ手荒なことはしません」

「護衛達は」

「オレの仲間達が相手をしています。ただ半分は既に倒れていますかね。ああご心配なさらずに。殺してはいません。但し、数日は動けないと思います。でも、オレ達が去った後ぐらいに商人の団が通る筈ですから運が良ければ助けられるでしょう」

「そんな……」

「それより、貴方様にはオレ達と一緒に来て頂きたい」
そこで、男が明燐を見つめる。

「一緒に来て頂けますね？ 風国王妃」
は？

明燐はキョトンとした。

風国王妃？

だが、今はそれよりも聞くべき事があるし、何よりも自分を王妃と誤解しているならば、どちらにしろ果敢に害は及ばないだろう。むしろ及ぼしたら即殺す。

「貴方達は一体何が目的——は？」

「目的は勿論貴方ですよ、王妃様」

何だか熱い眼差しを向けてくる男に、明燐は首を傾げた。

なんだか、これって。

いや、まさか。

普通有り得ないだろう——いや、有り得るか？

戦いの中、どんな時でも、いついかなる時でも兄に告白してきた敵軍兵士や大将達。

戦いの真つ最中にもかかわらず、兄に対してマウントポジションを奪い取った者達も居た。

もちろん、そういう馬鹿達は即座に鞭で吹っ飛ばしてやったが。因みに果豎もマウントポジションを勝ち取ったが、その時には温かい目で見守った。

それに、配下である侍女——涼雪が取った時には、兄に対してお赤飯を炊いてあげた。

『これで一步進めましたね！！ 後で三步下がると思いますが』
『……』

その後、何故か兄が両手で顔を覆って走り去ったのは、今でも不思議だった。

自分はただ、兄の初恋を応援しているだけだ。

怜悯冷酷冷酷非道の凧国上層部。

暗黒大戦時の際に、後の凧国国王たる青年の軍に比較的初期の段階で関わり、功績を挙げた者達。

凧国国王を自分達の主と認め、常にその側で戦ったのが、今の凧国上層部に当たる。

建国後は、それぞれが自分の能力を発揮し才能を開花させ、各長官、副長官として政治の手腕を振るっている。

が、そんな外面だけはカッコイイが、実はオトメン揃いと言われる凧国上層部。

同性に虐げられ、女を開花させられた彼らの心を激しくぶち抜いたのが、あの涼雪なのだ。

そして兄の初恋相手。

他のオトメン達は、皆女子校におけるカッコイイ女子生徒をお姉様と慕うが如くの親愛の情だが、いつそれが恋心に変わるか分からない。

涼雪はカッコイイ。

見た目は普通の少女だが、その雄々しさに兄はぞっこんだった。そして大抵兄は、涼雪に気付いて貰えない恋心に悩み溜息をついている。

それこそ、いつもの冷酷な宰相閣下が乙女にしか見えなかった。

その様は見ているだけで、子を育む器官が疼き全身をゾクゾクした快感が通り抜ける。

兄は憂いある顔や悲しんでいる顔が一番色っぽい。

明燐は、何時の間にか芽生えた兄に対する加虐心が疼くのを感じた。

「って、今は悠長にトリップしてる場合ではありませんわね」
危うくパールな世界にトリップする所だった。

明燐は目の前の男をジッと見つめた。

そう……今までの奴等と比べて、目の前の男からは嫌な感じはしなかった。

やってる事はたぶん同じ——な筈、なのに。

それどころか、その瞳に魅入られ明燐はしばし沈黙する。

が、その時——馬車の隅から珍妙な呻き声が聞こえてきた。

はっ！果豎！

さつき開いた扉に弾き飛ばされた果豎の姿を探すが、どうやら男には抵抗しているように見えたらしい。

男の拘束が強くなる。

「抵抗しないで下さい」

「いえ、抵抗ではなく——って果豎！！」

「はい？ ってうわぁ！」

そこには、大きな大根を握りしめた果豎が立っていた。

開いた扉の前で舞っていた男達すらも怯えて距離を取る。

「わざと？」

「へ？」

「私のこと、ガン無視したのって」

「え、いや」

無視というか、居たのさえ気付きませんでした。

なんて言ったら、その大根で殴り殺される様な殺気が漂っている。

「ええ、無視よね。無視以外はないわよね？」

手に持っていた大根が、ミシリと指圧で碎け散る。

動いたら殺られる。

砕け散った大根に、誰もが自分達の未来を見た。

そんな中、果豎は新たな大根を手に持つ。

「それに、何？ 人の友人にのし掛かって」

「あ、え、いや——って！！ 動かないで下さい！ 王妃がどうなつてもいいんですか？！」

男が明燐の首筋に刀を突きつける。

そんな男に果豎は怒鳴った。

「王妃は私よ！！」

「は？」

男だけではなく、外に居た男の仲間達も同じく間抜けな声をあげた。

「え……いや、そんな嘘は。どう考えても凧国国王の妻は此方の美しい」

「いえ、果豎が王妃です」

本来なら自分が王妃だと言って果豎を守るべきだが、そうすると余計に果豎の怒りに火を注ぎかねないと気づいた明燐は素直に言った。

「な、なんですって？」

「ですから、果豎が王妃です。凧国国王の唯一の妻にして正妃」

「嘘……」

呆然と呟く男に、様子見に馬車を覗き込んでいた彼の仲間の男達も騒ぎ出した。

「あんな十人並みで胸もない男みたいなのか？」

「いや、絶対男だろ。女であんなに胸がないなんてありえないし」

「そうだよ、お頭が押さえつけている女の方が美人で女らしくしてしとやかで」

「それにたおやかで清纯可憐だし」

「胸も大きくて腰も引き締まってて、あの美人の国王にお似合いだぜ」

「やっぱり、そっちの美人が王妃じゃないか？」

「だよな。そっちはあまりにも平凡で」

「胸真っ平らだし」

ぶちんと何かが果豎の中で音を立てて切れた。

「おい！ 失礼だぞ」

明燐を抑えている男が仲間を叱咤するが、果豎の王妃ではなく男疑惑に対する談義は留まることを知らない。

しかも失礼という事は、一度はそうだと認めている事に他ならないのだが、焦る男は気付かなかった。

「けど、お頭。王妃っていうからには」

「馬鹿にするなあっ！！」

完全に切れた果豎が暴れ出す。

特大の大根を持って外へと飛び出し片っ端から男達を殴り飛ばす。

「ひいっ！！」

「ぎゃあ！！」

「うわああああ！！ お助けえ！！」

白い大根が紅く染まる。

最終的には持っていた大根が真っ二つに折れると、果豎は近くの岩や大木を投げつける。

丁度馬車が襲われた場所が場所なだけに、武器になるものは沢山あった。

「ぎゃああ！！ 誰か助けてええ！！」

「待ちやがれ、このヤロウ！！」

次々に血祭りに上げられていく部下達に、お頭と呼ばれた男は焦った。

今も大木を投げつけている果豎という少女が王妃であるのは間違いないだろう。

けれど、自分達が想像していた王妃というのはもっとこころ深窓の姫君という感じだ。

確かに王妃は庶民出身だが、あの国王に見初められるのだからそ

れ相応の美女であるに違いないと思っていた。

なのに実際には平凡な少女。

しかも、対等どころか圧倒的な力で部下達を追いかけて回している。

「よくも年頃の乙女の心をズタボロにしてくれたわね」

「ひい！！ すいませんもう言いません貴方は絶世の美女です！！」
追い詰められた最後の部下が必死に命乞いをする。

「謝罪はともかくとして、あからさまな御世辞はいらんわっ！！」

それこそ、『果豎！ 胸が大きくなったんじゃない？ 一？ぐらいは』と昔言われたぐらい腹が立つ。

しかもそれが、男のくせに天使の様な美少女にしか見えない奴の発言だったと思い出せば、もっと腹が立つ。

胸が何だ！寸胴がなんだ！！

男のくせに恐ろしいほど色っぽくて。

男のくせに小悪魔にしか見えなくて。

男のくせに同性異性問わずモテまくって。

女性変化した時にプルンプルン揺れているからって。

いい気になるな、こんちくしょう！！

う、羨ましくなんてないんだからね！！

果豎はツンデレ要素を手に入れた。

「ちよっ！ やめて下さい！」

明燐を連れてお頭である男が部下の前に飛び出してきた。

「……ふっ…… 良い度胸ね。明燐を人質にしようだなんて」

「ち、違いますっ！！」

「さっきは首に刀を突きつけていたでしょうが！！」

「あ、あれは！！ でももうしません」

「当然よ！！ やったら許さないわよ！！」

「す、すいません——って、それよりも十分でしょう？！ 部下を許してください！！」

「十分？ あれだけ胸が小さい、ブス、王妃らしくないと言われた私の心の傷の深さに対しての報復が、十分？」

ブスとは言つてない。

しかし、そんな言葉が果豎に伝わるとは思わなかった。

「大根の如き真つ白な心を穢されたこの恨み！！ 晴らさないで死ぬなんてできないわ！！」

「は？ 大根？」

「すいません幻聴です、気にしないで下さい寧ろ気にしないで」

明燐が必死に自分を捕えている男に言い募る。

「ふふふ……みんな道連れにしてやるわ」

「果豎！ 落ち着いて！！」

「末代まで祟ってくれるわ…… あはははうふふふ
完全に果豎が壊れた。」

「どうしましょう…… 押してはいけない最終兵器スイッチを押したような事態ですわ」

「き、緊急停止ボタンはっ」

「とりあえず新種の大根を差し出せば正気には戻りますが」
胸をけなされるより、大根の方が果豎にとって比重は大きいらしい。

「大根？！ 大根ならこの先の峠に生えて」

お頭と呼ばれた男がそう叫んだ時だった。

風を切る音に、反射的に頭を横に傾ける。

はらりと髪の毛が数本宙を舞った。

「っ！！」

「明燐様に手を出すな」

「貴方は……」

冷たい眼差しで睨み付け、剣を構える使者団の長。

その姿が消える。

「っ！！」

お頭と呼ばれた男と、使者団の長の剣が激しく交わり、ぶつかり合った闘気は突風となって周囲を吹き飛ばしていく。

そんな中、果豎はと言うと。

「うきやあああつ!!」

ぼすんつと、一人茂みに落っこちていた。

一方で、明燐はお頭と呼ばれる男に庇われ傷一つ無く、まるで姫君の様に守られる。

実際、使者団の長とお頭の男は明燐を争って戦っている。相変わらずの逆転主従だった。

というか、何度も言うが、果豎が王妃なのだ。

が、たぶんこの状況では誰もが忘れ去っているだろう。

「明燐!!」

本人でさえも。

第四話 襲撃（後書き）

果豎の不憫度が五割増しになりました（笑）

第五話 人材

「明燐様から離れる！！」

敬愛する主のたった一人の妹君。

宰相閣下が溺愛し、命よりも大切にする方というだけでも使者団の長にとっては守るべき存在。

しかし、それを差し引いても聡明で麗しく気高い風国一の美姫である明燐。

侍女長としても優秀で、王宮にとって不可欠な人材という、風国の国民達の憧れの花。

そんな方に賊が触れるなど、許されて良いことではない。

その汚らしい手が、明燐の肌に触れた瞬間、使者団の長の頭に血が上った。

そうして、本来守るべき筈の果豎の存在をすっかり忘れ、お頭と呼ばれる男と激しい戦いを繰り広げていく。

「ちっ！」

お頭と呼ばれた男が長の刀を弾き、振り下ろす。

「甘いわ小童！！」

「それはこっちの台詞だっ」

凄まじい闘気ぶつかり合う場に、他の者達はいっしか斬り合うのを止めて、その戦いに魅入られていく。

それは、男達が生来持つ純粹なる闘争本能を刺激していた。

「すげえ」

「流石、お頭！！」

そんな中、果豎はと言うと。

「あ、これ野生大根だ」

明燐の元に向かおうとした途中で、野生の大根を見つけて寄り道中だった。

「って、何これ！！　いくら野生だからってこんなやせ細っている

なんて！！」

干涸らびたミイラ寸前の大根に果豎は苦悩混じる悲鳴をあげる。

こんな、こんな大根認められない！！

「即座に土壤改善に努めなきゃ！！」

そしてせつせとサンプルとして土を集める果豎だった。

「明燐様はそなたになんぞ渡さないぞつ！！」

「くつ！！ あんたはこの方の一体何なんだ？！」

もしや、彼も明燐を思っているのか？！

「明燐様は主の妹姫だつ！！」

安心した。

どうやら、恋愛感情はないらしい。

にしても、この少女は「めいりん」と言う名なのか。

確かに、美しいこの少女にはその名がよく似合う。

ああ、こういう字を書くのだろうか？

出来るならば、この少女から直接教えて貰いたかった。

だが、今は何よりも自分と戦う相手が、この少女に恋情を抱いていない事が分かって良かった。

ホッとした男だったが、そこで会話に出て来た「姫」という単語を思い出す。

確かに、王妃の側に居られる存在ならば、姫——貴族の姫ぐらいの身分は必要だろう。

風国の王宮は身分に関係なく開かれ、能力さえあれば貧しい平民にだって出世の機会はある。

しかし、未だ選民意識が強い者達が、一部に現役貴族として残っており、民達の中にも選民意識や身分制度に敏感な者達はまだまだ多い。

それは、暗黒大戦以前に骨の髄にまで叩き込まれた、理不尽なまでの圧倒的な身分制度と選民意識によるものだ。

大戦が終結するまでは、生まれから全てが差別され、平民の子供は一生平民に、貴族の子供は一生貴族のまま過ごす完全なる世襲制

度がとられていた。

たとえどれほど子供に能力がなかりうと、あるうと関係ない。
グズグズに腐った血は、終には暗黒大戦を勃発させるきっかけまで作ってしまった。

そんな身分制度や選民意識も、あの全てを崩壊させた暗黒大戦で破壊されたと言われているが、それでも完全に民達や貴族達の中から消えたわけではない。

なぜなら、暗黒大戦以降も絶対王制や貴族社会は続いているし、完全どころか中途半端でも、国民主権となる共和制の国なんて殆どないのだから。

それは、天界十三世界全てを見てもそうだ。

天帝と十二王家は別として、世界に数多ある国々は、未だ残る王や貴族が統治している。

王や貴族の大半が一新され、その多くが様々な身分にあった者達だとはいえ、だ。

更に、王や貴族はその意味、役割に関しても大戦以前と大戦以降では大幅に変わっていた。

知っている者達ならば知っている。

王や貴族——各国の上層部は、ただの支配者ではない。

『生贄』であり『世界を支える柱』なのだ。

だが、それでもその特殊性から多くの権力が王や貴族達に集まるのだ。

もちろん、王や貴族達が今も残るのは、その理由を紐解けば「どうしようもなかった」、「そうしなければならなかった」と誰もが思わざるを得ないだろう。

しかし、たとえば意味が違っても王や貴族と言う名が、制度が残り、絶対王制が支配する。

だからこそ、選民意識や身分差別が無くならないのも致し方ない事であり、男が王妃付きになれるのは貴族の姫なのだと思います事も当然だった。

それに、生まれつきの考え方など、そう簡単には変わらないのは当然である。

王や貴族を決める時に、『天帝と十二王家』がその本来の意味を、その真の理由を告げたとしても、年月が過ぎれば少しずつ情報は歪曲されていくし、最初から誤解して受け取る者達だっている。

それが、今も王や貴族をただの権力者として、権力目当てに擦り寄っていく者達だった。

「明燐様！　どうぞこちらにっ」

「くっ！」

長の攻撃をかわし、男は明燐を抱き寄せる。

「ちよっ！」

「大人しくしていて下さい」

そう耳元で囁き、長の剣を弾いていく。

その姿に、明燐は騒ぐのを止めた。

この男は中々出来るようだ。

自分というお荷物を抱えながら、使者団の長と互角に戦う様子からして、その剣の技術は凄まじいものがある。

使者団の長も中々の使い手だ。

しかも、あの王宮では宰相である兄や、各軍の將軍達と鍛錬をしていたらしい。

將軍達はもとより、兄は武術の腕は恐ろしいものがある。

大戦の中で、王の軍に所属する中で磨き抜いた腕。

剣だけでなく、あらゆる武器を使いこなし、眠っていた王に次ぐ強大な神力すらも目覚めさせ、軍の軍師としてだけではなく、前線に赴いて戦う事も多かった。

そう……普段、いや、涼雪の前でこそオトメンだが、あれで兄は意外に男らしいのだ。

見た目は『男の娘』そのものだろうと。

というか、凧国上層部の大半が『男の娘』だから特に気にする事もないが。

そんな兄とも鍛錬をしてきた長と互角に渡り合う男は、紛れもなく本物の使い手だろう。

欲しい――。

それは、明燐としてではなく、王宮に勤める者として思う気持ちだった。

この貴重な人材が欲しい。

風国だけでなく、天界十三世界全土で慢性的な人材不足が発生している今、使える人材を見つけるのも一苦勞だった。

なにせ、暗黒大戦で神にも大勢の死者が出たのだ。

一部助け出した人間達や他の世界の者達も居たが、彼らを長く神々の世界におく事は出来なかった。

だから、神の世界の事に関しては神か、半神と呼ばれる片親だけ神の血を引く存在が必要なのだ。

ゆえに、使える存在を見つけたならば、速攻で欲しいと願うのは当然の事だった。

特に風国は、大国であるが故に他の国よりも多くの人材を必要としている。

この三百年。

上層部の者達は休む間もなく走り回されていた。

何か地方で事が起ければ駆け付け、領主から懇願されれば事態の収拾に向かい、天界十三世界全土で問題視されている世界の不安定さがもたらす歪みが発生すれば、その安定化の為にかけずり回る。

上層部の誰もが叫んでいた。

他の者達に押し付けられるなら押し付けてしまいたいと。

だが、それには代わりとなる人材を集めなければどうにもならなかった。

欲しい――。

明燐は強く望む。

この人材が、この男が欲しい。

特に、瑠夏州に屋敷勤めの者達を残してきた今は、喉から手が出

るほどだった。

明燐は、男に抱きかかえられたまま、その手を背中に這わした。
「え？」

男が、驚いて明燐を見る。

その表情に、明燐は満足げに笑った。

そして紅く濡れた唇を耳元に近付ける。

貴方が欲しいと、囁くために。

第五話 人材（後書き）

感想ありがとうございます♪

世界観が分かりやすいと言って下さり嬉しいです♪

こんな感じで、少しずつ世界観、状況などを盛り込んで行きたいと思います。

さて、以前はあっさり捕まった果豎。

でも、今回は使者団の長という強い味方がいるので、結構粘っています。

そして明燐に関しては、『彼』が気になっているのに、公の部分が優り、人材として見てしまっているという……。

第六話 銃器

甘い匂いが男を包む。

いや、ただ甘いだけではない。

嗅いだ瞬間、我を忘れる様な洗礼された高貴な甘さだ。思わずムシャぶりつきたくなるような、それでいて彼女の前に膝を突き請い願いたくなる様な、不思議な感覚に包まれる。

戦いの最中だというのに、それすら忘れて剣を落としてしまいうになる。

明燐と呼ばれた美しい少女が、自分の耳元に唇を寄せる。

そして最初の音が、鼓膜を打つその時だった。

「お、お頭」

部下の言葉が、陶醉にも似た気持ちに水を差す。

それは強い苛立ちとなつて、男にいついキツイ物言いをさせた。

「なんだ！」

「あ、その、い、良いんですか？」

「何がだ！！」

体を捻つて長の剣をかわし、剣を横に風ぐ。

腕の中の少女を傷付けないように、慎重に間合いを詰めていく。

「だから、目的」

「ああ?!」

その時だ。

「大根、大根、大根ダンス」

くると男の視界に何かが映った。

それは、長の耳にも届いたらしく、二人して固まった。

「大根」

果豎はくると回る。

「大根」

更に回り続ける。

「大きくな〜れ〜」

それは成長促進のダンス。

確か、昔人間界である幼い姉妹がこうやって種を芽吹かせ、巨大な木に成長させた内容のアニメがあった。

それを徹夜で研究し、果豎独自のダンスを開発し極めたのだ。

「おりやああ!!」

下から上に、下から上に。

激しい踊りに、誰もがその奇怪な姿を前に凍り付く。

「果豎！ 何してるのです!!」

「成長促進の舞よ!!」

タイミングばっちり。

流石は王妃とそれ付きである。

ん？王妃？

この時、長と男はようやく思い出した。

「王妃！」

「忘れてた！」

部下の男が言いたかったのも、これ。

王妃の存在を忘れて、王妃付きの少女の存在で争う二人は、ようやくそれぞれの目的と守るべき対象、奪うべき対象を思い出した。

長かつたけど。

「だああいいいいこおおん!!」

その時、ニヨキニヨキつと大根の芽が生えた。

「すげえ」

何がだ。

「流石は王妃」

何がだ。

「これが風国王妃の力!!」

どこがだ。

「果豎!! その下手な歌をやめなさいっ」

「いえ、歌自体はとんでもなく上手いですけど——ひいいっ!!」

ツッコみを入れた男に、明燐は懷から取り出した小刀を投げつける。

至近距離のそれを寸での所で逃れた男も凄いが、明燐も凄い。

「あの子の歌が上手いのは分かってます」

「さつきと言ってる事が逆じゃないですか?!」

「でも、それをどうして貴方に聞かせなければならぬのですか!

! あの子の歌を聞けるのは私達、王宮の上層部だけですわ!」

果豎の歌声を聞いたとなれば、生かしておけない。

明燐の中で、今度は男が抹殺対象へと変わった。

「大人しく死になさい!!」

「嫌です」

「ってか、そこまでしてどうして明燐様を離されないのだ……」

呆れて、長は攻撃の手を止めて呟く。

明燐に攻撃されながらも、それを全て避けきる男。

しかも明燐を抱き締めたままだ。

あれか? 気合いか? 気合いだな!!

「恋とは恐ろしいものだ」

勝手に恋情有りと判断する長。

彼も若い頃は、今の妻を捕まえる為にそれはそれは苦労した。

毎日のように物陰から見守り、何処に行くにも付いて回り、誰かに付けられている気がすると怯える妻の為に、護衛を買ってでた。

そしてそれが縁で結婚した自分達。

長は全く気付いてない。

そのストーカーこそが自分で、とつくの昔に犯罪の道に入っている事を。

一方、そんな騒ぎに気付かずにせっせと大根の為に良い環境を作っている果豎。

大根の為なら、

果豎はその場が戦闘地域に入っていようと気にしない。

もしかしたら、

周囲が果豎を前線に出さなかった理由はそこかも知

しない。

「大根、大根、大根！！」

るるるん、らんらん。

鼻歌歌って雑草を抜く。

決まったメロディーはない、ただ思うがままに奏でていく旋律。

それは、その場に居た者達に一瞬状況を忘れさせた。

「ああ、みんなに無視されて傷ついてるのね！！」

哀しげに叫ぶ明燐。

しかし、みんなは激しく首を横に振った。

いや、めっちゃ楽しんでます、あの王妃。

めっちゃ自分の時間を満喫してます、あの王妃。

寧ろ自分の道を爆走してます、あの王妃。

「離しなさい！！」

「っ！！」

パンつと男の頬を平手打ちにし、明燐は自由を取り戻す。

「ま、待ちなさい！」

「果豎は誰にも渡しませんわ！！」

既に色々と何かが間違っているが、明燐は凄まじい速さで果豎へと近付いていく。

「やつぱり、こんな土壌じゃ駄目だわ！！」

愛しく艶めかしい肢体を持つ大根の寢床は、それこそふかふかの羽毛布団すら足下に及ばない土壌でなくてはならない。

こんなボロボロ土は、問題外！！

「この土壌改善の為に王宮に戻らないと！！」

王と離縁する為だった。

瑠夏州で起きた事件の真相を調べる為だった。

しかし、今の果豎には大根の寢床改善しか頭にない。

それどころか、このままでは鷺州の領主に詰め寄りかねなかった。他の男に必要以上に近付いたなんて知れたら、二十年前の王なら速攻で抹殺対象にしただろう。

「行くわよ、みんな！！ 大根の安眠の為に！！」

場所も状況も全てを顧みない王妃の宣言。

だが、振り上げようとした拳が中途半端に止まる。

「きゃっ！」

「明燐っ？！」

ドンツと空気を振るわす音と共に、明燐の前に鋭いものが飛んでくる。

「銃か？！」

音、火薬臭、そして銃弾痕。

これは、人間界で発達した銃器。

しかも、これは――。

「ライフルかっ――！」

暗黒大戦でも大量に使用された銃器類。

暗黒大戦以前は、銃器類の使用は殆どなかった。

あつても、人間界の銃器類とは違い弾薬は火薬のそれではなく、神力で作ったものだ。

しかし、暗黒大戦が勃発してからは、前天帝軍側は天界以外の世界の武器を大量に取り入れた。

その一つとして、銃器があつた。

神力を使用する天界のそれとは違い、火薬さえあればいくらかでも撃てるそれは、前天帝軍側には大変重宝する代物だった。

そうして、それで沢山の天界の神々が殺された。

だが、一つ疑問がある。

強靱な肉体を持つ神々は、人間界ではある意味不死にも近い状態で、そこで作られた代物では神々を殺す事は出来ない。

しかし、ある前天帝軍の狂術者が、その銃器を神々を殺す事が出来るように作り替えたのだ。

銃器だけではない。

他の世界の武器全てにその技術を応用し、結果として大量虐殺に拍車がかかったのだ。

それどころか、その技術で作った代物を他の世界に逆輸入し、他の世界の滅亡すらも促進させた。

忌まわしき、兵器。

暗黒大戦以降は、その取り扱いに対しては何度も危険性を提起されたが、それらの兵器は各地に広まっており、中には所在の分らないものもある。

また、天界十三世界には、大戦時に魔界から流入した魔獣が至る所に居り、神々の命を脅かした。前天帝達を討ち、同時に政治関係は機能せず、自分達の身を守るのは自分達しか居ない。

現天帝や十二王家がすぐに即位したが、それでも壊れゆく不安定な世界を支える方に集中しなければならず、それどころではなかった。

また、建国した国に守ってもらおうにも、国自体にそれだけの力はなく、王や貴族、上層部も行っ事が多すぎて一々構ってられない状況だった。

かと言って神力を使用するにも、したが最後世界の不安定さに拍車をかけ、自分達の住む場所への消滅にも繋がるとなれば、誰もが躊躇し断念するしかなかった。

その為、神々は暗黒大戦で使用された兵器を使用した。

中でも、持ち歩きがしやすい銃器は好んで持ち歩かれた。

失われた世界が再創造され、新たな土地が多かったから、その開拓に入る為の護身用にも持ち運ばれた。

そんな事もあり、いくら危険性が叫ばれようと、強制的に銃器を取り上げる事を天界十三世界の上層部は出来なかったのだ。

他の者達が守ってくれないなら、自分達で身を守るしかない。

その為の武器なのだ。

それが嫌なら、お前達が守ってくれと言われても、手が空かない上の者達が出来る筈もない。

そうして、自分達の手が回らない部分を、その銃器を使用を容認する事で不満を回避したのだ。

そんな、暗黒大戦の負の遺産は、実は結構残っているし、生活に取り入れられているのも実は多い。

また、銃器作りの技術も、科学技術の一つとして研究され、各世界に広まっていた。

後に、使い手の悪意を感じ取れば安全レバーが作動し、撃てなくなるような技術開発も進められているという。

ただ、銃器類は、その危険性から持ち込みや使用には制限がある。その一つとして、銃器の全てにナンバリングがされ、売買される時には持ち主のリストが作られるのだ。

また売買には、身分証明するものが必要となる。

それほどに取り扱いに厳重だった、それ。

とはいえ、大戦から三百年が経ち、少しずつだが国も安定した今。中でも風国は、炎水界の中ではどの国よりも安定しているとされる。

当然、民達への救済及び援助も他国よりは行き届いているだろう。その為か、少しずつだが各町村が持つ銃器類の数が減ってきている。

特に王宮の目や手がすぐに届かない辺境の地であればあるほど、銃器を持つ傾向は強い。

しかし、少しずつ生活も安定し、国による援助がされるようになり、銃器類は減ってきていた。

そう、減ってきていたのだ。

だが——男は断言する。

鶯州に関しては、その常識が当てはまらない事を。

なぜなら、鶯州では銃器類の類は殆ど無い。

全て、領主が取り上げてしまっているからだ。

隠し持っている者達は厳しい処罰を受け、処刑までされた。

なのに、どうしてそんなものが——！！

「しかもライフルなんてっ」

大戦時には、狙撃手が好んで使っていた獲物だ。

「くっ！」

木々の合間に、光るものを見つけた。

ああ、やはりライフルだ。

しかし、発射された二撃目の銃弾に男は明燐を抱えて後ろに飛ぶ。その時、ジャキンと何かを装填する音が聞こえた。

男の注意が、音のした方向へと向けられる。

「明燐！！」

王妃が、こちらに走ってくる。

それを狙う光るものが、木々の合間から見えた。

「来るなああっ！！」

叫んだ途端、三撃目が来る。

「果堅！！」

明燐が此方に向かってくる果堅へと手を伸ばす。

まだ遠く、届くはずもないのに。

空気を振るわす様な重い音が響いた。

「あ……」

開いた穴が見えた。

何の変哲もない穴。

それが、王妃の肩になれば、特に注意すらしなかつただろう。

どぷりと、赤い液体が穴からあふれ出した。

「ひいっ！！」

部下の男が悲鳴をあげる。

王妃を守る使者団とあれほど斬り合っていたにも関わらずに、だ。

小さな肩から流れ出た血は、衣服を染め、地面に赤い染みを作っ

ていく。

染みこみきれず、地面の上にも溜まっていく血。

反面、顔から血の気が失われ、果堅はその場に倒れた。

「いやああ！！」

明燐が果堅に駆け寄ろうと男の手を振り払おうとする。

「ま、待って！」

と、再び銃弾が打ち込まれる。

それは、先程自分達を狙っていた者達のものだ。

「くっ！ 皆殺しにする気かっ」

明燐を庇い、銃弾の飛んでくる方向を確かめる。

しかし、何かが引つ掛かった。

自分達に打ち込まれたのと、王妃に打ち込まれたもの。

何かが、違うような気がした。

音？火薬？銃弾？

分からない。

だが、それよりも考えている暇がなかった。

「うわ！！」

「おい、ぐっ！」

部下が打たれたのに気を取られた長が、銃弾を背中に浴びる。

「ぐっ……くっ……」

「長！！」

「すいません、ここに居て下さい！！」

「え？！ ちよつとっ」

男が明燐を抱きかかえて安全な場所へと置くと、そのまま踵を返して木々の合間から自分達を狙うものへと飛ぶようにかけていく。

パンつと、銃弾が頬を掠める。

「舐めるな！！」

黒いフードを被った狙撃手を見つける。

その相手に、剣を振り下ろした。

ボスンつと、有り得ない音と空を切る感触が腕に伝わった。

「え？」

肉を切りあがる血はそこにはない。

まるで中身だけ空気に溶け込んだかのように、黒い衣だけが残っている。

「な、なんだ、これ」

「果豎！！」

明燐の悲鳴に我に返る。

その時、男は気付いた。

もう一つの気配も消えている。

「一体、これは……」

見れば、武器であるライフルもない。

だが、間違いなく此処に居た者が自分達を撃つたのだ。

「果豎、しっかりして!!」

男は黒い衣を手にとると、そのまま明燐達の元へと戻った。

王妃は重傷だった。

意識はなく、肩からは血が今も流れている。

「このままでは失血死だ」

「っ——」

泣きじゃくる明燐に、男は果豎の傷を見る。

深いその傷は、いますぐに処置しなければ間に合わない。

「……」

手に、力を集中させる。

その瞬間、ぐにやりと奇妙な違和感が体を駆け抜け、足が地面に

沈み込む感覚に陥った。

「っ」

駄目だ。

力を使えない。

一か八かで治癒の術を使おうと思ったが、力を貯めて術式に入ろうとしただけで、大きく場が歪んだ。

明燐は果豎に掛け切りでそれに気付いていないが、他の者達は気付いた者もいるらしく、場の歪みが与えた体への影響が出ている。

吐く者、立ちくらみを起こす者、地面に手を突く者。

たった一瞬でこれだ。

術を使えば、歪みが体に影響するだけではない。

この場所自体が消滅する。

そこに王妃を巻き込む事は出来なかった。

王妃は、自分達の希望の証でもあるのだから。

第七話 止血（前書き）

警告）果堅が、痛い目にあってます。
嫌な方は、この回は飛ばしてください。

第七話 止血

「くっ……仕方ない」

「果豎、果豎っ!!」

完全にパニックになっている明燐の隣で、男が懷から燐寸を取り出す。

そして近くに落ちていた木の枝と、馬車の中にあつた布を組み合わせて松明をつくる。

布部分には、持っていた油を染みこませた。

シュボッと松明に火がつく。勢いよく轟々と燃える。

「これはやりたくなかったけど……」

先程傷口を確かめた時、銃弾は貫通していなかった。

それからすれば、体の中に銃弾を残すという危険性があるし、それ以外にも危険はあるかもしれない。

しかし、銃弾は深くめり込んで傷口の奥深くに存在し、直接火に炙られる事はないだろう。

「どいて下さい」

「果豎!!」

「どけ!!」

「っ!!」

男の叫びに、明燐が体を震わせる。

そんな少女を後ろに押し、男は地面に横たわる果豎の前に立った。その小さな口に猿轡を噛ませる。

「果豎に何をっ」

男の様子に嫌な予感を感じた明燐が叫んだ時だった。

果豎の傷口に、燃えさかる松明の火が押し付けられる。

果豎の目が見開かれた。

「うんぐううううううううっ!!」

絶叫が当たりに木霊する。

「ううううっ!!」

悲鳴を上げて抵抗する果豎を押え付け、男は傷口を焼く。

止血するためだ。

焼灼止血法という、出血面を焼くことで止血する方法である。

特別な技術や薬品の類は必要とせず、安価に行えるとされていた為、医師も物資も不足していた暗黒大戦時には広く使われてきた手法だ。

しかし、傷口を焼くというのは患者に対して酷い苦痛を伴わせる方法でもあり、いわば止血する代わりに熱傷を負わせる治療法である。

その為、適切な治療にはある程度の経験と、また矛盾するが、ちゃんとした技術も必要とされていた。

それこそ、出来るならば軽々しく行つて良い方法ではない。

下手すれば重傷の火傷や感染症で死なせてしまふ、賭け的な手法なのだから。

やるなら、相手の命を背負う覚悟で、他に一切の手段がない最後の賭けとして行われるべきものだ。

しかし同時に、今回の果豎のように、大量出血して一刻も早く止血しなければならぬ場合にはかなり有効な手段であるのも真実だった。

果豎の傷は、もう一刻の猶予もなく、秒単位での治療が必要とされる夥しい出血をしていた。

だからこそ、男は決断した。

それに、ここを乗り切れば何とかなるという希望があったからだ。自分達の住む里に居る、彼ならばきっとその後の火傷の処置を行ってくれる。

その時、果豎が頭を激しく振り、地面に猿轡の結び目が擦れて外れてしまふ。

「いやあああああああああ!!」

「っ!!」

もう一度猿轡を噛ませる。

火力が足りないのか、中々血が止まらない。

泣き叫ぶ果豎に、明燐が耐えられなくなった。

「やめなさい！！ やめて、やめて、やめる貴様ああっ！！」

男に飛びかかり、松明を持つ手に爪を食い込ませる。

だが、男は明燐の腕を掴んで引き離す。

その間にも果豎の叫び声が響く。

痛みに絶叫し、涙が流れ落ちる。

肉が焼ける音が耳を貫き、その生々しい匂いが鼻を突く。

「うっう……ふぐううううっ！！」

激しく暴れる体は男に押え付けられ、それでも手が助けを求めるように宙をかく。

それでも痛みは襲い、ぱたりと地面に落ちた手は、今度は固い土をひっかき続けた。

爪が割れ、指が血に染まっていく。

見開かれた目から、止めどない涙が流れ続けるのを見た時、明燐の中で何かが壊れた。

もう見ていられなかった。

明燐は、術式を組み始める。

ぐにやりと場が歪み、体が地面に沈む。

だが、構わない。

例え、この場が消滅しようとも、果豎だけは。

その時、グツと腕を掴まれる。

「っ！！」

集中が途切れ、術式が崩壊する。

「何をする貴様！！」

「それはこちらの台詞です。貴方はこの場を崩壊させるつもりですか？」

男の言葉に、明燐の頭に血が上る。

「それがどうしたと言つのです！ 果豎が助かるなら」

「この場に居る全ての者達を巻き込むと？」

「っ」

「確かに半分は襲って来たオレ達です。しかし、もう半分は貴方がたの仲間な筈」

「そんな事」

「分かってない。分かっているなら、その方法は選んでも強行しようとはしない。此処に居るのは王妃様だけではないんだ!!」

明燐の目が見開かれる。

「それでも、行うのですか？ 王妃様の方が大切だと。その他の命全てを見殺しにして」

「……お前達に、何が分かる」

お前達に、何が。

何が。

何が。

「そうですね。でも、王妃様の気持ちだけなら分かりますよ。オレと同じだと」

「なんですって？」

お前と、果豎が同じ？

ギロリと自分を睨み付けてくる明燐に、男はそつと空いた方の手で指を指した。

その指を辿り、自分の袖を見た明燐はハツとした。

座り込んだ際に広がった袖。

それを、果豎の手がしつかりと握っていた。

まるで、明燐の術を止めようとするかのように。

「オレが貴方の手を掴むのと同時に、王妃様も貴方の服の袖を掴みました。」

「か……じゅ……」

痛みに悲鳴をあげながら、もうろつとする意識の中、それでも明燐を止めようとした果豎。

「必ず、王妃様は助けます。オレ達だって王妃様を殺したいわけじゃない」

そう、殺したいわけじゃない。

ただ、自分達を……。

しかし今は、それを除いても王妃を助けたかった。

自分と同じように、傷の痛みに苦しみながらもこの場に居る者達の命を助けようとした彼女を。

「大丈夫」

死なせない。

だから、選んだのだ。

この、危険な治療法を。

ポロポロと、自分を睨み付けていた少女が涙を流す。

その美しい涙に思わず手を伸ばしかけた。

美しい。

恐ろしいまでに美しい。

手を触れる事も躊躇わせるほどの、美しさだ。

初めて見た瞬間から、その美しさに囚われた。

そんな彼女が、他の全てを犠牲にしても助けようとした王妃。

男は、初めて王妃に興味を持った。

今までは、ただ目的を遂行する為の大切な客人としか見ていなかった。

しかし今は、この美しい人にここまでさせるだけの存在として、またこの場にいる者達を救おうとした。その優しさ故に、強い興味が湧いた。

「果豎、果豎」

「っ……」

男はようやく松明を果豎の傷口から離した。

完全に血は止まっていた。

代わりに、痛々しい火傷が目につく。

だが、一秒でも早く離せば血は止まらなかった。

というのも、血を止める為に松明を押し付けた時、まるで自分の行動を弾く様な感触が腕に伝わってきたからだ。

その傷口に近寄せないと言うような、よく分からない何かが。

「これで、大丈夫です」

「ああ、果堅……」

と、その時だ。

ガラガラと、遙か遠くから何かの音が聞こえてくる。

「ちっ！ 商人達だ」

此処を通る予定の商人達の団体。

瑠夏州から鶯州の州都へと向かうそれは、この州の治安状況から多くの警備を雇った団体一行だった。

自分達が王妃一行を襲撃した後は、彼らに襲撃して負傷した者達を任せるつもりだった。

情報では、彼らは悪意ある商人達ではなく、善良に輪をかけたような者達だと聞いていたからだ。

間違っても、怪我人達を放っておいたり、人買いに売り飛ばしたりはしない。

そう思っていた。

どうやら、思いの外此処に留まりすぎていたらしい。

「退くぞー！」

部下達に命ずる。

幸いにも、部下達の負傷は少なかったようだ。

まあ、怪我は多少なりとも負ってはいたが、王妃を守る護衛達の方は銃弾を浴びた者達も多く、部下達以上の負傷である。

「貴方にも来て貰いますよ」

果堅を抱き上げると、男は明燐の手を掴む。

すると抵抗なく立ち上がった。

まるで望むところだと言わんばかりの視線だった。

「どちらにしろ、王妃様の治療もありますしね——」

それに、いつまでも此処に留まるのは得策ではない。

王妃を狙撃し、自分達を狙った二つの気配の持ち主がいつ戻ってこないとも限らない。

それを思えば、安全なる警備がある場所に王妃を連れていくべきだとも思う。

しかし、今の自分達は王妃を失えない。

もしここで王妃を手放せば、それは自分達の最後の命綱を失ったと言ってもいい。

もう二度と、機会は訪れないだろう。

魔手が迫り限界が近付く中での、全ての条件が揃った最後の機会なのだから。

「さあ、行きますよ」

だが、その足をグツと掴まれる。

驚き視線を向ければ、そこには使者団の長が居た。

「貴方は……」

「私も……つれて行け」

傷の痛みに呻きながら、キツイ眼差しを向ける。

今の状態で王妃と明燐を賊らから取り戻す事は不可能だった。

ならば、せめて自分も行動を共にし、もしもの時には命をかけて守る。

「……他の部下の方達は」

「補佐に……任せた」

そう……比較的軽傷だった補佐に任せた。ついでに、持っていた応急処置の道具も全て。

本当なら、それで王妃を治療したかったが、傷が深すぎてそれでは間に合わなかった。

それに——長の中で、賊の頭である男への印象が変わり始めていた。

この男なら、王妃に害を為さないだろうと。

あの治療は見事だった。その手際の良さも、思い切りの良さも。そして暴走しかけた明燐を止めた時の、その気迫も。

正しく、人の上に立つ存在だと言える。

それも、賊達の上だけで収まらず、もっと上の。

そう——領主として相応しい気概の持ち主だ。

だから、強引に奪い返すのは止めた。

もちろん奪い返したい気持ちもあるが、この男の剣術の腕は先程の戦いで分かっているし、今の王妃の状態からすれば長引くのは危険だ。

それでも強引に奪い返すならば、相打ちを覚悟しなければならぬ。

しかし、それでは王妃と明燐をこの場に放置する事にもなりかねない。

馬車は壊され、荷物もばらけた今、それこそ丸腰で放り出されてしまう。

もしかしたら、善良な商人達に拾われるかもしれないが、明燐のあの美しさにトチ狂わないとも限らない。

ならば、この男に賭けてみるしかない。

「私も……」

「お、長……」

荒い息をつきながら、必死に訴える相手に、男は目を閉じる。

次ぎに目を開けた時、彼は言った。

「仕方ない。誰か、肩を」

「お頭!!」

「危険じゃ」

「今は時間がありません。それに、もう商人達も迫っている。ここで断れば、彼は何としてもオレ達を阻もうとする筈だ」

「ですが」

「なら、殺すのか？」

部下の男達が黙る。

「出来ないだろ？ いや、そんな事はしないだろ？ それならば、何の為にオレ達は危険をおかして足止めだけですむように剣を振る

つたんだ？ 最初から殺すつもりなら、そうしていた」

だが、無駄な血は流さない。

命は奪わない。

「そう、オレ達は奴と違う。無血は無理でも、命だけは奪わない。重大な傷は負わさない。そうするって決めたはずだ」

「お頭……」

「そしてそれを実行したあんた達を、オレは誇りに思う。例え誰が何と言おうと、だ。オレについてきてくれた事にも、心から感謝する」

「……行きましょう、お頭」

「その男は、あつしが背負います」

「頼む」

男はそう言っていると、長を見る。

「という事だ。もう少ししたらここに商人達を通る。善良な性質の者達だそうだから、残った者達も無事に助けられる筈だ」

「そうか……」

使者団の長はホツとしたように息を吐いた。

また、明燐も安堵する様に息を吐く様に、男は微笑んだ。

王妃を思つて暴走したものの、この少女は此処に残される自分達の仲間の事もしっかりと気にかけていたらしい。

ああ、自分の思ったとおりだ。

厳しく恐ろしいけれど、同時に優しい少女。

男は表情を改めると、声を上げた。

「時間がない！！ 行くぞ！！」

お頭と呼ばれる男の声が上がるや否や、すぐさま果堅達を連れて一同は根城へと駆けた。

第八話 朱詩の場合（前書き）

と、とりあえず、R15で収まったと思うのですが……。

注意）R15です。匂わせる描写あり

第八話 朱詩の場合

その報せを、それぞれがそれぞれの場所で聞いた。
ブクブクに肥った豚が居る。

豚が動く度に、ギシギシと寝台が悲鳴を上げる。

カーテンが閉め切られた濃蜜漂う薄暗い部屋に、けたたましく木
霊する雑音。

本当に、へったくそ。

豚の下にいる存在は、心の中で吐き捨てる。

相手の事を思いやるよりも自分の快樂を追うだけの、ただの無能
な馬鹿。

「殺しちゃおうか」

残酷な台詞も、快樂だけを貪る豚には届かない。

代わりに、彼の頭の中にそれは響いた。

「あゝ、今取り込み中」

とりあえず、この後はこの豚の解体作業があるのだから。

しかし、無視すれば再度頭の中に叩付けられるように、それは響
いた。

問答無用の、勅命。

「ふゝん、補佐のくせに、な・ま・い・き」

愛らしい声で毒突くと、頭の中ではと返し、豚へと視線を向ける。
数分後。

床に広がる生臭い液体の中、ぷかぷかと浮かぶ幾つもの肉の塊が
あった。

扉を叩く音が聞こえる。

「いいよ、入ってきて」

豚の下に居た存在は、室内の惨状など気に留める風もなく言い放
った。

「失礼します——」

入ってきた一人の人物。

一見して妖艶で伶俐な美貌の美女だが、本当の性別はまるつきり逆。

美女の様な美しい顔立ちをしているが、あれはれっきとした男だ。
「玲珠^{れいしゅ}」

そして、自分の可愛い駒である。

「また、やんちゃをされたんですね」

「あゝ、玲珠のくせに生意気だよ」

可愛らしく言えば、玲珠と呼ばれた青年が薄闇の中でも顔を赤く染めたのが分かった。

ふふ、まだまだ子供だね。

年齢は相手が上だが、豚の下に居た存在はニタリと笑った。

「で、何のよう？　ボク、部屋の掃除がまだなんだけど」

「掃除は此方で手配します。どうか、王の間へ」

「ああ、遅いから迎えに来たっていうわけだね。でも、こんな状態で行ったら逆に大変じゃない？」

くれる流し目に、玲珠は下半身が疼くを感じ、慌てて理性で押え付けた。

そして相手を嗜めるように呼ぶ。

「おやめ下さい、朱詩様」

朱詩^{しうし}——それが、彼の主であり、先程まで豚の下に居たこの部屋の主の名前であった。

「ふふ」

朱詩が笑いながら、ゆつたりとシーツの上で体を動かす。

体に羽織っていた方のシーツが、するりと体から落ち、透ける様に艶めかしい白磁の肌が現れた。

ゴクリと、玲珠の喉が鳴る。

瑞々しさや張り言うまでもなく、その極上の滑らかさは一目瞭然だった。

首筋の一部分だけ長い朱色の艶やかな長髪が、動く度に白い背の

上で踊る。

蒼眼は、情欲の色を濃く残しており、修行を積んだ高僧でさえ一夜で墮落するだろう。

全身から沸き立つ壮絶なる香は、『魔性の色香』と称され、老若男女問わずに抗えるものはごく僅かだった。

しかし、誰もがその胸と下肢に視線を向ければ驚くだろう。

その白い胸に、大ぶりだが形良い二つの双球がない事を。

その股間にそそり立つ、一般男性よりも遙かに大きい男性の象徴がある事を。

そう——彼は男だった。

例え、その首から上が、想像上の麗しい天使など足下に及ばない清楚可憐で愛らしい美貌であろうとも。

彼こそが、本当の天使そのものだと言われようとも。

れっきとした、二十歳の男だった。

とはいえ、中性的な肢体と男にしては少し低めの背丈は、彼の見た目を実年齢よりも低めに見せている。

だが、それ以前に、その美貌から彼を男だと一目で気付く者は少なく、誰もが美少女だと断じて疑わない。

彼もそんな周囲の誤解を解くどころか、相手の誤解を楽しんでいる節がある。

あらゆる性技に通じ、その魔性の色香でもって多くの男達を墮落させてきた彼にとって、自分の美貌などただの道具でしかないのだ。そんな彼は、生まれながらにして同性を狂わせる『天性の男狂い』だった。

可憐な天使の風貌の中に隠れ潜んだ魔性の華は、美しく咲き誇る。玲珠は、そんな相反する幾つもの美を持つ主にゆっくりと近付くと、近くにあつた白い一重でその裸体を包んだ。

「あんっ」

胸の頂きが布に擦れ、痺れる様な甘い快樂が襲う。

朱詩は、誘う様に微笑む。

「君の方がよっぽど上手だね。ふふ、どう？」

主の誘いに、玲珠は表情を変えずとも心の中は焦っていた。

普通であれば、こういうのは冗談が多いが、この主に限っては違う。

嘘も真実も、その境界線はあつて無きに等しく、簡単に反転する。

「ご冗談を」

それが分かっている、あえて冗談と言いつつ切った。

彼にとって、こんなのはただのゲームなのだ。

愛らしく可憐な美貌とは裏腹に、この主は恐ろしいまでに無邪気な残酷さを持つ。

伶俐冷徹、冷酷非道。

残忍で非道な一面を、その甘い美貌の裏に隠す。

彼を御せるのは、この国の王のみと言っている。

いつも飄々と振る舞い、時には脳味噌の足りない道化のように振る舞うが、その聡明さと策謀に気付いた時にはもう手遅れだ。

玲珠の己が主を見る。

朱詩を主と頂いた時の、あの魂が震える様な衝撃は今でも容易に思い出せる。

彼の為ならば、命すら捨てても構わない——そう心から思った。

「ぶうー、玲珠の真面目ー、むっつりすけべー」

頬を膨らませた朱詩は、どんな美少女よりも可愛らしかった。

が、それに思わず見とれていた玲珠は、下肢に走った刺激にカッと目を見開いた。

「かわいいー」

ほっそりとした指でぐりぐりと押され、刺激される。

「朱詩様っ」

この方は、男を弄んで楽しんでいる。

だが、それが彼なりの復讐でもあるのだ。

自分を弄び、自分を奴隷の愛玩物として弄んだ、忌まわしき男達への。

男でありながら、彼に女を強制した者達への。

「や、やめて下さい」

「えゝ？ 前は嫌？ 後ろの方が良い？」

「っ！！」

玲珠の顔に朱が走る。

わなわなと震える体は、怒りではなく、圧倒的な暴力で打ち据えられ変えられた恐怖によるもの。

「ふふ、君だって同じだよ。寵姫様」

「あ……」

「男に弄られて弄ばれる事で喜ぶように作り替えられちゃったんだもん」

「っ……」

「そう、後宮で寵姫として、あの馬鹿親子に遊ばれた」

「やめて下さい！！」

玲珠の叫びに、朱詩はくつりと笑う。

「言葉責めは嫌い？」

「なっ」

「その顔、とっても良いよゝ。もっともつと苛めたくなる」

いつのまにか、涙目になっていたらしい。

すつと抱きつかれたかと思うと、その目尻をペロリと赤い舌で舐められる。

だが、その行動に驚くよりも、今までここで行われていた証とも言つべき濃厚な香りと血の臭いに体が疼き、朱詩の放つ甘い香りに酔いしれる。

汗の匂いさえも、朱詩は甘い。

汗――。

「っ！！」

「大丈夫だよ。飲んでるんでしょう？」

朱詩の言葉に、玲珠は思い当たり冷静さを取り戻した。そうだ、あれを飲んでいた。

「ボクの体液は確かに極上の媚薬だよ。でも、制御してるし、君も飲んでるからね。ふふ、なるほど。薬の効果はばっちり、と」

制御していれば薬の効果に問題なし、と笑う朱詩には性の残り香は全くなかった。

「っ！ あ、遊んだんですねっ」

「遊んでないよ。実験だよ、実験。薬の効果の中間報告。じゃないと医薬省が怒るんだもん」

朱詩の体液は媚薬。

朱詩が制御しても、その効果は抑えきれない。

だから、その効果を相手側にも抑えて貰う為の薬が風国では開発されていた。

それを、玲珠は飲んでいた。

一番近くに居る者達が飲み、その効果を測る。

いわば人体実験のようなものだった。

だが、朱詩の体液はそのまま野放しにしておくには危険であり、汗が蒸発しただけでその場に居る者達に反応してしまうのだ。

それこそ、乱交パーティーが開催されてしまう。

つまり、先程朱詩が玲珠を誘ったのは、その効果のほどを確かめたわけだ。

「ボク、人のものには興味ないの。君には綺麗な奥さんいるしね。

美琳に怒られるのは嫌だもん」

美琳——それは、玲珠の妻の名だ。

「それとも、美琳と三人でしょうか？ ふふ、女の人大丈夫だよ？ ボク」

相手にしてきたのは男が断然多いが、朱詩の色香は女性にも強い効果を発揮し、沢山の異性ともそういう事をしてきた。

「朱詩様っ！！」

妻の事を持ち出され、本気で怒りを露わにする玲珠に朱詩はけらけらと笑った。

「ああもう、『冗談に決まってるじゃない』」

「冗談でも言わないで下さい!!」

「あゝ、はいはい。玲珠は本当に愛妻家だね」

「朱詩様だって、小梅様（こめいさま）が生きていらしたらそんな事は言わないでしよう」

「当たり前じゃん、小梅（こめい）はボクだけのもの。他の男になんて触れさせられないじゃん」

あまりにも身勝手な言い分に、玲珠はその場に倒れなくなった。だが、自分の主はこういう方なのだ。

身勝手で残酷なまでに無邪気で、そして柳の様にしなやかで折れない強い心を持つ。

一度だけ、その心が折れかけた時はあったが、それを彼の亡き想い人である小梅が救い強固なものとした。

いまや、見た目がどれだけ美少女にしか見えずとも、その強い心には男の凛々しさを宿す美しき主。

——世間一般では、『男の娘』とか『オトメン』とか言われてるけど。

「それは玲珠もでしょう？」

「はうっ!!」

言外にお前も『男の娘』で『オトメン』と断ぜられた。

確かに、妻の美琳の雄々しさにキュンとする事は多いけど!!

「基本的に虬国上層部は『男の娘』、『オトメン』じゃないですか!!」

「その上層部の駒達もね。はは、類は友を呼ぶって本当だね」
この方、鬼だ。

しかも、自分が『男の娘』で『オトメン』である事を認めてるし。
「さうと、そろそろ準備するかな」

「……お早くお願いしますよ」

「うん、三時間ぐらい後には」

「はあ?!」

「だって、汗でベタベタの体を綺麗にしたいし。それに、この

ままの空気纏って行くのもね。わいせつ罪で捕まれと?」

確かに濃厚なる空気が漂っていて、その状態で王の間に向かえば
悩殺卒倒させられる者達が続出する。

「って事だから、今から入浴タイム。あははは、大丈夫だよ。それ
に、他の奴等も、どうせすぐには集まらないし」

「朱詩様」

「いいんだよ。やる事はきちんとやってるしね」

仕事はきちんとしている。

さっきの豚処理も仕事の一つだ。

「文句を言われる筋合いはないよ」

そう言つと、身に纏っていた一重をすりりと肌から滑り落とし、
白い輝く裸体を見せつけるようにスタスタと浴室への扉へと歩いて
行った。

一人残された玲珠は溜息をついた。

「はあ……仕方ない」

とりあえず、部屋の掃除をしよう。

第九話 茨戯の場合（前書き）

注意） R 1 5 です。 匂わせる描写あり

第九話 茨戯の場合

気だるげな空気の中、ゆっくりとそれは起き上がる。

頭の中に響いた、勅命に従って。

「主様？」

隣で寝ていた相手が、不安げな声をあげる様に、思わず笑みをこぼす。

先の仕事はそれは凄惨なものだった。

再三にわたる警告も最早効果はなく、処分対象になったある地方の領主を抹殺した。

それは、腐りきった彼の一族全てがその対象だった。

女も、老人も関係なく、その手を血で染めた。

かの領主の罪状は、人身売買、拉致監禁、そして大量虐殺とその証拠抹消だ。

罪は巧みに隠されていたが、地道な証拠集めが功を奏して予想より早くに始末をつけられた。

長年この仕事に携わってきた。

この国が建国した当時から。

覚悟は決めたし、感傷に耽るつもりもない。

しかし、強すぎる血の臭いは心を酔い乱し、凶悪な興奮状態が収まらなければ他者にも害を及ぼしかねない。

実際に、異常な戦闘の興奮や血酔いした馬鹿が、民間人に危害を加えたり、強姦する事件が多発した時期がある。

それを防ぐ為に、性欲として花街で発散するのが一つの方法とされている。

しかし自分の様に、仕事以外では潔癖な性分ではそれはままならないし、何よりも花街で何人が抱き殺し寸前まで追い遣った事から、心ある楼主から仕事直後の出入りを禁じられている。

普段なら率先して客引きしているというのに、とんだ狸達だ。

おかげで割を食っているのが、隣に居る少女だ。

今年十六歳になる彼女は、自分の養い子。

最初はただのやせ細ったガキンチョだったくせに、自分を主様と呼び慕う。

そんな彼女が初めて花を散らされたのは、まだ十三歳の頃だった。それから、何かにつけて自分は呼び出し彼女の幼い肢体を貪る。この国の王の所行を諫められない鬼畜の所行である。

「主様？」

少女はシーツに包まれたまま、自分の養い相手であり、主たる存在を見上げる。

美しい人だった。

まるで大輪の赤薔薇が咲き誇ったかの様な、麗しく華やかな美貌は、誰もが彼を美女と称える。しかし、彼はれっきとした男だった。先程自分を責めさいなんだそれは、一般男性のそれより遙かに凶悪で大きい。

しかし、無駄な贅肉のない体は白く滑らかで、以外にも筋肉質と分かったのは肌を合わせてからだ。

だが、彼を女性と見誤らせているのはその風貌だけではない。

女性的な仕草、女口調、そして何よりも何時も身に纏う服は女性物のそれなのだ。

そこに、麗しく華やかな薔薇の如き美貌が加われば、男だと言われても疑うのは間違いないだろう。

そんな彼の本当の名も、また薔薇そらびと言うが、それを知る者はごく僅か。

王の影となった時に、彼はその名を変えた。

そう——薔薇を守る騎士の名を冠する、『茨戯しはい』と言う名に。

「まだ寝てなさい」

濃厚なるアルトの声が、少女の耳に注がれる。

平凡な容姿の自分では到底触れる事すら許されない、気高き薔薇姫の囁き。

風国上層部女性陣からは、『オカマ』とか『オネエマン』とか『男の娘』とか『オトメン』とか言われてるけど。

本当に、気高く美しい方。

「そうよ、寝てなさい——^{きっか}葵花」

養い子。

痩せすぎた醜い餓鬼。

それが、彼の中で形を変えたのは何時だったか。

手放せず、その幼い肢体を貪り尽くす鬼に落ちてても、なお。

十人並みの容姿をした葵花が、主の言葉に酔うように眠りに就くと、茨戯はすつと寝台から起き上がった。

濃厚で気だるげな空気が漂う中、手際よく用意していた一重を身に纏う。

「シャワーを浴びる時間はあるわね」

葵花に関しては、話が終わった後に綺麗にしてやればいい。

「ったく、一体何なのよ。こんな時間に」

ようやく、夜が明け始めた空は、まだ濃い藍色をしている。

茨戯は苛立ちを抑えきれず、浴室に入るとシャワーをひねる。

温かいお湯がふんだんに頭上から注がれ、蒸気が浴室に立込める。このシャワーなるものも、人間界の技術を取り入れて作られたものだ。

評判は抜群で、水道管や下水管が各地に行き渡ったところで、このシャワーや湯船が作られた。

しかも、湯船はボタン一つで、お湯もボタン一つで沸かせられるとあって、お風呂好きの茨戯には最高の代物と言ってもいい。

足下のタイルに、茨戯の汗とお湯が混じり合った液体が流れ落ちていく。

ぬるりと粘着質の高かったそれが、次第にさらさらとしたものに変わっていく。

「あゝ、めんどい」

ボディーソープは薔薇のエキスを抽出して作られた最高級品。

それをスポンジにたっぷり出すと、体にこすりつけていく。
よく茨戯からは薔薇の香りがすると言う。

しかし、それはこのボディークリームだけでなく、茨戯の元々の体臭だった。

茨戯は好む薔薇の香りに浸りながら、泡をシャワーで落とすと、今度は髪を洗っていく。

長い、ゆるやかなウェーブがかかった薄い青髪を。

髪の色からすれば、蒼薔薇と称えられるべきなのに、何故か周囲は茨戯を赤薔薇にたとえる。

だが、それは茨戯の持つ華やかな美が影響しているのかもしれない。

「まったく、勅命勅命煩いのよ」

とつとと来い——その勅命は、よりもよって部下からもたらされた。

普通、勅命を出せるのは王ただ一人だ。

が、その王から渡された代理印が押された書状に関しては、王の元に直行で辿り着くと同時に、勅命クラスの問題が起きたと認識される。

それにより、長官クラスや宰相、王でなくともその側近達が招集をかける事が出来るのだ。

但し、それはよほどの事がなければ無理だ。

となると、それほどの問題が起きたという事だ。

現在、その代理印を持っているのは、あの使者団の長だけ。

となれば——。

「あの子に何かあった？」

二十年前、王宮から追放同然で瑠夏州という辺境の地に追いやった少女。

そう——この国の。

と、茨戯の中で強い拍動が鳴り響く。

「っ——!!」

ガクリと、その場に膝を突く。

「あの子に……」

あれ？あれ？おかしいな。

使者？

なんで？

だって、使者は、もう。

確かに今まで使者は出していた。

だが、それもあの時まで。

王が、愛妾を迎えた後は……。

「なんで、どう……」

おかしい。

記憶が、こんがらがる。

線が、複雑にからまり、どこが始まりなのかも分からない。

「アタシ……達……」

誰が？

誰が？

誰が、あの子を迎えにやった？

アンタ達よ。

「っ！！」

響く声は――。

「あ……」

そう、アタシ。

アタシ達が、みんなで決めた。

迎えに行く、取り戻す。

そう……例え、それがあの子を……。

流れるシャワーの水音の中、茨戯は美しい青の双瞳にギラリとし

た欲深き光を宿した。

第九話 茨戯の場合（後書き）

後は、宰相と、王様と——（笑）
そしてみんなでの会議、ですね。

第十話 明睡の場合

自分の下でその相手が動かなくなつた頃、ようやくそれが頭に響いた。

「煩い」

カーテンの隙間から覗く空は薄藍色に染まり、夜明けを知らせる。普段なら、後始末をして時間まで仮眠を取るのに、頭の中の命令がそれを許さない。

「ちっ」

反論するが、結局は勅命という言葉に是と返すしかなかった。

その時、自分の下に居た存在が身じろぎする。

「体が辛いだろう。もう少し寝ている」

怯えたように自分を見詰める少女にクツと口の端をあげる。

少女は自分の妾だった。

しかも、『未亡人になりそこねた人妻』という経歴の持ち主である。

彼女の夫は幾つもの大罪を犯し、実の母と共に逃げ、妻である少女を見捨てて逃げた。

その後、唯一の手がかりとして王宮に留められ、少女は自分に妾として下げ渡された。

自分は監視役。

けれど、そんな面倒な事はこちらに利益がなければやってられない。

でも、それが本当はただの建前である事に、たぶん王はとくに気付いているだろう。

暗黒大戦時に共に従軍し、闇に落ちかけた自分を救ってくれた少女は、気付けば他の男のものになっていた。

そう……裏切られた。

だから、償わせているだけ。

鈴蘭の花を思わせる涼やかな顔に浮かぶ笑みは、多くの者達の荒んだ心を和ませた。

しかし、今は哀しげな表情しか浮かばない。

それが自分を責めているようで、自然と口調もきつくなる。

今も泣き出しそうにしている彼女の顎を掴み囁く。

「笑え」

「……」

「笑え」

「……っ」

そうか、笑わないのか。

そうだよな。

「俺など、お前にとって笑いかける価値などないという事か」

「っ——」

笑った、おかしくて。

分かっているはずなのに、何を期待していたのか。

もう彼女が、昔のように自分に微笑みかけてくれる事などないのに。

あの日、彼女を強引に自分のものにした時点で、その資格は永久に失われた。

「はは、あははははは」

「宰相様」

「名前で呼べ」

「宰相」

「それは俺の名前じゃない!!」

どうか名前で呼んで。

あの日から、彼女は名前で呼んでくれなくなった。

あの男のものになってから、一度も。

それでも望んで、縋り付きたくて。

夜伽をさせる時には手酷く責め、終わった後はこうして命じた。しかし、彼女は決して名を呼ばない。

しつかりと引かれた境界線に阻まれる。

「宰相様、どうか」

ああ……そこまでして、呼ばないのか。

「なら、そんな口いらないな」

「宰——」

グツと口を掌で塞ぐ。

呻きもがく彼女の耳元でそつと囁く。

「妾なら、主の望む通りにするのが義務だろう？」

「っ——」

妾なら——。

「それとも何だ？ 何か欲しいものがあるのか？ ああ、そうだな。妾は妻じゃない。主に囲われただけで、寵愛がなければすぐに捨てられる。だから、足を開くのと引き替えに金品を求める。そう、そうだ」

違うと叫びたかった。

だが、もうこの人は聞いてくれない。

少女の瞳から涙が流れ落ちた。

ひやふやふ

「涼雪」

彼が自分の名を呼ぶ。

「何が欲しい、何を贈れば名を呼ぶ」

冷たい声は、けれど何処か懇願めいたものを交えて涼雪の耳を打つ。

「何でも贈ってやるよ」

美しい衣がいいか？

煌びやかな宝石がいいか？

それとも、金の延べ棒？

広い離宮？

今の自分にそれら全てを贈るだけの力がある。

さあ、望め。

物と引き替えにする浅ましさなど分かり切っている。

そして呼べ。

けど、そうでもしなければ心が壊れる。

俺の名を――。

たとえ、昔のそれとは違ってでも、縋り付きたいのだ。

いつか、彼女も……。

そんな、叶う事のない儂い未来を夢見て。

恐怖と哀しみに支配されながらも、近付けられた顔にぼんやりと

涼雪は思った。

ああ…… 本当に、恐ろしいまでに美しい方だと。

到底男とは思えない、性別を超越した美貌。

麗しく艶やかな顔と匂い立つ壮絶な色香。

なのに、こうして夜伽の度にする獣の様にしなやかな肢体は、正しく鍛えられた男のそれだった。

上層部の女性陣からは、『オトメンの中のオトメン』とか『男の娘』とか言われていたが、それが嘘だと思うほど、寝所での彼は男の美しさしか見せなかった。

例え、その美貌がどれほど麗しくとも、妖艶なる女神にしか見えずとも……。

いつも一緒にいる事が多い、朱詩と茨戯と合わせて三大美姫の一人と謳われる彼だが、彼の妹が凧国一の美姫と名高いのだからそれも当然だと思う。

美しい人。

気高い人。

自分などが手を触れられない、高貴な華。

初めて見た時には、どここの貴族の姫君かと思ったほどだ。

だが、彼が優れているのは美貌だけではなく、文武や政治手腕などあらゆる面においても同様だった。

そうして、凧国の建国と共に宰相に据えられた偉大な方。

なのに奢った所など全く無くて、優しく、温かい方だった。いつしか、恋心を抱いてしまうほどに。

けれど……それは許されない恋だった。

宰相となった彼を支えられるのは、美しく聡明で強い後見人を持った姫君だけ。

涼雪が持たない全てを持った姫君だけが、彼の妻としてその愛を手に入れられる。

大戦中もそうだったが、建国してからは彼の妻の座を狙う姫君達からの嫌がらせは更に酷くなった。

それでも嫌がらせだけならまだ耐えられた。

しかし切々と、いかに有力貴族と縁を結ぶことが大切かを訴えられれば、もうどうにも出来なかった。

これで、自分が彼の恋人ならば相談したかも知れないが、ただ一方的に懂れているだけの身で、誰にも相談など出来なかった。そうして、諦めた恋。

別の相手の優しさにつけ込み、結婚した。

だからバチが当たった。

相手に捨てられ、罪を押し付けられ、彼にも憎まれた。

でも……それでも幸せだった。

彼に憎まれても、妾という地位を与えられた。

例えただの遊び道具でも、彼に触れ、彼の側に居られるのだ。

それが期間限定であっても。

そう……身勝手で傲慢な自分が得られた幸せに、縋り付く。

でも……。

「名を呼べ」

これだけは譲らない。

決して、この恋心を知られてはならないから。

だから、名前を呼ばない。

呼べば、もう止まらなくなる。隠しきれなくなる。

婚約者の居るこの方に縋り付き、醜く迫ってしまうから。

彼が名前を呼ばせようとするのは、妾である自分の態度が気に食わないから。

主に従う筈なのに、それをしないから。

だから……。

止め処なく流れる涙が視界を歪ませ、彼の姿も滲んでいく。

「っ——」

彼が目を見開く。

口を覆っていた手が外された。

「ちっ！」

そのまま、涼雪から体を離し、寝台から降りる。

けれど自分は後を追うことは出来ない。

腰の鈍痛もそうだが、手足を戒める鎖が邪魔をするから。

だから、今もただ彼を見送るしかなかった。

「明睡様……」

その姿が見えなくなつて、初めて紡ぐ名は誰に聞かれる事なく消えた。

明睡は苛立たしげに浴室に入ると、シャワーを浴びて体を洗った。ゴシゴシと、艶めかしい白い肌が赤くなるのも構わず、必死に洗った。

「くそ、くそ、くそっ!!」

自分の醜い心が体全体に広まり、そこから腐り落ちていく気がした。

「ちくしょう!!」

ふつくらとした紅唇を振るわせ、けぶるような睫毛を揺らす。

頭の上から降り注ぐシャワーのお湯が、頬、喉元、胸元、そして蠱惑的な色香を漂わす白い裸体を伝い落ちていく。

瑞々しく張りがある、白磁の様な肌に水滴で伝い落ちる様は、それだけなのに驚くほど扇情的だった。

匂い立つ色香は、シャワーを浴びてもなお、より強く香る。

しかし、見て嗅ぐ者が居なければ、それもただの宝の持ち腐れにしか過ぎない。

そうして無駄に美と色香を振りまきながら、シャワーを止めると、

明睡は湯船に身を浸した。

鈴蘭のオイルを垂らしたお湯に包まれ、ようやく高ぶった心が鎮まっていく。

これで、あがった時には何時も通りに振る舞えるだろう。

本当なら涼雪も綺麗にしてやりたかったが、今の自分の状態では綺麗にするどころか、ここでも激しく責め立てた筈だ。

暫くして湯船から揚げり、脱衣所で一重を身に纏い部屋に戻る。

「涼雪」

名を呼び寝台に近付けば、すやすやとした寝息が聞こえた。

どうやら疲れて眠ってしまったらしい。

体中につけられた紅い華が、艶やかに咲き誇るのを見て明睡は満足げに微笑んだ。

「……本当に、寝ている時だけは昔のままだな」

寝台に腰掛け、汗で顔に張付いた髪をずらしながら囁く。

「……知ってるさ。間違っている事くらい」

涼雪の罪悪感を煽り利用し、強引に妾として手に入れた。妻として望む事はまだ無理だから。

「……でも、いつかは……」

まだ涼雪はあの男のもの。

実の母と近親相姦した、あいつのものなのだ。

涼雪の唇をなぞっていた指をすつと下ろし、肌を伝っていく。それが下腹部に来た時、恐ろしい考えが頭をもたげた。

「子供……生ませてしまおうか」

そうすれば、もう逃げられない。

この檻から、出られない。

手枷や足枷をつけずとも、子供が強力な楔となって涼雪を縛り付けるだろう。

「そうだ、子供、子供、子供だ」

ニタリと、笑う。

妖艶な女神の美貌に、墮淫の笑みが浮かぶ。

「はは、ははは」

逃がさない、逃がさない、逃がさ――。

「うん……」

涼雪がもらした声に、膨れあがった狂気がパチンと弾けた。急速に、戻っていく正気と代わりに身を潜める狂気。

「……何してるんだ、俺」

ポタポタとこぼれ落ちる涙が、シーツに染み込んでいく。

こんな事をしたいんじゃない。

大切にしたい。

昔のように、温かく穏やかな時間を過ごしたい。

血と汚辱に濡れた自分を受け入れてくれた、大切な存在。

朱詩にとっての小梅がそうだったように、王にとっての王妃がそうだったように……。

なのに、どうして？ どうして？ どうして？

傷付けることばかりするのだ。

膨れあがる狂気は、日々押え付けられなくなっていく。

昔はこんなではなかった。

まだ、もう少しだけ優しく振る舞えた。

なのに、今ではただ堕ちていくだけ。

時折、今のように正気に戻るけれど……。

自分で制御すら難しいこの狂気が、酷く腹立たしい。

大切にしたい、大切にしたい。

それこそが、望み。

それこそが、自分の願い。

カチンと、時計の針が音を立て、美しい音楽が鳴る。

特定の時間がくれば音楽がなるように作られたそれは、昔一度だけ行った涼雪との潜入捜査で手に入れたものだ。

『はい、明睡様への誕生日に』

そう言って、自分でさえ忘れきっていた日を思い出させてくれた。
「誕生日……」

明睡は、壁を見る。

そこにかかっていたカレンダーには、何の印もついていない。
だが、明睡にはしっかりと見えた。

彼女がこの世に生を受けた、その特別な日が。

第十話 明睡の場合（後書き）

次ぎは、王様……か、会議のお話し。

けど、ここの流れで王様を出して良いのか悩む。

結果は、次の更新で（苦笑）

今日中に更新予定です♪

第十一話 王の場合

暗黒大戦の忌まわしき遺産——銃器。

大戦中に何度も見たそれは、今この国でも使われている。

だが、それが向けられたのは——。

ドンツと空気を振るわす音と共に、飛び出た弾が柔らかな肉を貫く。

右肩を血に染め、倒れていく——。

ハツと目を覚ませば、そこは自分の部屋だった。

凧国王の寝室。

天蓋付きの寝台に横たわり、ぼんやりと天井を見上げる中で、薄藍色に染まった室内に朝が近い事を悟る。

腕に重みを感じ、視線をずらしその存在に視線を向けた。

妖艶で蠱惑的な曲線を描く白い裸体。

細腰には驚くほど実った形良い白い果実に、頂きに咲くピンクの薔。

今は閉じられている紅玉の瞳に見つめられれば、どんな相手だって焦燥感にも似た庇護欲を抱き、どんな悪意すらも溶けてしまうだろう。

シートに広がる長い膝下まで伸びた月白色の髪を弄べば、するりと手からこぼれ落ちていく。

華奢な輪郭に形作られた美貌は、清楚可憐で純真無垢。

触れた途端に霧散する様な儚い美しさを持ち、匂い立つ色香は、見る者全てに異常なまでの独占欲を抱かせる。

まだ十四歳でこれだ。

あと数年経てば、どれほどの美女に成長するか。

ただ分かるのは、今この時も少女は誰もが求めて争う傾国の美女だった。

となれば、その少女を得た自分は、その戦いに打ち勝った勝利者

という事か？

少女は自分の愛妾だった。

国王である自分が、自分の意思で愛妾へと迎えた存在。

片時も手放さず、常に側に置いてきた。

大切な、大切な愛しい——だから。

周囲からは苦笑されるほどの寵愛を注ぎ、それこそ何処に行くにも常に連れて行った。

もし一時でも手放せば、即座に涎を垂らした獣達が少女に群がり奪い去って行くだろう。

そんな事は許されない。

これは、自分のものだ。

自分だけが手を触れる事が許される、至高の存在なのだ。

強く、美しく、優秀な者だけが幾度の戦いに打ち勝ち、ようやく手に入れられる華。

もし、一瞬でもその姿を見失えば、狂気し何をするか分からない。なのに、頭にあるのは先程の夢の中の少女。

腕の中の少女とは似ても似つかない、平凡すぎる顔の娘だった。

青みがかった黒髪に、勿忘草色の瞳。

鼻には濃い雀斑が浮き、肌も白さとは無縁だった。

だが、血に染まれば肌の白さなど関係ないらしい。

男は、くつと笑う。

嫌な夢だった。

さつさと忘れたい、夢。

髪を揺らし、そつと窓を見る。

空の色が明るくなるにつれ、窓硝子は光りの作用で鏡の効果を失っていく。

しかし、それでもぼんやりと映し出す男の姿は、恐ろしいまでに美しかった。

その時、腕の中の少女が此方を見ているのが分かった。
「起こしてしまいましたか？」

「……」

自分を見詰める紅瞳。

ぼんやりとした様子だが、気を抜けば飲み込まれそうなほどの色香に思わず手が伸びる。

だが、その手を拳に変えて握りしめると、ずっと少女から体を離れた。

「もうすぐ夜明けです。私は入浴してきますが、貴方は？」

「……」

「では、私一人で入ってきますね」

そう言つと、少女から離れて一人浴室へと歩いて行く。

その時だった。

頭の中に、それが響いたのは。

「……分かりました」

突然の勅命に、口角を引き上げる。

勅命は王が出す命令だが、この国では特例の場合のみ王以外が出せる事になっている。

それが発動されたい。

しかし、それには代理印が必要だ。

今現在代理印を持っているのは……ああ、誰だったか。

思い出せない。

けれど、あれは誰にでも渡せるものではないから、信頼おける者であるのは確かだ。

詳しい内容まで知らせてこなかったが、既に他の者達にも連絡済みだという。

だとすれば、朝一、下手すれば、朝が完全に明けきらないうちの会議が始まるだろう。

「本当に、面倒ですね」

何が起きているのか分からないが、どうせろくな事ではない。

浴室に入り、一重を脱ぎ去った時、ふと胸元が寂しい事に気付いた。

「ん？」

首にかかっているものがない。

「ああ、また玉瑛ですか……」

先程まで腕に抱いていた少女——玉瑛がまた取ってしまったらしい。

酷く興味を持っていたから。

「仕方ないですね」

苦笑しつつも、急く心。

今はあの首飾りが酷く恋しかった。

なぜなら、あれだけが彼女と自分を——。

あれ？

彼女？

彼女とは？

その時、脳裏に夢の中の少女が蘇る。

平凡な少女。

地味で、美しさとは無縁の姿。

だが……。

「あれ……は」

……な筈がない。

そう……筈がないのに。

あの少女が……。

「……か……じゅ」

それは、自分の妻の名。

それも、正式な妻——王妃の、名だ。

そう……自分には王妃が居た。

正式な、妻が。

だから、少女を愛妾にするしかなかったのだ。

妻が、邪魔な女が居たから——。

ちがう。

頭に鋭い痛みが走る。

「ち……が……」

その場に膝を突く。

邪魔。

邪魔？

邪魔って何だ？

妻は、邪魔ではない。

なぜなら、自分が……。

男はハツとした。

何時のまにか、記憶の書き換えが起きていたことを。

一体何時のまにそれが起きたのか……。

だが、愛しく大切な存在は邪魔で忌々しい存在と認識していた自分が確かにそこに居る。

何故？

何故？

ああ、そうだ。

諦めた時だ。

妻の事を、諦めるしかなかった時。

あの日、決断するしかなかった日に、自分は。

——もう二度と、会えない。

それまで一月ごとに送っていた使者を止めた。

愛妾を迎えたその日に、それを命じた。

妻に会いたい、取り戻したい。

しかし此処に戻せば、奴等にとって邪魔な存在として葬られてしまっから。

奴等が望む事——愛妾である少女を正式な王妃にするには、彼女の存在が邪魔だから。

殺されたくない、死なせたくない。

それぐらいならと、決断するしかなかった。

多くの者達が苦渋の決断をする中、断腸の思いで、諦めた。

「……果豎……」

もう、会えない。

自分の大切な宝物。

強引に奪い、妻とした。

せめてその思い出だけでも大切にしたかった。

なのに、いつのまにか行われていた記憶の書き換え。

愛しい存在を忘れ、更には邪魔な相手と認識していた。

何故？

これは、彼女を失った心の痛みがそうしたのか？

だが、それはそれで腹立たしい。

もう二度と会えないからこそ、大切な思い出だけは守りたかった。
なのに。

「果豎、果豎……私の」

どうして。

どうして。

まさか、奴等が？

あいつらにとっては、果豎の存在は邪魔で仕方ない。

もしや、奴等の計画の一環として自分の記憶の書き換えが行われたのか。

それなら、話も繋がる。

奴等にとって、自分達はただの駒なのだから。

そう……あの、愛妾でさえも。

「果豎……」

会いたい、会いたい、会いたい。

この腕に取り戻し、会いたい。

力が及ばず、二十年前に失った愛しい妻。

その後も、彼女は戻ってきてくれなかった。

それでも、いつかはと願っていた。

しかし……今思えば、彼女が帰らなくて良かったと思う。

でなければ、彼女はとつくの昔に殺されていただろう。

そう……これで良かったのだ。

彼女だけは、堕としたくない、殺したくない。

「愛してます……」

自分を闇からすくい上げてくれた彼女を。

たった一人の、光り。

ナノニナゼウシナワナケレバナラナイ。

「っ?!」

心の底から、響く声に男は目を見開いた。

「な……」

ナンデ、私ばかり、我慢シナケレバならない。

「何を」

記憶を力キカエられる?

ジョウダンじゃない。

失うなんて、アリエナイ。

「そう……だから……だから、私は」

負け犬。

「っ」

失うのか?

諦めるのか?

全く変わらないんですね、お前は。

「誰ですかっ」

嘲る声に、男が声を上げる。

だが、頭に響く声は笑い続けた。

そんなんだから、失う。

「黙りなさい」

もっと素直になれ。

欲しいものを欲しいと言って何が悪い。

「……」

どうして自分だけ失わなければならない?

諦めなければならない?

隠して、抑えて。

思わないのか？

どうして、自分だけ。

「あ……」

いくら隠しても、抑えても、無駄だ。

そう……無駄なんですよ。

「無駄？」

すると、頭の中に響く笑い声がすつと収まる。

「そう、お前は既になっているのだから」

まるで頭の中の声が自分の口を借りた様に紡がれた言葉に、ギョツとした。

「何を」

既になっている？

何を？

最初から。

何を？

お前如きに私は止められない。

強い目眩が起る。

床に手を突き、男は歪む視界に呻いた。

そうしてどれだけ時間が経った頃か。

すつと、立ち上がった。

「早く、体を綺麗にしなければ」

まるで何事もなかったかのように、振る舞う。

「ああ、玉瑛に首飾りを返して貰わなければ」

あれは大切な妻を思い出す唯一のものだから。

ただ、少しだけ違っていた。

浴室から水音が聞こえる。

それをぼんやりと聞きながら、玉瑛は寝台の上で首飾りを弄んでいた。

あの人が持っていたものだ。

男なのに、性別を超越した女性的な美貌。

暗闇の中でも燐光を放つ雪白の肌に、中性的だが、野生の獣の様な無駄な肉のない肢体。

雪の様に白い艶やかな髪は、くせがなくまっすぐ腰下まで伸びている。

物腰が柔らかく、高貴な雰囲気が漂う中、ぞくりとする程の色香が漂う。

あの紅い瞳に見つめられたいと願うのは、異性ばかりではない。

氷雪の如き冷徹さと儚さを併せ持つ――白き麗人。

そして……自分を愛妾に迎えた、この国の偉大なる王。

賢君と名高く、多くの国民から絶大な支持を得て、絶対的なカリスマ性で貴族達を魅了する彼は、紛れもなく炎水界の中で一、二を争う大国の王だった。

だが、玉瑛の頭の中にあるのは、そんな王の事よりもこの首飾りだった。

繊細な銀の鎖の先にぶら下がる、双突六角柱の石英。

それを、玉瑛は王がするようにして力を込めた。

ふわりと、石英が光ったかと思うと、淡い光を放ちながらそれは現れた。

青みがかった黒髪と、勿忘草色の瞳をした少女。

透けていて、まるで幻の様な姿だが、玉瑛はそれを食い入るように見た。

そつと手を伸ばす。

だが、それはただの映像。

石英に記憶された、幻でしかない。

すり抜ける手を見つめたのも一瞬。

何度も、その少女に向けて手を伸ばす。

少女は何も言わない。

ただ、優しく微笑むだけ。

触れられないもどかしさは、いつしか苛立ちに、苛立ちは狂気へと変わる。

「カジュ」

王が呼ぶように、その名を紡ぐ。

見ていた。

知っていた。

王が、毎夜この石英の少女を見つめている事を。

彼の心は今も彼女にだけ注がれる。

王の心を手に入れろと命じられ、毎夜自分は服を脱ぎ捨て彼の元に侍る。

徹底的に仕込まれたそれは、息をする様に自然に行えた。

けれど、王は自分と出会ってから一度もこの体を抱こうとしない。触れても、ただ優しく撫でるだけ。

口づける事すらない。

おかげで、いつまでも手つかずの生娘の体。

散らされる筈の花は、いまだ誰に手折られる事もなく咲き続ける。任務一つこなせない体は、ただのガラクタだと蔑まされた。

でも、それでも良いと思った。

このぬるま湯の様な時間が、玉瑛は何よりも好きだった。

なのに……心の何処かで叫ぶ。

足りない、と。

それは、この少女の姿を見てから、特に強く頭をもたげる。

「カジュ……」

ペロリと、石英を舐める。

少女に触れられない分、何度も紅い舌で冷たい石を舐める。

ああ……美味しい。

けど、もしあの少女の肌に直接触れられれば……。

「アイタイ」

会いたい。

だから、我慢なんてする事はないのだ。

ぼんやりとした眼差しで、少女を見ながら玉瑛は笑う。
会いたい。

会いたい。

会いたい。

ただ、少女と会えるその日を夢見て、玉瑛は石英をペロリと舐めたのだった。

第十一話 王の場合（後書き）

次ぎは、会議です。

中々、本題に入らないな……。。

久しぶりのコメディ頑張ります〜
♪

第十二話 集結

炎水界が大国の一つ——風国。

丁度領地の中央に位置する王都『白風』に、その美しく壮麗なる王宮は存在した。

繊細且つ緻密な装飾が至る所に施され、芸術品としてもその価値は高い広大なる敷地を有する宮。

そこは、王族や高官達の住まいがある最深、政治の中枢である本宮と内宮、そしてそれ以外の機能がある外宮と一般市民や政治に関わらない貴族が立ち入れる外来宮からなる。

空にだいぶ白がにじみ出て来た頃。

王の間に、続々と官吏達が集まってきた。

文官、武官、更には雑務担当の者達も居るが、彼らに共通しているのは、いずれも上層部に君臨する各部門の長官、副長官クラスである。

中には、上層部がお気に入りの子飼いの者達も居るが、それはほんの僅かな者達だった。

ただ、どちらにしろ、今現在この部屋——王の間に集まれるのは、上層部とそれに関係する者達だけという事である。

「あゝ、此处に居たゝ」

「お前は朝から無駄にハイテンションだな」

「うっさいよ、宰相様」

「それはお前だ、朱詩。書記長官のくせに、いい加減身なりぐらいきちんとしろ」

宰相——明睡の言葉に、朱詩は頬を膨らませた。

確かに朱詩の服装は公式の場では褒められたものではない

自分のサイズよりも大きな服を身に纏っているだけならまだしも、着崩した上衣は、白い両肩が露わとなっている。

まるで、娼婦の様な姿だ。

「ふふ、固い事言わないの」

「煩い」

「明睡のいけず」

付き合っていられないと言わんばかりの明睡に後ろから飛びつく。

「やめる馬鹿!!」

「いゝや」

明睡が朱詩を振り払おうとするが、それよりも早くに耳を舐められる。

「っ!」

「耳弱いもんね」

「ふざけんなっ!」

大きく身を翻す明睡に、朱詩はくすりと笑って後ろに飛び退く。服の裾がふわりと靡き、まるで蝶の羽を思わせる様に部屋のそれぞれで歓談していた他の長官達が思わず話を止める。

だが、すぐに何時もの事だと再び話に戻っていた。

「ふふ、ボクは君の弱いところなんて全部知っているんだからね」

「お前……」

「耳でしょ? 乳首でしょ? ああ、あと後ろも」

その時、ピシリと明睡を中心に冷気が辺りに広がっていくのが分かった。

「それ以上言ったら、殺す」

「明睡の意地悪」

「どう考えてもお前が悪いだろ!」

どうやら、今回も書記長官の勝ちらしい。

密かにどちらが勝つか賭けていた者達は、懷から財布を取り出し掛け金を払う。

一応、大戦中に苦楽をともにし、建国後も最も気心の知れた者達だが、友情より自分達の楽しみの方が大切だった。

そうして勝手に賭の対象にされた宰相と書記長官。

真実を知れば、たぶん全く正反対の反応を示してくれるだろう。

「で、どう？ 今日の夜はボクも空いてるよ」

「てめえ……」

どどん明睡の纏う気配が黒くなっていく。

「あ？ それとも、涼雪とお楽しみ？ いいね、彼女の居る人は」
「っ」

「でも、君みたいな絶倫だと涼雪も大変でしょう？ だから、ボクが相手してあげるよ」

こいつ――。

だが、明睡はその言葉で気付いてしまった。

「お前、楽しんでるだろ」

「うん」

「遊んでるだろ」

「もちろん！！ 明睡が一番からかうと楽しいんだもの」

「てめえ……」

「で、麗しの宰相閣下は何を悩んでるのさ」

朱詩の言葉に、ギクリと明睡は心臓が口から飛び出しそうになった。

「は？」

「あつれ、隠すの？ ボクをごまかせると思ってるの？」

「何がだよ」

「やばい、こいつはやばい。」

絶対に気付いてる。

「もちろん、君が愛しの涼雪で悩んでる事だよ」

「――っ！」

他の者達にも聞こえる大きな声で言う朱詩に慌てるが、放たれた言葉を回収する事は無理だ。

何事かとこちらを見る者達を一睨みで黙らせると、明睡は朱詩の胸倉を掴んだ。

「お前な」

「ふっふ」。そういえばもう少しで涼雪の誕生日じゃない？ って

事は、誕生日の贈り物で悩んでるんでしょ？！　だよね。妾にして日々責め立てて、君の得点はマイナス通り越してどん底。ここで一つ起死回生を狙わないと」

殺す。

まじ殺す。

明睡の怒りは巨大な波動となつて、部屋の床を揺らす。

「明睡つてば、あんまり怒るとはげるよ？」

「誰がはげるかつ！」

「で、贈り物するの？　しないの？」

「っ」

「そういう事ならボクに任せてよ。とびっきりの贈り物をチョイスしてあげるからさ」

その言葉に、明睡の心が少しだけ傾いた。

それを遠くから見守っていた者達は悟る。

「明睡……」

「真面目すぎるのが玉に瑕だな」

「朱詩に思い切り手玉に取られてるぞ」

「宰相としては有能なのに、惜しいわ」

そうして周囲から残念な男認定をされた明睡は、それに気付かずよりもよって朱詩に悩み相談をしてしまった。

「その、涼雪の誕生日の贈り物だけど」

「うんうん」

「何を贈ろうかって……その、涼雪は綺麗な衣とか宝石類とか興味ないし」

少し頂垂れた感じが加虐心をそそる。

流石は『天性のドM』。

風国上層部の女性陣の心を激しく刺激した。

「なら、涼雪の興味のあるものをあげればいいじゃん」

「興味のあるもの……」

明睡は考えた。

たぶん、今までの神生で一番考えた。

「……熊」

「は？」

「いや、昔はよく熊狩りとかしてたし」

食料補給部隊のヒーローだった涼雪のおかげで、軍の食料事情は
かなり改善されたと言ってもいい。

「なら、熊あげればいいじゃん」

「熊の人形か……けど、大きさを考えないと枕の側におけないな」
案外ロマンティックな明睡。

だが、朱詩は言った。

「いや、涼雪は熊が好きじゃなくて、熊を倒すのが好きなんだよ。
熊狩りしてたぐらいだし」

ファイターな彼女だと、涼雪を知らぬ者がいれば驚いただろう。
それか、どこのアマゾネスだと絶句したかもしれない。

いや、アマゾネスだって熊を素手では倒さなかった筈だ。

「熊生け捕りにしてリボン巻けば？」

「そうか。熊のぬいぐるみがいいか。取り寄せられるかな」

「いや、生きた熊捕まえるって言うてるんだよ。じゃないと、狩れ
ないじゃん」

「……」

「……」

「生きた熊なんて涼雪が怪我したらどうする！」

「涼雪が怪我するわけじゃないじゃん！」

新たな戦い勃発。

「それに、驚かせられないだろそれっ！」

「横に熊が寝てたら驚き度抜群じゃないかつ」

「ああ?! 涼雪の横に寝るのは俺だけだ！」

「ちよつと! どこまで心が狭いのさ! それだから涼雪に拒まれ
るんだよ」

「お前に言われたくないわっ! 百歩譲っても熊の剥製を贈るっ」

「ちよつ！ 落ち着いて下さい、二人とも」

勇者が現れた。

その名は玲珠。

大国の書記長官と宰相という、高官二人の極めて低レベルな戦いを止める為に立ち上がった偉大なる生贄、いや、覇者である。

と、朱詩と明睡が同時に玲珠を振り帰る。

「お前はどっちを選ぶ！ 罽の剥製だよな」

「生け捕った罽だよな！」

「三番の指輪で」

なにげにしっかりと答える玲珠に、一斉にわき起こる拍手。

「三番だと?!」

「選択肢は二つなのになんで三番が出てくるんだよ！ 本当に空気を読まない子だねっ」

「空気読むより常識読みます」

もし自分が妻にどちらかを贈る事を考えれば、当然誰だって新しい選択肢を開拓するだろう。

はつきりいつて、玲珠はまだ妻と離婚したくなかった。

「つたく、玲珠ってば冒険心がないんだから」

「倦怠期も間近だな」

その時、温厚な玲珠の中で何かが切れた。

「それで結婚生活がぶち壊れたら責任取ってくれるのか、あんたらああ！」

王宮を震わす怒声に、低レベルの喧嘩は終了した。

第十三話 会議？

「国王陛下、ご入場でございます」

入り口の兵士の言葉に、各長官、副長官達が左右に分かれて道を作り、一斉に頭を下げる。

最奥にある玉座まで続く赤い絨毯の上を、王は寵愛する愛妾たる少女を腕に抱えながら滑るように進んでいった。

王一人でさえその美貌に息を飲むのに、絶世の美姫とも言える美貌の愛妾と二人並んだ姿は、時を忘れるかの様な絶景をそこに作り出す。

そうして、数段高くなっている玉座に座った王の隣に宰相が控えるように立つ。

だが、王は宰相を見ずに腕の中の愛妾へと微笑みかける。

これがいつもの日常。

本来であれば、重臣達の揃った会議に愛妾を連れてくるなど、絶対に有り得ない事態だ。

しかしそれに眉を潜める者はおらず、ただ温かい眼差しを向けている。

つまり、愛妾がこの会議に参加する事を長官達が認めているという事だった。

そんな、異常の中、会議は始められていく。

「それで、勅命により呼び出されましたが。一体何があつたのでしょうか？」

王の言葉に、ずっと前に進み出てきたのは、情報省長官だった。

「この度は、勅命発動によりお越し頂きありがとうございます」

「情報は全て一度は貴方の所に行きますからね。ですが、勅命は貴方から来ていませんが」

「はい。私めは情報の裏付け捜査をしていまして、各長官の部下達に手伝って頂きました」

よほど慌てていたのだろう。

直接長官達に話を通すのではなく、その部下。

確かに各長官が信頼している者達を使ったところは上手いが、それでも普通の状態ではまずしない方法だ。

「しかし、詳しい内容までは伝えていないと」

「御意」

「――何がありました？」

「それが……」

情報省長官がぎゅっと服の裾を握る。

「話しなさい」

「実は――連絡がありました」

「連絡？」

「はい。王妃様を迎えに行った使者団からの、ものです」

その瞬間、辺りが騒然となった。

純粹に驚くもの、まるで有り得ないと、顔を歪ませるもの、目眩をおこすものさえ居た。

ただ、僅かに黙ってそれを聞く者が居る。

「ど、どういう事だ!!」

「使者団って」

「王妃様を迎えに行ったのか?!」

有り得ない、有り得ない、有り得ない。

なぜなら、自分達は使者団など出していないからだ。

「どういう事だ!」

「どこの馬鹿がっ」

だが、騒ぎ立て居た者達は次の言葉に愕然とした。

「使者団は宰相閣下の命で出ている者達です」

「なっ――」

明睡が目を見開く。

俺――?

「俺が……使者団を？」

有り得ない。

「そんなわけがあるか……」

使者団を、王妃を迎えに行くなんて……そんな事、認めるわけがない。

それをするぐらいなら、なぜあの時自分達は――。

アキラメルワケナイダロ。

「え？」

諦める、ワケナイダロ。

これはなんだ。

脳裏に響く声。

聞こえてくる、禍々しいそれに明睡は目を見開く。

「やめ……ろ」

なんで、アキラメル。

声は囁き続ける。

明睡は気付かなかったが、その時、あれほど騒がしかった王の間がシンと静まり返っていた。

どうして、アキラメル必要がアル？

「それは……」

諦めなければ、死なせてしまうからだ。

だから、あのまま王妃をそつとしておこうと決めた。

王妃を――果豎を連れ戻す事を、全員が諦めたのだ。

なのに、なのに、なのに。

「どうして……使者団が」

そんな記憶、ない。

使者団を出した記憶など、ない。

「長官」

王の言葉に、情報省の長官が持っていた書類を捲る。

「裏付けをとったところ……驚く事が」

「驚くこと？」

「はい。止める事を決めた使者団ですが、記録、また実際に使者に

立つた者達からの証言により……」

言葉が震える。

有り得る筈がないのだ。

こんな事。

けれど、確かにその証拠は情報省長官の想いとは正反対の答えを出している。

「長官」

「……使者団は継続して王妃様の下に向かっている事になっていきます」

息をのむ音があちこちから響いた。

「な……ん……だと？」

宰相は強い目眩を覚える。

それは……どういう事だ。

「使者団は……もう出していない筈だ。そう……完全に止めた筈だ」
「しかし、使者団は出てるのです！！それも、一月に一度、定期的に毎回！！それだけではありません。きちんと報告書まで出ていました」

何故？！

そんなものは見た覚えがない。

「何度も確かめました。ですが、使者団に立つた者達は皆口を揃えて言います！上層部からの命令だっ」

つまり、宰相だけの個人暴走ではないという事だ。

信じられないと言う様子の上層部だが、口を開くものは居なかった。

なぜなら、彼らもまた自分達の脳裏に響く声と戦っていたからだ。
何故アキラメル——と。

明睡の脳裏に、一際強く声が響いてくる。

「やめろ、やめろ！」

叫び、気付く。

まさか、この声の主が関わっているのか。

王妃を連れ戻す使者団が今も送られている事に。

「まさか……」

お前が――。

「答えろっ」

頭の中の声を問い詰める。

すると、声が笑う。

ソウダヨ。

「っ」

オマエの代わりにヤッタダケダ。

「なっ」

いや、チガウ。

オマエとオレは同じ。

「何だと？」

ダカラ、オマエがやった。

そう……望む事を、したのだ。

「な……」

一体どういうことなのか。

頭の中の声と自分が同じ？

自分が望むこと？

お前は誰だ！！

ドクンと、強い拍動が鳴り響く。

カンミ。

「え？」

『完末』――ダヨ。

「か……んみ」

ドンツと、強い衝撃が全身を襲う。

立ってられないほどの、凄まじい圧迫感に膝をつく。

耳に、バタバタという音と、同じように座り込む者達の姿が視界に入るが、構って居る暇はなかった。

「か……んみ……だと？」

ソウダヨ。

オマエも、此処に居るすべてのヤツラも。

『完末』ダヨ。

ケラケラと笑う声を聞く度に、明睡の頭痛が大きくなっていく。

『完末』、『完末』。

『完末』は完全。

『完末』は完璧。

『完末』は孤独で不幸。

何かが、急激に浮上してくる気がした。

鎖でがんじがらめにした、開けてはいけない箱が開く気がする。

「やめ……ろ……」

開けてはいけない、あがつてきてはいけない。

押し込めなければ。閉じ込めなければ。

そうしなければ——自分達は——。

アキラメルモノカ。

「っ」

オマエがアキラメテモ。

オレタチはアキラメナイ。

ガマンナドスルモノカ。

アキラメルモノカ。

今度こそ、『枷』をテニイレル!!

「やめ、ろおおおっ!!」

絶叫は、一つではない。

幾つも、数十、数百もあがるその叫びが王の間に響き渡った。

——諦めたくない、それは確かに自分達の本音だった。

——けれど、諦めなければ、大勢の命が失われる。

——だから、諦めた。

——ヤツラを騙す為に道化を演じた。

——今の地位を授かった時に、義務と責任も背負ったから。

捨てるものなら、とつくの昔に捨てた!

あの時に！

二つの想いがぶつかりあう。

どちらも引かない、強い想い。

そうしてそれぞれの体に留まりきれなくなった想いは力となり、大きな波動となって王宮を中心に外へと広がっていった。

風国各地を、強い揺れが襲う。

「っ！」

王の瞳が見開かれ、力が解放される。

この神力が制限された天界十三世界において、唯一許された世界を支える為の力が、全土に注がれる。

しかし、それを頭の中の声が邪魔をする。

コワシテシマエ。

「やめ」

コワシテシマエ。

コンナモノガあるから、自分達は――。

「こわせ」

響く声に、飲込まれる。

そう……どうして、自分達ばかりが！！
大地に注いだ力が弱まる。

このまま、壊れてしまえば、いい。

やめ　　て。

「っ！」

弱まった力が、再び勢いを戻す。

「あ――」

コレハ。

アア、ナツカシイ――。

声が、急速に衰えていく。

その中で、王は見た。

光の中に、いる、その存在を。

「――」

泣いているその少女を慰めたくて、でも名が出ない。

ごめんなさい……。

何故、彼女が泣かなければならないのか。

何故、どうして……。

どうして彼女が――。

しかし、憎しみも恨みも全てが光によって抑えられていく。

ただ、その中で聞こえた声が懇願する。

自分達は……タダ、アレと一緒にいたかっただけ。

だから……送ったのだ。

迎えの、使者団を。

理性も、常識も全てを超越する強い思いが、囁く。

忘れていく、抑えられていく。

でも――これだけは譲らない。

声が囁く。

イッショニイタイ。

そう……イッショニイタイ。

でも、それ以上に生きていて欲しい。

だから、動かなければ。

そう……今からでも、遅くはない。

果豎を……あの屋敷に留めなければ――。

それからどれだけ時間が経ったのか。

ぼつりと、一人の長官が立ち上がった。

それに伴い、他の長官達も立ち上がる。

ずっと、王が目を開け、命じた。

「続きを」

「御意」

情報省長官が、すつと顔を上げる。

その眼差しに、ゆらぎはなかった。

第十四話 会議？

「それで、使者団は王妃を連れ戻しに行ったまでは分かりました。ですが、この様に私達が集められるというのは、それだけではないでしょう？ 何が起きたのです」

情報省長官が、持っていた調査用紙を握りしめる。

だが、辛そうな表情も一瞬。

すぐに全ての表情を消し、淡々と告げた。

「王宮へと戻る最中、瑠夏州隣の鶯州にて、賊に襲われ拉致されたとの事です」

その場に衝撃が走った。

「拉致されたのは、王妃様の他に、侍女長の明燐、そして使者団の長——碧易の三名です」

「他の者達は？」

「賊に襲われた後に通じかかった商人達に助けられ、近くの街に収容されました。そこで商人の持っていた伝書鳩に手紙を託したと、手紙には書かれていました」

「そうですか……」

「詳しい事に関しては、比較的身動きが取れる者が使者として王宮に現在向かっているそうです」

「護衛は何をしていたんだっ！」

あちこちで怒りの声上がる。

「話では、かなりの使い手のようだと。ただ気になる事があります」
「それは？」

「何でも、賊とはまた別の存在が現れ、それが……」

再び黙ってしまった長官に、宰相が先を促す。

「長官」

「……」

「言え」

「……その存在は……銃器を持っていたと」

銃器という言葉に、王の中で一つの光景が蘇る。

ドクドクと、血が流れる音が聞こえ、目眩がする。
まさか……。

「王妃様が、撃たれたそうです……」

場が、凍り付いた。

「……撃たれた？」

最初に声を出したのは、朱詩だった。

「はい。他にも、護衛達が数名撃たれましたが、王妃様は他の者達とは違いかなりの出血をしていたと」

「な——」

「それで、賊の一人が王妃様の治療にあたられ、事なきを得ましたが……」

「でも、連れ去ったんだろう？」

表情を消した朱詩に、長官は頷いた。

「はい。それで、最初は王妃様と明燐様だけが連れ攫われる筈だったのですが、使者団の長が交渉し、三人になったと」

その言葉に、少しだけ安堵の息があちこちから漏れる。

いくら治療したとはいえ、大量出血した王妃を抱えて明燐一人が動くにはきついものがある。

しかし、そこにもう一人いれば何とかなるだろう。

しかも、碧易は、宰相の子飼いの中でも、その実力は各長官からもお墨付きである。

とはいえ、事態が厳しいままなのには変りが無い。

「それで、襲われたのはいつなのです」

「日付から、十日前になると」

「十日ですか……」

それでも、襲われた地点を考えれば半分ほどの時間で来ている。

「丁度上手く風に乗れたようです」

また、緊急用に鍛えられた伝書鳩だった事も功を奏している。

伝書鳩にも階級があり、その階級が上であればあるほど飛ぶ速さも速くなる。

速さは『亀』、『兎』、『疾風』、『韋駄天』となっており、今回使われたのはその最高階級の『韋駄天』だった。

これだと、半分の時間で着くことは可能である。

しかし、なんだか腑に落ちない。

話を聞けば、今回王妃が帰郷する為に通るルートは、一番安全な場所だった筈。

賊が出るような話も聞いた事がない。

「ですが、王妃が攫われた事は事実。これは困りましたね」

王の言葉に、その場に居た者達が騒ぎ出す。

「い、一刻も早く軍を向かわせて王妃様を救出しなくてはっ……！」

「馬鹿……！ 軍を動かすなどすれば、向こうに気付かれてしまうではないかっ」

一軍を動かしたとなれば、その動きはすぐに知れる。

それに、民達に何かが起きた事がばれてしまう。

王妃誘拐。

民どころか国中が大騒ぎになる。

それどころか、この騒ぎに乗じて良からぬ事を考える者達が出るかもしれないし、周辺国もどう動くか分からない。

いくらこの国が大国とはいえ、徒党を組まれば厄介だし、同盟を組んでいる国だと一枚岩ではない。

「そうだ……！ 精鋭を数人送り込めばっ」

「送り込むにも居場所が分らないだろうが」

そう……それが問題だった。

しかも、目的も相手の素性もわからないのだ。

だが、賊とはいえ盗賊の類ではないという。

それに、出血多量の王妃を治療した手際の良さ。

たぶん、向こうは王妃に死なれたらまずい目的があるのだ。生きたまま王妃の身柄を確保する。

それは王妃自身が目的か、それとも王妃という地位の少女を何かの交渉にするつもりか――。

もし、前者だったらまずい――！！

その場に居た王以外の全員から血の気が引いた。

もし、もし万が一、王妃自身が目的だとしたら。

「王妃様の体が目的！　という、王みたいなロリコンだったらアウトですね！」

「黙れ馬鹿――！」

朱詩が隣に居た馬鹿を黙らせた。

なんて事を言うんだ殺されたいのか――！！

確かに王妃の体は幼児体型だ。

真性のロリコンでない限りは、絶対に性欲の対象としてはみないだろう。

という事は、最後までしっかりと手を出した王は変態なのか？

当たり前だ。

当時十二歳だった王妃を笑顔で騙して婚姻届けを書かせた挙げ句、最後までイタしてしまった王はどう考えたって、ロリコンだ。

いや、犯罪者だ。

本気で逮捕されればいい。

もし可能なら、次の会議にて『ロリコン規制法』十六歳以下に手出ししてはいけません』を採決し可決させてやりたい。

だが、きつとこの王なら言うはずだ。

『この法律が出来る前の事に関しては、適応されません』

流石は真の犯罪者。

きっと王妃の神生はこの王に目を付けられた時点で終わっていたと思う。

だが、失礼極まりない発現をされた王は、表情を崩す事はなく朱詩を始め多くの者達がキョトンとした。

だが、すぐに気付いた。

その吐き気すら覚える気配が近づくにつれ、彼らはスイッチを切

り替える。

素顔を隠し、心を隠して仮面を被る。

さあ——始めよう。

最高の演技を。

王妃を守る為に。

「本当に仕方の無い王妃だ」

「面倒事ばかり起こして下さる」

「なんて無能な王妃」

口々に囁き、陰口を叩き、嘲笑する。

あいつらに、聞こえるように。

先程までの、本当の自分達の時間を懐かしみながら。

王妃への想いを、心に押し込めて。

「しかし、このままにはしておけません」

「そうね。国が混乱するのは望まないわ」

「まずは居場所の特定をしましょう」

「そうだな。それに、賊からの接触もあるかもしれない」

「王、それでいいですか？」

「いいも何もそうするしかないでしょう？ならばやって下さい」

まるで投げやりのような感じで王はひらひらと手を振った。

先程までとは打って変わった怠惰の様だが、それを咎める事なく

長官達は頷く。

愛妾との生活に酔いしれ、愛妾の事しか頭にない愚王。

騙し、演じ、愚かな王を作り出す。

それは、確かにあいつらを騙せるだろう。

しかし、別の問題を作り出す危険性もあった。

何とかして自分達の娘を側室としようとする者達を付け上げさせるという。

実際に、既にその問題は起きていた。

毎日のように、自分の娘を、姉妹を、縁者の娘をと望む者達の陳状がなされていた。

出来れば王妃。

もしなれずとも、寵愛されれば跡継ぎの母として国母になれる。そうなれば権力は思いのまま。

凧国は炎水家の直属の大国であり、その国王は限られた者しか達している事の出来ない炎水家の宮殿に殿上する事が出来る。

その仲間入りが出来れば自分の一族の繁栄は思いのままだとして、権力を望む一部の貴族達は王に娘を薦めるのだ。

「それでは、王妃様の事はまず賊の居場所特定から始めます」

その時、謁見の間に一つだけある時計の鐘が鳴響き、正午の時間を知らせる。

と、王が立ち上がった。

「さてと、そろそろ時間ですし、私は帰ります。後の事は頼みますよ。それでは」

立ち去る王に、長官達が一斉に頭を下げた。

怠情を演じつつも、それでも国を支え続けてくれる、王に対して自室に戻った王が座り慣れた椅子に腰を下ろす。

「ああ、来ましたね」

ずっと、何時のまにか目の前に現れた存在に王は顔を上げる。腕の中で、愛妾たる少女がキョトリと相手を見つめていた。

「王のお呼びとあらば、ね」

大輪の薔薇の様な美女が、艶麗なる笑みを浮かべた。

「話は」

「聞いていたわよ。影からね」

凧国国王には、王だけが動かせる直属の影がある。

その名は『海影』といい、長の名は茨戯と言う。

そう——王の前に立つ薔薇の美女こそが、その長だった。しかも男である。

「で、用件は？ 王妃を攫った奴等の皆殺し？」

「全員殺して来なさい」

「……全員って、萩波」

思わず王の名を呼んだ茨戯に、萩波はきつく睨み付ける。

「勅命です」

「……」

「但し明燐だけは傷一つつけずに、連れ帰りなさい。宰相の大切な妹姫ですから」

「王妃は？」

茨戯の言葉に、萩波がくすりと笑う。

「……分かったわ」

その笑みに隠されたものを、感じ取る。

そう……遅かったのだ。

だから、茨戯も演じる。

演じなければ、アノ子は殺されるから。

王が愛しているのは、愛妾だけでなくてはならない。

王妃は、愛妾との愛を邪魔するだけの存在でなければならぬ。

そう言つと、長の姿はあつという間にその場から消えた。

「頼みましたよ……」

願わくば、果豎を……。

決して口に出せない想いを、萩波は心の奥深くへと鎮めた。
あいつらに気付かれないように。

第十四話 会議？（後書き）

次ぎからは、明燐達のターンです。

第十五話 狂ゆく齒車（前書き）

次ぎは明燐達と言いましたが、すいません。
美琳達のお話です。

第十五話 狂ゆく齒車

「美琳、どうしたの？」

「あ……何でもないわ、煌恋」

風国王宮の下女である美琳は、朝早く人気のない自分の仕事場である洗濯場から、今現在会議が行われているだろう本宮を見つめた。朝早くに招集がかけられ、自分の夫も上層部の側近として出席を求められた会議。

選ばれし者達だけが集う、決して越えられない壁に羨望の眼差しを送る者達が多いが、美琳は複雑だった。

そんな彼女の隣では、友人であり上女の役職についている煌恋が心配げに美琳を見つめていた。

侍女や女官達同様に美しい女性が多い中でも、一際美しい煌恋。

二十代前半の女性が持つ艶と朝露に濡れた桜の花を思わせる美貌は、同じ女である美琳ですら溜息をつくほどだった。

それに比べて、自分は……。

美貌はおろか、役職すらも下の地位——そう、下女だ。

同じようにこの国に来た者だというのに、明らかなる差に劣等感がむくむくと頭をもたげ、美琳は再度溜息をついた。

風国王宮——内政部の雑下省には、下女、下男、上女、上男という役職がある。

中でも、下女と下男は王宮で働く官吏達の最下位の役職であり、他の官吏達の炊事や掃除などを行い水回りや雑用全般にかり出される下働きだった。

対して、上女と上男は下女と下男のすぐ上の地位に位置する下位職ではあるが、接客や王宮を訪れる貴族や来賓達の身の回りの世話をする選ばれた者達である。

当然、綺麗どころが揃えられているばかりか、あらゆる教養に秀

でた者達の集まりと言ってもいい。

それを思いだし、美琳は余計に気が重くなった。

どんどん落ち込む美琳の心を機敏に悟った煌恋が慌てて話題を進めた。

「玲珠様の事が心配なんですよ！」

すると、美琳がようやく浮上し、煌恋はホッと息を吐く。

「煌恋……」

煌恋はそつと美琳の肩に手を置いた。

ある国で、共に二代にわたる愚王に愛する者を奪われた仲である自分達。

美琳は夫を。

煌恋は当時婚約者だった夫を。

あの国で生きる事も考えたけれど、どうしてもこの国で生きたいと願うここまで来た。

全ては、この国への恩返しのために。

住んでいた村を滅ぼされ、家族を殺され、愛する夫を奪われたばかりか、愚王や側近達によって夫が凌辱される光景を目の当たりにさせられた。

それは、自分達が荒くれの下層兵士に凌辱されるよりもなお辛い事だった。

美琳と煌恋が住んでいた国は、虬国から東に位置する国だった。

ある程度の領土と豊富な資源を有していたが、あまりにも愚王だった前王により国はあつという間に傾いた。

が、それだけではない。

異常なまでに好色だった前王。

しかも、彼の好みは美しい男達だった。

そうして自国他国問わず美しい男達を権力に物を言わせて強引に拉致監禁し、寵姫として後宮へと放り込んだのだ。

そればかりではない。証拠隠滅や邪魔になるとして住んでいた場所を焼き、そこに住まう者達を皆殺しにした。

ただ、寵姫とした男達の縁者の女性だけは助けた。
だが、助けたといつても、それは地獄同然だった。

地下牢に放り込まれ、兵士達の慰み者とされ、愛する男が、家族である男が凌辱される姿を何度も見させられてるのだ。

当然、男達は見ると泣き叫ぶ。

男達を性奴隷とする為の道具として生かされる日々に絶望したのは美琳や煌恋だけではない。

それこそ、数え切れない者達が絶望し、中には命を絶った者達も居た。

それは愚王の息子に王位が移っても変わらなかった。

そんな自分達を救ってくれたのが、この国だった。

美琳、そして煌恋は今でも思い出せる。

この国の王妃が、剣を手に叫んだ言葉を。

『このままなぶり殺しにされるか、それとも自分の尊厳と名誉をかけ、大切な者達を取り戻す為に戦うか』

そして自分達は選んだ。

ゴミの様に虐げられ、心まで恐怖で支配されていた中で、あの言葉が自分達を奮い立たせた。

そうして勝ち取った未来と自由。

だからこそ、今自分達はこうして此処に居るのだ。

——とはいうものの……。

美琳は思う。

あの日、この国に渡ってきた者達は、二代にわたって愚王に凌辱され虐げられてきた寵姫達たる男達と、その縁者の女達全員だった。そしてその全員が、凧国王宮にて職を得た。

煌恋も自分も、二人の夫も。

特に煌恋と自分の夫はあの国から来た者達の中でも酷く優秀だった。

その潜在能力と開花していく才能。

更には、それを使って今では、上層部の側近としてのし上がった。

二人の夫は、虬国上層部の一人にして、書記長官——朱詩の側近の地位に就いていた。

美琳の夫——玲珠と。

煌恋の夫——柳。

柳は、あの国では將軍の一人という高位の存在だったが、後宮時代から夫とは仲が良く、今では二人して朱詩の懐刀と呼ばれている。対して、いつまで経っても下女の自分。

劣等感はいくたび刺激され、何度も別れようと思った。

しかし、それも全て飲み込み、ここまで来た。

『あのね、美琳さん』

美琳は思い出す。

二十年前——王妃がこの王宮から逃がされる時だった。

『苦しいんだっただけ……一緒にいこう？』

状況が混乱する中、王妃は美琳の手を取ってそう言った。

その言葉に、美琳は今までの苦しみが発火した。

逃げたい、逃げたい、逃げたい。

王宮から逃がされる王妃に羨望すら覚えてしまった自分に、彼女は言ってくれた。

王妃には侍女長や数名の選ばれた者達が同行する事になっていた。

美琳も、望めば一緒に行けたかもしれない。

そう……行けた。

なのに——。

「美琳」

「あ、玲珠さん」

「っ！」

後ろから聞こえて来た声に、美琳はハッと我に返る。

「美琳、玲珠さんが」

煌恋の言葉に、美琳は恐る恐る後ろを見た。

そこには、会議に出た筈の玲珠が居た。

「あなた……」

「すまない、仕事中に」

「一体どうしたんですか？」

問いかけながら、ちらりと視界の隅に柳の姿を認める。
横に居た煌恋が嬉しそうに自分の夫に駆け寄っていく。

「ちよつと面倒な事になって」

「面倒？」

「いや、正確には大変な事に……」

そこで、言葉を切る。

此処に居るのは、玲珠達が来なければ美琳と煌恋の二人だけだった。

しかし、美琳は夫の視線から物陰に隠れてこちらを見ている下女仲間達を見つけた。

それは、長らく勤めている者達ではない、新人の者達だ。

まだまだミ―ハー根性が抜けないらしい。

年頃の少女らしく、玲珠と柳の姿を見て頬を赤らめている。

しかも、きゃあきゃあという甲高い声まで聞こえていた。

まあ……二人はカツコイイし。

何しろ、あの国——祖国では王の後宮に放り込まれ、寵姫として寵愛されていたぐらいだし……。

その時だった。

「どうしてあんな女が玲珠様の奥方なのかしら」

「——っ」

悪意ある声に、美琳は固まった。

ああ、まただ。

今まで何度も聞かされてきた言葉だった。

何度も。

何度も。

足下の地面が崩れ落ちていく気がした。

今すぐ、この場所から駆け出したい。

駄目だ、そんな事をすれば余計に彼女達を付け上がらせる。

音を遮断しようとするが、一度気付いてしまえば次々とそれは飛び込んでくる。

「珍珠様は高官の側近だけれど、奥方はただの下女」

「ふふ、これが噂の格差夫婦って事かしら」

「うわ！ 悲惨、ちょく可哀想」

「けど、あそこまで差があつたら、少なくとも夫には何も言えないわね」

「ほんとほんと！」

「実は本命は他にいたりして」

「いやーん！ 私も遊びでいいから抱かれてみたい」

駄目だ。

激しい頭痛に強い目眩が起こる。

彼女達の言う事なんて気にするな。

あんなのは、ただのやつかみだ。

けれど、自分の劣等感を激しく刺激される。

「煌恋様ともご友人らしいけれど、あれではね」

「顔は見られたものだけど、それ以外は全然駄目だって噂だし」

「きつと夜の方は凄いのよ」

「二十歳を過ぎた年増にもかかわらず、子供も産めない石女のくせに生意気よ！！」

ドンツ、と全身を殴られた気がした。

「珍珠っ！」

頰れそうになった美琳は、柳の叫びにハッと珍珠を見る。

「珍珠！」

無表情を通り越し、全身から凍てつく殺気が放たれる。

このままではまずい。

美琳は自然な動作で懷に手を入れた珍珠の腕を掴んだ。

「美琳——どけ」

「駄目よ！」

だが、逆に腕をひねりあげられる。

「っ！ 逃げなさい！」

物陰で此方を伺っていた少女達に叫ぶ。

「は？ 何言ってるの？」

「何かあの女が怒らしたのかしら？」

「玲珠様も可哀想——あんなのを妻にして」

「強引に押しかけたんじゃない？」

少女達の笑い声に、玲珠の殺気が更に濃くなる。

「玲珠、止める！」

「邪魔しないで下さい」

玲珠の冷たい声が響き渡る。

「玲——」

「何をしているの！」

響いた怒声に、その場を凍てつかせていく氷が割れた。

「ひっ！ 下女頭様っ」

「仕事をさぼって何をしているのっ」

「す、すいません！ でも、美琳達も」

「とつと仕事に戻りなさい！ でなければ給料からさっ引くわよ

！」

その言葉に、新人の下女達が蜘蛛の子を散らすように走り去っていった。

「下女頭様……」

「美琳、貴方は今日は仕事はもういいわ」

「え？」

「気付いてないの？ 顔色が酷く悪いわ。家に帰りなさい」

「でも……」

しかし、下女頭の言葉には逆らえず、美琳は強制的に休みを取らされた。

「きちんと休むのよ」

「はい……」

「玲珠、美琳を頼むわね」

下女頭の言葉に玲珠は不満げに頷いた。

出来る事なら追い掛けて始末してやろうと思ったのに、先手を封じられてしまった。

しかし、美琳は確かに顔色が悪いし、このままにはしておけない。それにしても……殺してやれば良かった。

あの美しい少女の皮を被った醜い者達を視界から消したかった。

お前達に何が分かる。

お前達に、自分達の何が。

玲珠の中に渦巻く怒りはいまだ収まらず激しさを増す。

あの少女達には分からない。

あの日の自分の絶望を。

『美琳……』

今思い出しても、焦燥感は尽きない。

二十年前、美琳は自分を捨てようとした。

過去には妾になるとか、色々ともんでもない発言をした妻だったが、まさか捨てられかけるなんて……。

荷物を片手に、王妃の乗る【馬車】へと向かった美琳を見つけた

時、玲珠の中で何かが音を立てて壊れた。

『どうしました？ 王妃様』

『玲珠……あの、美琳の姿がないな……って』

『ああ……美琳なら、体調を崩してしまって……』

逃げようとした美琳を捕らえ、部屋に閉じ込め、その足で王妃の下に向かいそう告げた。

いつもの笑みを浮かべて、優しい口調で告げた。

最後まで、王妃は美琳の事を気にしていた。

いや、美琳だけではない。

彼女は美琳と、宰相閣下の妾である涼雪、そして葵花を連れてきたかったのだ。

だからこそ、宰相閣下は王妃様の見送りだというのに涼雪を連れず、海影の長も葵花を同行させなかった。

同行させれば、連れて行かれるから。

逃がせない、離せない。

だが、まさか自分の妻までその対象にされるとは思わなかった。もしあの時気付かなければ、美琳は王妃と共に去って行っただろう。

王宮から動けない自分は後を追う事も出来ずに、かといって王妃に同行する事も出来ずにこの二十年を苦しんだかもしれない。

王妃の事は敬愛している。

しかし、美琳だけは手放せない。

子供が居れば良かった。

そうすれば、美琳は子供という枷で自分から離れられなかったのに。

だが、子供は居ない。

最初の子供は、あの馬鹿王のせいで死んでしまったからだ。

そうして美琳は子供を産めなくなった。

だが、それでも体を繋げられていれば……。

散々女として凌辱された自分の体は、女を抱く事が出来ない。

女として開発された体は男を欲しがる。

それ以上に、美琳を抱く事によって自分の受けた苦痛を味あわせるかもしれないと思い、体が反応しないのだ。

だから、二十年前も美琳を閉じ込める事しか出来なかった。

『美琳、美琳、愛してる……』

そう……今のうちに。

「美琳……」

「……」

美琳を部屋まで連れ帰った玲珠は、そのまま寝台に妻を寝かると共にその上に覆い被さった。

しなければならぬ仕事が沢山あるが、次から次へと湧き上がる焦燥感が玲珠を此処に留める。

美琳、美琳、美琳。

妻の名を呼び、その首筋に顔を埋める。
けれど……それだけだった。

それ以上は、どうしても出来なかった。

「玲珠……無理しなくていいから」

妻の言葉に、玲珠は泣きなくなった。

男として失格な自分。

不能なばかりか、女として男に抱かれる事でよがり狂う自分の穢れた体は、愛する妻に全く反応しない。

何時の頃からか……妻は自分に心を開いてくれなくなった。

どうすればいい。

どうすればいい。

このままでは、自分は妻を失う。

永遠なんて存在しない。

全てを愚かな男達に奪われたから玲珠は知っている。

幸せも平穏も、あっけなく崩れてしまうのだと。

凧国国王でさえそうだった。

誰よりも愛していた王妃を、二十年前のあの日、簡単に失った。

宰相もそうだ。

ずっと側に居ると傲慢にも思い込み、涼雪を別の男に取られた。

自分の主である朱詩だって、愛した小梅を目の前で死なせてしまった。
った。

そう……幸せなんてあっけなく壊れるのだ。

しかも、今は特にそうだ。

玲珠は思い出す。

あの日の事を。

王が愛妾を持った時の事を。

美琳には伝えてない。

柳も同じ。

煌恋には伝えていない。

伝えなければ巻き込まない。

まだ影響の少ない彼女達ならば、きつと……。

けれど、もう一人の自分がそれを拒む。

何故失わなければならない。

どうして手放さなければならない。

守らなければ。

閉じ込めなければ。

手放さなければ。

側に置かなければ。

でなければ、自分は……。

「玲珠……」

「大丈夫……はは、大丈夫だよ……」

笑い出した玲珠に美琳はハツとした。

まだだ。

王が愛妾を持った頃からだろうか。

夫が……玲珠が少しずつおかしくなってきたのは。

いつもは優しい夫が、狂気を帯びる。

「玲珠、どうし——きゃっ」

「美琳、美琳、美琳っ！」

玲珠がのしかかる。

ああ、失う。

失えない。

これだけは、絶対に。

きつと……王も同じ気持ちだった筈だ。

二十年前も。

愛妾を持った時も。

そして……。

それから一時間後。

「美琳……行ってくるよ」

ぐったりとしている美琳を残し、玲珠は部屋の扉を閉めた。
後には、美琳一人が寝台に残される。

「王妃様……」

美琳は天井を見ながら呟く。

「ここは……変わってしまいました……」

あの方が居た時とは、変わってしまった王宮。

美琳も肌で感じている。

少しずつ、何かが狂っていくのを。

それを必死に止めようとしながらも、坂を転がる石は決して止められないことを。

そして自分ももうその糸に絡め取られている。

でも、王妃だけは……。

その足に、寝台に繋がる鎖のついた足枷を嵌められながら美琳は願う。

どうか、この王宮に王妃が戻ってこない事を。

緊急招集された会議の報せに感じた焦燥感を心の奥に押し込め。

回っていく歯車が、せめてその動きを緩やかにしてくれるように……。

第十六話 休憩

時は、王宮に連絡の入った十日前に戻る。

明燐と果豎、碧易へきえきの三人は、自分達を襲った男達に連れられて野山を分け入った。

残された護衛達は、その十分後に商人達に助けられる事となるが、その時には既に距離があり、もし護衛が追い掛けてももう追いつく事は不可能だっただろう。

それから、男達は明燐達を連れて山道を歩き続けた。

途中日が落ちて、彼らは歩みを止めず、せめて場所を覚えておこうとした碧易も、同じような風景の連続と負った傷による熱で終には自分を担ぐ男の肩で意識を失った。

果豎も首領格の男に抱えられ、明燐はその男に手助けされながら険しい道を進んだ。

だが、明燐を驚かせたのは既に日が落ちたにも関わらず、光の類を殆ど使わずに進む男達の身体能力の高さだった。

普通であれば、周囲を木々が覆い、道も殆ど獣道となれば満足に歩く事もままならないだろう。

しかし、彼らはまるで全てが見えているかのように、歩いて行く。そんな明燐の疑問に気付いたのか、首領格の男がくすりと笑って指を指す。

「あれですよ」

首領格の男が指さした先を見て、明燐は目を丸くした。

「木々の根元が光ってる？」

木々の根元に、小さな光る『バツの字』があった。

「なんで、光って……」

「光苔ですよ」

「え？」

光苔？あの、洞窟とかにある――。

「それを染料に加工し、木々に『バツの字』を書いてるんですよ。こつやつて」

男が、取り出した小さな小瓶と筆を出して実践してくれた。すると、書かれた部分が確かに光る。

「で、来る時はこれを書いて、戻る時はこれを辿って消しているんですよ」

「消す？」

「オレ達の居場所がバレたら困るでしょう？」

そういえば、思い出してみれば男達の誰かが必ず木々の根元に何かしていた気がする。

あれは、その染料を消していたのか。

「頭が良いですわね」

これでは、追い掛けるのは難しい。

「それで、後どのぐらいで着くのですか？」

「このままぶつ通して走れば、明日の夜には」

「へーって、はい?!」

明日の夜？

「はい。それでも、遅い方ですよ？」

「お、遅いつて」

「安全な道を進んでいますからね」

「あ、安全……」

なのだろうか？この道は。

岩がゴロゴロしている道を歩かされている時点で、どう考えても危険な道だろう。

その後、なんだか抜け道の様な洞窟を通り抜け、そのまま地下道に入る。

「気をつけて下さいね」

「ここは？」

「昔の坑道ですよ。入り組んでいて網の目状ですから、はぐれたら遭難しますよ」

首領格の男の言葉に、明燐は頷いた。

「もう少し行ったら一度休憩を取ります。王妃様の傷も確かめたいですし」

「わかりましたわ」

それから間もなく、地下水が流れる場所に辿り着いた。

場所によつてはかなり急流な場所もあるそれは、地下に流れる川と言つてもいい。

手をつければ、ひんやりとした冷たさに明燐の頭の中も冷えていく。

「ここで休憩しましょう」

「果豎……」

男が自分の上衣を地面に敷き、そこに果豎を寝かせる。

応急処置で巻いた包帯を外せば、火傷の引きつった傷が露わとなる。

「……」

痛々しい傷跡だが、男は目をそらさずに懷から掌に載る黒い二枚貝を取り出す。

「それは？」

「軟膏入れです。オレ達がよく使う軟膏が入っていて、痛み止めの作用があります」

「では、お貸し下さいな。私が塗りますわ」

果豎の肌に触れさせる事は出来ないと明燐が手を差し出す。

「変なことは致しませんよ——と言いたいところですが、彼女は王妃様。分かりました」

男は素直に応じ、明燐に貝殻の容器を渡す。

「どう開けるのですか？」

「それは、ここをこうして」

男の指が明燐の手に触れ、パツと明燐が手を払う。

「あ……」

「す、すいません」

「……いえ、で、こうですわね」

明燐は教えられた通りに貝殻を開けば、そこには確かに塗り薬が収められていた。

それを手に取り、果豎の皮膚へとぬっていく。

果豎は目を覚まさない。

よほど深く意識が落ちているのだろう。

「……塗り終えましたわ」

「では、また包帯を巻きます」

男が果豎の肩に包帯を巻こうとするが、明燐に制された。

自分がやるという事だろう。

どうやら、少しずつ冷静さを取り戻してきたらしい。

それでも、逃げようとするそぶりは見られず、男はホッとした。

「上手ですね」

「包帯巻ぐらいですわ。大戦中は自分達の怪我は自分達でどうにかしなければなりませんでしたし」

大戦という言葉に、男が目を伏せる。

神々の世界から始まり、全ての世界を滅ぼした暗黒大戦。

前天帝達の横暴に耐えきれず、現天帝の蜂起を皮切りにあちこちで反乱が勃発した結果引き起こされた大戦。

およそ千年に及ぶ長い戦いは、法律、常識、慣習その他全ても崩壊させ、殺戮、略奪、暴行が平然とまかり通る世界となった。

弱ければ死ぬ、強ければ生き残る。

更に大飢饉が何度も起き、多くの者達が死に絶えた。

物資は困窮し、人材も居なくなり、当然医師も減れば、治療する道具も減っていった。

ならば神力で治療しようにも、術者の体力が激減すればままならない。

体力を確保するだけの食事すら満足に取れず、明燐が所属していた萩波の軍も酷い時は塩をなめ、食べられる土や草を煮込んで食べる生活が一月も続いた。

もちろん、男も同じだった。

何とか家族全員で生き延びた暗黒大戦中、男も満足に食事が取れずに何度も生死の境をさまよう事となった。

そればかりか、母の栄養失調で死産した弟妹も居た。

だが、それでも誰もが言う。

現天帝達への感謝の言葉を。

なぜなら、そこまで追い込まれていたからだ。

あの時、現天帝達が蜂起してくれたから、この程度で済んだのだと。

でなければ、世界全てが滅び混沌へと還っていっただろう。

全ての命と共に。

「どうしました？」

明燐の言葉に、男は馳せていた思いから帰る。

「いえ……そうですよ。風国上層部の方々は、あの暗黒大戦を戦ってこれた方々でしたね」

「……ええ」

「十二王家——炎水家当主夫妻の指揮下に入りつつも、それまでの間、そしてそれ以降も多くの兵士達を抱えた大軍の一つ。そしてそれを指揮され、見事に幾つもの村や町を戦火から救い、前天帝軍と戦い、多くの功績を立てた者の一人として、風国国王として君臨し、他の方々は上層部に就任された」

「……その通りよ」

そして国王と上層部はこの国を与えられ、託された民達を引き連れてこの土地に国を興した。

それが風国の始まりだった。

風と時化を司る水の国の一つ。

天界十三世界が一つ、炎水界でも一、二を争う大国として、王と上層部は国を発展させていった。

「その地位に胡座をかく無能どころか、多才で恐ろしいまでの実力を有する実力者揃い」

男の言葉に、明燐は溜息をつく。

「その通りですわ。ですから、貴方の行った事は王宮側に喧嘩を売るとんでもない暴挙ですよ」

「ですね」

男は笑う。

そんな事ぐらい、分かり切っている。

この国の王と上層部がどんなに優秀であるかを。

これほどの大国を維持し発展させるには、強大な神力だけでは駄目だ。

だが、卓越した政治手腕や財政手腕、軍事力だけでも駄目だ。

強大な神力と、政治手腕の類。

絶対的なカリスマ性と、人材を発掘し適材適所に置くだけの眼力。そう——あらゆる才能に秀で、それを実行するだけの力がなければここまで国を発展させる事は無理だっただろう。

また、発展させるには維持しなければならない。

凧国ほどの大国ともなれば、目が行き届かない場所も当然多くなくなる。

空中分解や瓦解、反乱などが幾つも起きてもおかしくなかった。

しかし、凧国は反乱の類が他の国に比べて圧倒的に少なく、民達が無用な戦火に巻き込まれる機会も少ない方だと言っている。

但し、何事においても完璧なものがないのもまた事実だ。

どんな完璧と思われる法律にも抜け道があるように、物事には穴がある。

男は思う。

自分達を苦しめた奴は、その部分をついてきたのだ。

広大な国を維持する王と上層部を見事に欺き、自分達に地獄の様な苦しみを味わせた暗君。

異常なまでに権力欲が強く、それゆえに多くの民達が犠牲となった。

全ての逃げ道を塞ぎ、自分達を追い込み。

ここで失敗は出来ない。

男はゆっくりと息を吐き、王妃を見る。

王妃は自分達の希望だ。

偉大なるこの国の賢君達の目を欺き続けるあいつに一矢報いるための。

いや、自分達を再び日の光の下に掬い上げてくれる、大切な切り札。

王妃が居れば、必ずや王宮側は動いてくれるだろうから。

だが――。

男は王妃を見る。

肩に巻かれた包帯の下には、痛々しい火傷の痕がある。

これは、間違いなく自分達のせいでついた傷だ。

言い訳はしない。

王妃を撃つたのは自分達ではないが、撃たれる機会を作ったのは紛れもなく自分達が足止めしたからだ。
それが結果的に、王妃を撃った者達に絶好の機会を作ってしまった。

だから、この傷は自分達の――いや、この計画を立て遂行した自分の責任と言える。

「すいません」

「え？」

明燐は男を見れば、今にも泣きそうに見えた。

「……謝るぐらいなら、最初からしないでください」

「そうですね……オレ達はこうしなければならなかった。だから、本当ならば謝るなんて事はしてはならない。なぜなら、謝ればオレを信じてついてきてくれた者達、そして今回怪我を負わせた方達、全てを侮辱する事になるから……でも」

それでも、王妃の傷を見て俯く。

「すいません……」

「……」

たぶん、男は酷く優しい心根の持ち主なのだろう。

だからこそ、今回の事は絶対に起こさなければならなかったのだ。何となく、明燐はそう思った。

果豎を助けた時の様子と良い、彼は攫う筈の果豎に対して驚くほど気をつかってくれた。

確かに、果豎を攫う事が目的ならば、死なせる事は出来ない。

しかし……、今もこうして傷薬を塗ってくれたり、自分達を気遣い休憩を入れてくれるなど、どう考えてもただの悪党には見えなかった。

彼も言った。

しなければならなかった——何としても。

そう……そこまで、追い詰められるだけの何かが、彼らにはあったのだろう。

と、男の仲間の一人が明燐に葉っぱで作った器を手渡した。

そこには、澄んだ水が注がれていた。

「葉っぱ製ので悪いけど、水分補給しないと……あ、葉っぱは汚くないからな！ それに毒とかも持っていないから」

「分かってますわ。それに、大戦時代はよくこうして水を飲みましたもの」

器なんて、限られた数しかなかった。

だから、手で掬って飲んだり、こうして葉で器を作って飲んだ。

だが、葉も焦土と化した部分が多い場所では、それさえも出来なかったが。

「ありがとうございます」

「あ、ああ——その、もう少し欲しかったらまた汲むから」

そう言つと、男の仲間は慌てて離れていってしまった。

頬が赤く、どぎまぎした態度に、明燐は今まで何度も自分に向けられてきたものを思い出す。

明燐の美貌は風国一。

その姿を一目目にした者は、大抵がこんな風に落ち着かない態度

を取る。

因みに残りは、悩殺されて倒れたり、固まる者達だ。

とはいえ、自分に水を渡してくれた者は、今までの者達とも違う。多くの者達は、明燐を欲に塗れた瞳で嬲る様に見つめてきたが、先程の男はごく少数の部類に入るのだろう。

「何赤くなってる」

首領格の男が苦笑しているのが見えた。

「い、いや、そのお頭——あんまり綺麗過ぎて」

「へえ……奥さんよりか？」

「それはもう——あ」

他の仲間達も同じような顔をする。

「あーあああああつ！ お、お頭、あの、そのっ」

「分かつてる。他の女性を見て鼻の下を伸ばしてましたと言っておくから」

「ありが——じゃないですよおつ！ 殺されますよアッシ——！」

どうやら、かなりの恐妻家らしい。

と同時に、愛妻家らしい。

「り、離婚される、離婚され——うわあああつ——！」

「落ち着け、言わないから」

「ど、どうしよう！ 離婚されたら、アッシは、アッシは……」

「って馬鹿——！」

「落ち着け——！」

「誰か回り込めっ——！」

地下水の中でも流れの激しい場所に飛び込もうとした仲間、慌てる他の男達。

どうやら入水自殺寸前だったらしい。

が、とりあえず此処までするぐらいなら、奥さんとの仲も問題ないだろう。

機会があれば伝えてあげてもいい。

離婚される事を恐怖して入水自殺しかけました——って。

第十七話　つかの間の会話

「そういえば、まだ名前を名乗っていませんでしたね」

リーダー格の男の言葉に、明燐が顔を上げた。

「名前……」

驚いた様子に、男が笑う。

「ああ——普通は名乗りませんよね」

「当たり前ですわ」

誘拐犯が身元をばらすという事は、ある意味タブーだ。

それこそ、誘拐した相手を生きて返す事はないという意味にも繋がる。

もし被害者を生きて返せば、そこから自分の身元がばれるからである。

「つまり私達を生きて返さないと？」

「それはないです」

「……」

はつきりと断言した男に、明燐は無言で先を促した。

「オレ達は貴方達を害すつもりはありません。オレの名と名誉、そして命にかけて」

真っ直ぐな眼差しを明燐は真っ向から見据える。

暫し見つめ合い、その真意を探る。

しかしそこに裏はないと感じると、ふっと明燐から視線をそらした。

「信じましょう」

今までの事を含めても、信頼に値すると答えを出す。

それに——もし、裏切ったらその時はその時だ。

明燐は自分の胸にそっと手を当て、鞭の存在を確かめる。

今まで何人も屠ってきた血に濡れた自分の武器。

この武器が更に血を吸うだけ。

しかし……出来るならばこの男にはそれはしたくないと思う。
そう考えている自分に気付き、明燐は自嘲した。
何を馬鹿な。

自分の役目は果豎を守る事。

もし果豎に危害を及ぼすものがあれば、全てをなぎ払うのみ。

例えこの手が血に染まり、汚泥にこの身が沈もうとも。

それが——明燐の誓い。

『私の名と誇り、この命に誓いましょう』

果豎の命と心を守る。

そう——あの時誓ったのだ。

明燐はそつと伏せていた眼差しを男へと向ける。

それを合図に、男が口を開いた。

「オレの名前は蓮璋れんしょうと言います」

「蓮璋……失礼ですが姓は」

「姓はありません」

「え？」

「既に取りつぶしにされていますからね……オレの家は。その時に消えました」

何処か哀しげに呟く蓮璋に明燐は考え込む。

確かに取りつぶしともなれば、場合によっては姓も消える。

それは籍から消されてしまうからだ。

しかし、本人が名乗る事には問題はないだろう。

例え公式なものから消えようとも、生き残った者が居る限り完全に無くなりはない。

だが、蓮璋はそれ以上言おうとはしなかった。

取りつぶし……もしや、その事が今回の誘拐に関わっているのだろうか。

何かの理由で取りつぶしにされた家を再興する為に、王妃を浚い王に直談判する。

王妃という駒があれば、確かに王側も動くだろう。

切り捨てるという事もないわけではないが……。

と、まるで明燐の考えを読んだかのように蓮璋が笑う。

「たぶん貴女が考えて居る事とは違いますよ。家についてはもう良いんです」

家の再興よりも大切な家族は既に居ないのだから。

「……」

「それで、貴女の名前を教えて頂けますか？」

「……明燐」

ああ、やはり良い名だと蓮璋はその名を噛みしめる。

「どういつ字を書かれるんですか？」

「明るいに、燐ですわ」

「へえ……」

火に関係する字。

その名の通り、明燐の温かな火を思わせる朱色の髪は何と鮮やかなことか。

「王妃様とはとても近い方の方なのですが……侍女ですか？」

と、つつい聞いてしまつて反省する。

確かに名前を覚えてくれるまでは信用してくれたが、誘拐犯相手にそうそう情報は与えないだろう。

だが、蓮璋の思いとは裏腹に明燐が頷いた。

「ええ。侍女長をしておりますの」

「あ、え?!」

そこまで答えてくれるとは思っていなかった。

「どうして驚きますの？」

「い、いや……」

まさか答えてくれるなんて……。

しかしその驚きが過ぎると、今度は侍女長という高位な地位に茫然とする。

風国王宮女性職の中でも上位職——それも、女官長と共に双壁と言われている地位だ。

王夫妻の信頼厚く、有能な側近中の側近の一人とも言われている。確か——王妃の懐刀だと、父が言っていた。

——で、あれ？

「侍女長……」

自分は何時でも父の代わりとして留守番をしていた。

だが、父から王宮の事は何度か聞いていた。

今は記憶の奥底に沈められた情報の中から、一つの情報が頭を出す。

侍女長……その地位に現在就く者の情報を。

『ご本人には会えなかったがな——』

そう言いながら、父が語ってくれた。

風国一の美姫として周辺国にまで名を馳せ、王妃よりも王妃らしいと言われた有能で麗しい美少女。

そんな侍女長は、宰相とは実の兄妹にして手中の珠と呼ばれる存在だと——。

「っ——！」

蓮璋は上がりかけた悲鳴を必死に飲込んだ。

確かに、明燐の美貌は風国一の美姫に相応しい。

そして侍女長に就いている。

つまり、つまり明燐こそが宰相閣下の手中の珠——！

「貴女……様は」

「……」

「宰相閣下の妹姫」

遠方の地——この驚州にまでその名は轟き、男達の憧れの高嶺の花として名をあげられる宰相の愛しの妹姫。

まだ自分が平凡に暮している頃から、誰がその妹姫の夫の座を手に入れるかと噂されていた。

まさか……本人に会えるとは。

いや——。

「私が誰か分かって、今更ながら後悔しました？」

明燐は意地悪げに告げる。

「でももう遅いですわ。とつくの昔に賽は投げられましたもの」

果豎を襲った時に、もう道は決まってしまった。

今更、なかつた事には出来ない。

「まあ——今すぐ私達を帰すならば」

「いえ」

「はい？」

蓮璋を見れば、穏やかな笑みを浮かべている。

「後悔はしていません。そもそも、これぐらいで後悔する様な覚悟なら、最初からこんな事はしていません」

もうどうにもならないからこそ、ここまでの危険を冒したのだ。

「賽は投げられた。確かにそうです。もうオレ達には後戻りする道はない。だからこそ、突き進み望みのものを手に入れる」

「……」

「それに……驚きましたが、納得もしました」

「え？」

「貴女の事は最初からただの女性ではないと思っていました。王妃様の側に居られるのだから、高位の方だと。それでも予想よりも遙かに高かったですが」

そこに媚びも生々しい欲望も見られず、明燐は詰めていた息を安堵するように吐き出した。

と、そんな自分に気付きハツとする。

自分は……何処かで期待していたのだろうか。

この男だけは違うと。

今までの、自分を鰐る様に見つめ、手に入れようと虎視眈々と狙う者達とは違うのだと。

相手の意思を無視し、強引に自分の意思を押し付け、手段を選ばずに襲い掛かってくる獣達など掃いて捨てるほど居た。

自分の思いを受け入れてくれ、これだけ愛しているのだから我が物になれ。

此方の意思など完全に無視し、此方が望んでいるのだからと身勝手に手を伸ばす。

その美しさは選ばれしものだけが手にできるとして、勝手に人のことを争い出した。

美しいお前が悪いのだと言われた。

それほど魅力的だから争うのだと言われた。

ふざけるな。

ふざけるな。

ふざけるな。

望んでもいない争いの原因にされ、襲い掛かられる。

兄が守ってくれたが、今度は兄にその余波が向かった。

兄も同じだったから。

その美しさ故に奪われ争われ、自分の意思とは関係なしに閉じ込められた。

殺してやる。

兄を虐げる者を。

呪ってやる。

自分達兄妹を苦しめる者達を。

この風国の王と出会うまで、地獄しかなかった。

そう——男なんて……いや、男も女も全てが敵だった。

老若男女問わず、自分と兄を奪おうとした者達など……。

暗い闇の底に沈んだ心は重く、汚泥の水の中に閉じ込められたまま生きてきた。

それを水面上に上がるきっかけを作ってくれたのは、王。

泥まみれだった自分に臆することなく受け入れてくれたのが、果
豎。

『私、果豎！ 宜しくね！』

がりがりの顔で浮かべた満面の笑み。

ともすれば骸骨にも似た衰弱した体の中に宿る心は酷く温かった。

と、蓮璋を見ると、ふと温かいものが心に宿る。

果豎の時と似ている。

けれど、何処か違う。

これは何？

自問自答するが、答えは出ない。

「どうしました？」

「いえ——」

心配げに自分を見つめる眼差しを見る。

そこには、やはり身勝手な欲も媚びも見られない。

純粹に心配する思いと、恋い慕うものだけが持ち得る光が宿る。

けれど、激しいそれとは違い、温かく穏やかなそれに明燐はなんだか笑いたくなくなった。

今まで……そんな風に見てくれる者は居なかった。

もちろん、ずっと穏やかな恋や愛などない。

いつか激しく燃え上がる時だって来るだろう。

しかし今までの者達は最初から自分の気持ちを押しつけ、断られれば強引に体を奪おうとした。

蓮璋のように、恋い慕っていても自分の気持ちを押し付けない者達など居なかった。

その時、傷つき過ぎて固くなった心の奥深くに、小さな炎が人知れず灯ったが、今はまだ気づく事はなかった。

後にそれが大きく燃え上がり、相手すら焼き尽くす激しいものと化すという事も知らずに。

「それで……何故私達を誘拐したのですか？」

「……それはここでは言えません」

「何故？」

「誰に聞かれているか分からないからです」

「どういう事でしょう？」

「とにかく、慎重に事を進めなければならいんです。ですから……もう少しだけ、待って下さい。向こうにつけば、全てをお話しし

ます」

「……分かりましたわ」

もつ目を見ずとも、声だけで分かった。

だから、明燐は静かに頷いた。

と、その時横で眠っていた果豎が身じろぎする。

「ん……」

「果豎?!」

目覚めたのかと思うも、何度かの呼びかけに答えず瞼も開かない。どうやら、ただの身じろぎだったらしい。

だが、少し呼吸が荒くなってきたており、そつと額に手を当てれば高い熱を感じた。

「果豎——っ」

「どうしました?」

蓮璋が明燐の横から果豎の額に手を当てる。

少し離れた場所で思い思いに休んでいた蓮璋の仲間達もやってきた。

「お頭?」

「熱がある。少し冷やした方がいいな」

すると、仲間の一人がさつと地下水に自分の持っていた布を浸して絞る。

それを果豎の額に当てた。

「水分補給もした方が良く。多めに。あと、塩だな」

塩は水分を体内に留めてくれる。

「塩ならアッシがもってますぜっ」

「それを水に少し混ぜてくれ。しかし弱ったな……向こうに着けば、もつとちゃんとした治療が出来るんだが」

しかし、この熱ではすぐに連れて移動するのは厳しい。

「感染症か……」

熱の原因を予測する。

確かに可能性はあるだろう。

あんな場所で、満足な道具もなく行つたのだから。

「熱冷ましの薬草か何かあればいいんだが……」

「薬草ならこの先の分岐点を右に抜けた廃坑入り口に生えてたと思いますが」

「俺が取りに行きますよ」

仲間の一人の提案に、蓮璋が眉を顰める。

「しかし――」

「大丈夫。見付かるようなヘマはしません」

ポンッと胸を叩く大男の仲間に、蓮璋はしばし考えるが結局は頷いた。

「頼む」

王妃の様子を見ていれば、それを止めさせる事は出来なかった。そうして大男が奥に姿を消すと、他の男達も動き出す。

少しでも果豎の体が辛くないように場所を整えたり、体にかけている衣類を増やしたり。

明燐のやる事は殆どなかった。

「……手際が宜しいですね」

「はは。何でも自分達でしてきましたからね」
特に……あの日からは。

「それに、治療も的確で……本当に素晴らしいですわ」

明燐は果豎が撃たれた時の事を思い出す。

自分はただ泣き叫ぶことしか出来なかった。

完全にパニックになり、治療するどころか逆に蓮璋の治療の邪魔までかけて……。

「果豎の侍女だというのに……」

侍女は、一番王妃の側に居ることが多い。

王妃が恙なく暮しているように気を配り、その世話をする。

果豎の場合は自分で何でもやるから、古代の王妃のように侍女が全てをやるのではなく、ある意味話し相手としての割合が大きい。

しかし、今回のような時に一番側に居るのはやはり侍女である自

分である。

そんな時に、侍女——しかもその長である明燐が焦れば、他の者達もパニックを起こし、手遅れにさえなりかねない。

また治療も傷によつては一分一秒を争うものがあり、適切な治療法が分からないでは済まされない事が今回の件でよく分かった。

神力が使えるならまだしも、今の神々の世界ではそれさえも出来ない。

となれば、いかに沢山の治療法を覚え、それをどんな時にでもそこにあるものを使用して使いこなせるかだ。

「もつと、勉強しなくてはなりません」

「明燐様」

「明燐で宜しいですわ」

彼は誘拐犯だが、果豎の命の恩人。

呼び捨てで呼ばせる事で、明燐は蓮璋を認めたと暗に告げる。

「……では、オレの事も蓮璋と」

含む真意をきちんと読み取り、蓮璋もまた告げた。

「でも、明燐。こういう事はそうそう無いのでは？ 特に王宮に居るならば」

「確かにそうです。しかし、王宮に居ない場合は？ 今回のがその

良い例ではありませんか？」

確かに明燐の言うとおりだ。

「ですから、そういう場合も仮定して常に動かなければなりません」

王宮ならば、専用の医師が居るし、治療に必要な技術も道具も設備もある。

問題は、それらが無い所での怪我だ。

「二度目はないですわ」

決意する様に呟く明燐に、蓮璋はふと気になった。

「王宮では、軽い怪我なども医師が？」

「ええ。大戦時代は違いましたが、今ではきちんとした医師の方が良いだろうと」

ようは、実験台になっているのだが、そこは言わない。
医師の学生達を鍛えるには、やはり沢山の経験である。

よって、小さな怪我をしても学生達に治療させているのだ。

「私も王宮に帰りましたら、勉強し直さなくては」

と、そこで蓮璋を見た。

「貴方の治療法は見事でした。手際の良さ、思い切り、そして判断力。どうです？ 王宮で医師として働きませんか？」

明燐の誘いに蓮璋は微笑む。

そう出来ればどれだけ良いか……しかし、今はまだ無理だ。

「因みに明燐は何処までの治療が出来るんですか？」

あまり追求されてはならないと、話題を変えてみた。

「私ですか？」

「ええ」

「そうですね……誰にでも出来るものしか」

というと、簡単な止血程度か。

「イヤだ、止めてと言いながらも獣の様な男達に十分な準備もされず強引に拡張され大量出血しかけた肛門の外科的治療なら出来ます」

「……」

え？

「ですから、男達に散々弄ばれ傷ついた肛門の裂傷の縫合なら出来ます」

キュピーンと、明燐の目が妖しく光った気がする。

聞いた事に後悔するよりも、何故そんなピンポイントな特殊事例の場合なのか不思議だった。

「ってか、男達に弄ばれた——」。

いや、はは、相手はもちろん女性。

「同性同士の交合は十分な準備が必要だというのに、その美貌と色香に血迷った獣達が強引に中に突っ込むんですよ。本当に忌々しいですわ」

少し怒り口調の明燐に、蓮璋は乾いた笑みすらこぼせなかった。

「はは、はは、は」

アクセントもイントネーションもない、単音だけが口からもれる。
「ああ、もし蓮璋も必要になったら私が縫合して差し上げますからね」

嫌です。

「私、こう見えても縫い物は得意ですよ！　今まで何百回、何千回と回数をこなしてきましたし、綺麗にしっかりと縫って差し上げますから！　ふふ、治療した者達からは、治療後の交合時において強引に拡張されても傷が開かないし痛みもない、しかも見た目はもの凄く綺麗と評判も宜しいのよ！」

どこのですかあああつ！

だが、そんな叫びは口から出ることはなかった。

「因みに、王宮の上層部の男性陣の肛門治療の専門医は私と言っても宜しくてよ」

「っ?!」

王宮上層部さん?!

「だから、蓮璋も安心して下さいね」

何を?

「か、かなり特殊な、環境に、いらしたんですね」

「特殊?　かしら。周囲の男達はみんなそうでしたけど」

獣達に施される地獄の様な凌辱によって肛門裂傷する者達など、そこら中に居た。

「それに私の兄もそうでしたからね」

なんか治療時にグダグダ言って泣き喚いていたが、そこは薬の力。しっかりと眠らせてから縫合した。

既に沢山の裂傷と出血を伴っている状態でグダグダ言っただけ。一分一秒争うんだぞ。

確かに手が足りなくて涼雪にも手伝わせたが。

しかし夫婦になれば、夫が男に凌辱された後の治療として肛門など嫌でも毎日見るのだから、今から練習していると思えば良い。

そうして抵抗した挙げ句に気絶させられて縫われるか、それとも大人しく縫われるかを上層部の男共に選択させた所——激しく抵抗する者達が多いので、全て気絶させてから治療を施し続けている。

特に兄に次いで煩かった珍珠は最後まで抵抗したが、美琳に説得させた。

『珍珠！　お願い！　私に後ろを縫わせて！』

その後声を上げて珍珠が男泣きし、見かねた朱詩達に明燐は説教されたが逆にこう言った。

『愛しい相手の肛門を他の誰にも見せたくない！　他の相手に見せるぐらいなら、後ろの穴まで妻や恋人が縫いたいと思って何が悪いんですのっ！』

愛しい相手を誰にも見せたくない嫉妬心故の愛情的行為。

そう纏めてみれば胸キュンして認めてくれるのだから、ちよろいもんだった。

兄と珍珠もそうやって黙らせた。

それに自分だって考えている。

他の見知らぬ相手に縫わせたが最後、治療どころか余計に後ろをズバズバに拡張されるだろう。

二重遭難ならぬ、多重凌辱だ。

男だろうが女だろうが関係ない。

子供、いや枯れ果てた神だつて一瞬にして大きくなるだろう。

それほど、兄達の体は魅力的だと何処かの誰かが言っていたのを覚えている。

既に血だらけのそこだろうが関係ない。

自分の独占欲と加虐心を満たすためだけに行われる忌まわしき行為。

それを防ぐ為にも、やはり身内に治療してもらうべきだ。

でなきゃ、新たな凌辱が勃発する。

感慨深げに告げた明燐だったが、その後蓮璋は青ざめた顔のまま口を閉ざした。

そして二時間後に煎じた薬草によって果豎の熱が下がり、再び目的地に向かう間も一向に蓮璋が口を利いてくれなくなった事に、明燐はただ首を傾げるのみだった。

第十七話　つかの間の会話（後書き）

間違って消してしまった四話分。
そのうちの一話を更新しました。
ってか、四話分……集中すると一気に書いて保存しないくせをどうにかしたい……。

第十八話 鳥籠の少女

「ここ、何処だろう？」

何処までも続く闇の中。

気付いた時には、果豎は当てもなく彷徨い歩いていた。

しかし空も地面も全てが黒に塗り潰されたそこは、方向感覚を失わせ、時の流れすらも遙か彼方へと押しやる。

どれだけ歩いたのか。

どこを歩いているのか。

そもそもここは何処なのか。

何も分らない。

自分はどうしてこんな場所に居るのだろう。

しかし思いたそうとすれば、ズキンと酷い頭痛を覚えて記憶の想起を邪魔する。

「……明燐……」

友人の名を呼ぶ。

彼女ぐらいしか、呼べる相手は居ないから。

どんな時も側に居てくれた大切な友。

「明燐……」

明燐だけなのだ。

もう、もう――。

「神のお友達は」

大根の友達なら沢山居るけど。

明燐が聞けば無言で追いかけて来そうな事を呟きつつ、果豎は歩き続けた。

どうせなら、黒よりも白の方が良かった。

そしたら艶めかしい大根の肢体の上を彷徨っていると錯覚出来たから。

そして幸せなままにダイビング出来た。

「というか、暫く頼ずりに夢中になるわね」

以前愛する大根に頼ずりしまくっていたら、明燐に処分された。それからは隠れて頼ずりするようになったが、やはりバレた。

だが、そうやって楽しみを強制排除され続ければ、神だって禁断症状が出る。

果豎も当然のように症状が出現した。

真夜中に大根を求めて歩き彷徨うという――。

そしてそれに気付いた屋敷の者達が明燐に掛け合い、無事に大根を取り戻した。

その日は大喜びで大根達を部屋に並べて一日中その艶めかしい肢体を食い入る様に、貪るようにガン見したものだ。

『うふふふ……大根………大根………』

久しぶりに見た白い媚態の余りの眩しさにもう意識は飛びかけ。口から漏れる笑いはいつしか大きくなって――。

「病院送りにされたっけ」

十二時間ぶつ続けて笑い続けていたのが悪かったらしい。

明燐達によつて縄でぐるぐる巻きにされた拳げ句、そのまま病院に担ぎ込まれた。

それこそ、天界十三世界の中で一番医療技術の進んでいる月世界へと送りかけられた。

だが一番失礼だったのは、とにかく原因が脳と神経にあると言われたことだ。

何を言うのだ。

大根は心で愛するものだ。

そう叫んだら、心療内科への紹介状を書かれた。ついでに眼科への紹介状も書かれた。

なんでも、大根が夫に見えているのかもしれないとの事らしい。失礼な。

大根と夫を混同した事などない。

大根は大根。

夫は夫。

どっちも白いけど、大根のあの逞しくも艶めかしい下半身を直撃する魅力は誰にも出せない。

ビバ大根。

愛してる大根。

あの太さと輪郭、そして穢れなき白さと青々とした緑のコントラストが織りなす完璧な美貌に果豎はクラクラだった。

今だって思い出しただけでクラクラする。

そうして時と場合を考えず、大根の魅力に膝を突き悶える果豎。

はつきり言つて、危ない人——いや、危ない神だった。

とりあえず、万が一生贗を欲する様な墮神になつても大根さえ捧げていれば何とかなるほど危なかった。

「くふう……」

頬を赤く染め、声を上げる。

それも全ては大根によるもの。

明燐が知れば、本気で怒り狂ったかもしれないが幸いにも此処には居ない。

そうして暫く悶えていた果豎だが、その耳があるものを捉えた。

「……」

耳を澄まし、果豎はそれが歌だと気付いた。

といっても、歌詞などではなくリズムもバラバラ。

けれど心惹かれる旋律に、気付けば音の聞こえる方へと走り出していた。

しかしどれだけ走っても歌声は近付かず、次第に果豎は焦り出す。行かなければ。

この歌声の元に。

辿り着かなくては。

この歌声の相手に。

強き思いは強い焦燥感を呼び起こし、言いようのないもどかしさを生み出す。

走れ、走れ、走れ。

この歌声の相手の元に。

今辿り着けなければ、きつともう二度と辿り着けない。

今までも、悠久の時の流れの中で何度か会った邂逅の機会は静かに消えていった。

今まで――？

果豎は首を傾げた。

自分は何を考えたのだろう。

しかし、先程まで狂おしいほど心の中に浮かんできた思いが急激に消えていく。

消さないで。

消えないで。

と、地面の感覚が消えた。

「え？」

あつ！と思った時には、果豎は先程とは違う場所に居た。

「イタタ……お尻打ったあ」

お尻をさすりながら手を突けば、冷たい石畳の感触が伝わってくる。

果豎は周囲の変化に気付いた。

そこは不思議な場所だった。

石畳の床、白い壁と大きな柱が等間隔で並んでいる広い部屋。

広すぎて、逆に居心地が悪いぐらいに。

入り口は観音開きの大きなのが一つ。

聖堂——という言葉が脳裏に浮かんだ。

遙か昔、人間達が作った聖堂にそこはよく似ていた。

その時——また歌声が聞こえてきて、果豎はゆっくりと振り返った。

「——え？」

部屋の奥に、部屋の内装とは不釣り合いな鉄格子が見える。

だが、それを通りこし、果豎は鉄格子の向こうにいる存在を見つ

めていた。

「あ——」

気付いた時、果豎は鉄格子の前に立っていた。

そして鉄格子の中の存在もまた、果豎を見て驚愕していた。

「……」

「……」

果豎と鉄格子の中にいる少女はうり二つだった。

ただ、鉄格子の中の少女は黒髪に灰色の瞳をしているが、それ以外は全く同じ。

果豎は何かを言おうとして、気付いた。

少女はただそこに居るのではない。

鉄格子の奥にある壁に張付けにされていた。

一言で言えば、Yの字の形。

上にあげさせられた両腕と腰が、壁に備え付けられている拘束具に戒められている。

だがその拘束具はただの鉄枷ではなく、力を具現化した純粋な結晶によって作られていると果豎は瞬時に理解した。

そのまま視線を下にずらせば、少女の足は爪先が地面に届くか届かないか。

しかし、その足下に黒魔術で使うような魔方陣を見つけた瞬間、果豎はその場に座り込んでしまった。

目に入れた瞬間、意識ごと持って行かれそうな強い念が込められている。

離れていてこれなのだ。

その陣を足下に置く少女なら——。

いや、足下に置いてるのではない。

あの陣は少女を拘束する為のものだろう。

「大丈夫？」

「っ！」

自分と同じ顔をした少女が紡ぎ出す声は、正に自分のもの。

「……」

「何処から来たの？　ここに入れるのは限られた者しかないのに……
……って聞いても無駄よね。何も分からないって顔をしてるし」

「……ここ……は」

「鳥籠よ」

「え？」

自分にそっくりの少女が哀しげに微笑む。

「あの人を拒み、逃げようとした哀れな小鳥に与えられた終の棲家」
「……」

「ふふ……信じられないって顔だね。私もそう思うわ……此処に閉
じ込められてからもずっと」

つまり逃げようとしたから閉じ込められたのか。

しかし、こんな風にされるほどの何をしたのだろうか。

「……どうして、逃げようとしたの？」

「……目的を果たすため。あの方を探し出すという——私はその為
に此処に来たの」

少女は歌うように告げる。

目的？

「確かにあの方は恩人。でも、ここは私達が住む場所ではない。だ
から——」

あの方を探しだし、本来居るべき場所に帰ろうとした。

一刻も早く。

少しでも早く、あの方の元から離れるために。

少女の心が果豎に流れ込んでくる。

愛しさと哀しみ、苦しみと喜び。

幾つもの感情と思いに、果豎は鉄格子を握りしめた。

「けれど……あの方は逃がしてくれなかった。でも、此処から去ら
なければ。私達の力は——」

と、その時だ。

少女の表情に恐れが浮かぶ。

「っ！ 隠れて！」

「え？！」

「良いから、早く！ 見付かったら——」

少女の剣幕に押されるように果豎は近くの柱の陰へと隠れた。

そして気配を必死に隠す。

と、ほぼ同時に扉が開く音がした。

それから起きた事は、果豎の想像を絶するものだった。

扉から入ってきたのは、美しい衣を身に纏い、顔もベールで隠した存在だった。

背丈と発した声で何とか男と分かった。

ベールは完全に目元まで覆っていたが、鼻から下の部分だけでもずば抜けた恐ろしいまでの美貌である事は瞬時に理解出来た。

その男は、鉄格子を挟み少女と向かい合った。

すると、次の瞬間には鉄格子の向こうにその存在は立ち、眼前の

少女と向かい合う。

少女の懇願は一貫していた。

どうか自分を解放して。

此処から出して。

あの方と共に、元居た世界に返して。

けれど、その人は少女の言葉を聞き入れなかった。

それどころか、少女が泣きながら抵抗するのも構わずに両足を抱え上げた。

「いつやああああああ！」

少女の悲鳴があがる。

何をしているかなんてすぐに分かった。

揺れる足が必死に宙を蹴るように暴れている。

と、果豎の居る場所から少女の顔が見えた。

乱れる髪の間から、涙に濡れた瞳が果豎を見据える。

ココカラニゲテ。

「っ！」

だが、弾かれたように逃げ出そうとした体は、聞こえて来た声に足を止めた。

「逃がさない」

え——？

この声……。

「逃がさない……お前は私のもの」

ハツとして、果豎は柱から鉄格子の奥を除く。

声は、自分にそっくりの少女を辱める男のものだった。

泣き叫ぶ少女に言い聞かせるように、男は言い続けた。

「お前は私のもの。逃がさない、何処にも行かせない。今更離れていくなど許せない」

後ろ姿しか見えない。

けれど、果豎にはその狂気の笑みが見えた気がした。

「お前は一生此処で暮して私の子供を産むんだ——！」

その為の鳥籠——。

男の狂気に当てられ、果豎はふらりと後ろによるめいた。

余りにも強く歪んだ狂気は、周囲の心すらも惑わせる。

近くに居た果豎も同様に、食らいつくかれた心から血が流れ出した。

少女の泣き声が聞こえる。

泣きながら、獣に貪られていく。

少女はあの場所から出られないだろう。

あの獣の言うように、子供を産むまでは——。

なんという妄執。

なんという執着。

相手の自由を奪い、ただ自分の側に居る事だけを求める。

既に抵抗すら出来ずに為すがままの少女の足が見えた。

少女と自分はうり二つ。

まるで自分の身に受けているかのような感覚を覚え、叫びだしたかった。

アレハワタシ。

「え？」

ふと脳裏によぎった言葉に、果豎は鉄格子の中の少女を見た。自分そっくりの少女を見た。

そして……気付く。

自分がこの光景を知っている事を。

知っている。

知っている。

だってこれは――。

ドクンと、大きな拍動が打つ。

「っ――！」

何かが鎖で閉じられた記憶の箱をぶち破ろうとする。

これ以上此処に居てはいけない。

これ以上此処に留まってはいけない。

後ずさり、扉に向かって走りだそうとした。

途端に、後ろから伸びてきた腕に羽交い締められる。

「え――」

腰に手を回されて引き寄せられ、もう片方の手が果豎の口を覆う。

甘い香りがした。

その香りに、悠久の時の流れに隠し続けてきたものが、強引に引

きずり出される感覚を覚える。

駄目だ。

駄目だ。

なのに、その声が果豎の抵抗を奪う。

「見つけた――」

限界まで見開られる眼。

なぜなら、その声は――。

一気に視界が暗くなり、目覚めた時には明燐の泣き顔がそこにあった。

第十九話 推測

明燐の泣き顔なんて久しぶりだ。

いや、ついこの前も泣いていたような気がする。

確か何も言わずに勝手に出発して行方不明になって……。

今度は何をして泣かせてしまったのだろう。

ぼんやりとする頭で考えていた果豎は、甘い花の香りに気づく。

ああ、明燐の匂いだ。

でも、どうしてこんな近く――。

「果豎！」

ガバリと覆い被さるように抱き締められて納得。

体を締め上げられる圧迫感に果豎の意識は再び吹っ飛びかけた。

せめて大根に抱き締められて死にたかった――。

風国一の美女の抱擁よりも大根の抱擁を望む変神――それが果豎である。

と、グツタリとした果豎に明燐が悲鳴をあげた。

「果豎?! どうしたの?! ああ、手術は成功したと言うのに――
体どうして!!」

まさか医療ミス?!

「いや、確実に今抱き締めたせいです」

横に居た蓮璋の突っ込みに明燐は「え?」と今の状況を見つめ直した。

「……別に何も外傷は」

「外傷が出来るほど圧迫したら即死です!」

即死かどうかは疑問だが、とにかく問題はあるだろう。

「うう……」

「果豎?!」

呻き声を上げるまで回復出来たらしい。

苦しい声を上上げる果豎に明燐は飛びついた。

「果豎、しつかり」

そしてまた強く抱き締め――。

「退場」

蓮璋の意を受けた者達に明燐は捕獲された。

「何をするのです！ 私は果豎の――」

最後まで言わずに連れだされた明燐を見送り、蓮璋は果豎に近寄った。

遠くから「果豎と二人つきりで何をするの！」とか、「まさか果豎に何か変なことを！」とか聞こえてくる。

そんなに自分は信用ならないのだろうか、ちよっぴり涙が出た。

「……あの」

「はい？ あ」

呼びかけに無意識に返事をしたが、それが王妃からのものだと思つぎ蓮璋は居住まいを正した。

勿忘草色の瞳が自分を見つめる。

「ここ……は」

王妃の求めている答えを悟り、蓮璋は優しく微笑んだ。

「ここは俺達の住む隠れ里ですよ」

「隠れ……里？」

「ええ。詳しい場所は言えませんが……すみません、居場所が特定されるのは危険なので」

「……王宮に、バレるから？」

王妃の質問に蓮璋は苦笑した。

「いえ、寧ろ王宮にはバレて欲しいですね、俺達の存在を……。バテて欲しくないのは、俺達の敵の方です。そして今はそちらにバテる可能性の方が遙かに高い」

「……敵？」

敵とは、どういう事だろう？

果豎はぼんやりとした頭で考えた。

しかも王宮にはバレて欲しいとはどういう事か？

王妃を誘拐したのだ。

王宮を敵に回すも同然の行為を行ったのにバレたら捕縛されてしまうではないか。

この人は何を考えているのだろう。

ジツとその顔を見つめる。

「それより、何が起きたか覚えてますか？」

「え？」

「オレ達が王妃様達を襲った時の事ですよ」

「……」

何が、起きたか。

分からないと頭を横に振ろうとした時、果豎は右肩に引きつる様な痛みを覚えた。

「っ！」

と、その痛みが果豎を覚醒させると共に記憶を取り戻させる。

「わた……し……」

そうだ……思い、だした。

「……私……撃たれた」

「ええ。そうです」

明燐に駆け寄ろうとした時、肩に強い衝撃を受けた。そして――。

ズキンと頭に痛みが走り果豎はギュツと目を瞑った。ガンガンと強い痛み意識が揺れる。

「王妃様?!」

「う……あ……」

肩に強い衝撃を受けた。

そう、衝撃を受けて……その後、何かあったような気がする。何処か、暗い場所を歩いて……歩いて……。

だがそれ以上思い出すのを拒むように頭痛は酷くなっていく。

「あ、頭……痛い」

「王妃様、しっかりして下さい!」

蓮璋の手が右肩に触れた途端、果豎は痛みに悲鳴を上げた。

「あ——」

しまったと思った時には、王妃は肩を庇うようにごろりと横を向く。

「も、申し訳ありませんっ」

そのまま動かなくなってしまった王妃に、蓮璋は慌てた。機嫌を損ねてしまったのだろうか。

だが、傷に触れたのは自分だ。

謝罪しなければと必死に言葉を考え口を開く。

だが、最初の言葉が出てくる前に王妃が動き出した。

ゆつくりと、上半身を起こそうとする姿に慌てて手を貸す。

「ありがとうございます」

「いえ、あの、すいませんでした」

必死に謝る青年に果豎は首を横に振った。

肩の痛みはまだあるが、わざとやったわけではないのだから。

「あの、痛みは」

「あ、肩はもう大丈夫ですよ」

果豎が安心させるように言うと、青年はホッと息を吐いた。

「つてか、包帯巻かれてますけど、貴方が手当してくれたんですか？」

「いえ、それはオレの知り合いの医師の手によるものですよ。寧ろオレは王妃様に痛みばかり与えてしまつて……」

「どういふ事ですか？」

「その、貴方が撃たれた時に……一分一秒を争う状況で手荒な治療をせざるを得なかったんです。おかげで火傷までさせてしまつて」

「え？ 火傷？」

「王妃様の出血が多量すぎて、傷口を焼いたんです。あ、もちろん此処に来てから更に治療しましたので傷跡は殆ど残らないと思います。銃弾も摘出しましたし」

体に弾が残っていたのを、青年の知り合いの医師が手術で摘出し

てくれたという。

「覚えてない」

「当たり前ですよ。ずっと意識を失っていましたし、手術中は麻酔もかけますしね」

意識がある状態での切開などんでもないと青年は顔を歪める。

その顔は何処か青ざめており、よほど自分は重傷だったのだと果豎は理解した。

「それに意識自体が中々戻らなくて……あの場所で意識を失ってから、今日までずっと眠り続けていたんですよ。もう此処に来てから三日経過してます」

「三日……」

そんなに意識がなかったのか。

と、そこで青年がまた心配そうな表情を浮かべた。

「そっいえば頭の方の痛みはどうですか？」

頭？

果豎はキョトンとした。

「頭がどうかしました？」

痛かったのは肩だが。

「え？ でも、さっき頭が痛いって」

驚いた様子の青年に果豎は首を傾げた。

そんな事を自分は言ったのだろうか？

だが、記憶を探ってもそんな事を言った覚えはない。

「その、大丈夫ですから。え」と

「あ、オレは蓮璋と言います」

「果豎です——あ」

あっさりと名乗った相手に果豎もつられて名乗ってしまった。

しかし、そこで自分達の関係を思い出して焦った。

この蓮璋と言う名の青年は、自分達を襲った存在の一人でもある。そんな相手にこうも簡単に名乗っていいのだろうか。

いや、それ以前に蓮璋の方も素性に関わる情報を渡してもいいの

か疑問だ。

「え」と、大丈夫ですよ」

「え？」

「名前の件でしょう？ 大丈夫です」

「あの、それってどういう事ですか？」

「ですから、名前を隠すつもりはありません」

名前を隠すつもりはない？

つまり素性を隠すつもりはないという事か。

「でも、さっき場所は知られたくないって」

「ええ。それを知られるとオレ達の命に関わりますからね」

なんだか分からない事ばかりだ。

だが、ふとそこで思い当たる。

「そういえば、私、貴方達に襲われたんですよ」

「ええ」

「で、王妃を狙っていましたよね」

「はい」

「なんで王妃を狙ったんですか？」

果豎の直球の質問に蓮璋はあつけにとられる。

だが、すぐに笑みを浮かべて答えた。

「オレ達に必要なだったからです」

「貴方達の居場所がバレるかもしれないのに？」

「……」

「バレないとは思っていませんよね？ 王妃が攫われれば当然王宮

側は躍起になって捜そうとする」

王が愛妾に首ったけの今、そこまでしてくれるか分からないが。

それどころか、これ幸いにと始末されそうな気もする。

しかし普通に考えれば、搜索する確率の方が高い。

それこそ、どんな手段を用いても。

「王妃が襲われ誘拐されたなんて国にとっては大事ですからね。居場所がバレないわけがない」

特にこの国の上層部の实力を知っている果豎は断言した。

「絶対に、バレますよ。なのはどうして」

「言っただけでしょう？ 王妃様」

蓮璋が果豎の言葉を遮る。

「オレ達は王宮側にはバレて欲しいと」

「……え？」

「バレて欲しいんです。でなければ、オレ達は……オレ達は、ずっとこのままだ」

ギョツと握りしめられる拳。

苦しそうに顰められた眉。

その瞳に浮かぶ悲壮な決意の光を目の当たりにした果豎は、ポツリと呟いた。

「……もう一つ質問させて下さい」

「何ですか？」

「どうしてあそこで私達を襲ったんですか？」

「はい？」

キョトンとする蓮璋に果豎は淡々と告げる。

「だから、どうして、あそこに王妃が来ると分かったんですか？」

蓮璋がギョツとした様に目を見開くが、果豎は追求の手を緩めない。

大切に、重要に質問だからだ。

襲われた時にも疑問に思った。

けれど、こうして落ち着いて考えられるようになると、それはあつという間に大きな疑問となって果豎の頭に居座った。

大切な、大切な、明かさなければならぬ疑問。

「場所だけじゃない。時間もそうです。どうして、私達があの場所を通る時間にタイミングよく襲えたんでしょうか」

果豎は蓮璋を見つめた。

「確かに王妃が王宮に居ない事は周知の事実だし、二十年前の事件で追放された事も公にされています。でも、何処に追放されたかは

誰も知らない筈。けれど私が襲われたあの道は、瑠夏州と鶯州を繋ぐ道であり、瑠夏州から来た者達が通るのが殆ど」

つまり、瑠夏州から王妃が来ると知っていたのだ。

「更に、私があのだを通る時間をどうして知っていたんでしょうか？」

「……」

「場所が分かっているとしても、通ると分かなければ待ちぼうけです。つまり、王妃があのだの時間にあのだを通ると知っていたという事になる」

「……」

「しかも貴方方は、あの馬車が王妃のものだと分かっていましたしね」

確かにあれだけ警備されていれば一般市民ではないが、貴族という事もある。

だが、彼らは間違いなくあの馬車を王妃のものだと知っていたのは、当時の言動を思い出しても明らかだ。

「つまり、かなり詳しい情報を、貴方方に提供してくれた方は持っているんでしょうね」

「え？」

「それもこちら側の内部の人間。でなきゃ、そこまで知れるわけがない」

「……」

「ですよ。そして私が王に疎まれて別の場所に移される事も教えてくれたんでしょうね」

蓮璋の目が見開かれる。

「そんな！！　嘘でしょう？！　あいつは王妃様が王宮に帰還すると——あ」

「その道を通る目的まで教えてくれたんですか」

溜息をついた果豎に蓮璋は自分の失言に気づいた。
手で口を覆ってももう遅い。

「あ、その」

「別に言い訳しなくてもいいですよ。どちらにしろ、ここからでは教えた相手に何かする事は出来ませんからね」

場所や時間もそうだが、王宮帰還という目的も隠されていた筈だ。それを知っているのは、迎えの使者達を別にすれば、あの屋敷の者達と瑠夏州の領主とその側近である輝鳳ぐらいである。

「まあでも仕方ないですよ。そもそも、詳しい情報がなければ王妃誘拐なんて計画出来ませんし」

でなきゃすぐに捕まってしまうし、計画も破綻してしまうだろう。それを考えれば情報提供者が詳しい情報を渡していてもなんら不思議ではない。

だが、だからといって黙って見逃すわけにも行くまい。

「貴方に情報を流したのが誰か教えて欲しいんですけど」

「……」

「まあ——素直に言うわけですね」

押し黙った蓮璋に果豎は苦笑する。

「けど、それほど私の事をどうにかしたい相手が居たって事は哀しいですね」

「っ！」

「二十年一緒にいながら……ふがないです」

「ち、違います！ あいつはそんな事は思っていない！ 王妃様の事をオレ達に教えてくれたのはそれしかなかったからだ！ オレ達が頼んだんです！ あいつは最後まで王妃様を巻き込む事を躊躇っていた！」

「でも」

「あいつは王妃様を尊敬していました！ だから、だからオレ達の事はどれだけ恨んでもいい！ でもあいつだけは見逃して下さい！

あいつは何も」

必死な面持ちを見ながら、果豎は淡々と告げた。

「そういえば、鶯州出身者は一人だけ居ましたね」

「え？」

キョトンとした蓮璋は言葉の意味をすぐには理解出来なかったようだ。

けれど果豎はそれを無視して先を続けた。

「確か、あの屋敷の料理長」

「……っ！」

ああ、ビンゴか。

果豎はようやく理解した蓮璋を見つめた。

「な……あ……」

「当たりですか」

「あ……ど、どうし」

「貴方の様子から、貴方方に関わりの深い相手だと思いました。で、私の側にいる人で貴方方に関わりの深い人を搜したところ、そういえば鶯州出身が一人だけ居たと思い出しまして」

果豎があゝの屋敷に追放される際に同行した者達には幾つか特徴がある。

それは、明燐を除いて、その殆どの者達が追放した瑠夏州の周辺州の出の者達であるという事だ。

何故そうしたのかと言えば理由は一つ。

もし何か事情があつて瑠夏州に居られなくなった際に、彼らの出身州のどれかに逃がす為である。

その時にその州の出身者がいる事は心強いだろう。

場合によつてはすぐにその州の領主に助けを求められない場合だつてある。

その時に地理を知っている者が居るという事は心強い。

そうして瑠夏州の隣に位置する鶯州の出身者はその料理長ただ一人だった。

果豎は、出立した日に差し入れてくれた大根の煮物を思い出す。あれは、この州の郷土料理で州独特の味付けだと聞いていた。

「もちろん必ずしも同じ出身者だから関わりが深いわけではないで

す。でも、別の州よりも可能性が高い。だから聞いてみました」

「聞いてって」

「とても良い反応をしてくれましたよね」

そこまで驚いてくれれば、誰だって見当が付く。

料理長が、蓮璋達に縁が深いと。

「料理長なんですね、情報を流したのは」

「……カマかけされたという事ですか」

「はい、かけさせてもらいました——で、話は戻りますけど、どうして攫ったんですか？ 王妃を」

果豎の質問に、蓮璋は項垂れていた頭を上げた。

「……驚きましたよ、本当に」

「……」

「すいません、まさかここまでとは思っていませんでしたから……」

いえ、オレの中の何処かで王妃に対する侮りがあったんでしょうね」

田舎出身の王妃様。

何の取り柄もない、地位と権力の上にあぐらをかく無能者。

料理長から聞いた情報はそれとは逆だったけど。

けれど……何処かで思っていた部分が確かにあったのかもしれない。

「それで——料理長はどうなるんでしょうか？」

「理由によります。情状酌量があるのなら、考慮します」

「つまり、オレの話す内容次第だと？」

「はい。ですから、教えて下さい」

「……先程まで眠っていた相手とは思えませんね」

「え？」

「早すぎるんです。状況判断が……それに、協力者まで見抜いてしまっなんて」

苦笑する蓮璋に果豎はポリポリと頬をかいいた。

「確かに私は馬鹿で無能ですけど、一応大戦経験者で、あの王宮に二十年前まで住んでましたから」

その中で培ってきたものの結果が、これだ。
しかしこれでも遅い方だと思う。

結局二十年前も冤罪を被せられてしまったし。
だから驚く蓮璋を果豎は理解出来なかった。

「……分かりました。でも、最初にこれだけは言います。料理長は
オレ達が強引に協力させただけで、彼は被害者です」

「……」

「そして今回の事は全てオレに責任があります。ですから、罰する
ならオレを」

「詳しい説明を聞かないとなんとも」

そう突っぱねる果豎に、蓮璋は笑った。

「分かりました、話します。もともと話す筈でした、今回の理由を」
ただ、全てを話すかどうかは決めかねていた。
けれど、今決めた。

この方になら全てを話しても構わないと。

それだけのリスクを負ってでも、この方に聞いて貰いたい。

自分達の苦しみを、この計画に至る経緯を。

そう……きっと、分かってくれる。

勿忘草色の瞳を見つめ、蓮璋は口を開いた。

と、背後の扉が吹っ飛び蓮璋の真横を通過した。

「え?!」

それはそのまま奥の壁へとぶつかった。

「れんしょうおおお」

「ひっ! め、明燐さん?!」

「あ、明燐」

「果豎と二人つきりで何をするつもりだったんですのおお!」

「へ?! いや、何もな——うわああ!」

飛びかかる明燐に押倒される蓮璋。

それを寝台の上から見てしまった果豎は慌てて制止の声を上げる。

「明燐、落ち着いて!」

「果豎に何かしていいのは私だけよ！」

「何かって何？！」

初めて聞いた、そんな新事実。

おかげで果豎は暫し固まり、結果として明燐を止めるのも遅くなり、その後の予定が全て後ろにずれたのは言うまでも無い。

第二十話 疑問

カチャカチャと音を立てながら薬瓶を片付ける中、その人物は首を傾げた。

「不思議だのう」

そう——不思議でならない。

「呼ばれて大急ぎで駆け付けてみれば、王妃様をお連れした時よりも傷だらけのお前が居るとはのう」

「ろ、老師、それは」

「しかも女に引つかかれた傷とは！ くく、この女つたらしが」

「老師！ それは誤解ですっ」

慌てて叫び木の椅子から立ち上がる蓮璋だが、背中に痛みを感じて蹲る。

因みにそこは、明燐のピンヒールで何度も踏まれた場所だったりする。

老師と呼ばれた壮年の男は苦笑した。

「とにかく、後で塗る分の傷薬も用意しておくでしょう」

「あ、ありがとうございます」

そう言つと、老師はてきぱきと薬瓶から薬紙に中身を小分けにしていた。

そんな中、果豎が明燐を叱りつけていた。

「明燐、きちんと謝って！」

「知りませんわ！」

ふんつと頬を膨らませたまま顔を逸らす明燐に果豎が歯軋りする。蓮璋に対する仕打ちは余りにも酷く、しかもそれが全て誤解からなっているとなれば絶対に謝罪するべきである。

しかし、こうなってしまうては、此方が何を言っても無駄だろう。少し時間を置くかと溜息をつく、果豎は老師と呼ばれた男を見た。

明燐にボコボコにされた蓮璋を手際よく治療した事から、たぶん医師が何かなのだろう。

そういえば、自分の傷を治療してくれたのは、蓮璋の知り合いの医師だったという。

「肩はどうかね？」

「え、あ……その」

「果豎、落ち着いて。そんなに驚くと失礼ですわ」

「め、明燐」

「老師、どうか気を悪くなさらないで下さいね」

浮かべる笑みが心から労るものである事に気づき、果豎は驚いた。確かに彼が来た時から明燐は愛想良く振る舞っており、そこから既に顔見知りである事は何となく気付いていた。

というのも、明燐はすぐに他人を信用せず、距離を置くのが常である。

しかし老師に対してはそれがない。

そして言葉の節々に含まれる労りと尊敬から、つまり老師は明燐からある程度の信頼を引き出すだけの事をしたのだろうという事は容易に理解出来た。

たぶん自分が眠っていた間に知り合ったのだろう。

だが、三日という短期間だ。

その間に明燐が信頼を置くだけの事といえば――。

その答えをくれたのは、黙ったままの果豎に気づいた蓮璋だった。「すみません、紹介が遅れましたね。彼はこの隠れ里唯一の医師兼相談役の一人で、本名は別にあるんですけど、みんなは老師と呼んでいる方です。そして今回、王妃様の傷の手術に尽力して下さいました」

確かにそれなら明燐が信頼するのも納得だ。

「しかも、老師は薬にも強いんです。良い火傷の薬もありますから、火傷の跡も殆ど残らない筈です」

その言葉に明燐が嬉しげに微笑むのが分かった。

そう——果豎自身も不思議だが、明燐はとにかく自分を一番大切にしてくれる。

大戦中も夫を除けば、同い年にもかかわらず明燐が一番果豎の世話を焼いてくれたし、二十年前の追放時にも一緒についてきてくれた。

王妃付きの侍女長だから当然と言えば当然だろう。

しかし、そのつくしつぷりには感謝を超えて申し訳なささえ覚える。

このままでは、明燐はいつまでたっても自分の幸せを掴めないのでは——と。

そもそも、こんなにも美しく綺麗で教養高いのに、婚約者どころか彼氏一人いない時点で色々と何かが間違っている。

誰か紹介してやりたいが、果豎の知り合いの男性といえば風国上層部ぐらいだ。

しかし友達、戦友、仕事仲間としては仲良くても、明燐と上層部の男性陣は決して違いを異性として見る事はない。

恋人や妻が居なくてもだ。

ならば別の男性と思っても、知り合う機会がない。

それは、王宮に居た時もそうだし、追放されてからもだ。

というか、そもそも自分よりも自由に動ける明燐が知り合えないのだから自分が紹介する事自体が無理なのかもしれない。

それに明燐は自分と違い、公式の場に宰相の妹姫として参加する事も多い。

風国一の美姫と名高い明燐に誰も近付かないわけではない。

それこそ明燐に憧れる者達は自国他国問わず多く、それは顔を知らない者達にまで及ぶ。

絶対に縁談も求婚も数多くなされているだろう。

となると、余計に不思議だ。

なんで、なんで恋人が出来ない。

美人過ぎて手が出せないのか？！

それとも観賞用と実用品は違うのか？！

だがそこまで考え、果豎は大切な事を思い出した。

明睡——明燐の兄で、凧国の麗しい有能なる宰相閣下。

あのシスコン大魔王をどうにか出来る相手でなければまず近付く事すら無理だろう。

それによくよく考えてみればあのシスコンが妹に男が近付くのを許す筈がない。

つまり、あのシスコンが裏から手を回して明燐の側に男を近付けないのだろう。

昔は男だけでなく女でさえ明燐の側に近付くのをとことん嫌い、妹が果豎の世話をする事すら嫌がつて文句をつけていたぐらいだ。

流石に果豎も我慢出来ず、半年ほど経過して体力が回復するやいなや三日三晩拳で語り合ったぐらいなのだから。

明燐が嫁き遅れる——！！

あつてはならない未来に思わず頭を抱えると、老師の声が聞こえて来た。

「全く、こんな大怪我を女性にさせるとは……そなたは男の風上にも置けぬのう、蓮璋」

何処かからかいが入り交じっていながらも、しっかりと嗜める部分は嗜める老師に蓮璋が頭を下げた。

「う、す、すいません」

白く長い髭がチャームポイントの老師の外見年齢は、七十を越えるか越えないか。

神としては珍しい程の年寄りの外見を維持している。

が——たぶん中身もその位なのだろうと果豎は見当を付けた。

神は不老で若い肉体を維持出来る存在であるが、魂もそうかと言われればそうでもないからだ。

例え肉体が永遠に若くとも、魂は確実に疲弊していくのは周知の事実である。

それが人間など他の種族と比べて酷く遅いだけ。

そして長らく生きた者の中には、中身の年齢にあわせて外見年齢を変化させて余生を過ごす者達も何気に多く存在する。

特に孫やひ孫が生まれるとその傾向が強い。

となればこの老師はかなりの神生経験者！！

きつと孫やひ孫も居たりするのもかもしれない。

神は元々子供に恵まれにくい、大戦以降更にそれが加速している。

よって、孫やひ孫持ちははつきりいつて凄い。

もともと神の総数すら全盛期に比べると格段に減り、純粋な天界育ちの神に至っては半分が死に絶え、他の世界から引き上げてきた神々をあわせる事で何とか数を保っている。

だが、この数では滅んだ他の世界が再生されても、世界の維持に必要な神を派遣するだけの余裕がない。

だから今は『生めや増やせや』だが、それには安定した衣食住と仕事が必要となり、それにはそれをもたすだけの国の繁栄と維持が必要となってくる。

果豎は尊敬の眼差しを向けた。

「な、なんかキラキラ目を向けられておるのだが……」
蓮璋に目で助ける老師に果豎は気づいた。

のんびりとした口調と気さくな人柄に相応しい好々爺。

白い髪と白い髭の境界線が分からないふさふさのモコモコ外見。
いや、モコモコよりもその白の多さに果豎は瞳を光らせる。

そう——白。

果豎の大好きな色。

白は大根に通ずる色。

大根よりももっと自分に身近な存在が居る事をすっかり忘れ、果豎は老師をガン見した。

それこそ、恋する乙女のように。

「な、なんかハンターに狙われる獲物の様な心境だが」

「老師、冷や汗出てますけど」

周囲をしきりに見回す老師とそれにつられる蓮璋。

しかし二人ともその原因に気づく事は、最後までなかった。

「しかしこちらが王妃とはのう……いや、わしは最初そっちの美人さんかと」

「老師」

明燐と果豎を交互に見る老師に、蓮璋は嗜める様にその名を呼んだ。

「あゝ、良いんですよ。良く言われますし」

明燐の方が王妃なら良かったと――。

風国が建国してからずっと、言われなかった日はなかったぐらいに言われ続けてきた。

それがなくなったのは、二十年前に追放されてからだろう。

風国一の美女。

風国一の美姫。

風国の至宝の宝。

聡明で教養深い高貴で高嶺の花は自国他国問わず有名だった。

そうして明燐を一目見た瞬間、誰もが彼女を王妃だと認識するのだ。

しかも誤解を解くのは酷く困難で、解いたとしてもその事実を受け入れられず、その矛先は果豎へと向かった。

あんたより、明燐様が王妃ならいいのに――

確かに、美貌も教養も全てにおいて明燐は王妃に相応しいだろう。その能力の高さからしても、『王の女』としてその隣に立つに相応しいから。

と、そう考えれば、どうして自分が王妃になったのかと果豎自身も不思議でたまらなかった。

いや、そもそもどうして自分は王妃になってしまったのか。

「王妃様、どうかお気を悪くなさらないで下さい」

蓮璋が老師の非礼を詫びるが、果豎の頭の中にはどうして王妃に、いや妻になってしまったのかという原因を記憶から探る方で一杯だった。

ってか、なんで？

なんで自分は王妃になったんだ？

いや、そもそもどういう経緯だったわけ――。

そして果豎は思い出した。

暗黒大戦中、孤児となった自分は、後の凧国国王であり幼馴染みでもあった夫の軍に従軍していた。

というか、居候していたと言った方が良かったらう。

戦闘の時は殆ど役に立たなかったし、寧ろ戦闘になったら仲間に小脇に抱えられて後方に退けられた。

また時には、ボール投げの要領で後ろに放り投げられた。

更には、前線に立たない時の夫の隣に置いておかれた。

『果豎はそこに居なさい！』

最初の内は隠れて前線、又は後方支援に入ろうとした事はあったが、その度に怒られ、結局は安全な場所で薬草探しとかに勤しむ羽目となった。

だが今思えば、それが果豎の薬学の強さに繋がる原因となったのだらう。

で、そういう生活が数年続き、十二歳になった頃――。

ああ、そうだ。

その時、夫に婚姻届けなるものを書かされたんだっけ。

当時は余りに無力で役立たずの自分に嫌気がさし、自分を跡継として引き取ってくれる心優しい女性の手を迷わずとった。

本当なら孤児院にでも入ろうとしたが、当時親のいない子供は沢山おり、孤児院は何処も満杯だった。

かといって一人で生きていけるほど器用でもなく、結局は誰かの

助けを必要とした。

別に相手は誰でも良かった。

ただ、その女性がたまたま手を差し伸べてくれたから、とっただけだ。

その頃はもう、夫や仲間達に憧れる者達が手段を問わずに自分を引き剥がそうとしていて、一刻も早く軍から離れたかった。

だが跡継となるには条件があり、婿養子を貰わなければならず、別の男と婚約する為の婚約届けを記入させられた。

それが夫にバレてしまったのだ。

そうして烈火の如く怒られ、その後は——お仕置きと言って服をはぎ取られ縛り付けられ、何が起きたか分からない中、朝を迎えるはめとなった。

そんな自分に夫は言ったのだ。

『これで、果豎は他の男の元にお嫁にはいけません』

それでも、人並みに夢は大根農家のお嫁さんという可愛らしい事を考えて居た。

なのに、お嫁には行けません。

お嫁には行けません。

お嫁に——。

十二歳で神生が終わった瞬間だった。

その後、体は痛いわ結婚出来ないやらで泣きじゃくる自分に夫は言ってくれた。

『何を泣いているのです、果豎。貴方はもう私のお嫁さんでしょう？』

と。

ああ、そうだ。

そうやって結婚したんだっけ……。

果豎は結婚の経緯を思い出した。

当時はよく分からなかった。

というか、なんでお嫁に行けなくなった自分が夫と夫婦になって

いるのか……いや、どうして夫が自分と結婚したのか分からなかった。

けれど……分らなかったのはほんの少しの間。

すぐに気づかされた、教えられた。

夫は戦争孤児の少女を不憫に思っ て結婚してくれたのだと。

何も持たない少女が結婚など出来る筈がない。

それを不憫に思い、一時の幸せをくれたのだと。

それは夫が非常に優しいから。

将来本当に好きな相手が現れるという可能性も全て捨てて、可哀想な孤児の少女の為に尽くしている。

いわば慈善事業だと、何度も夫や仲間達を狙うあの人達に言われた。

慈悲——その言葉が自分達の結婚には相応しいだろう。

それに確かに夫は、慈悲や慈愛が似合うほど優しい男性だった。

幼馴染みとして、あの村に居た時から……その後、一人生き残って焼けた村の中で茫然としていた自分を助けてくれた時も……ずっと。

でも、まさかそのまま王妃にされるとは思わなかった。

大戦が終わり、夫が天帝と十二王家から王の一人として任命され、風国の領土を与えられた時、そこで自分は離縁されると思っていた。確かに当時果豎は妻だった。

だが歴史を鑑みても、権力を得て地位が上がっていけば、大抵それに相応しい高貴な姫や沢山の女性達を、財力を得ればそれに相応しい妻を娶っていく男達は多く、それまで苦勞をとにした妻が捨てられる例は数多くあった。

しかし夫は言った。

『糟糠の妻、大戦を共に生抜いた仲間を蔑ろにして良き国が治められるでしょうか』

大戦中の仲間達が高官に就任する事に異議申し立てをする者達は誰も居なかった。

権力に執着する古狸達すらも心から認めていた。

けれど、夫は果豎の事も蔑ろにはしないといい、天帝と十二王家の前で王妃に就任させる事を宣言してしまった。

そこで認められれば、古狸達ですら下手に王妃を引きずり下ろす事は出来ない。

しかしそれがより果豎への攻撃の手を強める事となったのは言うまでもない。

強引に引きずり下ろせないなら、王妃から退くしかないように持つて行くまでだ。

そうして誹謗中傷、罵倒、数多くの嫌がらせ、更には暗殺を何度も繰り返してきたのだ。

自分から退くか、死んで退位するか。

と同時に、古狸達は自身の縁者の娘を後宮入りさせる事に力を入れた。

それは、王妃が死ぬ前から地盤を固めさせて王妃地位を得やすくする為であり、それが駄目でも側室として王の寵愛を得て国母となる事を望んだ。

薦められる女性は自薦他薦問わずどの女性も美しく高貴な姫君達だったのは言うまでも無い。

彼女達に勝てるとしたら、上層部の女性陣ぐらいだろう。

それに彼女達も明燐を見た時に王妃と誤解し、自分達では敵わぬと認めたくらいである。

そう——明燐であれば、王妃の地位争いなどという余計な騒動は起きないだろう。

逆に果豎が王妃でいる限り、いつも王妃や後宮を巡って争いになる。

やはり……自分は王妃を辞めるべきなのだ。

慈善事業ならば、もう十分だ。

夫はもう自分の幸せを掴むべきなのだ。

それに夫には好きな相手が出来た。

あの夫が好きになった相手ならば、それこそ公私共に王妃に相應しい相手に違いない。

だからこそ、自分は夫への思いも全て断ち切り、先に進むために王宮へと戻るのだ。

離婚宣言し、新しい生活を――。

「そうよ――こうしちゃいられない!」

「王妃様、どうか老師は――え?」

全く反応してくれずとも根気よく謝罪を続けていた蓮璋が、果堅のあげた声に言葉を止めた。

「早く帰らないと!」

「王妃様……」

蓮璋は王妃の叫びに胸が締め付けられた。
当然だ。

二十年も追放され、ようやく今回王宮に帰れる筈だったのだ。

なのにこうして強引に誘拐された王妃の心中を思えば、自分達の行いの非道さに心苦しさと罪悪感を覚える。

「大根との新しい生活が出来ないじゃない!」

その瞬間、お茶を用意していた老師は自分の足にお湯をかけて飛び上がり、蓮璋は座っていた木の椅子から転がり落ちた。

大根との新しい生活?!

王宮での新しい生活ではなく?!

それとも、王宮に大根があるのか?!

いや、それとも王宮の者達は大根――。

「それ以上考えたら、潰しますよ?」

色気ではなく、黒い瘴気を蠱惑的な肢体から放出する明燐の前に、何処を?と聞く勇氣は蓮璋達にはなかった。

第二十一話 侮辱

「大根、大根との新しい生活がつ！」

「お、落ち着いて下さいっ」

大根との新しい生活って何？！

気になりながらも、とりあえず暴れる王妃を抑えようとした蓮璋は、聞こえて来た音にその伸ばした手を止めた。

ベシンと王妃の後頭部を一殴りした侍女長。

「煩いですわ、果堅」

「むきゆうっ」

叩かれた衝撃で椅子から落ちかけた王妃だが、ちゃっかり侍女長である明燐が抱き留めていた。

その幸せそうな笑顔。

満足そうな笑み。

子羊を前にした狼の如き妖艶な眼差し。

もしやその為に——と思うが、蓮璋は口には出さなかった。

「え」と、とりあえず何故王妃様を此処に連れて来たかをお話するんでしたよね」

あえて目の前の光景には触れず、さつさと事情説明に入るべく頭の中で話す順番を割り振り始めた蓮璋だったが、そつと耳元にもたらされた老師の囁きを聞き取った。

「れ、蓮璋、まさか、もう事情を」

見れば何処か不安と驚きを入り混ぜた視線とぶつかった。

「ええ。善は急げ。しかも包み隠さず一通り話すつもりです」
ギョツとする老師に蓮璋は気づいた。

「大丈夫ですよ、老師。王妃様は既に今回の件の協力者が居る事、それが誰かまで気づいていますから」

「なっ?!」

「どうやらオレ達が思う以上に聡いお方です」

下手に隠す方が不利になると告げると、老師はうゝむと唸りながら白い髭を引っぱった。

「老師、不安なのは分かります。ですが」

言い募ろうとした蓮璋だったが、老師に制された。

「いや、大丈夫だよ、蓮璋」

「老師」

「少し驚いただけだ。だが、王妃様にはある程度お話をするのは最初から決めていた事じゃからな。ただ、王妃様が目覚めて間もない今とは思わなかったただけで」

「そ、それは」

「いや、いいんじや。それに事情説明に関しては、最終的判断はそなたに一任しておるし……わしらはそれに従うまでだ」

事情説明する事は最初から決めていた。

どの内容をどのぐらい話すかも決めていた。

けれど、最終的に何処まで話すかの判断は蓮璋に一任されており、状況次第では全て話してしまうという選択肢がないわけでもなかった。

「ただ——その事を、他の者達にはもう知らせておるのかのう？」

「いえ、つい先程決めたばかりですから。あれでしたら、老師には今からでも皆にその事を報せて頂いても良いのですが」

すると老師は頭を横に振った。

「いや——わしも此処に残ろう。そなただけに全てを負わせるのはな。なに、大丈夫じゃ。事情説明に関しては、最初から全て話すという案も考えていたから、皆もすぐに分かってくれよう」

温かな信頼が滲み出る声音に、蓮璋は嬉しそうに笑った。

そして明燐の抱擁から抜けだそうと暴れていた果豎へと向き直った。

「すいません遅くなりました」

すると、ようやく王妃が侍女長の腕から抜け出し此方を見た。

その様子を苦笑しながら蓮璋が言葉を続けた。

「では、今から説明しますね」

「うん——けど、いいの？　なんか全部話したら不味そうな感じだったけど」

声を潜めてはいたが、どうやら言葉の端々は聞こえていたらしい。王妃の気遣いに目を丸くするも、すぐに安心させる様に微笑んだ。「はい。最終的にはオレの判断に任されていますから」

そう言くと、蓮璋はふう〜と大きく息を吐き王妃を見つめた。

「まず王妃様を襲ったのは、ある目的の為です。いわば、王妃様を襲ったのは王妃様自身が狙いではなく、オレ達の目的の為に王妃様という交渉の切り札を得る為でした」

「交渉？」

王妃の呟きに蓮璋は頷いた。

「はい。ですから、オレ達は王妃様を害そうという気はありません」

「蓮璋」

「はい？」

明燐に名を呼ばれ、蓮璋はさっと王妃の隣に居る美しい佳人に視線を向けた。

「交渉と言いましたね」

「ええ」

「交渉に王妃という切り札が必要という事は、きっとそれだけ大きな物を望んでいるという事でしょうか？」

冷たく唇を緩めて浮かべた笑みは、見惚れるほど艶然とした微笑だった。

上に立つ女に相応しいそれに蓮璋だけでなく老師すら魅入られる。

「答えを——」

自分に視線を向けたまま動かなくなった蓮璋達に、明燐は冷たく言い放つ。

「あ、その……はい、その通りです」

「一体何をお望みなのかしら？」

その言葉に、蓮璋はきちんと割り振った話の流れが壊れていく様

な気がした。

目の前の美しい美少女の求める答えを用意し、なければどんな手段を用いても奪い取る。

明燐から放たれる、トロリとした極上の蜜の香りに脳髓まで侵されていく。

それを打ち破ったのは、王妃だった。

「明燐は黙ってて。というか、蓮璋はきちんと話してくれるんだから、黙って聞いてようよ」

「私、間怠っこしい事は嫌いですわ。それに話の主導権を握られるのも好みではありませんもの」

常に話の主導権を握る事でその場を支配する。

王宮では当然の手腕の一つだ。

だが果豎は頭を横に振った。

「今は主導権はどうでもいいから」

そう言うのと、ずば抜けた美貌が不満の色に彩られるのも構わず、蓮璋に向き直り先を促した。

「続きをお願いします」

「あ、はい。その、王妃様を交渉の切り札にする為に連れてきたという所まででしたね」

蓮璋はコホンと一つセキをこぼすと、ずっと視線を果豎へと向けた。

「確かに王妃様という切り札を得るという事は、明燐も言われたとおり、それ相応の物を望んでいるからと思われと思います。でも、オレ達が望んでいるのは——この隠れ里の者達が望んでいる事はただ一つ」

今まで望んできたそれを、蓮璋は噛みしめる様に音にした。

「オレ達の申し立てを王に聞いて頂きたい——それに伴い、オレ達の奪われたものを取り返す、ただそれだけです」

「奪われたもの？」

首を傾げる王妃に蓮璋は頷いた。

すると明燐が口を開いた。

「王に申し立て……つまり、貴方達の奪われたものは王妃と引き替えにしなければ取り返せない」と

「いえ——正確には、王に何が何でも話を聞いて貰う為の切り札です」

「——それはどういう事ですか？」

首を傾げる果堅とは裏腹に、明燐は鋭い眼差しを蓮璋へと向ける。

「不満そうですね」

明燐の視線を真つ向から受けた蓮璋は、自分を奮い立たせる様に軽口を叩く。

「当たり前ですわ。王に申し立てを聞いて貰いたいのが貴方達の目的の一つであり、交渉と言いながら王妃を切り札とするのは、王に何としても話を聞いて貰う為。つまり、王妃という人質が居なければ王が話を聞かないと言ってるも同然ではありませんか」

つまり国王を侮辱している事に他ならない。

明燐は目をつり上げて蓮璋達を射貫く。

王妃を攫うという大罪を犯し、更には王のことを、王妃が居なければ民の申し立てすら聞かずに無視する狭小なる器の持ち主であると断じられた。

この、侮辱。

「王に忠誠を誓いしものとして、その侮辱、断じて許せません」

明燐の主は果堅だ。

それは疑いようも無く、果堅の為ならどんな事だつてしてみせよう。

しかし、王もまた明燐の主である。

しかも明燐が王に捧げた忠誠は、果堅に対するものと同じく、王に言うよりは彼自身に捧げられたもの。

その絶対的なカリスマ性と魅力から、この国の上層部の心を奪い、心酔にも似た忠誠と敬愛を一手にした存在は、明燐をも一瞬にして魅了した。

たとえ——果豎以外に寵愛する愛妾の存在を得たとしても、その忠誠だけは揺るがない。

王への忠誠は、感情やその他全ての事とは別の絶対たるものだからだ。

王に仇なす相手には死を。

王を侮辱した相手には死を。

明燐の視線が冷たさだけでなく、明確なる殺意を纏う。

それに果豎が気づき、服の裾を掴む——とほぼ同時にそれは響いた。

「王を侮辱した事は一度もありません」

蓮璋の言葉に明燐の視線が更に鋭くなる。

「でも、相手が悪すぎる」

「明燐、落ち着いて！」

スツと懷に手を入れた明燐の腕を果豎は押え付けた。

「蓮璋、相手というのは」

「もちろん王ではありませんよ。オレ達から全てを奪った相手の方です」

「全てを奪った……相手？」

「……ええ。その相手から奪い返す為に、王に申し立てを行いたい。でも、それには相手から死に物狂いの抵抗が来るだろうから、その邪魔をどうにかしなければならぬ」

蓮璋は疲れた笑みを浮かべた。

「王は、話を聞いてくれるでしょう。それは分かります。でも、その邪魔によつては話をするどころか全ての罪をあいっくに負わせられかねない。だから……だから、王妃様が必要だった。相手の邪魔が入るうとも、どんな事が起きようとも、王妃様という切り札があればきつと王は話を聞いてくれる」

例え言い噂が無い王妃だろうとも、王妃は王妃。

しかも、その存在はすぐ隣の州に居るのだ。

どんなに頑張っても届かない——いや、可能性の低い王宮に向か

うよりも、断然にすぐ掴めそうな場所に。

しかも向こうからもっと近くまで来てくれた。

だから――。

「王妃様に来て貰いました」

しっかりと果豎を見据える蓮璋を見つめながら、明燐は静かに告げた。

「王は――民達の声を聞く為に、王都だけでなく各州に意見箱を設置し、実際に話し会う場を頻繁に設けております。例えば身分や地位がどうだろうと、関係なく耳を傾けて下さるでしょう。例えば、どんな妨害があるうとも」

蓮璋が明燐へと視線を向けた。

「それでも、王妃という切り札が必要なのですか？」

「……ええ、必要です」

強い眼差し。

けれど、その笑みは何処までも哀しく悲哀に満ちていた。

「あいつの妨害を思えば……いや、今までして来た事を思えば、切り札などこれでも足りないぐらいなんですよ」

「どういう事でしょう？」

「強欲で権力欲が強く冷酷非道。自分の欲望を叶える為にはどんな事だってするし、誰を殺そうと構わない。自分の財を増やす為には、新たな鉱石の存在をも国から隠し、散々酷使した民達すら使い捨てにし、証拠隠滅の為に文字通り葬る極悪領主」

「え？」

「この隠れ里に居る者達は、そうやって葬られた者達なんですよ」

「れ、蓮璋？」

王妃の視線を受けた蓮璋が大きく息を吐いた。

「存在の抹消――文字通り、葬られた」

と、蓮璋が天井を仰ぎ見る。

細められた美しい瞳の縁に、果豎は透明な滴が盛り上がったように見えた。

「ここは——死者の村」

死者の村？

「人間界では……ネクロポリスという言葉が相応しいでしょうかね。死者の都——ああ、でもそこまでの数は生き残っていませんから……やはり、村ですか」

果豎が目を見開き、明燐は静かに聞き入り、老師はクツと齒を食いしばり顔を背けた。

「正確には、世間から死んだとされた者達が作り上げた村こそが、この隠れ里なんですよ。オレも、オレと一緒に馬車を襲った仲間達も、此処に住まう皆も全員が世間からその存在を抹消された——いえ、違いますね」

そう言くと、蓮璋は苦々しげに笑った。

「生きたまま葬られ、必死に生き延びたにもかかわらず死んだ事にしなければならなかった哀れな存在——それがオレ達です」

それは二十数年前に遡ります、と蓮璋が消え入る声で告げた。

第二十二話 資格

「今から二十数年前の事です。この鷲州にて新しい鉱石が発見されました」

「新しい鉱石？」

明燐の確認する様な問いかけに蓮璋は頷いた。

別に新しい鉱石がこの国で見付かるのは不思議な事ではない。

なにせこの風国の大地には、鉱業を国の主産業として発展するほど膨大な鉱石を含んでいるのだから。

そもそも鉱業というものは、そこに鉱石があれば何処でも起こせるものではない。

まず最初に鉱山がある鉱石を捜す鉱体の試掘は常識だが、その後は見付かった鉱山の潜在的利益を分析し、必要な素材を抽出する作業に移る。

つまり、鉱石に有用鉱物が十分な密度で含まれているか、また掘り起こす予定の鉱山に十分な埋蔵量があるかどうか、経済的な資源採掘に値する鉱山か否かを判断する上で重要である。

簡単に言えば、一千億円分の金の埋蔵量があるからといって、掘り出す費用が二千億円なんて事になれば十分な利益が得られるどころか鉱山自体が運営できないからだ。

また鉱石を始め資源の大半は有限であり、どれだけ量の多い鉱石だっっていつかは枯渇し、最後には閉山される。

当然働き手達は仕事を失い、鉱山の規模によつては数千人規模、その家族にまで影響が出る。

すぐに別の鉱山に仕事を受けられれば良いが、それが遠方の地であれば移動費がかかり、転職するとしても一苦労だ。

その為、風国では閉山となった鉱山の土地を再利用して新たな産業を起こし、そこで働いていた者達を再雇用する事でその危機を乗り越えていた。

ただ、今の所、閉山となるほど鉱石を掘り出された山は少ない為、別鉱山の働き手として回せば良いという反対意見も出ているのも確かだ。

それほど、鉱石の埋蔵量が膨大なのである。

それに、もし鉱石が枯渇しても、風国の所有する海底には海底油田、メタンハイドレート、天然ガスなど幾つものエネルギー資源が数千年規模で存在している事が調査で判明している。

明燐は蓮璋の顔をじっくりと見た。

「どうやら、その新しい鉱石は中々に貴重なもののようにすわね」
何度も言うが、風国では新しい鉱石など頻繁に発掘している。

ただ、問題はそれが利益になるほどの量があつて掘り出されるかどうかだ。

だが、蓮璋の顔色を見ると中々に複雑なものを噛みしめていた。

「……ええ、貴重ですよ。それこそ、現在風国の特産品である『海耀石』を凌駕する程に」

「か、海耀石を?!」

果豎が驚愕の声を上げた。

『海耀石』——それは、風国で発掘される鉱石の約九割を占める重要な資源である。

というのも、この天界十三世界にての需要は風国で発掘される量の数百倍とされているからだ。

それはこの「世界の不安定さ」が大きく関わっていた。

そもそもこの炎水界を含む天界十三世界は、神々の世界でありながら、神力の使用を制限しなければあつという間に世界がバランスを崩して崩壊するほどの不安定さを内包している。

例外は、宝玉の欠片という【乗り物】や【電化製品】の類に使われている小さな欠片の使用ぐらいで、それ以外の神としての力、またそれに準じる力を全て使用制限する事で世界は維持してきた。

そんな中で、公然と神力使用が許されているのは、天帝夫妻に十二王家と特殊五家。

そして各国の王と上層部だけであり、それも世界を支える為にだけ許される。

いや、逆に言えば世界を支える為に、各国の王と上層部は「王」と「上層部」になり得ているのである。

元々、この世界以前から神々の世界として存在していた天界。

その世界が暗黒大戦にて七割方が消滅した事により、暗黒大戦を制した現天帝夫妻と、十二王家、特殊五家によって再創造され、そうして出来たのが天界十三世界だ。

しかし新しい世界には、暗黒大戦の影響にて滅んだ他の世界の者達も一時的に避難させる事となり、以前の天界とは比べものにならないほど広大な世界の構築が必要となった。

天界十三世界に逃げてきたのは、他の世界の神々を始め、人間、魔族、精霊、仙人、獣、その他沢山の種族が居た。

だが、神々の世界は、所詮は神々にとつての世界。

他の世界の者達が住まうには神気が強すぎた。

それは、魔界に人間が長く住めば発狂するように、多種族の精神を蝕み体をボロボロにしていくな。

その為、現天帝達は相談し合い、幾つもの箱庭という仮世界を造った。

人間界に良く似せた世界、魔界に良く似せた世界と、それぞれの種族達の元居た仮世界を造り出し、そこに保護した者達をそれぞれ逃がしたのである。

だが、その仮世界は現天帝達の力によって維持されており、力が注がなければあっという間に崩壊する。

よって、天界十三世界以外にも力を注ぎ始めた現天帝達。

そこで力が分散されてしまったのも、天界十三世界の脆さの原因だったのかもしれない。

そもそも、天界十三世界は余りにも広すぎた。

にも関わらず、酷く脆く、小さな神力一つ使用しただけで空間に影響しては崩壊を起こすほどの不安定さを孕んでいる。

それを防ぐには、少しでも世界を縮小した方が良いのだが、それは出来なかったのだ。

というのも、箱庭が完璧ではなかったからだ。

所詮は仮初めの箱庭。

ちよつとしたバランスで崩れるほどの不安定な世界である。

もしそこが壊れたら、そこに住まう者達は当然別の世界に逃げなければ共に消滅してしまうだろう。

しかし別の世界は今の所天界十三世界しか存在しておらず、結果その世界に保護するしか無い。

そこで世界を縮小してしまえば、全員を保護する事など到底無理だ。

その為、天界十三世界は現在のまま維持され、未だに不安定さも解消されないままとなっていた。

現天帝達だけでは、手に余るほどに。

というのも、現天帝達は世界全体を外側から支えている状態な為、細かい部分には十分には手が回らないのだ。

世界が再創造されて間もない頃には、細かい部分での崩壊が連続して起きる始末。

当然これを解消する為に、現天帝達は新たな人手を求めたのは当然の流れだろう。

それが、王と上層部だ。

王と上層部と呼ばれているが、元々は世界を支える柱として選ばれた彼らは、現天帝達によって世界を支えるだけの力があると認められた者達である。

しかしその力は現天帝達には遠く及ばない。

だがないよりマシとされ、それぞれが支えられるだけの土地を渡され、それが各国の領土となった。

つまり支えられる力が多ければ多いほど国の領土は大きくなり、小さければ領土も小さくなる。

例外として、狭い土地でも不安定で歪みが大きい場合は、王や上

層部の力が強くても領地は小さくなるが、そういう場合は重要な要所として現在では認識され敬われている。

と同時に、民達も国の領地を考慮して振り分けられた。

王と上層部に求められたのは、割り振られた土地分の空間維持が最も重要だが、民達が安心して暮らせる国を造る事も同時に求められた。

いわば、その二つこそが王と上層部の義務と言ってもいい。

特に焼け出された民達は財産も殆どを失い、衣食住の保証すらなかった。

そんな彼らを守る為に、そして彼らが住まう領地を、ひいては世界の安定を守る為に各国の王と上層部は存在している。

王と上層部の本来の仕事は世界安定の為に柱として力を注ぐこと。しかし、その役割と民達の為に働く——その姿勢に敬意を表して王、そして上層部と呼ばれる事となったのだ。

だから大戦前の様な権力に胡座をかくのではなく、大半は空間維持の為に働いている。

だが、当然王や上層部にも能力差があり、その能力差によっては風国のようにある程度安定した国もあれば、まだまだ不安定な国もある。

それに国の繁栄にも関わってくる。

特に王となる存在の力が強く、支える空間が安定していれば、それだけ国民達は安心して国の繁栄の為に働けるし、同じく空間を支えている上層部の負担も減って政治に力を注げる。

しかしその逆となれば、国力は弱いままである。

また各国が自分達の国で精一杯な為、手助けする事もまだまだ難しい。

言い換えれば、国の繁栄どころか衣食住の提供すらままならなくなるのだ。

酷い場所では国が崩壊し、民達も共に消滅するなど、悲惨な例も幾つもあった。

逃げようにも逃げられず、逃がすだけの時間も無いままあつという間に死に絶えていく。

また逃げ出しても、各国に保護するだけの余裕がなければ流浪の民となる。

つまり、どれだけ空間を安定出来るかにかかっているといってもいい。

だが、幾ら神力を制限しようとも、完全に影響を断つ事は不可能だった。

それは神力を自分から使うというわけではない。

誰もが神力を使用した際のデメリットの高さを十分ほど知っているおり、本能的に忌避する傾向が強い。

だが無意識に、力が強すぎる事で抑えきれない分の神力が漏れ出る神や、暴走して力を暴発させてしまう神々まではどうにもならなかった。

場合によっては、その神力に影響し他の神まで神力を漏らすという負の連鎖が起きる場合もある。

そうなれば、王と上層部はそちらの対処に追われて余計に国の発展は遠のいていく。

だが、それはある時劇的に解消された。

風国で『海耀石』が発見されたからだ。

第二十三話 『海耀石』と傷

『海耀石』はただの宝玉ではない。

確かに見た目は何処にでもある様な蒼い透明な石だ。

しかしそこに宿る力は、神力に問わず、強い力を押え付ける恐るべきものだった。

つまり、神力の制御を可能とする。

通常であれば神力は神々本人が意識して制御するが、例外として子供や生来強い力を持つ存在、また何かのきっかけに感情を暴走させてしまう事で放出されてしまう事がある。

これらは本人ですらどうにも出来ない「どうしようもない事」として今までは諦められていた。

だがそれすらも、この宝玉を身につける事で制御してくれるのだ。遙か昔はその地形すら変え、あらゆる天災をも制御し世界を支えた神々の偉大なる力は、今の不安定な天界十三世界では、滅びと消滅を誘発するものでしかない。

その為、本人では漏れる力をどうにも出来なかった神々を始め、少しでも世界を支える者達の負担を減らす道具として、世界各地で『海耀石』が求められたのは当然の流れだった。

しかもこの宝玉は、【乗り物】や【電化製品】の広い普及にも大いに貢献した。

というのも、天帝や十二王家の技術と共にこの宝玉の力によって、【乗り物】や【電化製品】に使われる宝玉の欠片の力がいつそう安定した事、また緊急時の際に緊急停止する装置として組み込むことで安全性に優れるようになったからである。

力を押え付ける石——すなわち、規定以上の力が出た時にこの宝玉はその効果を発揮し、暴走する力を押留めてくれるのである。

だから、『海耀石』^{かいようせき}は『荒れ狂う洋を抑え支える石——支洋石』^{かいようせき}とも呼ばれ、供給量よりも遙かに大量の需要によりその価値は爆発

的に値上がりした。

そして風国は、炎水界における『海耀石』の約九割を産出する国として、市場の独占および経済の頂点に君臨するようになったのだ。

だが——風国が経済の頂点に立てたのは、それだけが理由ではない。

そもそもこの宝玉は、未加工のままでは効果は半減してしまい、特殊な技術によって加工しなければその奇跡の力を十分には発揮出来ない。

つまり、宝玉だけでなく、加工技術という二つが必要でありどちらか一方だけではその価値も半分になるのは必死である。

ゆえに、ただ産出しているだけでは、加工技術を持つ国々によって安く買いたたかれる恐れがある。

しかし、風国は違った。

独自に最も効果的に力を発揮する特殊な加工技術の開発に成功したのである。

また必要な資金源も確保され、人材もいる。

そうして風国は、他国の手を必要としない、原料の生産から製品まで一手に引き受ける巨大な生産工場となった。

風国がこの炎水界でも一、二を争う大国で有り得るのは、そうして得た利益を仲介業者にとられる事なく全て自分の懐に収められる為と言ってもいい。

と同時に、全てを風国で十分にまかなえる——そう、逆に言えば風国にそっぽを向かれてしまえば他の国々は非常に困った事態になるのだ。

因みに他の国々でも加工技術の開発には力は注がれたが、風国に優るどころか同程度の加工技術の開発にも達することは出来なかった。

それが、風国が大国として数多の国々の上に君臨出来た真相の一つであると同時に、食糧自給率が低くても周辺国から食料を輸入を

打ち切られず、凧国が破竹の勢いで繁栄と発展し続けてる事が出来るのは、この為と言われている。

また食料輸入を盾にとればいいのではないかという案も出るかもしれないが、万が一それを行えば、凧国は当然『海耀石』の生産を停止する。

そしてそれが停止すれば、神々の力を制御する制御装置はおろか、【乗り物】や【電化製品】の製造すら停まってしまう。

そしてその中には、食料作りに必要な農機具もあれば、魚を捕る為の【船】も存在する。

だが、それらは『海耀石』によって造られた緊急停止装置が組み込まれているからこそ使用出来るのであって、当然凧国が生産を止めれば緊急停止装置も足りず、結果食料作りも大幅に減少し、自国の分すらまかなえば自滅する。

つまり、どうあっても凧国に食料輸入し続けなければならないのである。

とはいえ、全ての国が敵に回ったり、長期的に食料輸入が停まれば凧国側も受ける被害は大きいだろうが、そこは王と上層部の手腕そんな事が起きないように外交を進め、それこそ自分達の思い通りに事が進むように会議を操る。

そうして他国の外交官達は誘導された事すら気づかずに、凧国の思惑に嵌まるのである。

ただそれを除いても、各国からすれば凧国は無茶な注文は付けないし、その事を盾にとって何かする事もない。

また緊急事態の時にはさりげなく便宜を図ってくれるし、協力もしてくれる。

牙を剥いて楯突いたり、自分達から無茶な注文さえしなければ、これほど頼りになる国はないという認識が強く、多くの国々は凧国対して非常に友好的である。

ただ、それでも凧国に刃向かおうとする国々は幾つかあるが。だが果敢からすればそれが当然なのだ。

むしろ全ての国が何の疑問も思わず虬国に依存したらどうなるか。既に虬国への依存は強く、虬国と同盟を組む大国——津国ですらその傾向を見せている。

しかしもし虬国が倒れた場合はどうなるだろうか。

一緒に共倒れである。

そればかりか、もし虬国がおかしな要求を突きつけ始めたら？

永遠に変わらぬものなどない。

永遠に、良いままであるものなどない。

決して滅びないとされた、永遠のまほろばたる『天界』さえ滅びかけたのだ。

だから一つの国が資源の独占をする事の危険性に果豎は危機感を抱いているが、それには新しい『海耀石』の代わりになるものが必要である。

近年になってようやく『海耀石』の代わりになるものの新しい鉱石探しに周辺国は力を入れ始めてはいるが、それには長い時間がかかるだろう。

また代わりが見付かったとしても、虬国も馬鹿ではない。

きつと『海耀石』に変わる別のものにて、その頂点を維持し続けるだろう。

抜け目が無いから——王と上層部は。

と、そんな虬国を強大国にのし上げた『海耀石』。

それすらも超える石の存在が虬国で見付かったとなれば、世界の勢力図は更に変わらなくなる。

いや、その前にそんな石が見付かったとなればある程度の騒ぎになるだろう。

特に、この鶯州の隣にある瑠夏州ならすぐに噂が聞こえてくるはず。

なのに、果豎は聞いた事などなかった——一度も。

それは明らかにおかしい状況だった。

それこそ、故意に隠してもしない限りは——。

『自分の財を増やす為には、新たな鉱石の存在をも国から隠し』
先程の蓮璋の言葉が蘇る。

新たな鉱石を……国から隠した？

「王妃様の思われている通りですよ」

蓮璋の声に果堅はハツとして哀しげに微笑む青年を見た。

「蓮璋……」

「そう——なまじ、『海耀石』を遙かに凌駕する力をその石が持つていたばかりに、その悲劇は——」

蓮璋は拳を握りしめる。

「いえ、違いますね。その石はただのきっかけに過ぎなかった。深々と燃えたぎる怒りと激しい屈辱を募らせ、それらを憎悪と殺意に変え続けていたあいつが、暴走するきっかけが……たまたま、あの石の発見でした」

驚く果堅達を見つめながら蓮璋は思い出す。

この話を語るには、あいつとの思い出も語る事になる。

それは、蓮璋がスタボロにされた心と共に鉄製の箱に投げ込み隠したものだった。

その相手とは、昔からの付き合いだった友だった。

かたや、名領主と謳われた父を持つ息子のあいつ。

かたや、その領主に仕える貴族の息子の自分。

幼い頃から共に学び、共に遊び、いつか自分は身分を超えた友人に仕えこの領地を更に発展させていく。

『見ろ、蓮璋！ この広がる世界を！ これが俺達の住む故郷。そして俺達が治めていく領地なんだ——』

偉大なる父に憧れ、いつか自分がこの地の領主として支えていく。それを夢見てキラキラと瞳を輝かせる友を、蓮璋は心強く思っていた。

何が悪かったのだろう。

何処までも真っ直ぐだった心は見る影も無く折れ、清かった心はグズグズに腐り果て、友は堕ちていった。

『俺は、昔からお前の事が大嫌いだったんだよ!』

にやけた笑み。

のしかかる重み。

顔にかかる生温かい息と体を這いずり回る手。

服をはぎ取られ、沢山の手に押え付けられながら、その後に与えられた痛みは――。

『お前は一生俺の下でイヤらしく鳴き続ける奴隷なんだよ!!』

太股の内側に、ジユウウと肉を焼く音と激痛が蘇る。

!!!!!!!!!!

「蓮璋!」

「っ!」

ハッと我に返った時、蓮璋は自分の両肩を掴む必死な形相の老師と向かい合っていた。

また自分が床の上に尻餅をついている事にも気づく。

茫然と立ち尽くす王妃とそれを守るうとする明燐が自分を訝しげに見下ろしているのが分かった。

「え……お、オレ、は」

「突然ひっくり返って叫びだしたのだぞ?! 一体どうしたのじゃっ」

「……オレ」

呟きながら無意識に持ち上げた手を見れば、ガタガタと震えている。

これは……あいつの事を思い出したからだろうか。

蓮璋は自分の震える手を反対の手で押え付けた。

今からこれでどうするんだ。

王妃様に全ての事情を説明するには、あいつとの事も話さなければならぬ。

それどころか、最終的にはあいつと対決する予定なのだ。

なのに思い出ただけでこのざま。

もう大丈夫だと思っていたというのに――。

二十年以上だ。

二十年以上もの時が経っている。

たとえ数千年を軽く生きる神々にとっては二十年などあつという間だとしても。

それに、計画を立てた時は大丈夫だったではないか。

あいつと対決すると決めた時、自分は平気だった。

だから大丈夫だと思った、克服出来たと思った。

だが、体に及ぶ震えは、蓮璋の心の傷が癒えていない事を如実に表わしている。

「……蓮璋、まさかあの時の」

事情を知る老師の言葉に蓮璋がカツと目を見開いた。

「——っ！」

引きつる喉。

声にならない叫び。

極限まで見開かれる瞳がグルリと動く。

鎖でがんじがらめにして奥底に沈めた禁忌の箱がガタガタと音を立てる。

まだ、大丈夫だ。

まだ、箱さえ開かなければ。

しかし、強固な鎖の抵抗すらものともしない強い力で箱が少しずつ開かれ、そこから漏れ出した黒いものが蓮璋へと忍び寄る。

その、忌むべき記憶を鮮明に呼び起こすべく触手を伸ばし、ついに蓮璋の脳裏に悪夢としか言いようのない光景が――。

「しっかりしなさい！」

鋭く飛んだ叱責。

頬に浴びた強い衝撃。

それは蓮璋を飛ばすと共に、同時に蘇りかけていた悪夢すら吹っ飛ばした。

「め、明燐、殿」

茫然と明燐の名を呼ぶ老師。

だが、それ以上に蓮璋は尻餅をついたまま茫然と明燐を見た。

輝く美貌が自分を見下ろし、ゆっくりと濡れた薔薇の唇が妖艶に動いていく。

「――我に返ったようですね」

美しい玉響の如き声音が蓮璋の耳に優しく木霊した。

「明燐、なんて事を！」

焦る果豎に明燐は淡々と告げる。

「ただのショック療法ですわ」

「しょっ――」

にしては、力一杯殴った気がするが。

蓮璋の吹っ飛ぶ姿を目の当たりにした果豎は責める様に明燐を見つめるが、友人はさりとその視線を無視した。

「それに、蓮璋が落ち着いたのだから結果オーライですわよ」

明燐の開き直った態度に果豎はガクリと項垂れた。

どうして明燐はこうなのか。

まあ――鞭とか出して殴らなかった分良かったのかもしれないが、明燐が蓮璋の元にしゃがみ込む。

「それで、パニックは落ち着きました？」

「……あ」

パニック？

明燐は、自分の状態をパニックと言ったのか。

という事は――。

「心の傷は誰にでもあるもの。大切なのは、それと上手く共存する事ですわよ」

「――っ」

目を見開く蓮璋に明燐は微かに微笑むと、優雅に立ち上がった。

一方、蓮璋は茫然としたままだった。

明燐は気づいている。

これが、蓮璋の負った傷によるものだと。

詳しい内容は知らずとも、傷だと気づいた上で彼女は何も言わず

に手を下したのだ。

蓮璋はぼんやりと明燐を見上げた。

「早く立ちなさい」

聞きようによっては冷たい言葉。

でも、蓮璋は向けられた視線の中に入り交じるそれに気づき、ゆつくりと立ち上がった。

「さあ、説明の続きをお願いしますわ」

明燐は何も言わない。

言わないが、それとない仕草に出ている。

蓮璋の傷に気づきながらも、そのプライドを傷付けぬように立ち振る舞う姿。

哀れだと慰めるのでもなく、なんて事をと不憫に思うのでもなく、乗り越えろと叱責するわけでもなく、可哀想と同情するのでもなく、ただあるがままに受け入れた。

そう——蓮璋が欲しかったものを、明燐はあっさりと行ってくれた。

心の傷を持ったままの自分を責めるのでも哀れむのでもなく、そのままの蓮璋を普通に扱ってくれた。

自分の事を知った者達が哀れみ同情の眼差しを向ける中で、ただ一人——。

蓮璋の中で育ちゆく恋心が、その時ぶわりと、本人にも嘘のつきようがない大輪の花を咲かせた。

「——明燐、ありがとう」

蓮璋の笑みに明燐が首を傾げた。

「あら？ 私が何かしました？」

「蓮璋、殴られた場所大丈夫？」

王妃の心配に笑みを返すと、蓮璋はスツと表情を改めた。

「ええ、大丈夫です。すいません、話を続けましょう」

もう、蓮璋の指先は震えてはいなかった。

第二十四話 共存

心の傷と共存する――。

そう言った明燐だが、それが酷く難しい事は分かっていた。

そもそも明燐が蓮璋の傷に気づいたのは、兄という経験が身近にあったからだ。

明燐の兄――風国の若く美しい名宰相閣下。

王の懐刀としての功績は輝かしく、誰もが憧れる存在だ。

しかし、大戦中に王と出会ったまでの神生は、日の当たる所どころか最低の一言だった。

父の身代わりとして、実の母に性的虐待を受け続けた兄に手を引かれ、荒れた夜道を逃げた時の事は今でも覚えている。

夫を殺し、明燐の母を殺し、自分の息子を夫の身代わりとして犯し続けていたあの女。

明燐の母の婚約者だった父を奪い無理矢理自分の夫としたばかりか、憎い女を殺そうとした鬼女。

そればかりか、領民達を拷問にかけ次々と殺す狂った女に、父は産まれた息子の兄を連れて明燐の母と逃げた。

だが、明燐が三歳になる頃――父を見つけ出したあの鬼女は父と母を殺し、息子と明燐を拉致監禁した。

明燐は憎い女の代わりに痛めつける相手であり、兄に言う事を聞かせる為の駒だった。

そんな母を兄が殺したのは、連れ戻されてから十年目の事。

妹に酷い虐待を与え続けていた実母が、その日に限って興奮が収まらず勢い余って明燐を殺そうとした。

そんな実母に耐えきれなくなった兄は、実の母を手にかけた。

兄にとっての母は、既に明燐の母だったからだ。

兄は明燐を連れて外の世界へと逃げた。

しかし、世間は幼い兄妹が暮していけるほど甘い世界ではなく、

特に美しい者達は直ぐに拉致され奴隷売買されるか、権力のある者達の愛妾や玩具とされるのが世間の常識。

明燐達にもすぐにその魔手は及んだが、兄が全て身代わりになって貴族達の妾として弄ばれる日々が続いた。

兄はその事をひたすら隠していたが、そんな兄を囲う何番目かの貴族によって、明燐は想像を絶する兄への無体を隠れて見させられた。

だが、その事は決して言わなかった。

誰が言えるだろう——美しく誰よりも誇り高い兄は、その誇りと妹を守りたいという思いだけで地獄の日々を生抜いていた。

細い糸上を歩く様に危なかしげで、ちよつと突いただけで壊れそうな程の心を壊しかねない。

明燐は何も言わずに兄を守ろうとした。

学問は兄に教えられたが、武術や力の使い方は全て独力で学んだ。いつか兄を守る——そう願ひ死ぬ気で努力した明燐だが、それが叶う事は最後までなかった。

明燐すら知らない間に武術や力の使い方を学んだ兄は、ある日自分を囲っていた貴族達を皆殺しにしたからだ。

兄は多くの貴族達に売り買いされた。

兄の美貌に目が眩み、手にするべく当時の主を殺して奪う者達が多かったからだ。

そうして何番目に兄を囲った者か。

それが明燐に手を出そうとし、それを知った兄はその貴族を殺したのだ。

兄は強かった。

噴出した憎悪と殺意が、兄が生来持っていた強大な潜在能力を開花させた。

兄と明燐を虐げた屋敷の者達全てが死に絶え、その牙が全く関係のない者達にまで及びかけた時——後のこの国の王に出会ったのだ。
『来たければ来なさい』

その強さと美しさに兄妹揃って魅入られ、従軍し側に仕え——その器と魅力に酔いしれた。

この方の側こそが自分達の生きる場所。

そうして生き急ぐように戦い続けた日々。

でも、明燐の最大の願いである兄の心を癒す事は出来なかった。

『大丈夫、大丈夫だよ、俺のお姫様。俺がお前を守るからね』

たった二人の兄妹だった。

兄は明燐を守ってくれた。

心に幾つもの傷を抱え、更に深まっていくのも構わずに。

明燐は悩んだ。

どうすればいいのかと嘆いた。

ようやく自由を得て、仕えるべき主を得たのに、兄の心の傷は癒されぬまま。

このままでは兄を失ってしまう。

けれど、兄の誇り高さが手を差し伸ばす機会を全て消し去る。

そんな時だった。

『この子は果豎と言います』

ガリガリにやせ細った体の中に、強い輝きを宿す少女。

全てを失ったにも関わらず、明燐達に笑いかけた希有な存在。

そうして果豎は——。

『だって、誰だって大好きな人の為に何かしたいと思うのは当然じゃない！ 明燐が大好きなお兄ちゃんを守りたいと思う事の何が悪いのよ！！』

驚く兄の横つ面を張り倒した果豎。

三日三晩の拳での語り合いの末に、兄が食らったその一撃に込められた思い。

『心の傷が簡単に治るわけじゃない。だから、無理して何かする必要はないよ。でも、普通に生きているだけで色々と経験して強くなる。だから、いつか自然と乗り越えられる力を得たら、勝手に乗り越えてるよ、明睡もね』

何も出来ないと言きじやくる明燐の頭をそう言つて撫でた果豎。それを聞いて更に泣き出す明燐を果豎は黙つて抱き締めてくれた。温かい手。

優しい眼差し。

いつも明燐が果豎を面倒見ていると思われるが、それは最初の頃だけ。

本当はとつくの昔に立場は逆転した。

『大丈夫だよ、何とかなるから』

その言葉が、明燐自身にも共存の道を歩ませた。

何とかなる。

何とかなる。

いつか、生きていれば——必死に生きていけば、自然と乗り越えるだけの力も、時間も気づかぬうちに得ている。

だから——明燐は決めた。

心の傷なんて生きていけば幾つもつく。

傷つかないなんて事はない。

だからこそ、乗り越えられる力が来るまで、それは持ったままにいるしかない。

ならば、共存した方が良い。

無理に乗り越えようとして、よりいつそう傷つくぐらいなら。

そうしていつか乗り越えられる日が来たら、乗り越えればいい。

蓮璋がパニックに陥った時、明燐は蓮璋に兄の姿がダブって見え

た。

このままでは壊れる。

兄の時に感じた恐怖が明燐を支配し、気づけば体が動いていた。兄の時はただパニックになった兄に気づかれず物陰から見守るしかなかった。

触れたくても触れられない、側に居たくても居られない苦痛が身を焦がす中、ただ見ているだけしか出来なかった。

抱き締めたい、優しい言葉をかけたい。

でも、兄が求めている事はそんなものではなかった。

逆にそれが兄を、誇り高い兄を追い詰める。

しかし明燐はそれ以外の術を知らなかった。

それは明燐の心の傷となつて残り、その後も彼女を苦しめ続けた。

どうすればいい。

どうすればいい。

答えは出ない。

でも、蓮璋がパニックになつた時、兄と姿がダブつた時、明燐の体は勝手に動き、頭にその言葉がよぎつた。

『心の傷と共存——』

蓮璋が求めているのは、慰めでも哀れみでも叱責でもない。

だから、それらは与えない。

蓮璋は苦しんでいる。

逃げ場のない蟻地獄で身動きの取れないまま藻掻いている。

必要なのは——。

気づけば手で頬を打っていた。

すると、パニックは収まつたが、いまだ光を失つたままの瞳がぼんやりと自分を見つめた。

まだ駄目だ。

まだ、戻つて来てない。

明燐の目にもまだ蓮璋と兄が重なっていた。

だから——あの時、兄に言えなかった言葉を言った。

自分の代わりに果豎が言ってくれた言葉。

本来なら、誰よりも側に居た自分が言うべき言葉を——。

『心の傷は誰にでもあるもの。大切なのは、それと上手く共存する事ですわよ』

兄に——いや、蓮璋の心に届くように告げた。

そうして光の戻つた瞳にようやくホッと息を吐いた。

と同時に、兄の姿は消えて蓮璋だけがそこに残つた。

良かった……助けられた……柄にも無く思つた時、明燐は見てし

まった。

『明燐、ありがとう』

そう言った時の笑顔を。

安堵する中に、本当に嬉しそうな笑みを。

それを見た瞬間、明燐は良かったと思った。

・

蓮璋を助けられて良かった——と。

それは、明燐が助けられなかった兄の身代わりとして蓮璋を助けたのではなく、蓮璋自身を助けようと思ったという真実を明燐に気づかせた。

有り得ない。

こんな事。

助けたくても助けられなかった兄の分まで、兄の身代わりにという思いだけだった筈。

自分が助けたかったのは兄だった筈。

でも、それだけではなかったのだと、明燐は否応なしに気づいてしまった。

別に蓮璋を助けたいと思ってても良いでは無いか。

自分達を攫った相手ではあるが、果豎の恩人でもあり、こうして色々と気を配ってくれた相手だ。

なのに、なのにどうしてホッとするのだ。

蓮璋を助けられた自分を誇らしく思うのか。

明燐は自問自答しながら、最後まで出ない答えに頭を悩ませる。まるで意図せず気づいた恋に悩む少女のように。

それを、果豎が見ているとも知らずに。

第二十五話 二十数年前

蓮璋は滑らかな声で話し出した。

「今から二十数年前に見付かったその鉱石は、光の加減で虹色の輝きを放つ、見た目は水晶によく似ているものでした。だから最初は水晶だと思われたのです。しかし、たまたま領主館に居た採掘師の一人が、その鉱石を調査した事により、それは水晶でもなければ、今までこの国で発見された鉱石のどれとも違うものだとは判明したのです——詳しい事は、分かりませんが」

「詳しい事が分からない？」

明燐の指摘に蓮璋は頷いた。

「はい。全て、あいつが——いえ、領主が隠してしまいましたから」

「驚州領主ですわね」

「確か——二十年以上前に代替わりしたって聞いたけど」

因みに、二十年前に果豎が追放された時も驚州を通ったのだが、その時にはどこの州に追放されたか知られると追ってをかけられる恐れがあつた為、通った州の領主に許可を取るどころか居所も隠したまま通り抜けた。

その為、他の州同様に驚州の領主とも直接会う機会はなかった。

果豎の指摘に、蓮璋は哀しげな笑みを浮かべながら頷いた。

「はい、その通りです。鉱石発見の半年前に亡くなれてしまい……もし名君と名高い前領主様が生きておられたら、こんな事にはならなかった筈です」

悲痛に満ちた声を聞きながら、果豎は驚州の前領主を思い出す。

まだ王宮に居た時に、果豎は見たことがあつた。

夫への謁見だけで、訪れた驚州領主。

優しく穏やかな雰囲気を感じ、とても礼儀正しい方だった。

そういえば、その時息子を伴っていたのを覚えている。

確か一人息子だと言っていたから、きっと新しい領主はその息子

だろう。

だが父とは違う俗物だと上層部は吐き捨てていた。

確かに見た目は紳士的だが、慇懃無礼である事は果豎の目にも明らかで、たまたま王の側に王妃として立っていた自分に対して、その息子は恐ろしい台詞を吐き捨てたのだ。

『これからますます繁栄する現王の御代。その権勢は更に増すでしょう。ですがお体の弱い王妃様のご負担を考えればそれもどうかと臣下の一人として心配しております。常々言われますが、豪邸を支えるにはそれなりに沢山の柱が存在します。強大なものとなれば、やはりそれに見合っただけの支える存在が必要という事でしょね』

つまり言い換えれば

『王を支えるにはお前一人なんて役不足なんだよ。公式の場にも満足に顔を見せず、後の最大の義務である子供を産む事さえ出来ない石女のくせしてデカイ面するな。それよりもっと沢山の女達を後宮入りさせるように進言しやがれ』

と言っているようなものだった。

まあ全て本当の事だから、果豎は黙っていた。

そこで動揺すれば余計に付け上がらせるし、基本はにつこり笑って無視である。

それに向こうの言い分の方が断然正しいのも事実だった。

王の世継ぎというのは、絶対に必要だ。

確かに大戦以前と違い、王の存在意義の大部分は、国の為政者よりも国の領地の空間を安定させる為とされている。

その強い力は国の空間を支える為にも今後必要であり、その力の後継者たる王の血を引く子供は何としても必要とされていた。

それこそ、多ければ多いほどいい。

特に神々には子供は産まれにくい事も考慮すれば、一夫多妻制は理想的だし、妻が一人では一人産んでも次を産むまでに時間がかかるだろう。

もちろん、必ずしも力の強い子供が産まれるわけではないが、数打ちやそれだけ確率は高くなる。

その点からしても、一人の妃では負担が大きいというのは誰にだって分かる事実だ。

しかも風国の王は、炎水界はおろか天界十三世界においても希に見る強大な力の持ち主である。

その実力は、天帝達上層部を除けば、上から数えても百位には余裕で入るだろうし、五十位以内にもひっかかる筈だ。

よって跡継を切望する声は大きく、その点では子無しの果豎は、周囲の言うように役立たずと見なされても当然だった。

それだけではない。

公式の場に殆ど姿を見せないのは、王妃としていかなるものか。だが、王や上層部は果豎を公式の場に殆ど出さず、後宮に押し込める日々。

その事で何度かやり合う事もあったが、結局は聞き届けては貰えなかった。

といっても最初からではない。

建国して間もない頃はまだマシだった。

思えば、あの日から徐々に酷くなつた気がする。

朱詩の想い人を殺し、朱詩を拉致したあの国の事件。

そこでの騒動が終わって暫く経った頃から、少しずつおかしくなつていった。

「王妃様、どうかしましたか？」

「え？」

蓮璋が心配そうに見ている。

「あ、ごめんなさい。あの——ごめん、その、考え事してて聞いてませんでした」

「果豎……」

明燐の呆れた顔に果豎は素直に頭を下げた。

「いや、その、驚州の前領主様を思い出してて」

「前領主様をですか？」

驚いた声を上げる蓮璋に果豎は頷いた。

「うん。以前に一度だけお会いした事があるの」

その前領主は息子の暴言にいち早く気づき、その場で息子を叱責した。

激しく、厳しく怒る事で自分の怒りを表わした後に、王である果豎の夫に謝罪した。

貴族が公衆の面前で、しかも王やその側近達の前で叱られるなんて事は激しく屈辱的な事である。

つまりその屈辱を味わせたので、これで許して欲しいというパフオーマンスでもあっただろう。

しかし、その怒りが真実である事は誰が見ても一目瞭然であり、前領主に免じて王宮側はその場では溜飲を下げるしかなかった。

王の御前を辞した後、前領主は更に息子に激怒し反省を促すと共に、後日改めて王妃に謝罪を申し出てきた。

だがそこで再び息子の暴言。

二度目はないとして、明燐や宰相、他の側近達は怒り心頭で突っぱねるように言ったが、果豎としてはここで広い器を見せる事は今後とも驚州と上手くやっていく為にも必要であり、これは一つの恩として売れると周囲を説得した。

まあ——といっても、それは全て建前で、優しい瞳をした前領主の必死の謝罪を突っぱねる事が出来なかったのと、確かにその様に言われる事をしているのは自分だという負い目があったからだ。

もともと、果豎はそこその大根農家に嫁ぎ、大好きな大根に囲まれて暮すのが夢だった。

間違つても王妃になどなる気はなかった。

そんな思いが何処かにあったのかもしれない。

王妃は他人の税金で生かして貰っている存在であり、時には自分の心を曲げてでも国と民の為に生きなければならない。

その覚悟がないから、そう言われたのだ。

だから果豎は怒らない。

自分の不甲斐なさを反省しても、怒ったりする権利はないのだから。

「良い方だったのに、残念です」

「王妃様……」

蓮璋は感極まった様に声を震わした。

今は亡き前領主は、今も蓮璋にとって尊敬する存在である。

それを残念と惜しまれて喜ばないはずが無い。

「それで、その石が今までと違うものだと思ついたら後はどうしたんですか？」

「領主はその石が貴重なものと分かったと、軍を派遣して民達に石を掘り出させたのです」

領主は州軍という軍を持つ。

主に、領内の警備、国境の警備の任に当たり、数は多くて二万、少なくて千から二千。

州の広さや州力によって差があり、当然ながら統帥権は領主にある。

だが、普通に考えれば、たかが鉱石掘りに軍は投入しない。

「つまり、鉱石掘りの為の神員集めですか？」

果豎の問いかけに蓮璋は頷く。

「その通りです。領主は国に新たな鉱石の発見を告げずに隠し、全てを自分のものにしようとした。しかし、それには短時間で事を済ませなければなりません。バレル恐れが出ますからね」

「うんうん」

「また、全ての手をそこに投入すれば、今度は他の鉱山が一気に回らなくなる。そうすれば供給率も一気に下がり、どちらにしろ遅かれ早かれ事は露見する。だから、他の鉱山の人手はそのままにし、

その鉱石の発見された場所付近に住む村人、街の者達が強引に働かされました——女も子供も」

「で、でもそれだとバレませんか？　だってそこに新たな鉱山があると分かれば、全体的な供給率は必ず上がる筈ですし」

果豎の疑問に蓮璋は同意した。

「確かにその通りです。ですから、他の鉱石の産出量を減らし、その鉱山で掘られたように見せて数を調整しました」

「鉱石に限らず資源は有限。ずっと同じ供給量が続くわけではありませんからね。少しずつ操作して、その供給量を減らせれば出来なくもありませんわね」

「ええ。その為にも、他の鉱山から労働者を奪うわけにはいきませんでした」

「つて事は、詐欺罪も追加か。一種の帳簿操作ね」

果豎の淡々とした罪状把握に蓮璋は溜息をついて頷いた。

「労働力は限られた分しかない。だから、よりいつそう休む暇も寝る暇も与えず、まるで奴隷の様な仕打ちでしたよ、本当に。逆らえば殺される。厳しい監視の下、恐怖に支配されながら彼らはひたすら石を掘り続けました」

「反対する者は居なかったのですか？」

明燐から発せられた当然の言葉に、蓮璋は押し黙る。

「領主が暴走したとはいえ、州官達が止めれば何とかなったのではありません事？」

「……確かに、その通りです」

「明燐殿、蓮璋は」

「老師、オレから話します。ええ、止めました。でも——領主はその制止すら振り切った」

蓮璋は目を閉じた。

「オレの父を含めた前領主の側近達は、全て領主に殺されました」

明燐が驚愕に目を見開き、果豎は言葉を失った。

「殺された？」

「ええ。反逆者として——見せしめですね、一種の。そうして、残った者達は全て領主に組みする者達だけになった」

「だが、あの領主はそれだけでは止まらなかったのじゃ！ あの男が手にかけてしたのは、蓮璋の父達だけではない！ 蓮璋は他の家族も皆殺しにされたのじゃっ」

老師の叫ぶ様な言葉に、果豎が蓮璋を見つめた。

「……本当、なの？」

「……はい」

蓮璋は果豎と明燐を交互に見ると、ゆっくりと口を開いた。

「あの日、幾ら待っても帰ってこなかった父をオレと家族は待つていました。志を同じくする者達……領主の横暴を止めようとする者達と領主館に行って……本当はオレも行く筈でしたが……父はもしもの時の事を考えていたのかもしれない」

果豎は何も言わなかった。

何となく、分かったからだ。

「自分に何かあったら家族を頼むと言われました。でも、オレはそんな父の言いつけを破り、帰らない父を追いつけて領主館に向かい……そこで、父達の遺体を見つけました」

バラバラに切り刻まれた父達の遺体と、そこに凶器を持って立つ領主の姿。

「茫然とするオレはすぐに捕らえられ、そのまま……幽閉されました」

正直なところ、幽閉——なんて話ですむものではなかった。

確かに領主館に囚われたが、その後に受けた肉欲の拷問の数々は完全なる凌辱。

散々辱められ、太股に押し付けられた焼印は、奴隷の中でも性奴隷と言われるものだった。

「……幽閉されて三日目です、残りの家族が殺された事を知ったのは」

「……」

「母と妹弟達の首を……目の前に転がされました」

その直後から暫く記憶がなかったが、ようやくそれが母達だと認めた時には、既に半分ほど腐敗した状態だった。

「母と妹弟達は、父と一緒に殺された州官達の家族達と共に……一箇所に集められた先で自害したそうです……」

それでも幸いだっただのは、辱められる前に命を絶てた事だ。

女や子供、特に美しければ楽に死ねず殺す前に散々慰み者にされる場合がある。

「領主は悔しがっていましたよ。殺す事も出来ず、兵士達の慰みものとしても利用出来なかった事に。他の方達も同様に自害されたそうですから……だから、嫌がらせて首を切り落としたそうです。まあ——オレの家族の場合は見せる為にの部分が大きいでしょうが」

「酷い……」

無意識に呟いた明燐は愕然とした。

大戦中などそんな事はいくらでもあった。

惨殺される事も、慰みものになる事も、闇オークションで売られたり、奴隷売買もそれ以上の酷い事も沢山あった。

珍しい事ではない。

なのに、この震えるような怒りは一体何なのか。

「蓮璋は……ずっと幽閉されていたの？」

王妃の質問に蓮璋は頷いた。

「ええ。資源が枯渇するまで、逃げられないように閉じ込められてました」

資源が枯渇するまで、ひたすら凌辱され弄ばれていた——とは、言わずに蓮璋は微笑んだ。

「情けないですね」

ポロリと零れた言葉は心からのもの。

しかし、王妃は激しく首を横に振る。

「そんな事ないよ。蓮璋だけでも生きていてくれて良かったよ」

「王妃様」

「それに今ここにいてるって事は、最終的には何とか抜け出したんでしょう？」

「……どうして、そう思うんですか？」

蓮璋はさりとて言い切った王妃に問いかける。

「だって、蓮璋ぐらいの行動力があるなら、絶対に黙ったまま囚われているよりも知恵と力を振り絞って逃げ出す可能性が高いし」

「……そう、ですか」

「それに、一度はお父さんと一緒に領主の元に行こうとした。それだけ民達の事を考えて居るんだから、苦しめられている民達を見捨てたりはしないもの」

「王妃様……」

「今だってそう。家族を殺されて、沢山酷い目に遭わされても……それとなく、仲間の事を気遣ってる。料理長の事だってそう。料理長は悪くないって言ったよね？ 全て自分の責任だって。だから、私は蓮璋が諦めずに抜け出したって思うの」

「——ありがとうございます」

流れそうになる涙を必死に堪え、蓮璋は頭を下げた。

「けど、蓮璋のお父さんは州官だったんだね——って事は、結構偉い家」

「まあ、一応そうですね。貴族の爵位を持っていますが」

「では、場合によっては、その領主の代わりも務められますわね」
「へ？」

明燐の言葉に蓮璋は瞬きする。

「へ？ じゃありません。そんな横暴を行う領主をこのままにしてはおけません。地位の返上及び王都での正式な裁きのもと、厳重なる罰を下さなければなりません」

「明燐の言つとおりよ。領主だからって、民達に何をしても良いなんて事はない。民は領主の玩具じゃないのよ」

「明燐……王妃様」

茫然とする蓮璋に果豎は続けた。

「そもそも領主は民達を守る為に存在する。何かあった時には、王と戦ってでも民達の命を守り抜く、領地の最後の砦。それが率先して民を虐げ、殺す。そんな事が許されるわけじゃない」

激しく、きつい王妃の言葉が蓮璋の心を揺さぶる。

ああ、この方は、本当の意味での為政者だ。

もちろん口だけの者達も居るが、実際に王妃を目にしている蓮璋には全てが真実だと感じられる。

その言葉の一つ一つは、全て王妃の真実から出た言葉。

「果豎、少々熱くなりすぎですよ」

「あ、ごめん——その、蓮璋、先を続けて」

「はい。……反対派を全て粛正した領主により、もはや横暴を止める者は誰も居なくなりました。そうして鉾石はどんどん掘られていった……でも、どんな資源だって掘り続ければやがては枯渇する。」

しかも毎日毎日休みなく掘ったせいで、三年という余りにも短い年月で資源は枯渇しました……そしてそこから更なる地獄が始まったのです」

第二十六話 悲劇

あの地獄を思い出し、蓮璋は今も蘇る恐怖と怒りを必死に押し殺しながら先を続けた。

「資源の枯渇後、領主がした事は口止めでした。鉱石を知る者達を全て……鉱山で働いていた民達とその家族全てを廃坑となった鉱山へと押し込めその入り口を塞いだんです。石の秘密を知るもの達をこの世から消し去るために」

「なんて事を……」

「領主の館からオレが抜け出したのは丁度その時です。民達の事を知り、駆け付けた。けれど、兵士達の間を見て坑道に入っただけ後に、坑道の入り口は封鎖されました」

「どうしてそこで一緒に入るのです」

呆れる明燐に蓮璋は縮こまる。

「たぶん、その時のオレには正常な判断が出来なかったんですね……」

散々凌辱された体と頭。

使われた薬で意識が混濁しながらも、必死に民達の元へと向かった。

だが、明燐の言うとおり、中に入る必要はなかった。

外に居て、助け出す手段を講じれば良かった。

それをしなかったのは、何処かで共に死ぬ事を願っていたのかもしれない。

しかし、入り口を封鎖された闇の中で蓮璋は次第に冷静さを取り戻していった。

「たぶん、世間には鉱山での事故死という発表になったと思われるます」

蓮璋の言葉に、明燐はある記事を思い出した。

確かに、二十年前に鶯州にて大規模な坑道崩落事故があり、多く

の民達の命が失われたと、当時の新聞記事には書かれていた。

しかし二十年前か……。

明燐は余りにも間の悪すぎるタイミングに頭痛を覚える。

丁度その頃、王宮は果豎の冤罪を晴らすために走り回り、明燐と果豎も隣の州にしながら、瑠夏州で起きた反乱未遂事件に介入していた。

そう——つまり、最も王宮側の注意が各州から逸れていた時期なのだ——二十年前は。

王宮側にとつては最悪の冤罪事件は、鶯州領主にとつては最大の追い風となつてしまったのだ。

しかも最初から民達を始末する手筈となつていたならば、領主側もかなり綿密に事を進めていったのだろうが。

だが——明燐は心の中で吐き捨てた。

あの、馬鹿がそこまでの能力があるのか？と。

明燐にとつては、鶯州の現領主たる男は思い出ただけでも苦虫をかみつぶす思いである。

あの男は、明燐にとつて、いや兄にとつて最悪最低な事をしてくれた。

きつと兄にとつては、本気で殺したいほど憎い相手の一人に違いない。

というのも、あの男は明燐の兄の想い人——涼雪という侍女に大怪我をさせてくれたのだ。

あれは果豎を侮辱した息子を連れて、前領主が謝罪しに来た日の事だ。

謝罪後、あの男はとんでもない事態を引き起こした。

与えられた屈辱の八つ当たり相手として、たまたま近くを通りかかった下働きの女性を空き部屋に連れ込んで強姦しようとしたのだ。

その相手は、美琳。

明燐とは昔なじみの高官——朱詩の側近の妻だった。

美琳のあげた悲鳴にいち早く気づいた涼雪が、数人の侍女と共に

駆け付けた時には、のしかかられ服をはぎ取られる最中だったとか。しかし見付かったにもかかわらず、その馬鹿は涼雪達を追い払い事を続けようとした。

一人が助けを求めに走る中、涼雪はその馬鹿から美琳を助けるべく格闘し――。

『たかが侍女のくせに俺のやる事に口出しするな!!』

そう叫ばれ何度も突き飛ばされる中で、涼雪は領主を突き飛ばし美琳を助け出した。

だが、美琳を他の者達に任せて部屋の外に突きだした時だった。

獣の様な声が響き、振り向いた涼雪の額に、馬鹿が振り下ろした花瓶が当たったのだ。

いや、当たったなんていう言葉は生ぬるい。

涼雪の額を叩き割ったのだ。

その光景を、駆け付けた兄は見てしまった。

兄や朱詩はおるか、美琳の夫である玲珠に至っては、妻の事だけでも怒りに冷静さを飛ばしていたのに、その一撃で完全に切れた。

『うあああああつ!!』

『やめろ! 玲珠!』

絶叫したまま、刀を抜こうとした玲珠を朱詩が止めた。

遅れて駆け付けた明燐は、その時ほど冷静に事に対処する兄の後ろ姿が恐ろしいと思った事はなかった。

大怪我を負った涼雪は医務室へと送られ、美琳は朱詩に気絶させられた玲珠と共に早々に安全な場所へと手の者達に連れて行かれた。その後、その馬鹿に下ったのは十年の謹慎処分。

いわば、屋敷から十年間出るなというものだった。

本当は処刑してしまいたかったが、そこで有能な父親の方が、責任を取って死ぬと騒いだのだ。

やはり優秀な為政者とはいえ、結局は最後に息子の命をとったのだらう。

馬鹿に死なれてもいいが、父は駄目だ。

よって、色々と条件を突きつけた上で、穩便に事を済ませたのである。

だがそれ以上に事が事なだけに、詳しく調査する事で美琳に何度もその時の事を思い出させるのは酷だという判断もされていた。

調査が始まれば、どれほど穩便に事を進めても何処からか漏れる恐れがある。

それに馬鹿からある事ない事話される恐れもあった。

きつと馬鹿の事だから、美琳から誘ってきたと言張るだろう。

そうすれば、下働きにもかかわらず、有能な高官を夫にしている美琳を良く思わない者達が喜び勇んで食いついてくるだろう。

それこそ、どんな噂を流されるものか分ったものではない。

また、何よりも妻を辱められたとして玲珠が、どんな手段に出るか分らない状況だった。

その時点で、断腸の思いで相手への報復を思いとどまっていたのだ。

だから、美琳と玲珠の為にも全ての真相を闇に葬りなかった事にした。

知っているのは、その時に居合わせた者達、そして王と王直属の影数人だけ。

よって上層部の中にも知らない者達は多く、果豎もまた知らなかった。

これ以上迷惑をかけたくないという美琳の強い希望もあったし、また本人の許可がない状態で無闇やたらに報せられず、また箝口令が敷かれた。

代わりに、馬鹿には徹底的に恐怖を植え付け、次同じ事をしたら今度こそ処刑すると脅した。

それから十年——馬鹿には影を張付かせていたが、心底反省している節が見られた。

そうして謹慎期間が明けてもその態度は変わらず、影は外されたが、今回の件からして反省はパフォーマンスだったか、それとも何

かがあつたのか。

しかしあれだけ脅されていたにも関わらず、問題を起こす鷺州の現領主の馬鹿さ加減には完全に呆れかえった。

そんな明燐の耳に、蓮璋の説明が聞こえてくる。

「太陽の光さえ届かない暗い鉾山の奥深く。しかも水も食料も何もない場所に閉じ込められ、ただでさえ強制労働によって衰弱していた民達は更に弱っていきました」

死を望み、自害する者達まで現れた。

まさに、地獄絵図だった。

「それでも、中にはオレの顔を見知っている者達も居て、彼らと共に必死に外に出る為の対策を立て続けたんです」

神力を使おうという案も出た。

しかし、神力を使えば空間は不安定となり消滅する。

それこそ、逃げ場のない坑道で行えば自殺行為である。

「そんな時、偶然か奇跡か必然か。地震が坑道を襲いました」

風国に地震はそんなに多くないが、地方によっては地震が多い場所もある。

だが、その中でも鷺州は地震の少ない場所だったから、かなり珍しいと言える。

「坑道内に居て地震はある意味死活問題です。ですが、その地震がオレ達に活路をくれた。……その地震で、坑道の閉鎖された入り口が開いたんですよ」

蓮璋がようやく嬉しそうに微笑む。

「そうしてすぐにオレ達は生き残った者達を連れて外に出ました。本当に後一步の差での脱出劇でしたよ」

全員が逃げ出し走る中で、遠くに兵士達の足音を聞いた。

きつと、地震で坑道の入り口が開いたかどうか確かめに来たのだろつ。

丁度時間は夜。

しかも新月だった事と鉾山のすぐ近くに森があつた事が幸いし、

闇夜に隠れて森を駆け抜けた。

行き先は、隣州。

誰もが既にこの州の中に安息の地がない事を悟っていた。だが、衰弱している者達も多く、峠を越えられるかどうかの問題となった。

「最初はすぐに隣州に助けを求めようと思いました。ですが、峠を越えるだけの体力はない。無理をすれば、まず一人も生き残れない。そうなれば助けを求めるところではありません。それに、オレ達が居なくなつた事はすぐに知られ、追手がかけられました。到底逃げ切れない。だから隠れる場所を捜したんです」

その時、蓮璋は母から聞いた話を思い出した。

数年前から体調を崩していた母は、それまではよく父と共に馬で領地を視察と言う名で駆け巡っていた。

そんな中で、ある日母が父と共に迷い込んだ不思議な場所の話を聞いた。

それは二人だけしか知らない、特別な場所だった。

『あそこはね、まだ誰も入った事のない未開の地だと思うの』

蓮璋は現在自分達が居る場所が、その地からそれほど離れていない場所だという事に気づくと、すぐさまその地へと目的地を定めた。どうせこのままではすぐに見付かる。

母の言うとおり、その地がまだ誰も入った事のない場所ならば、きつと領主も知らない筈。

蓮璋は必死に生き残り達を引き連れて、その地へと向かった。

母が幼い妹弟達に聞かせた通り、歩き続けて。

そうして、何とか辿り着いたのが。

「この隠れ里でした」

四方を強大な岩壁に囲まれたそこは、豊かな水と自然に囲まれた場所だった。

天然の要塞のような造り。

と同時に驚いた。

というのは、その岩壁の外には濃い霧が渦巻いていたのだ。
まるで、この岩壁を覆い隠すように。

そこで蓮璋は鷺州のある地域を思い出した。

一年中霧が晴れず、また霧の中を彷徨っても必ず迷って元の位置
に戻ってきてしまう場所。

ここは、その霧の中なのだ。

第二十七話 証拠

それまで霧というのは、基本的には厄介ものでしかなかった。

しかし、傷を癒す中、いつ居場所を突き止められるかと恐怖する民達を隠し続けてくれたのは、その霧だった。

何時しか民達にとって、霧が特別なものとなったのは当然の成り行きだろう。

「そうしてここに逃げ込んでから一ヶ月経ったところで、ようやく全員がとりあえずは動けるようになりました。でも、その時にはもう遅かったのは想像がつかますよね？」

果豎と明燐は黙って頷いた。

逃げ出すのと入れ違いに逃亡が発覚し、すぐに追手がかかっていったのだ。

どんな馬鹿でも、一月もあれば包囲網は敷けるだろう。

「既に隣州に抜けるどころか、オレ達を捜す為にあらゆる場所に兵士達が彷徨っていました。もちろん、オレ達は既に死んだ事にされているでしょうから、大々的に捜す事は出来ませんが、治安の悪化を銘打って警備が厳しくなりました」

逃げ出した者達を捜しているのは明らかだった。

関所の警備も今まで以上に厳しくなり、到底女子供を抱えて通り抜けることは不可能に近かった。

それに下手に騒ぎを起こせば、すぐに領主に伝わってしまう。

かといって女子供達をこの隠里に残して少数精鋭で通り抜けるとしても、もし捕まった場合、必ずや領主は残りの者達の居場所を聞きだそうとするだろう。

領主の冷酷非道っぷりを知る者達にとって、そんな事は容易に想像が付いた。

見付かれば今度こそ、全員皆殺しにされる。

だから、突破口の見付からない状況では、この隠れ里から動くに

動けず隠れ住み続けるしかなかった。

「関所……か」

果豎は誰に言うのでも無く、ポツリと呟いた。

関所は各州の入り口を司る門。

確かにそこを超えるのは至難の業だ。

だが、果豎はそこでふと気づいた。

「私達も二十年前はそこを突破したよね。なら」

「いえ、突破しておりませんわ」

果豎はあっさりと答えた明燐を凝視した。

「し、してない？」

「ならば何処から――」。

「お忍びですからね。関所を突破したらまずいですもの」

「でも、馬車で走りきったよね？」

「ええ。関所以外を」

「はい？」

「ですから、関所を通るとバレルので、道無き道を走りました」

「どこを！」

「ですから、危険だと言われて閉鎖された道とかを主に」

「……」

「本当は海路から行きたかったのですが、すぐに見付かりますしね。ですから本当に大変でしたわ。勢いのままに突っ走りました」

「そうか……だからあんなにガツタンガツタン揺れたり傾いたりしたのか。」

「……じゃあ、その道を」

「無理ですわね。私達が通った後にはもう崩れてましたし」

明燐は何処までも淡々と答えた。

だが果豎はめげなかった。

「……なら、あれは？」

「はい？」

「私の居る場所を隠したといっても、王宮からの帰還の使者達が関

所を通っている時点ではれるよね。なら」

「バレないように商隊を装ってますから大丈夫です」

何処までも完璧に手を打つ王宮側だった。

「それに王室御用達の商隊ですからね。幾ら馬鹿でも手を出せば王宮が出張ってきますし、殆どフリーパスでしょう」

「フリーパス……なら、もし蓮璋達をその商隊に——いや、駄目か。フリーパスだって人数チェックされてるか」

それこそ、大幅に人数が増えていたら完璧にばれる。人数を減らしても、ばれる。

「そこで雇った者達です」とか言っても連れ出す事は無理だし」
徹底調査されるだろう。

「ええ、奴隷商人でもない限りは」

「王室御用達がやったら洒落にならないわね。公然と風国が奴隷制度を認めているって事になるわ」

かといって、商隊ぐらいでなければ通り抜けられなかっただろう。瑠夏州に王妃が居るとばれずに、使者達が入り込む方法としては、その時果豎は強引に——という手段を考えた。

それは、王の権力を行使し、強引に蓮璋達を連れ出す方法だ。

しかし、それには確たる証拠と保護するだけの理由がなければ無理だろう。

それがない状態での行使となれば、非難が集中してしまうからだ。それをはね返す事も出来るが、他の州への不協和音が生じる恐れもある。

他の国と比べれば確かに風国は安定している。

けれど、まだ百五十年だ。

一度完全に崩壊したものから復興した場所から興した国としては、余りにも歴史が浅すぎる。

特に風国は広い国だし、領主達にある程度の権力を持たせている現在。

下手な方法で王権を振りかざせば、国が瓦解する事態になりかね

ない。

そればかりか、虬国以外ではまだまだ混乱時代まった中の国もあるし、鶯州はそのまった中の国の一つである隣国とも隣接する州だ。

そちらに飛び火でもしたら大事である。

「それより、他の村人に話をつける事は出来なかったんですの?」

蓮璋達が動けずとも、他の村人達の協力を得られれば——そう告げる明燐に、果豎は蓮璋を押し退けるようにきっぱりと答えた。

「明燐、それは無理だと思うよ」

「王妃様の言うとおりです。現在もそうですが、先程も申したとおり、村や町には治安悪化を理由にして兵士達が闊歩し、また常に監視しています。外から来た者達が居れば即座にチェックし、彼らが出て行くまで確認する徹底ぶり。しかも、夜は村や町の門まで完全に閉鎖し出入り出来ないようにされる始末」

「て、徹底してるわね」

そこに老師も再び口を開いた。

「それだけではないのじゃよ。領主は密告制度を作り上げたのじゃ」

「密告制度?」

「そうじゃ。怪しい奴、見知らぬ奴が居たら密告する、そうすれば礼を支払うと」

「礼って……」

「以前に確認した例では、子供が密告した際には三百万円が支払われた」

「はあ?!」

この国では、人間界の島国の通貨が使われている。
が、三百万って!!

「そ、そんな大金?!」

「そうじゃ。新領主になってから、鶯州では税金の値上げなどが行われて民達は貧乏まっしぐら。日々の生活にも苦しい時にその様な餌をちらつかされれば——」

「率先して密告しようと思いますわね」

「それに加え、坑道で死んだ者達が化けて出るといふ噂まで流されておつてのう。見かけたら連絡するようにとのお触れまで出された」
「幽霊……」

非科学的とは誰も言わない。

だって、幽霊は居るから。

一般的には死んだらそのまま冥界に向かうが、時偶それが上手く行かずに悪霊と化したり、浮遊霊となったりする者がいるのだ。

それに、そもそも神々の世界に科学技術が発展したのは暗黒大戦以降の事であるし。

しかし、人間などに比べれば神の幽霊は非常に少ないとされている。

それは人間に比べて神の魂が安定している為とか言われているが、民達にとつてはそんな事は別にどうでもいいだろう。

「しかもその幽霊を見つけた相手は五百万だとか」

「居なくても居るって言いたいレベルですね」

庇うどころか、完全に売られる。

誰だって樂してお金は手に入れたいものだ。

「ええ。例え協力者が居たとしても、それ以外の全員が目を光らせていれば必ず何処からか漏れますし、その協力者まで危険な目に遭わせます。ですから、料理長の協力も本当に危険だったんです」

「つてか、その協力者達に隣州に伝えてもらうのは」

「無理ですね。隣州に出るところか、住んでいる場所から出るのもままなりません。監視がつきます」

「うー」

徹底しすぎている。

が、腐つても領主なのだから当然かもしれない。

「伝書鳩も撃ち殺される始末ですからね」

現在、天界十三世界での通信手段は伝書鳩か手紙である。

それは現在世界に流通している【乗り物】や【電化製品】などの

科学技術レベルを考えれば有り得ない話だ。

そもそも現在の天界は、人間界では二十世紀半ば頃までの科学技術レベルを取り入れており、その時代の人間界では電話やパソコン、メール、テレビ、ラジオなど幾つものハイテク通信技術があった事は既に広く知られていた。

しかし、それらの電波はこの天界十三世界の脆いバランスを余計に崩すとして使用が断念されており、結果通信技術に関しては未だに昔ながらのものを使っしかない状態なのである。

「……なら、鶯州以外の者達なら」

「鶯州に入った時点でやはり監視が付きます」

「……ってか、それでよく料理長と連絡が取り合えたよね」

「オレも幸運だと思います。王妃様に同行して瑠夏州に来た料理長が、自分の実家を訪れたなんて」

「そうなの？」

果豎が明燐を見ればコクリと頷かれた。

「ええ。丁度二十数年前から料理長の母君が伏せていましたね。」

もともと体も弱かったそうで、出来れば近くに居たいと料理長は願っていました。だから、料理長の場合はその件もあつて同行させたと言われていますの」

「し、知らなかった……」

「知っているのはごく僅かですわ。あの屋敷の中では私だけでしょうし、王宮の方でも知ってるのは直属の上司と宰相閣下と陛下ぐらいです」

「そうか……って、料理長帰宅したら私のことばれないの？王宮勤めしているのがなんで瑠夏州からって」

瑠夏州は鶯州よりも後方にある州で、そこから王都に抜けるには鶯州を通らなければならぬ立地となっている。

「ええ。ですから、料理長だけは、王宮から修行として瑠夏州の領主館の料理長として飛ばされた事にしております」

「あゝ、なら、大丈夫なのか」

「抜かりはありません事よ」

胸を張る明燐。

その時ぶると大きく揺れた胸に蓮璋と老師の目が釘付けとなる。
「一番最初に料理長が実家への帰省を願いだしたのは十九年前の事でしたわね。その後もちよくちよくと帰省を願っていました」

「そ、そんなに帰ってもいいの？」

「ええ。元々果豎の事件の前から王宮を辞することを希望していましたからね。それなのに果豎にも誠心誠意仕えてくれました。ですから、本人の希望があれば帰れるようにと。まあこれが王宮ならば難しいですが、隣州ぐらいならと認めておりましたの」

「その時の帰省でオレの父の訃報を知ったそうです。料理長は父とは旧友の仲で、反逆者とされていたにも関わらず、隠れ潜みながら花を手向けようとしてくれて……その途中で出会いました」

もちろん料理長にも監視はついた。

しかし、たまたま発生した嵐と雷によって、料理長の体は崖下へと転落したという。

その為、監視は料理長が死んだと判断してそれ以上追わなかったのだろう。

そうして料理長は、どうにかして自分達の窮状を伝える方法はないかと、隠れ里から出てくる途中だった蓮璋によって発見された。

そこで介抱しながら、全ての事情を蓮璋は教えたのだ。

「ならばどうしてすぐに、料理長は私達に話してくれなかったのですか。そうすれば私達だつてすぐに動きましたし、王にだって王妃を迎えに来た使者達から伝えさせる事も」

「証拠がなかったからです」

「え？」

驚く明燐に蓮璋は溜息をこぼす。

「確かにオレ達は被害に遭いました。でも、その被害にあった原因の証拠となるものがなかった」

「証拠も何も蓮璋達に起きた事は事実。それだけで充分でしょう？」

「でもそれを示す物は何も無い」

淡々と言い切る果豎を明燐が振り返って見る。

王妃としての顔がそこにはあった。

「私個人としては、蓮璋達が嘘を言っているとは思えない」

「果豎」

鋭く言葉を発する明燐を果豎は押留めた。

「酷い言い草なのは分るよ。でも、それが本当だという証拠はないのよ」

「その通りです」

「どうしてです？ 果豎。証人がいるのですよ」

「証人だけじゃ駄目よ、足りない」

「足りないって」

「足りないの。確たる証拠もなしに双方の主張が違えば、言った言わないの水掛け論になる」

果豎の指摘に明燐がハッと目を見開く。

「証拠には二つの種類があるわ。一つは人的証拠、一つは物的証拠。この二つが揃う事で相手を追い詰める事が出来る」

二十年前の果豎に対する冤罪事件のそれには、人的証拠も物的証拠も揃っていた。

そう——どちらも、果豎を追い詰めるために偽造されたものだったが、それらは強い威力を持って果豎に逃れられない罪を背負わせてきたのである。

「仮に運良く王に全てを話せたとしても、領主だってそこまで馬鹿じゃないわ。そんな事はしてないと争ってくる筈。例え裁判で争っても、双方の主張はまったく逆で、しかも物的証拠がないとなれば長引くし、そうなれば蓮璋達の身も危険になる」

果豎は苦い思い出を呼び起こす。

果豎の時もそうだった。

果豎の無実を証明してくれる筈の人的証拠、物的証拠が相手側によって消された。

「蓮璋達を確実に消しにかかってくる筈よ」

相手が居なければ裁判は成り立たない。

「でも、王宮側が警護すれば」

「警護だって完璧じゃない。それに、確たる証拠が出なければ結局は負けよ」

「王妃様の言うとおりです」

それこそ、最悪のシナリオである。

「そう——消されなくても、証拠がなければ嘘つき呼ばわりで逆に罪を被されるわ」

果豎の言葉に蓮璋が苦笑し、明燐が憤る。

「果豎！ それはっ」

「だからそんなに怒らないでよ」

果豎の視線に明燐はうつと言葉を詰まらせる。

まるで立場が逆転した様な……いや、逆転しているのだ。

明燐は必死に気持ちを落ち着かせて果豎を見る。

完全に王妃としての顔には、いつもの少女らしさは見受けられない。

これこそが、果豎の王妃としての姿だ。

冷静に、的確に物事を限られた情報の中で淡々と判断していく。

そこに私情を挟めない様は、正しく為政者。

けれど、この姿を知る者はごく僅か。

王と上層部、そして上層部の可愛がる側近達ぐらいである。

「私が言いたいのは、それだけ物的証拠が必要だって事だよ。それに、蓮璋達が鉱山に閉じ込められた原因は新種の鉱石が原因。つまりそれがあるという前提でこそ、蓮璋達の訴えは成り立つ」

「では、その鉱石を証拠として提出すれば」

「誰が出すの」

「誰がって……」

明燐は自分が余りにも馬鹿な発言をした事に気づいた。

「鉱石を持っているのはそもそも領主よ。出してくれるわけないじ

やない。蓮璋達は持つてないだろうし」

「……」

「しかも鉱石の存在自体が表沙汰になってないのが問題なのよね」

「え？」

「さつきも言ったとおり、蓮璋達はその鉱石のせいまでここまで最悪な目にあつたの。でも、最初からそんな鉱石がなかったとされれば根本からその主張は覆されるわ」

「で、でも鉱石は」

「ないじゃない」

「っ」

「国すらも知らない鉱石。そもそも最初からそんなものはなかったとされている。きつと発掘資料も全て隠されているか焼き捨てられている。で、蓮璋達の方も持つてない。何処にもない、誰もない、その状態では蓮璋達側が圧倒的に不利になる」

存在しないはずの鉱石があつたという証拠は、実物の鉱石を見せる事だ。

そして出来ればその鉱石の調査書もそえた方が良い。

「でも、ないよね？ 鉱石は全て貴族の懐に入ってしまったんだもの。坑道にだつてない。一つ残らず取り尽くされてしまった」

「……ほ、他にはありませんの？」

その鉱山以外にだつて鉱石はあるのではないか？という明燐の言葉に、蓮璋はを首を横にふった。

「もしかしたら鷺州全てを捜せばあるかもしれません。でも、必要なのはその鉱山から取られた鉱石です」

「そうそう」

別の場所からでも鉱石自体は見付かるだろうが、それでは鉱石の存在自体は明らかになつても、蓮璋達が閉じ込められた場所のものという事にはならず、結局は物的証拠にはなり得ない。

「大切なのは、その鉱山から掘られた鉱石である事」

普通の殺人事件だつて、事件に使つたものと同じナイフを新しく

購入して「はい、証拠です」なんて事は出来ない。

それは完全なる証拠の偽造である。

「だから、必要なのは領主が懐に収めた鉱石なのよ」

一つでも蓮璋達の手元に残っていれば話は違ったかも知れない。

けれど、欠片一つさえ領主のものとなり、他の者達の手には残されていない。

勿論、鉱山の中にも一つも残っていない。

「この隠れ里の人達が強制労働をさせられた挙げ句、坑道に閉じ込められたのは、新種の鉱石を領主が独り占めにする為。でもね、仮にそう訴えても、そんな鉱石はなかったと言われてしまえばどうする？」

結果は火を見るより明らかだ。

民達を坑道に閉じ込めた際に、事故を装うなどあれだけ手際が良かったのだ。

新種の鉱石など最初からなかったと、主張し続ければそれだけでいい。

だから——例え、新種の鉱石を独り占めする為に村人達を殺した、と訴えたとしてもだ。

新種の鉱石を国に申し出ず独り占めにし、その上村人達を虐殺目的で行動に閉じ込めたとなればそれは重罪に値する。

けど、もし新種の鉱石などなかったとすれば？

なかったという証拠を提示されてしまえば？

鉱石などなかった——それが認められてしまえば、訴えの全てが覆ってしまう。

鉱石の秘密を守るために坑道に閉じ込められて殺されかけた。

けれど、鉱石がなければ殺される必要はない。

そう——そんな鉱石はなかったのだから、独り占めにする為に閉わった者達を虐殺する必要もない。

寧ろ、それは全てその者達の妄想、狂言だと言われてしまえばそれで終わってしまうのだ。

「で、ですが果豎」

「ですがじゃない。領主を訴えるのよ。証拠もなしに訴えて勝てる相手じゃないし、他の者達がそれで納得する筈がない。それどころか、下手をすれば領主を侮辱したという罪でこっちが罪に問われてしまうわ」

「で、では坑道に閉じ込められたという証拠だけでも」

「その前にどうやって坑道に近寄るのよ。まず兵士達に阻まれるわね。それに、その坑道だって残されている可能性はないわ」

元々崩落事故としていたのだ。

今度こそ爆薬でも仕込んで崩された可能性は高い。

「……王宮側は本当に何も情報を掴んでいなかったのかしら？」

「問題はそこよね。確かに二十年前はあれだったけど……その後は――あの腹黒鬼畜集団なら掴んでいそうなんだけど……まあ、でも完璧じゃないし」

「え？ 腹黒鬼畜集団？」

今何か聞こえてはいけない単語の羅列が聞こえた気がする。

しかし王妃は笑顔で肯定した。

「うん、腹黒鬼畜集団」

「……王宮にそんな物騒な集団が」

「違うよ。上層部の事」

「じよ――」

暗黒大戦にてその名を馳せ、十二王家の覚えもめでたい凧国建国の立役者。

しかも、たった百五十年という短期間で、王と共に凧国を発展、繁栄させた凄腕の高官達揃い。

そんな凧国上層部の功績は炎水界中に轟く。

それを、それを！！

腹黒鬼畜集団？！

「うん」

王妃は真顔で頷いた。

「な、どこら辺がですかっ」

「全てが」

「全て?!」

「まあ果堅! 私達の何処が腹黒だというのです!」

そういえば明燐も侍女長なのだから、上層部の一人であってもおかしくないだろう。

と、蓮璋が王妃に視線を向ければ、嫌そうな顔が視界に入った。

「色々と腹黒」

「だから何処がですよ!」

「全て」

「何を言うの! こんなに真っ白なのにつ」

その時、蓮璋は果堅の顔を見てしまった。

その、明らかに残念な人を見るかの様な眼差しをガン見してしまっ
った。

残念で、痛々しい人を哀れむような視線がこれほど似合わない少女
がいるのかと、半ば現実逃避気味に考える。

「ってか、上層部は腹黒です。腹黒以外の何ものでもありません」

「果堅!」

「それに私は恨みだつてあるわ。私の愛する大根達を虐げられつて
いう!」

「は? 大根?」

既に老師はオロオロとするばかりで、会話に入れないで居た。

いや、入られても困るが。

「そうよ! 私の愛する大根達! 収穫を心待ちにしていれば先に
抜かれるし! ってか、抜く時ボツキリ折られたの! ボツキリと
! 私の、私の愛しい大根達があああああ!」

「胃袋の中に入れば同じ事」

「何を言うの! この人でなし! 大根の敵!」

「そもそも人ではありませんから」

というか、この室内にも人はいない。

全員神様だから。

「神でなし！」

「言葉がおかしいですわ」

「私が、私が丹精込めて作った大根達を！ それこそ、夫に色々とされて重たい腰を引き摺って、毎夜大根の前で豊作の踊りを大根の妖精達と踊りまくっていたというのに！」

「新人の王宮仕え達から、毎夜絶叫しながら念仏を唱える馬鹿がいる、という訴状が届いていましたけれど」

「豊作を祈願する念仏踊りよ！」

「しかも夜中に白いものが飛んだり跳ねたりしていると」

「大根達の華麗なダンスに決まってるじゃない」

色々と突っ込みどころはある。

けれど、蓮璋としては大根よりも突っ込みたい事があった。

ってか、腰が痛いってあれだよな。

いや、王と王妃は夫婦だからしてもいい。

してもいいが――。

蓮璋は果豎を頭のとっぺんから爪先までまじまじと見た。

「王ってロリコン？」

がああん！という衝撃音を明燐と老師は確かに聞いた。

「な、何を言うのです蓮璋！」

「はっ！ す、すいません、そ、そんな事はな」

「そこはあえて目を瞑るべき所です！」

「ロリコンなんですかっ！」

そこは決定なのか。

ってか王がロリコンって……いやいや、好みというか嗜好は人それぞれで。

「それが何かいけませんの？！」

カッと目を見開いた明燐に睨まれ蓮璋は口をつぐむ。

「い、いや、いけないわけでは」

「というか王のロリコンで今まで民達に迷惑をかけた事はあって？」

！ 幼女狩りを行った事はあつて？！ 美少年狩りをして侍らせていた事があるとでも？！」

「いや、な」

「ないでしょう！ 王都のいたいけな幼児達を狩りつくすほどの権力を持つていながら、そんな事はしておりません事よ！」

「流石は陛下！」

「老師っ！」

「つてか、ロリコン……」

王妃がパタリと倒れた。

「果豎！」

「王妃様！」

王妃はピクリとも動かない。

が、その小さな呟きを蓮璋は拾ってしまった。

「……別にいいし、どうせ幼児体型だし、真っ平らだし、胸ないし」

「え、え」と

王妃は横たわったまま指でのの字を書く。

「でもさ、誘拐された時にロリコンいたけど相手にされなかったもん、だから夫はロリコンじゃないもん、ロリコンだったら相手にされないもん」

「何ですって果豎？！」

再度カツと目を見開く明燐。

しかし何か別のものまで開眼してしまったように見えるのは錯覚か。

「相手にされなかったとはどういう事です！ つまり果豎はロリコンの射程範囲外？！」

ロリコンにすら相手にされなかったら誰が相手にするのだろう――

――と、蓮璋は思った。

いや、そんな王妃を相手にした王は――。

「究極のロリコン？！」

ロリコンを超えたロリコンという事か。

というか、ロリコンを超えたロリコンとは一体どういう状態なのか？！

もう想像すら難しかった。

「流石は陛下！ 何事も極めるお方ですから」

そこは極めてはいけないだろう。

というか、果たして王妃様に跡継は産めるのだろうか――。

いや、その前にこの幼児体型の時点で手を出す事自体が犯罪である。

「身長はまあ年齢相応か……体重か？ 体重が少なすぎるのか？」

「蓮璋！ 女の子に体重の話は厳禁ですわ！」

「そうよ！ それに豊胸手術っていう手段があるわ！」

「果豎！ それよりも刺激です！ 激しく揉みし抱く事で胸なんて大きくなりますわっ！」

それならとつくの昔になっている――と果豎は口に出さずにツツコンだ。

王宮にまだ居た頃、無い胸を激しく揉まれた日々。

それでも殆ど変わらない胸。

民間療法とか色々やってみたが、大きくならなかった。

けど！！

「大根！ 愛する大根を食べマッサージする事で一ミクロン大きくなつたの！」

それ、もう殆ど分らないレベルだろう――なんていう突っ込みを蓮璋はしなかった、出来なかった。

男だって、男性器を小さいとか短いとか言われたらへこむ。

それとたぶん一緒なのだ。

しかも――。

蓮璋はちらりと明燐を見た。

服の上からでも揺れる胸。

たぶたぶとした柔らかさそうなそれは、きつと色艶感触共に極上な

のだろう。

そんな胸の持ち主が常に側に居る状態なんて、地獄以外のなにものでもないだろう。

と、その時王妃がバンつと壁を叩いた。

「ってか一ミクロン！　一ミクロンも大きくなったのに、朱詩つてば人を馬鹿にしていえっ！」

胸の恨み、いつか晴らしてやる！！

いや、むしろ奴の胸を大きくしてやる！！

そして想い人が転生してきたら「私、同性愛の趣味はないから」とか言われてふられてしまえばいい。

果豎はいけない道を走りかけていた。

「いや、胸なんて成長と共に大きくなりますよ。その、十六、七にもなれば」

その時、蓮璋は地雷を踏み抜いた事に気づかなかった。

「……私、十七」

「はい？」

「ですから、果豎と私は共に十七歳です」

絶対に王妃は十歳ぐらいかと思っていた。

今度こそ、蓮璋は茫然とした。

第二十八話 査察

「え」と

「目が泳いでるよ」

床に突っ伏したままの王妃からの鋭い指摘に蓮璋はたじろいだ。

「え、いや、その」

「いいよ、別に十歳で」

読心術？！

「顔に書いてある」

もつと駄目じゃんオレ――。

蓮璋はぶわりと冷や汗を流すが、かといって上手い言葉が浮かばない。

「い、いや、その、見た目じゃなくて中身の方が大事で」

「いいのよ、蓮璋。周囲の男性陣が女性化した時の方がよっぽどスタイル抜群な事実には、いつか大根を原料とした貧乳剤を国中にはまいてやる――！ わあははははは――！ なんて思っていないから」

思ってる、絶対思ってる――！

王妃の目はそれほどマジだった。

「果て、胸を大きくする為には何度も揉むことです！ 同性の手で
っ」

「いや、違うでしょ！ ってかその手は何ですか明燐っ」

わきわきと、イヤらしく胸を揉む仕草をする明燐に、蓮璋は全力で突っ込む。

普通なら、女性同士のそれは妖しささえ醸し出す筈なのに、王妃と明燐となるとどう考えても性的な虐待にしか思えない。

何故だ？

何故そう思ってしまうのか？！

「蓮璋だって女性化したらきつとFカップだよF！ 絶対にボボンっキュッポオンだよっ！ 酷い！ そうやって、私の涙ぐましい未

来への輝かしい豊胸願望を、木っ端微塵に吹き飛ばすなんて酷すぎる！」

やってもいない事で罵倒された。

「つてか、勝手にオレの胸のサイズ予想しないで下さい」

「予想じゃなくて算出だよ。身長、体重、年齢、その他諸々から」

余計に難易度上がった？！

そこに明燐の駄目出しを食らう。

「果豎の計算力を舐めないで下さい。全て大根に換算すれば、果豎の能力は完璧です」

「んなつ？！」

なんだその妙チクリン極まりない条件はっ！！

「逆に大根でなければ、二桁と二桁の足し引きすら間違えます」

「駄目じゃん！ 間違ったら駄目だろそれっ！」

「でも全て大根を使って考えれば、数学の行列も可能なのです」
能力の乖離がありすぎる。

有り得ないだろ、おかしいだろ！！

「全ては大根への崇高なる愛が可能とするのよ！」

「というか、大根の為なら世界征服すら可能としそくに思えるのは何故だろう。」

蓮璋は王妃の能力に恐れを成した。

「それで、話は戻りますけど——」

明燐が完全に逸れた話を戻す。

「今回の領主の非道は、是非とも王宮に報せなければなりませんわね」

「そうだね。けど、難しいよ、それは」

「証拠の件でしょうか？」

「それだけじゃないよ」

果豎はよろよと床から起き上がると、側の椅子に座り直した。

「さっきも言ったとおり、王宮側が気付いていないと言うのがおかしいのよ。あの人達なら二十年もあればその間に確実に気づくわ」

「王妃様？」

「確かに二十年前は気付かなかったかもしれない。というの——ごめん、こんな言い方すると蓮璋達を傷付けるかもしれないけど、王宮側は他州に構ってられないほど走り回っていたの——私の冤罪を晴らすために」

果豎の言葉に、蓮璋は黙ったまま聞き続けた。

その事件なら料理長から聞いていた。

ゆえに、瑠夏州へと王妃が追放されたという事も。

自分達が坑道に閉じ込められていた時期に起きた、大事件。

時期がたまたま悪かったと、そう思わざるを得なかった。

謂われなき罪にて最も傷ついたのは、王妃様だ。

『なのにあの方は強い——』

料理長の言葉が思い出される。

そう……料理長は言っていた。

ずっと、王妃様は素晴らしい方だと。

なのはどうして、心ない噂が入り込む隙があったのだろうか。

蓮璋は自分の馬鹿さ加減に自嘲の溜息をつく。

「でもね、その事件が収束に向かうまでかかったのは二年。それ以降は再び『目』と『耳』は通常通りに戻った筈」

それに事件中も各州に飛ばしていた『目』と『耳』は、そのまま

仕事を続行していた。

王の『目』となり『耳』となり。

領主達が暴走しないように、領主では手に負えない問題が起きた

時の為。

事件中も最低限の対処はされていた筈だし、事件後は今までの溜

まった分を精算するべく動いた筈だ。

となれば、二十年前は気づかずとも、鷲州に潜入させていた者か

ら、また各州に定期的に入る隠密の査察が王に報告している筈だ。

「まあ、各州には不輸不入権はあるけれど」

領地の政治は領主に任せているが、それでも定期的に査察は入れ

ていた。

特に、鷺州のように隣国と接する州は重点的に。

しかし、その査察でさえ気づかなかったというのはおかしい。

「それだけ領主が巧妙な手口を使ったという事でしようか」

「そういう考えもあるわね。まあ上層部だって完璧ではないから、でも、違うと思う」

「果豎？」

「確かに崩落事故があった。それは分る。でも、よく考えて。崩落事故で犠牲になるのって普通はそこに勤めている者達よ」

「それは当然ですわ」

何を今更と明燐が答える。

「そう、当然。で、普通に考えてそういう仕事をする人達はどんな人達が多い？」

「それは、やはり男手ですわね。女性は少ないでしょう」

仕事のキツさを考えても、女性は少ない。

「そう。でも、今回死んだとされて坑道に閉じ込められた人達は、その男性だけ？」

「……」

明燐は記事を思い出す。

その崩落による大量の犠牲者達の、内訳を。

「違うよね。ってか、どこの世界に働いている人達の家族全員が、一緒に崩落事故で死ぬのよ」

そう——そんな事はおかしい。

明燐が当時そう思わなかったのは、記事にはそこで働いていた者達だけと書かれていた。

「その家族達は何処に行っただろうね？ 蓮璋」

問いかけられた蓮璋は、八つと我に返った。

「何人？」

「え？」

「そこに閉じ込められた人達。数確認はしたよね？」

「あ……」

「そこで自害してしまった人達も加えて、何人が閉じ込められたの？」

蓮璋は、果豎に促されるままその数字を伝える。

「で、明燐。記事の人数は？」

「え？あ——」

明燐からもたらされた人数に果豎は口を開いた。

「同人数だね」

坑道に閉じ込められた人数と記事の人数が一致している。

「家族も働いている人の人数に含められたみたい」

「け、けど果豎。そういうのは、戸籍を調べたら異変に気づくものだと思いますわ」

そう—— 虬国では戸籍が導入されている。

因みに、孤児だろうと流浪の民だろうと基本的に戸籍は与えられる為、取りこぼしが完全にならないわけではないが、殆どの所在は確認されている。

そしてその戸籍は領地、国、監査機関の三段階での調査、確認が義務づけられていた。

また二年に一度、定期的な神口調査なども行われていた。

だから働いている者達だけが死んだとされたならば、当然家族は生きている事になる。

何もないのに居なくなったらそれこそおかしい。

「ですから、隠すのは難しいかと」

「そう、難しい。でも国からおかしいとは言われてないよね？」

「……」

新聞には何も書かれていないし、隣州にも何も届いていない。

「つまりそれだけおかしい事があるのに、国はおかしいとは言っていない。つまり、おかしくないという報告がされたからじゃない？」

明燐がハツとし、蓮璋は静かに顔を伏せる。

「情報の……改ざん？」

「だと思つよ。というか潜入している人達が気づかないなんておかしい。そもそもそういう大きな事故があつたら、国の方でも潜入させている者達に調査を命じるのが普通だからね」

別に領主達を信じていないというわけではなく、第三者の面から客観的な事故原因調査をする為だ。

「なのに気づかない。しかも国にはおかしいと報告しない」

もう言わずとも分つた。

「つまり、果豎は誰かその件を黙殺した相手が居ると?」

「うん」

「でも、でもそんな事が」

「ただ、絶対とは言い切れない。あくまで、一つの可能性の話。ただ可能性は高いと思う」

誰がそんな事をしたのかは知らない。

しかし、握り潰したとすれば、領主側に組みしているのは間違いない。

それがどういう理由かは分らないが。

「なんて事を……」

「それに、今も蓮璋達がこうして身を隠し、隠れ里を拠点としなければならぬほど、警備が厳しいまま。二十年間もそんな状態を続ける領主の無能さを、普通は王に伝えるよね?」

辛辣な物言いだ、確かにそうだ。

隣国と隣接している州だからある程度の警備は必要だが、それでも蓮璋から聞かされたほどの警備が必要とは絶対に思えない。

むしろそうしなければならぬ理由があるとしても、それを二十年も民達に強いるほどその脅威をどうにも出来ず、かといってそれを改善する為に国側に訴えがあつたような形跡もない。

「密告の事もそうよ。そんな馬鹿な制度が作られたなんて王宮側に知られたら、まず間違いなく激怒してくる。でも、それが無い。けど驚州中にその制度が伝わっているなら、潜入している者達にも当然それは耳に入っているし、その時点で王宮側の指示を仰ぐはず。」

それもしてない。だから、変なの」

「王妃様……」

「そういつた情報を握り潰している可能性は高い。きっと蓮璋達の身に起きた悲劇すらも握り潰していると思う」

「……最悪ですわ」

果豎は蓮璋を見据えた。

「その事には」

「ええ、気づきましたよ」

蓮璋が苦笑する。

「オレ達だってただ黙っていたわけではありませんからね……けど、たとえ握り潰されていたとしても、王に伝えたかった。あいつに、狂わされた民達を、死んだ事にされたまま、追手に怯える生活から抜け出したかった」

だから……。

「だから王妃様に……」

蓮璋は悲痛な面持ちで訴えた。

「でも本当は……巻き込みたくは……なかった」

「……え？」

「どういう事ですか？」

「……」

「蓮璋」

老師の心配そうな声に蓮璋は首を横に振った。

「二十年——あの事件から二十年が経過しました」

その言葉と年月の重みが果豎の心に突き刺さる。

「確かに、警備はキツクなりオレ達の行動は制限された。証拠もなく、出来る事なんて殆ど無かった。けれど、それでもオレ達は……戦い続けていました。たとえ、可能性は低くても、必死に手札を捜した。あいつらに対抗出来るだけの、手札を」

「蓮璋……」

ギョツと手を握りしめ、目を瞑る。

本当に、この王妃様は自分の予想を遙かに超えている。
全てを話す前に、こうも先に見抜かれてしまうなんて。
けれど……もともと、最初から予想外だった。

攫われ、見知らぬ所につれて来られたにも関わらず、こうして積極的に話を聞いてくれる。

こんな王妃様を妻にされている陛下も……こんな、優しい方なのだろうか。

「王妃様、先程証拠の話をしましたよね」

「う、うん」

「証拠はないと……でも、本当は違うんです」

「え？」

驚く果豎に蓮璋は泣きそうな笑みを浮かべた。

「証拠は、あつたんです」

「……え？」

「正確には二年前までは、ですが」

第二十九話 出来る事

証拠はあった。

それは今までの全てを覆す言葉だった。

つまり、既に蓮璋達は一度切り札を手にしていたのだ。

なのに、どうして、今までの話で証拠がないという話の流れに蓮璋は同意していたのだろうか。

いや、蓮璋は「あった」と過去形で告げた。

つまり、「証拠」を手にしていたのは過去の事で、今は無いという事だ。

けれど腑に落ちない。

過去に手にしていた時に、どうして動かなかったのか。

いや、動かなかったのではない、領主側の警備網のせいで動けなかったのだ。

たとえ証拠を持っていたても、それを王の前まで届けなければ意味は無い。

しかし届けるには、関所を突破しなければならないが、実行すれば即座に追手がかかるし、そうなれば証拠すら奪われてしまうだろう。

そこで果豎は新たな疑問を覚える。

二年前までは証拠があったと言うならば、その証拠はどのようにして無くなったのだろうか。

無くしたか、奪われたか。

すると、果豎の心を読んだかのように蓮璋が答えを口にした。

「奪われたと言った方が正しいでしょう。但し、その現場を目撃したわけではありませんが」

「見ていないの？」

「はい。最後に見たのは……私の友達。そして彼らは、王への訴状に向かい、戻って来なかった」

「……」

果豎は無言で先を促す。

大体、予想出来た。

どうにかして、今の状況から脱したかった蓮璋達。

どんどん危機に陥る中で、彼らは一刻も早くどうにかしたいと願っていた。

例え厳しい警戒網があろうとも、切り札を手にしていたとなれば、それを外の州に持ち込めさえすれば。

しかし、結果は戻って来なかった——その意味する事は、もう。

「殺されてしまったか」

「裏切ったか」

「め、明燐」

とんでもない事を口にする明燐を果豎は嗜める。

確かに可能性としてはあっても、今此処で口にするべき事ではないだろう。

しかし、明燐の厳しい眼差しがそれ以上の窘めを阻む。

王宮という特殊な場所で、常に守られてきた果豎とは違い、権謀術数を繰り広げる政治の場を渡り歩いてきた明燐だ。

裏切られる事も、裏切る事も星の数ほど行ってきた。

風国という巨大な国を維持する為に、幾つもの策略を練り、時には王に献上し、時には自ら実行し。

王妃付きの侍女長という立場だろうとも、明燐は一人の政治家としてその手腕を振るう政務官だった。

人手がないから。

使える者は、下働きだろうと民であろうと、片っ端から政治に参入させた。

そして使えそうな者達は、ひたすら叩いて叩いて叩きまくって政治の手腕を身につけさせた。

足りないのだ。

圧倒的に。

どこの国も、その国自体を維持する為の神材が。だからこそ、明燐も侍女長でありながら政治に関わる。時には、馬で現場まで駆けていく。

なのに、自分だけは——果豎は、ぎゅっと胸の辺りで握り拳を作る。

自分だけは、安全な場所に置いておかれた。

貴方は何も心配する事はないのよ——そう囁かれ続けた。そうして何も出来なくなっていた。

でも、今は違う。

果豎は無力感の海に飲込まれそうになる心を奮い立たせる。

此処には、守ってくれる相手なんて殆ど居ない。

全て、自分で動かなければならない。

明燐を無事に王宮に帰らせ、蓮璋達をこの危機的状況から救い出すためにも。

決意を改める果豎に、明燐は更に口を開いた。

「死体の確認はしたのかしら？」

「いえ、していません。ですから、裏切りという可能性もあるかもしれません」

「蓮璋っ」

「老師、良いですよ。明燐も可能性の一つとして言われているだけですから。それに、例えそうだとしてもオレは責められません。責められる筈などありません」

蓮璋の言葉を、果豎は静かに聞き入る。

「いくらこの場所は領主達に知られる確率が低いとはいえ、死と隣り合わせの極限状態に居続けたのです。たとえ神でも、十八年という月日は長すぎた。俺だって、何度心が折れかけたか……」

だから、もし裏切ったとしても、仕方ないと心の中の何処かで思っていた。

けれど、それでも願う思いは何処までも甘い。

「蓮璋……私は、その人達が最後まで頑張ったと思うよ」

「王妃様」

信じるという光を瞳に宿す王妃に、蓮璋は冷や水を浴びせかけられた様な気持ちに陥る。

「……ええ、そうですね。そう、俺も信じたい」

裏切っても仕方が無い。

でも、信じたい。

最後の最後まで、彼らが自由と此処に居る者達の命をかけて、駆けつけてくれた事を。

証拠が失われ、一度は空中分解しそうなほど険悪になったこの隠れ里で、それでも誰もが願っていた。

その思い。

「でも、蓮璋。言っでは悪いけど、貴方達の対応は軽率だと言わざるをえませんか」

「明燐」

「果豎、考えてもみて。だって、唯一の証拠があるとしても、逆に言えばそれを失えばどうにもなくなる。なのに、蓮璋達はそれを持たせて一か八かで陛下の下へと向かわせたのよ。証拠を失う確率が高い状態で」

仮に裏切らなかったとしても、殺されて奪われる可能性が高すぎる。

「それは」

「私ならばそんな事はしない。そう——証拠はこの隠れ里に残したままにするわ」

明燐の厳しい眼差しに、蓮璋は苦笑いを浮かべる。

「そして、彼らだけを行かせたと」

「そうよ。一人でも王宮に辿り着けば、そこから王に伝えてくれる」
「王側に裏切り者が居るかもしれないけども？」

「査察のことを言っているのだと果豎は気付く。」

「それでもです。証拠を失う可能性は極限まで低くしなければ」

「ですね。でも、この隠れ里も危険だとなれば？」

「え？」

驚く果豎に蓮璋は言葉を続けた。

「二年半前、二つの悲劇が私達に襲い掛かりました。一つは、この近隣の村々で領主からの肅正が行われた事が発端の事件です。それにより、数ヶ月もの間この隠れ里の唯一の出入り口付近に兵士達が彷徨き、何度も発見されかけたんですよ」

その度に、蓮璋達は息を殺して耐えるしか無かった。

丁度天気が悪く雨が多い日々が続いたから、何とかあった。

しかし、もし天気が良くなり、もう少し遠くまで彼らが来たら。

「その極限状態から、幾つものデマも飛び交いました。この隠れ里が発見されたのだ、大軍が押し寄せてくるなど」

そんな中、たまたま一人の兵士がこの隠れ里に迷い込んできた。

その相手は、大怪我を負っていてすぐに亡くなったが、それが隠れ住まう者達の神経を大いにえぐり取った。

もう駄目だと騒ぎ、殺されるぐらいならと自害しようとする者達まで現れる始末。

「更に悪いことに、流行病が流行ったのですよ」

その兵士が持って来たのだろう。

子供を中心に流行った病に、幼い子供達の四分の一が倒れた。

尽力してくれた老師でも手に負えず、かといって新たな医師を呼ぶ事は出来ない。

せめて、この状況から脱することさえ出来れば。

子供達の苦しい呻きと親達の嘆きに、蓮璋は決断しなければならなかった。

一か八かの方法だったとしても。

「そして、結局は証拠ごと仲間を失ってしまったのですよ」

子供達も介抱の甲斐無く、病を得た半分が死んだ。

それでも半分は助ける事が出来、迫っていた兵士達も村の肅正が終わり隠れ里付近から撤退した。

だが、隠れ里の方の被害は余りにも大きすぎた。

もう、手はない。

そう——もう、手は殆ど無かった。

だからこそ、王妃という切り札に拘るしかなかった。

新しい証拠を手に入れるにしろ、手に入れた後、確実に王に届けるために。

「もし証拠を失わずに済んでいれば、もっと別の道もあったかもしれませんが」

でも、もうない。

だから、王妃を利用するしかない。

何も知らない王妃を巻き込み、その身柄を奪い、切り札として。

料理長から、瑠夏州に王妃が居ると知った後、何度も意見が交わされてきた十八年。

助けを求めよう、巻き込みたくない。

けれど、証拠を持って行った彼らが戻らなかった事から、王妃を利用する事を決めるしかなかった。

そして待ち続けた日々。

まるで、運命のように崩れだしたそれ。

時間は、もうない。

「でも、蓮璋」

「はい？」

「証拠はいつ手に入れたの？」

果豎の質問に蓮璋は真意を理解する。

その証拠を、二年前よりもずっと前に手に入れていたならば、料理長からでも王妃に話を通して貰えば良かったのだ。

しかし、それは出来なかった。

「証拠を手に入れたのは、二年と少し前です」

「二年と少し前」

それは、隠れ里の危機と流行病が流行った後である。

「そう、それが見付かった時、もう村人達の焦りと苛立ちは頂点に達していました」

そこから、王妃に——なんて話を一々しているほど待つ時間はなかった。

死と恐怖は最大限にまで迫っていたから。

「だから危険を承知で、すぐさま行かせたんです」

雨で、夜の闇に紛れれば少しはマシだと、自分達を納得させて。

立候補した者達に、証拠を託した。

「そう……もつと早く見付かっていれば良かった」

けれど見付からなかった。

子供達の薬草を採りに行く中で、たまたま蓮璋は見つけたのだ。

「既に何もなかったオレの家の近くの森に薬草がある事は知っていて、それを取りに行ったんです。でも、いつもは見張りの兵士達が大勢居て……でも、一か八かで訪れた時、丁度その兵士は少なくなっていたんですよ。たぶん、他の村々の焼き討ちで忙しかったのでしょうね」

そうして、手薄になった包囲網を潜り抜け、薬草を採りに行く中で、見つけたのだ。

「父が、残してくれていた証拠を」

小さな鉱石の欠片を、手紙と共に。

それは、あの鉱山から見付かったものであり、もし自分に何かあったら頼むと最後に書かれていた。

「それって……」

「ええ、本当に親不孝者ですよ、オレは」

もし、あの時父の言うとおり家に留まっていれば。

そう思わざるを得なかった。

「そして、その証拠さえ失ってしまった。大切な仲間達と共に」

父の言いつけに背き、更には父が命がけで託してくれた証拠まで失った。

村人達の嘆きと哀しみ、そして証拠を王に届ける為の手段の板挟みになり、最終的に蓮璋は村人達の思いを優先した。

そうして失われた切り札について、蓮璋を責める者は誰も居なか

つたと老師が語る。

「責められるわけがない。蓮璋はギリギリのところを選択してくれ
たし、何よりそれを望んだのはわしらだからのう」

「老師……」

「だから、蓮璋。そのような顔をするでない。わしらは本当にそな
たに感謝しておるのじゃからな」

そう言われて、初めて目尻に涙が溜まっているのに気付いた。

そつと果豎が何処からか布を手渡し、蓮璋はそれを受け取った。

「それで……どうするの？ この先」

「もちろん、証拠を手に入れます」

そうしなければ、どうにもならないのは分かり切っている。

証拠だけでは難しいように、王妃だけを手中してにもどうにもな
らないから。

だからこそ、証拠が失われた事が悔やまれてならない。

もし今も証拠があれば、そうすればと何度も思う。

けれど無いものは無い。

諦めなければ。

それに、王妃様を巻き込みたくなかったとどれほど思っても、も
う連れて来てしまったのだ。

あの日、あの時に、証拠が失われた後、こうなっては王妃様を何
が何でも手に入れ、今度こそ手に入れた証拠を確実に届けると決め
た。

何度も何度も悩んで、最後まで悩んだけど。

王妃様が出立すると聞き、蓮璋は動いた。

逃せばもう二度と、手に入らない——大切な切り札。

けれど、王妃と出会い話をする事で、よりいっそう募る罪悪感
はどんどん重くなっていく。

巻き込みたくなかった——例え、王妃と言えど。

いや、この少女だからこそ、巻き込みたくなかった。

不甲斐ないと蓮璋は自分を嘲笑う。

決めて、動きだして、それでもなおこうしてウジウジと悩む自分。いい加減腹を決めなければならぬのに、自分はこうして今も悩み続けている。

村人達の上に立つ者として、最悪な頭である。

「で、私は何をしたらいいの？」

果豎の言葉に、蓮璋は驚いたように目を見開く。

「王妃様にはして頂く事はありません。何度も言いましたが、王妃様は切り札です。しかし、何かをして頂くという事はなく、ただオレ達の過去と今の状況を知って頂きたい」

「そして、王に申し出る時の援護射撃をしろと」

明燐の指摘に蓮璋は頷いた。

「僭越ながら、お願い致します」

蓮璋はそう言つて頭を下げ、そのまま続けた。

「オレ達は既に失敗しています。ですから、どんな手だろうと手段は多い方がよい。そして、王妃様という切り札は今回を逃せば、もう二度と手に入らない」

自ら懷に飛び込んでくれる今回こそが、最大の好機。

但し、機会は一度限り。

もちろん、王妃拉致という事は危険が高すぎるが、王妃を助けに来た者達に話をつける事も出来るかもしれない。

「領主達と組んで来たらどうするのですか」

「それはないですよ」

蓮璋の言葉に、明燐は溜息をつく。

確かに、ない。

王宮側はこの領主を嫌っている。

特に王妃の事に関しては、手を組むぐらいなら自分達が不眠不休になる方を選ぶぐらいに。

「出来る限り、早急な決着を付けたいと思います。ですから、王妃様にはそれまで此処でゆっくりとして頂きたい」

話す事は話し、保険はかけた。

これで、たとえ自分達が皆殺しにされても、全てを無かった事にはされない。

「蓮璋……」

「本当に巻き込んで申し訳ありませんでした。このような怪我までさせて」

怪我という言葉に敏感に反応したのは明燐だった。

「そう、怪我ですね。果豎を襲ったあいつらに報復しなければ」

襲われたという言葉に、今度は果豎が反応する。

「私は……」

あれは、誰だったのか。

自分を狙ったという事は、自分に対して恨みがある相手。

王宮に居た頃の誰かだろうか？

いや、もしかしたら――。

二十年前の事件を思い出す。

あの事件で生き延びた誰かが、今回の事を引き起こしたのかもしれない。

「許さないわ」

濡れた唇からもたらされる不穏な声色に果豎は戦慄する。

「め、明燐」

「許さない、許さない」

蘇る、悪夢。

膨れ上がる憎悪と殺意。

果豎を傷付けた者達への報復をと叫ぶ心。

私の、果豎に。

何度も何度も頭の中を回る。

許さない、殺してやる。

「め、明燐落ち着いてっ!」

傷付けた。

傷付けたのだ。

私の、カジユヲ!!

その怒りが、憎悪が、爆発する——そう思った時だった。

「明燐！」

それまでとは違う厳しい声に明燐が我を取り戻す。

そうして無意識に目を向ければ、厳しい眼差しを浮かべた果豎の視線とぶつかる。

「……果豎」

「落ち着いて、明燐。抑えて。これ以上は許さない」

知っているからこそ止める。

このままでは、明燐は暴れる。

昔のように、全てをなぎ払う。

ここに明燐の兄はいない。

他の上層部も居ない。

止められるのは、果豎だけだ。

だから果豎は必死に言い募る。

「私は大丈夫。だからそれ以上の報復も必要ない」

何度も何度も、まるで呪文の様に唱え続ける。

「にも関わらず、これ以上の報復を考えるとというなら、私は」

「や、いやよ！」

明燐の叫びに果豎はホツと息を吐いた。

急速に収縮する憎悪と殺意、それはほどなく完全に消えた。

それまで張り詰めていた室内の空気が和らいでいく。

凍り付いていた蓮璋と老師がようやく肩から力を抜き、全身から大量の汗を流した。

「でも、蓮璋。話は戻るけど、証拠集めをするなら、手は多い方がいいんじゃないの？ そもそも、証拠集めっていうからには、領主の所から取ってくるって事だよね？ それとも他にアテはあるの？」

「いえ、領主の所以外に証拠たる鉱石がある場所をオレは知りません。が——手の方は遠慮しますよ」

「どうして」

「王妃様、貴方はこの国の大切なお方です。確かにオレ達は貴方様

を攫った。でも、もうこれ以上貴方様を傷付けたり危険な目に遭わせたくないんです。矛盾していると思いますが、これ以上は。いえ、これ以上はオレ達の役目です」

「蓮璋」

なおも言い募ろうとする果豎に蓮璋は笑う。

「ありがとうございます、王妃様。でも、証拠を失ったのはオレ達の原因です。だから、オレ達の手で証拠を集めなければ。だからどうか、王妃様はここでゆっくりと傷を癒して下さい」

「けど、もし証拠が手に入らなかったら、私でもどうにもならないんだよ?! 本当の事を知っていたって、貴方達の事をどれだけ信じていたって、他の人達には通用しない。証拠が全てって言われてしまう」

果豎は蓮璋の腕を掴み、思いをぶちまけた。

「私、蓮璋やこの人達を失いたくない」

「王妃様……」

「果豎……」

「助けたい、絶対に助けたい。わかってるよ？ 王妃という立場の存在が、一方に肩入れするのは危険だって。なら、ただの果豎として手伝う。それじゃ駄目？ それに今は、地位をどうこう言うよりも、少しでも此処に居る人達を助ける可能性を引き上げる方が大切じゃない」

「果豎、我が儘を言わないで」

「明燐……分ってる、分ってるよ、私が我が儘を言ってる事ぐらいでも、今此処に必要なのは、ただ守られている王妃なんかじゃないものっ」

ただ守られているだけの王妃なんて、邪魔以外の何ものでも無い。王との交渉まで何の役にも立てないなんて嫌だ。

困っている者達が、今日の前で死に怯えている者達が居るというのに。

「王妃様……嬉しいお言葉です。でも、もし王妃様に何かあれば、

どちらにしろオレ達は処刑ですよ、完璧に」

困ったように笑う蓮璋に、果豎は唇を噛みしめる。

そうだ——それは自らが言った言葉だ。

王妃に何かあれば、王宮は必ず動く。

そして、王妃を傷付けられれば、彼らは許さない。

許せば、王妃という立場だけでなく、それを許した風国自体が低く見られるから。

「だから、王妃様はここに居て下さい」

蓮璋は王妃に微笑みつつも、真摯に訴えた。

もう傷付けたくない、これ以上危険な目に遭わせたくない。

優しい少女だからこそ、蓮璋は願う。

王妃と実際に話せば、他の村人達だって思うだろう。

それに、証拠集めに関わらせるといふ事は、必然的にあの領主に

王妃を近付けると言う事だ。

自分の意のままにならない者達を皆殺しにしたあいつだ。

王妃という存在を前にし、何をするか分らない。

人質として捕らえるだけならばまだしも、王妃という地位があいつの暴走を止められないかもしれない。

それに明燐の事もある。

連れて来てしまったが、もしあの領主にでも見付ければ必ずや奪おうとするだろう。

男ならば誰もが手に入れたいと願うほどの美姫である。

蓮璋は大きく息を吐く。

もし、もし証拠集めに失敗し、この隠れ里まで明らかとなった場合は、せめて王妃様達だけでも逃がさなければ。

今までとは違い、相手の懐に飛び込む。

となれば、同時に隠れ里の場所が漏れる可能性だって出てくるから。

もちろん、村人達には既に伝えてあり、その場合の対処も話し合っている。

相手の懷に飛び込む危険な方法——けれど、それをしないという選択肢はない。

これ以上時間を置けば、一番最悪な隠れ里だけがばれてしまうという事になるからだ。

そう——今、此処に住まう者達は、この安全な場所すらも失いかけている。

動かなければならない。

走り出さなければならない。

全ては運命なのだ。

今、この隠れ里の危機において、王妃様が王宮への帰還を決めた事は。

それだけではない、あれが起きるこの時に、王妃様がこの場所にいる事は。

そう——全ては、今こそ動き出す時だと、運命そのものが蓮璋達へと訴えかけている。

「王妃様」

蓮璋は王妃の前に傳く。

巻き込んで申し訳ない。

まだまだ言いたい事も、謝りたい事も多い。

でも、それ以上に今は早くこの王妃を自由に、安全な場所へと戻したい。

出来ならば、あんな最悪最低なあいつから離れたこの場所で、全てが終わるまで居て欲しい。

はらりと果豎の髪が揺れ、右肩の包帯が露わとなる。

その傷も、自分達のせいでついたといっている。

なのに、どこまでも優しい王妃様。

こんな目に遭わされても、蓮璋達の身を気遣う。

王妃として、証拠がない状態では全てを信じきる事は出来ないと中立な立場を取るときもあつたが……。

『蓮璋達を失いたくない』

不覚にも、泣きそうになった。

あいつに利用された挙げ句簡単に捨てられかけた自分達の命を、王妃は惜しんでくれる。

失いたくないと言ってくれる。

ああ、この方で良かった。

それは、この状況下の中での光となる。

その時、ゆつくりと伸ばされた手で、頭を撫でられた。

「王妃様？」

「頑張りすぎ」

王妃の言葉に、蓮璋はきよとした。

「ずっと、ずっと誰にも言えなくて、誰にも相談出来なくて、此処で耐え続けて、たった一つの証拠を失ってもそれで終る事が出来なくて……」

危険を冒して、王妃を攫うまで追い詰められて。

「本当にさ、今までよく頑張ってくれたね」

慈愛に満ちた笑みに、蓮璋は息を呑む。

そこに居たのは、きっと誰もが思い描く優しく気高い王妃。

「ありがとう、今まで生抜いてくれて。ありがとう、こうして教えてくれて」

「……っ」

「でも、もう少しだけ頑張つて。あと、少しだから。証拠を手に入れば、私が必ず王に伝えるから」

此処に居る者達一人残らず、全員を保護する。

この身を盾にしても、失わせない。

脳裏によぎるのは、皆殺しにされた故郷の事。

あんな目に遭う者達は、あの哀しい大戦で最後だ。

今、ここで新たな犠牲者達を出すなんてまっぴら。

そして果豎は今、その事件の最中に居り、何とかする為に動ける場所に居る。

その好機を、ここで使わなくてどうするのか。

まだ、果豎は王妃だ。

王妃としての力を持っている。

たとえそれがとても小さなものとしても、彼らを守る為に使わなければならない。

王妃としては駄目だと言うなら、ただの果豎としても協力する。「必ず王に伝える。でも、それ以外にも出来る事は沢山ある筈なのだから、手伝わせて」

何でも良い。

少しでも、蓮璋達の手助けになる事なら。

「邪魔になつたり使えなかつたら、その時は容赦なく切り捨てていいから」

「王妃様、それは」

「確かにさ、王妃に何かあれば王宮側が黙っていない。でも、どうしても、このまま一人安全な場所で黙ってなんてられない。だから、せめて危険が少ないものの手伝いだけでもさせて。例えば、何か物を運んだり、警備を手伝つたり」

「警備は危険ですわよ、果豎」

「う——さ、捜せば他にも色々あるものっ」
胸を反らして言い切る王妃に、蓮璋は笑った。

老師も、笑いをかみ殺しきれずに笑ってしまう。

「蓮璋、どうするのじゃ？」

「老師、丸投げしましたね」

「じゃが、王妃様にここまで言われてはのう」

「しかし、王妃様に手伝わってもらうのは」

引かない王妃。

嬉しかった。

ここまでしても、助力を願い出してくれる。

でも、嬉しくても許可出来ない事はある。

「だが、証拠を得る為の準備で大人達は忙しくなる。そうなれば、子供達に構ってはられないのう」

老師の言葉に、蓮璋はギョツとした。

「まさか、王妃様に子守を」

それこそ、王宮側が切れるのでは。

いや、その前に王妃様の手まで煩わせるなんて――。

「あら？ 次世代を大切に守る事に文句なんてある筈無いですよ」

「果豎……」

明燐が疲れた様に溜息をつく隣で、果豎の太陽の様な笑みを浮かべた。

「蓮璋？」

甘える様な笑みに、蓮璋は呻いた。

「そ、そこは、その、他の者達にも話を聞いてみてからで」

しかし、既に喜ぶ果豎の前に、これで駄目と言ったら後で明燐にどんな目に遭わされるか分らないと、蓮璋は流れる冷や汗を拭いつつ恐怖に震えた。

果豎が手伝うことに関しては否定的でも、果豎を蓮璋が悲しませたとなれば――恐ろしすぎる。

第三十話 大切なもの

「ただ、王妃様」

老師の呼びかけに、果豎が万歳をしたままの状態できると振り向く。

が、はつきりいって、その状態は右肩を負傷している怪我人がしても良い体勢ではなく、激しい痛みを覚えた果豎から当然のように悲鳴があがった。

「おぎよぎよぎよっ！」

「果豎、もつと可愛らしい悲鳴をあげて下さいませ」

間違つても、夙国の女性達の最高位たる王妃の悲鳴ではない。が、果豎には果豎の言い分があつた。

「悲鳴という、普段は使わないだろう状態で使う筋肉をより効率的に使っているだけよ！」

ああ言えばこう言う——なんて可愛らしい範疇に留まらない、そんな果豎の言い訳。

「それに、これは大根との愛を語り合う為に必要な発声法の一つなの。私は常に愛する大根達とのコミュニケーションについて考えて居るのよ」

「それより、普通の相手とのコミュニケーション方法を考えて下さい」

「だから普通に大根達とのコミュニケーション方法を考えて居るのよ。他のみんなの為に」

「は？」

そう呟いたのは、蓮璋達も同じだった。

「だから、私以外の初心者達の為のコミュニケーション方法」

「ならば果豎はどのような方法をとっているのです」

「もちろん、以心伝心よ！」

口にせずとも、目と目で会話できる。

うつん、もはや離れていても脳に語りかける、愛LOVE大根。

「私達に口で会話という原始的なコミュニケーション方法はもはや必要ないのよ！」

「全世界の生物に謝りなさい、果豎」

「なんで?!」

何故謝る必要があるのか。

果豎は本気でわけが分らない。

「まさか明燐。私と大根との仲を嫉妬しているの?! でも大丈夫よ、大根の愛はすなわち、世界の愛っ」

「八方美人という事ですか」

「違うわ! 誰に対しても心から優しいのよ! そのしなやかな両腕で抱き締め、その広い胸で安心させてくれる! これぞ、世界のアイドルの度量よ!」

その言葉に、蓮璋と老師は悩む。

此処に連れて来られた事でのストレスで王妃が壊れたのか、もともと王妃が壊れていたのか。

出来れば前者であって欲しい。

「そういえば、屋敷から持って来た大根達ってどうしたんだろう」

「たぶん、馬車と共に」

明燐の言葉に、果豎は馬車に残されたのだと悟る。

「綺麗に燃えあがり天に旅立った筈です」

「いやああああ! 私のだいこおおおおおんっ!」

「きつと天から見守って下さっている事です。ほら、あの空を見て下さい、きらりと齒を光らせ親指を立てているでしょう」

明燐が指さす先は天井の片隅。

カサカサと足の多い虫が走っているだけだったが、果豎には見えた。

眩しい白い光を放ちながら、「オレの愛は永遠の不滅だぜ、ベイビー!」と齒をキラリと光らせる大根の姿が。

ふさりと靡く青々とした緑の葉と白い体のコントラストに、果豎

の心は撃ち抜かれた。

「きゃあああああすてきいいいいっ！」

「良いですこと？ 皆様。あれが幻覚と幻聴による奇声という症状ですの。ああなったら殴って止めるのですよ」

「いや、殴つたらまずいのでは？ あの方は王妃様で」

「私の果豎が大根に盗られても良いというの？！」

ガツと蓮璋の胸倉を掴み叫ぶ明燐は怖かった。

どの位怖いかと言うと、たぶん蓮璋が今まで経験してきた全ての事よりも怖いと思えるほどに。

あいつの狂気とそれによってもたらされた苦痛さえ、今の明燐の形相を前にすれば吹き飛びかけた。

「私の果豎は誰にも渡さないわ！」

必ずつく「私の」という言葉。

明燐の目はぎらぎらと欲望に染まっていた。

「そうよ、果豎は私だけのもの。果豎の笑顔も果豎の拗ねた姿も、怒った姿も何もかもが私に許された至福のもの。そうよ、寝顔も、更には着替え、入浴の姿さえも私だけに許された——果豎？！」

自分の危機に瀕した貞操に、果豎は小動物も顔負けの素早さで蓮璋の後ろに隠れた。

一番安全なのは誰かとその小さな頭で計算し、確保した安全地帯。代わりに、蓮璋が明燐の怒りの矢面に立たされた。

「蓮璋……？」

「お、おおオレのせいですか？！」

「果豎を私に差し出さない」

「え、いや、無理です」

「蓮璋」

ジリジリと詰められる間合い。

生物として、いや、軍神にも匹敵する本能が蓮璋に反撃を叫ぶ。殺られる——確実に。

美しい美女の容姿は仮の姿の破壊神と言っても過言ではない明燐

の怒りに、蓮璋はダラダラと冷や汗を流し続ける。

因みに老師は素早く安全テリトリーに入っている。

「果豎を、私に、渡しますよね？」

蓮璋は究極の選択に迫られた。

ここで果豎を渡せばとりあえず自分は無事、しかし王妃の信頼は失う。

明燐に立ち向かえば、王妃の信頼は失わないけど死の一手手前まで送られる。

どうする？

「……」

きゅつと後ろから小さな手で服を掴まれ、蓮璋は決めた。

「すいません、王妃様は渡せません」

タラントタタタン。

そんな効果音と共に、蓮璋の男気が頂点を突き抜けた。

更に、果豎の中での蓮璋に対する好感度も突き抜けた。

更に、明燐の中に今までの男達と違うという思いが突き抜けた。

そうして知らない間に好感度を上げていたが、蓮璋は最後まで気付かなかった。

今この時、遙か遠くで、ひゅろひゅろーんと大勢の好感度が下がる音が鳴った事に。

と、そこでコンコンと扉が外側から叩かれる。

反射的にギョツと服を握る果豎の手をそつと降ろすと、蓮璋は上

に立つ者の顔で扉を見る。

「どうした」

「碧易様の怪我のお薬が切れたのですが、代わりの傷薬が見付からなくて」

「ああ、薬なら」

代わりに老師が答える。

が、果豎は心臓が飛び出たかと思った。

「へ、碧易?!」

まさかここで聞くとは思っていなかった名だ。

先の瑠夏州での農作物盗難事件にて自分の迎えとして来た後、その事件にて尽力してくれた使者団の長であり、実は宰相の手駒だった相手。

そして、今回の王宮帰還の警備上の責任者でもあって――。

そう、襲われるまで確かに側に居た。

しかし、なぜ彼が、いや、彼まで此处に居るのか？！

「ど、どどうして、碧易が」

「王妃様の事が心配だったのでしょうか。自分もついていくなと言われまして」

「そうなのよ、果豎」

蓮璋はまだしも、明燐も普通に答えてくれた。

「つて、いや、ちょっと待って、何かおかしいでしょ、それ」

自分とは違い、碧易はそれなりに武術を嗜んでいる。

何せ、盗賊紛いな事もしていたらしいから。

というか、明燐だけならまだしも……いや、実は明燐の方がよっぽど危険だが、更に男手ともなりうる碧易と一緒に連れて行く事は、王妃を奪い返される危険性が高まるという事である。

なのに、心配だからといって一緒に連れて行くなど、尚更有り得ない。

まず抵抗されなかったのだろうか？

あの碧易が、王妃が攫われるのをそのまま黙認するわけではない。

となれば、奪い返せないならせめて何としても同行しようというパターンだろうか。

「つてか、傷薬つて？」

「碧易は怪我をしましたの。果豎、貴方を撃った銃弾に他の同行者達も傷付けられてしまつて」

「だ、大丈夫なの？！」

「果豎が一番重傷でしたわ。大丈夫、残された者達もそう簡単には死にません」

それに蓮璋の話では、自分達が居なくなつた後に通りかかった商隊に保護された筈だとの事で、そちらの心配はない。

また碧易の方も、毎日見舞いに行っているが、特に問題はなく普通に起きて話も出来ていた。

今日などは、既に寝台から起きて普通に彷徨っていたぐらいだし。その事を果堅に伝えると、ホツとした嬉しそうな笑みを見せた。

「良かった……」

しかし、すぐに哀しげな表情を浮かべる。

「でも、碧易は私のせいで巻き込んでしまったんだよね……」

「果堅……そんな事はありませんわ」

「けど、碧易は王妃である私を守るのが任務。だから、こうして一緒にいてきてくれた」

そう——碧易を巻き込んでしまったのは、果堅の王妃としての地位に寄るものである。

「碧易を、無事に返さなきゃ」

碧易の帰りを待つ者達の為にも。

「それに、明燐もね」

「果堅つてば……」

一番無事に帰らなければならないのは果堅だというのに、これでは立場が完全に逆である。

蓮璋と老師も苦笑していた。

「碧易に会えるかな？」

「そうね。でも、今日は止めておきなさいな。まだ果堅は目を覚ましたばかりですもの。代わりに私から果堅が目覚めた事を伝えて置くわ。とても心配していたから」

「明燐、ありがとう」

「ついでに食事も持ってくるわね」

「ほほ、栄養をつける事は傷の治療の一番の特効薬じゃ。さて、わしもそろそろ戻るとしようかのう。患者達も居る事じゃし」

そう言つと、老師が部屋を出て行く。

それに続くように、明燐も扉へと向かった。

「すぐに戻ってきます。それまで果豎について居て下さるかしら？」

「あ、はい——って、え？」

聞き返す間もなく、さつさと部屋から出て行った明燐に蓮璋は茫然とした。

普通人妻を、いや、王妃を出会ったばかりの男と二人きりにするだろうか。

「というか、まずいでしょ」

「いえ、それだけ明燐に信頼されているって事だと思いますよ」

王妃の言葉に、蓮璋はぎよつとして振り向いた。

「たぶん、他の女性よりも、蓮璋が一番信頼が置けると判断したんだと思う」

「王妃様……」

信頼。

その言葉を、蓮璋はしっかりと噛みしめる。

ただ、それでも、だ。

「そ、その、離れてますね」

蓮璋は果豎の名誉を考え、部屋の隅に移動した。

本当なら部屋の外に出て行きたいが、それでは明燐との約束を反故にするし、別の誰かが間違えて入ってくるとも限らない。

そんな蓮璋の姿に果豎は苦笑すれば、振動で肩の痛みを覚えた。というか、痛い。

傷口に左手を置けば、じんわりと熱を感じた。

包帯ぐるぐる巻きの右肩に視線を向ける。

手術というからには、きっとかなりの怪我なのだろう。

傷口は綺麗に塞がるのだろうか。

そこまで考え、果豎も自分が女の子だったのだと思い知る。

「まあ、命があっただけでもめっけもんだよね」

それに、そもそもそんな傷ぐらいでどうにかなるような美貌の持ち主でもない。

それよりも、傷口を鏡で見れるかどうかが問題だが。
そう、鏡。

果豎の中に稲光の様にそれがよぎった。
「か、がみ」

果豎は自分の胸の懷に手を入れようとして気付いた。
今自分が来ている服は、馬車の中で身につけていたものではない。
当然、懷を探ってもそれが出てくる事はなかった。

一種の恐慌状態に陥った果豎に、蓮璋が慌てて駆け寄ってきた。

「王妃様？」

「れ、蓮璋、わ、私の、服」

「服？」

「ば、ばしゃ、で、きてて」

「もしかして、ここに来る前に着ていた服ですか？ それなら、今
繕ってますよ」

違う、服ではない。

服よりも大切なものが。

「ち、ちが、服じゃ、か、鏡」

果豎は必死に訴えた。

息が上手く吸えない。

あの鏡を無くしたかと思えば、凄まじい焦燥感と絶望に陥る。

「鏡？」

「き、巾着に」

巾着という言葉に、蓮璋はようやく思い至った。

そう、王妃を老師の下につれて行った後の事だ。

緊急手術の準備で部屋を出て行った老師と入れ替わる様に入ってきた女性達が王妃の服を脱がせる為に走り回る中で、王妃の懷から滑り落ちたそれを蓮璋は条件反射的に受け止めた。

大根の刺繍がされていた巾着袋で、中に固い何かが入っていたが、他人の荷物を勝手に見る気は無くそのまま自分の懷へと入れた。

女性達が走り回っている所に戻せばまた落しかねないし、こうし

て袋に入れているという事は大切なものなのだろう。

とりあえず預かり、明燐に後で渡そうと思い——そのまま、自分が持ち続けていたのだ。

蓮璋は「しまった」と思いつつ、慌てて自分の懐を探り巾着袋を取り出した。

「王妃様、これをつ」

果豎の目の前にそれを差し出す。

「あ——」

震える指が巾着袋に触れた瞬間、それを果豎は握りしめた。

「こ、これ……これっ」

蓮璋に渡された巾着袋を抱き締める。

固い感触が触れ、中に鏡が入っている事に気づき安堵する。

「すいません、ずっと預かっていました」

蓮璋は巾着袋を自分が持った経緯を説明した。

「本当に申し訳ありませんでした」

「うっん、ありがとう、大切に持っていてくれて」

それをぎゅっと抱き締める果豎に、蓮璋はポリポリと頭をかきながら聞いた。

「その、凄く大切にされているものなんです」

「うん、大事な子から貰ったの」

「……友達ですか？」

「そんなところ」

そう言って笑う果豎に、蓮璋も釣られて微笑む。

「本当にありがとう。もしこれを無くしていたら、私、本当に……」

「王妃様……」

本当に大切なものなのだろう。

自分にも、そういう物はあった。

ただ、それらはもう一つも残っていないが。

だから、こうして大切なものを胸に抱く王妃に、少しでも羨望と嫉妬を抱く。

しかしそんな嫉妬も、王妃の笑顔を見ていると淡雪が溶ける様に消えていってしまう。

「中身を聞いてもいいですか？」

「うん、これはね」

その後、明燐が戻ってくるまで蓮璋と果豎の楽しげな会話は続いたのだった。

第三十一話　どちらがマシか

日が昇り、日が沈む——毎日がその繰り返しだった。

そうして日が昇ると同時に起き出して仕事をし、日が沈み夜空に星が瞬く中眠りに就く。

それは隠れ里に来てからも変わらない。

それでも、以前は日がのぼるのが怖かった。

日は、全てを照らし、闇に隠れる自分達の姿さえも照らし出してしまつから。

しかし、隠れ里に連れて来られた王妃が目覚めてから、次第に村人達は太陽の光を怖がらなくなつていった。

特に、子供達に笑顔が増えたと、蓮璋は思う。

証拠を得る為の準備だけではなく、この集落の仕事も請け負っている蓮璋の耳に子供達の笑い声が聞こえて来た。

楽しそうな声に、自然と蓮璋を始めとした大人達の心も浮き立ってくる。

まず始めに遠くに姿を見せたのは、王妃だった。

「元氣そうですね」

「本当に」

手ぬぐいで汗を拭う中年の夫婦が、遠くの王妃に対して好ましげに笑つた。

王妃が目覚めてから今日で四日目。

王妃が此処に来てから一週間。

子供達の面倒を見始めてからまだたった一日しか経過していないのに、王妃はすっかり子供達と仲良くなつてしまった。

そこに居るのは、王妃というよりは子供達と一緒に遊ぶ遊び仲間のようなだった。

まあ、見た目はかなり幼く見えるが——といっても、彼女は正真正銘の十七歳。

しかも王妃だ。

子供達も最初は共に遊ぶ事に躊躇したが、そんな彼らにたいして王妃は自然に遊びの輪に加わっていった。

今では、彼らは王妃を姉のように慕っている。

それまでは恐怖に怯えて殆ど家から出なかった子供達の良い方向への変化に、大人達の方も親達を中心に笑顔が広がっている。

そうして親達を始め、他の村人達の信頼すらもたった一日で王妃は勝ち取ってしまった。

流石は王妃様——いや、違う。

蓮璋ははつきりと断じた。

王妃様だからではなく、彼女だからこそ、それを成し得たのだ。あれだけ多くの子供達に慕われる姿に、蓮璋は自然と笑みを浮かべる。

すると、王妃が子供達を輪にし始めた。

何か新しい遊びでもするのだろうか。

円になった子供達の中心に立つ王妃を微笑ましげに大人達が見ていた時だった。

王妃が拳を振り上げ、叫んだ。

「大根は！」

子供達が叫ぶ。

「世界のアイドル！」

ガランと、畑仕事に勤しんでいた中年夫婦が手から鍬を落した。

少し離れた場所に居た他の大人達も次々と転んだり、固まったり、手に持っていたものを落している。

しかし、それを気にせず更に王妃は続けた。

「大根は！」

「優しい！」

「大根は！」

「素敵！」

「大根は！」

「美味しい！」

そして子供達は拳を振り上げ――。

「大根は世界のアイドル！！」

素晴らしい相づち、いや、タイミング。

そこに無駄はなく、一切の迷いのない答えに王妃が目を輝かせた。

「素敵よみんなっ！」

蓮璋は子供達を王妃に預けた事を後悔した。

どこの新興宗教だこれは。

だが、悩む大人達を余所に、王妃の周りを囲む隠れ里中の子供達は、キラキラと目を輝かせて大根達を称えていた。

「さあ！ 今日も元気に大根の歌を歌うわよ！」

はい、と一点の曇りも無い清らかな心を持つ子供達が元気よく頷いた。

「じゃあ、一番。大根愛と大根の欲望の果てに」

「ちよつと待つてええっ！」

蓮璋は王妃へと突進した。

「あ、蓮璋」

「王妃様、一体何してるんですかつ」

「子供達への早期教育」

「早期――」

「英才教育は早ければ早い方がいいのよ。そう、早ければ早いほど純粋に大根への愛を素直に称えられるのだから」

それは言い換えれば、子供のうちに洗脳した方が良いといっているようなもの。

いや、その前に面倒を見て欲しいとは言ったが、洗脳、いや、教育して欲しいとは言っていない。

「いや、あのですね」

「大丈夫！ 彼らは立派な大根を愛する子供達に変えてみせるから！」

「本気で止めて下さい！」

はつきりいつて、戦隊物の悪役による改造手術と同じぐらいの危険が子供達に迫っている。

蓮璋は、小さい頃に父親が何処かの露店で手に入れた人間界の戦隊物の絵本を思いだし、血の気が引いた。
改造される。

子供達が大根星人に改造――。

「みんな！ 大根は」

「最高！」

「大根は！」

「世界のトップアイドル！」

「大根は！」

「王妃様あああつ！」

王妃はこれがしくて子供達の面倒を見ると言っただけではないだろうか――そう勘ぐる蓮璋だったが、先に子供の面倒を言い出したのは老師だと思い出す。

王妃の笑顔が輝いた。

「大根は王妃って、そんな、蓮璋ってば褒め過ぎよ！」

頬を赤らめ、恥ずかしそうに口元を抑えるその姿は正しく恋する乙女。

いや、その前に王妃様、自分はそんな事、一言も言っただけです。

たまたま、大根はと叫んだ王妃のすぐ後に蓮璋が絶叫してしまっただけで。

「流石蓮璋。女心も分るなんて素敵だわっ」

「ありがとうございます――って、そうじゃなくて！」

女心が分かる要素が何処にあったらう。

むしろ殴り飛ばされる様な発言しかしていない。

「で、蓮璋、一体どうしたの？」

果敢はようやくそこで蓮璋が此処に居ることに疑問を憶えた。

「いえ、どうしたもうこうしたも」

「王妃様、きつと蓮お兄ちゃんもなかまにくわわりたいんだよ」

「そうだよ、いっしょにだいこんのうたをうたいたいんだよ」

なんて事を言うんだこの子達は――！！

しかし、キラキラとした眼差しを向けられ、蓮璋は呻いた。

どうする、オレ。

ここで逃げるの簡単だ。

しかし、逃げれば子供達の信頼を失ってしまう。

たいした信頼ではないかも知れないが、それでも大切な絆。

神としての大切な何かを捨てるか、子供達との信頼を捨てるか。

どうする、オレ！！

「蓮璋も歌う？」

死刑宣告同然の言葉に、蓮璋は目眩を覚えた。

此処に來た事事態を後悔するが、だからといって見過ごす事も出来ない。

やめて下さいと言いたい。

しかし、それで済む相手なのだろうか。

頭の中でぐるぐると回り出す思考。

どうする、どうする、どうする。

「因みにね、決まったステップがあるの」

王妃の笑顔が一段と眩しくなる。

駄目だ、そこまで行ったらもう戻れない。

ダラダラと大量の汗を流しながら、蓮璋は危機に陥っていた――

神としての何かの。

「ねえねえ、連兄」

「ん？」

くいくいと服の裾を引っばる子供に蓮璋が反射的に笑いかける。

その子供は、蓮璋に一番懐いている女の子だった。

「あのね、わたしね、やさいたべられるようになったの」

「え？！ 本当なのか？！」

子供達の中でも特に偏食が激しく、野菜を食べられなかった子な

のに。

「おうひさまとね、がんばったの」

王妃様と？

キョトンとする蓮璋に果豎が胸を張る。

「そういえば、今日の朝食では子供達の食べ残しが全く無かったな」
何時の間にか集まってきた村人達。

彼らは自分達の家の朝食を思い出し、口々に言った。

こんな場所では野菜が中心となる食生活。

当然、野菜が苦手な子供達はいつも食べ残しをしていたが、今日に限ってはそれがなかった。

すると子供達が嬉しそうに我先にと話し出した。

「やさいたべれたの」

「あのね、王妃様が作ってくれたの、凄く美味しかったの」

「だから、食べれるようになったの」

どうやら子供達は王妃の手料理で野菜嫌いを克服したらしい。

というか、王妃の手料理？

「い、何時の間に？！」

「ふ、愛する大根達の素晴らしさを子供達に広める事に関しての私に一切の隙はないわ！」

いや、大根はどうでも良いから。

「というか、大根以外も朝食で出しましたが」

むしろ、大根なんてなかったが。

あるのは、やせ細った野菜だけである。

「ってか、どうやってコイツらに食べさせたんですか？ もう筋金

入りの野菜嫌いだったのに」

子供の父親の一人だろう。

二十代後半の男の質問に、他の親達も興味津々に王妃を見る。

「簡単よ」

簡単？！

蓮璋も含め、全員がゴクリと唾を飲込む。

「大根の波瀾万丈神生を切々と語っただけ」

どう反応していいか、大人達は全員が困った。

「そう、ある国の王族の子として生まれた一人の大根。けれど、裏切りにあい奴隷に落されてしまった大根。そこで裏切りと友情、更には幾つもの困難を乗り越え最終的に世界のトップアイドルに花開くその物語を語っただけよ」

「どこの世界の王族ですか」

「もちろん、大根の世界の王族。但しこれは一例に過ぎず、平凡な家庭に生まれた大根も居れば、他には優秀すぎる両親の元に生まれた為に不良神生まつしぐらの大根も居て」

子供達から口々に大根の世界に行きたいとの言葉が上がった。

駄目だ、このままでは子供達が連れて行かれる——！！

「さあ、もつともつと愛する大根達を称える」

「果豎、何してますの？」

「はううっ！」

飛びあがる王妃。

反対に、そこに居た村人達全員がザッと道を空け、更に王妃の前まで赤い絨毯が敷かれる。

何処から赤い絨毯が——という突っ込みを蓮璋がする間もなく、明燐は見事に履きこなしたピンヒールで絨毯を踏み締めていく。

更に、明燐のバックに花弁を巻くのは、見覚えのある村人の少女達。

どうやら、こちらでも何かまずい事が起きている——。

「明燐、なんで花弁がまかれてるの」

代わりに質問してくれる王妃に蓮璋は心の中で応援すれば、明燐が艶やかに微笑み爆弾発言を下す。

「是非とも私に仕えたいと言われまして」

ふっと鼻で笑い明燐が胸を反らせば、大きく揺れる乳房の動きに蓮璋以外の村人達がクラクラと目眩を起こし倒れていく。

というか、一体これは何なんだ。

何が起きているのだ。

蓮璋は大きく深呼吸し、必死に頭を巡らせる。

とりあえず、王妃がまだ目覚めていない時にはこんな事はなかった筈。

「昨日から果豎も寝台から動いても大丈夫になって心配が減りましたので、私も普段通りに振る舞えるようになりましたの」

普段通り？！

「——そういえば、うん、そうだよね」

「何がそういえば？！」

「……いや、なんていうか、うん。ただ、この隠れ里が既に明燐によつて半分以上は掌握されているって事で」

しよ、掌握？

「というか、下僕化？」

とんでもない発言に、蓮璋が度肝を抜かれる。

「大丈夫、いつもの事だから！」

「どこが大丈夫なんですかつ！」

というか、いつだ？！いつの間に掌握された？！

だが、そこで蓮璋は明燐の言葉を思い出す。

先程明燐は、心配が減ったから普段通りに振る舞ったとか言っていた。

という事は、少なくとも動き出したのは昨日からで――。

「たった一日？！」

一日で下僕化したのか？！

蓮璋は下僕という言葉を確認がたかった。

しかし、どう見ても明燐に付き従う若者達は下僕そのもの。

若い少女も居れば、若い少年達も居る。

そこに、子供を持つ親達も今加わり始めていた。

「隠れ里の八割は掌握しました」

「八割？！」

「蓮璋、大丈夫。逆らわなければ大丈夫だから。それに大戦中は新

しい場所に行く度にそうだったし、王宮に居た時も結構あったし」
ツッコみたいところは色々あった。

が、とりあえずまずは、二十年かけて築き上げてきた全てを書き換えられてしまいそうな状況に、蓮璋は恐れ戦く。

しかも、良い方向ならばまだしも、特殊な方向への書き換えである。

「お姉様」

「じよ、女王様、どうかもつと踏んで下さい！」

「馬鹿！ 子供の教育に悪い」

明燐をお姉様と慕う少女達に、仕置きを求める少年達。

もはや子供に見せられない十八禁指定に突入しそうな薔薇の花びら吹き荒れる光景に、蓮璋が怒鳴ろうとしたその時だった。

「わたしもそれやりたい」

「びしびしするの」

「お馬さんごつこなの？」

「見るな！」

蓮璋は思い知った。

王妃による大根教の洗脳など、明燐の女王様っぷりに比べれば可愛いものだったと。

そして忙しいにもかかわらず、蓮璋はこの場を収める為に奔走する羽目となったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1638t/>

大根と王妃?【改訂版】

2011年8月12日03時16分発行